

問題児たちと（常識人の）幼馴染が異世界から来るそうですよ？

gobrin

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

問題児三人に手紙が届くと同時に、ある少年の下にも手紙が届いていた。

その少年は師匠を亡くし、幼馴染が行方不明になっていたため、世界に思い残すことがほとんどなかった。

それゆえ、奇怪な手紙の封を切る。

そして飛ばされたのは、以前師匠から存在を聞かされていた箱庭。その少年と問題児達が箱庭で出会う時、世界の歯車が動き始める――

SS初作品です。

原作設定の“友人、家族を捨て”という部分には矛盾しています。

一応、“二人ともその決心をして箱庭に行ったら偶々再会した”という設定ではありません。

それらが気に入らない方は他の方の作品をお読みください。

それと、残酷な描写とアンチ・ヘイトは念のためです。

よろしく願います。

感想、評価はガンガンしてくださいませ。

お待ちしております。

目次

オリジナルキャラクターの紹介だそうですよ？	1
YES！ウサギが呼びました！	
第一話 問題児たちと常識人が集まるそうですよ？	6
第二話 黒ウサギの長い説明だそうですよ？	12
第三話 コミュニティのリーダーと胡散臭い奴に出会うそうですよ？	16
よ？	
第四話 均の本領発揮だそうですよ？	22
第五話 あの和装ロリの登場だそうですよ？	30
第六話 白夜又とのギフトゲームだそうですよ？	40
第七話 均の秘密とギフトネームがわかるそうですよ？	52
第八話 フォレス・ガロと決着だそうですよ？	63
第九話 クソお坊ちゃんのご対面だそうですよ？	79
第十話 ペルセウスと決闘だそうですよ？	97
第十一話 決着のその後だそうですよ？	115
番外編 “魅”がやってくるそうですよ？	134
あら、魔王襲来のお知らせ？	
第一話 問題児たちが北側に行こうとするようですよ？	144
第二話 サウザンドアイズに交渉に行くそうですよ？	155
第三話 北側到着！だそうですよ？	164
第四話 魔王襲来のお知らせだそうですよ？	178
第五話 何やら雲行きが怪しくなってきたようですよ？	196
第六話 造物主達の決闘だそうですよ？	215
第七話 魔王の登場だそうですよ？	239

第八話 ギフトゲームは一時休止だそうですよ？

オリジナルキャラクターの紹介だそうですね？

くオリキャラ紹介く

平均たいらなお

『特徴』

- ・身長は十六夜より僅かに低い。
- ・髪は前髪が眉にかかる程度に全体的に短く、色素が薄い。
- ・いつも目を細めて優しい笑みを浮かべているが、それは実は視力が少し悪いせい。矯正せずにちゃんと見える程度の視力は一応ある。優しい笑みは自身の感情を悟らせないための防壁。表情が崩れたときはかなり感情が昂ぶっているという証である。
- ・現在の霊格は、クサレお坊ちゃんの七割と少しと言ったところ。
- ・色々と秘密を抱えている様子。十六夜とは幼馴染。

『能力』

- ・運動神経は人並み以上というより霊格が上がるにつれてどんどん向上してきている。そもそもこの箱庭に來た時点で人としてはかなり上位の身体能力を有していた。
- ・特技は自分ができること全部。スポーツや音楽、料理掃除等の家事など多岐に渡る。もちろんできないこともある。一番の特技を強いて挙げるなら、師匠から散々叩き込まれた徒手格闘を初めとする戦闘技術。力量が対等な相手に負けることが絶対にならないように技術のみを徹底的に、それはもう、均でさえ涙目になりそうになる程扱われた。技術を身に着ける過程で副次的に体力等も増したのは結果的によかったため、「理不尽だ」などと師匠の教育方針に文句も言えない状況に陥っている。
- ・趣味は人間観察。相手を一目見て性格を予想することにかけては多少の自信あり。
- ・知識・知力は問題児の中でも十六夜と同等以上。悪知恵・策略・

謀略・姦計もなんのその。しかし、閃きという点では十六夜に劣る。極めて理詰めなタイプ。

『性格』

- ・ 温厚（に見える）。争いを好まない（ように見せている）。
- ・ 実際は悪い。それはもう悪い。意地が悪いともいう。タチの悪いことに、その性格の悪さが発揮されるのは他人を責めたてるもとい倒す時で、細かく相手の逃げ道を塞ぎ最後に逃げられなくなったところで向かってきた相手を完膚なきまでに叩きのめすという手法を好むため、味方が怒るに怒れない。端的に言うと、人として陰湿で最低な行いを好んでいる。

- ・ 基本的に他者と距離を置く。正確に言えば他人を必要以上に近づけない。自身が認めていない相手には敬語や敬称を使い、心を開くことはない。相手が敬語を使う必要性がない程のクズだと均が判断した場合か均が相手を認めた場合、敬語が取れる。目上の相手に敬語を使い続けるのは珍しくない。

- ・ 目上の人間に適切な対応を取れる程度の常識は（一応）あるが、箱庭に来て十六夜を抑える必要がなくなったためか、幾分はつちやけた。

- ・ 認めた相手には基本的に優しく、彼ら彼女らを守るためなら多少の無茶もする。自分の命が最優先ではあるけれど。その時性格の悪さが発揮され以下略。

『ギフト』

—— 先天性ギフト ——

- ・ “均等分配”。均の持つギフトの中では最強にして最凶のギフト。これがあるから均は均たり得る。このギフトを使うという意思を持って自分から触った対象のある数値を自分のそれと平均化して分け与える。自分以外の二つの対象に触れて使うこともできるので、汎用性はかなり高い。が、自分から触れなければならぬため、格上に使用するにはリスクを伴う。

・“模倣投影”。対象のギフトをコピーするギフト。基本的に実体があり意識のないギフトしかコピーできず、一度コピーの対象にしたギフトを再度コピーの対象にすることはできない。また、このギフトで作ったコピー品をコピーの対象にすることはできない。コピー後のギフトの性能は、ギフトコピー時のギフト保有者と自身の霊格の比を基準にして変動する。コピーするときだけ一時的に霊格の低い者にギフトを貸し与える、という方法を取ることはできない。

・“イージーチューン”。自身の持つギフトを、元よりも性能の低い同系統のギフトへと作り変えるギフト。“模倣投影”でコピーしたギフトを対象にして使うこともできるが、その場合コピー製品に内包されていた比率に応じて能力が変動する効果は消える。作り変えた後の具体的な性能を定めることはできない。

・“ジャツジ・アイ”。相手の霊格の、自分の霊格に対する比率がオーラの大きさとなって見えるギフト。自身の霊格と相手の霊格が全くの同格だった場合、身体シルエットと見えるオーラは完璧に一致する。また、実体のあるギフトの能力をある程度読み取ることができ

る。

——後天性ギフト——

・“ホワイトダガー”。均が白夜叉から譲り受けた真っ白な二振りのダガー。均の近接戦闘の攻撃力を上げる結構えげつない武器。金剛鉄製。柄の硬さと刃の切れ味の鋭さは折り紙付き。均の技術を以てすれば“アルゴルの魔王”の身体をも切り裂ける業物。予備のコピー品も合わせて二セットある。

・“クリアブーツ”。均が白夜叉から譲り受けた無色透明なブーツ。無色透明なのに足が透けない不思議なギフト。所々に金剛鉄が使われているため、蹴りの威力はかなり高い。自分から蹴りつけた場合に反動を相手に押し付けるとい性質と、蹴りつけたギフトを無効化するという性質を持つ。流石はギフトと言うべきなのか、金剛鉄が使われている割にはかなり重量が軽減されている。予備のコピー以下略。

・“水樹”。十六夜が神格を得た蛇神をぶしのめして手に入れた水樹のコピー品。コピー時の十六夜との霊格差がとても大きく、それが比

の基準になつたため、現在もほとんど性能は向上していない。

・コネクトブレスレット “疎通の腕輪”。ゲナム・ツリ 耀の“生命の目録”をコピーさせてもらったもののギフトの欠点を感じ取り、均が“イージーチューン”で調整したギフト。生物と意思疎通する能力しかなく、戦闘に直接は意味をなさない。

・“白銀の十字剣”。ガルドを討伐するために用意された銀製の剣のコピー品。コピー時の持ち主がガルドに設定されていたため、均の霊格の上昇に伴って邪を祓う性能がかなり向上している。

・“疑似・ハデスの隠れ兜”。ペルセウス所有のハデスの兜のレプリカのコピー品。ややこしい。性能はペルセウスのメンバーが持っているレプリカ品よりはいい程度。現状、姿と匂いを隠せる。

・“ハデスの隠れ兜”。ルイオスの腹心がギフトゲーム時に装着していた本物のハデスの兜のコピー品。その時点での所有者は万全状態のルイオス。均の霊格がルイオスの霊格と平均化して上昇したことにより、本物よりも性能が向上しているかも。透明化を看破する権能の持ち主からも存在を隠せる可能性がある。

・“ヘルメスの靴”。ルイオスが履いていた、翼の生えた靴のコピー品。ルイオスをぼこぼこにした後で均が勝手にコピーした。

・“ハルパー”。ルイオスが持っていた鎌のコピー品。不死殺しの力を持ち、箱庭に来たことで星霊殺しの力も新たに付与された。これも均が勝手にコピーした。

・“アルゴルの魔王”。呼び方はゴーゴン、リリス 原初の悪魔、メデューサなど数多くあるが、その正体は化け物染みた霊格を持っていた、魔王となつた星霊である。今は色々あつて霊格が縮小している。それを“ペルセウス”が永久隷属させてギフトとして所持していたが、均が最低な脅迫をして自分の物にした。均に似非虎紳士のことをとやかく言う資格は全くないと断言できる。

また、アルゴルの新たな主となつた均が彼女を脅迫した際に、均の恐ろしさを本能的に悟つたアルゴルは均に従順になつた。

蛇女と言える容姿をしていたが、今は黒髪ロングストレートで片目が隠れた美人メイドさんである。人化した結果、筋力などの物理的な

性能だけでなく、疑似的に靈格も圧縮されたような形になり、前よりも強くなった。だが、流石に魔王時代には遠く及ばない。均からはアールと呼ばれて親しまれている。均に戦闘技術を師事していて、メキメキ上達中。

YES!ウサギが呼びました!

第一話 問題児たちと常識人が集まるそうですよ?

三人の問題児に不思議な手紙が届いた。

三人は様々な理由からその手紙を開く。

その内容は、

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。その才能を試すことを望むのならば、己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、我らの“箱庭”に来られたし』

というものだった。

そして、一人の黄昏れている少年の下にもその手紙は届いていた。

「ハハッ……そうだね。二人はもういないし……僕がこの世界に留まる理由がもうない。みんなのことが少し心残りだけど。ごめんね、みんな……僕は行くよ。もう一度、話がしたかったな……十六夜、しよ——」

そこまで呟いたとき、少年の視界が変わった。

「え?う、うわあ——!!」

少年が気がついたら、なぜか上空四km程のところにいる。

「これっ、落ちてッ——!!!」

(……)が——師匠が言っていた“箱庭”か!!)

少年は本能的にそう察する。この場所、この世界に不思議な懐かしさすら覚えていた。

幕のようなものを幾つか通ると、勢いはだいぶ弱まった。

少し余裕ができた少年が下を見ると……湖。

「……………へ?」

他の三つの水音とともに、少年は湖に落ちた。

湖に落ちた四人のうち二人が、陸に上がりながら罵詈雑言を吐き捨てる。

「し、信じられない！まさか問答無用で引き摺りこんだ挙句、空に放り出すなんて！」

「右に同じだクソツタレ。場合によつちやその場でゲームオーバーだぜコレ。石の中に呼び出された方がまだマシだ」

「いえ、石の中に呼び出されては動けないでしょう？」

「俺は問題ない」

「そう。身勝手ね」

少年を含めた四人が服を絞る。そして、三毛猫を抱えた少女が呟いた。

「(こ)……どこだろう？」

「さあな。世界の果てつばいものが見えたし、どこぞの大亀の背中じゃねえか？」

と、ヘッドホンをつけた少年が答える。

その声を聞いて、少年は、言葉にできない感情に包まれた。

(ああ……声でそうじゃないかと思っただけ……やつぱり……)

「まず間違いないだろうけど、確認しとくぞ。お前達にも変な手紙が？」

その問いに上品そうな少女が答える。

「そうだけど、まずは“オマエ”って呼び方を訂正して。私は久遠飛鳥よ。以後気を付けて。それで、そこで猫を抱きかかえてる貴女は？」

「……………春日部耀。以下同文」

「そう、よろしく春日部さん。じゃあ、野蛮で凶暴そうなその貴方は？」

「見たまんま野蛮で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快樂主義と三拍子揃った駄目人間なので、用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれお嬢様」

ヘッドホンの少年はヤハハ、と笑いながら答えた。

(ああ、やつぱり十六夜だ……)

「そう。取扱説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君」

「ハハ、マジかよ。今度作つとくから覚悟しとけ、お嬢様」

飛鳥はそれに不敵な笑みで応え、最後の一人に目を向けた。

「最後に、さつきから何も喋ってない貴方は？」

「……十六夜、僕のこと、わかる？」

「ん？誰だお前………つて！お前、均か!？」

「そうだよ、十六夜。飛鳥さん、僕の名前は平たいら均なお。よろしくお願いします。耀さんも」

「え、ええ。よろしく」

「……こちらこそ」

飛鳥も耀も、少々驚いているようだ。耀の方はわかりづらいが。

「でもお前………どうして？」

「僕も十六夜が居て驚いたよ。手紙には『友人、家族を捨て』つて書いてあったからね。でも、いなくなった十六夜に会えて素直に嬉しい」
「そうか………つてちよつと待て。いなくなった？まさか手紙が届いた時間が違うのか？」

「その辺は後で話そう。あと、鈴華と焰が寂しがつてたよ」

「ん、そうか。お前に面倒任せちまったのか。悪いことしたな」

「十六夜が謝ることじゃないよ。結局僕もこつちに来ちやっただし」

「え、ちよ、ちよつと待つて。二人は知り合いなの？」

状況を把握できていない飛鳥が慌てて遮る。

「ああ、こいつとは昔馴染だよ」

「……なぜ？何もかも捨ててきたはずでしょう？」

「僕にもよくわかりません。十六夜にもわからないと思います」

「そう。わかったわ」

均が首を横に振ると、飛鳥もこの場で議論することではないと考えたのか引き下がった。

「で、呼び出されたはいいけどなんで誰もいねえんだよ。この状況、招待状に書かれていた箱庭とかいうものの説明をする人間が現れるもんじゃないのか？」

「そうね。説明がないままでは動きようがないもの」

「……。この状況に対して落ち着き過ぎているのもどうかと思うけど」

「僕も激しく同意しますよ」

(とういか十六夜は確実に気づいてるよね)

均が勿体ぶる十六夜にジトつとした目を向けるのと同時に、十六夜がニヤリと笑った。

「――仕方がねえな。こうなったら、そこに隠れてる奴にでも話を聞くか?」

(ほら、やっぱり)

「あら、貴方も気づいてたの?」

飛鳥が気づいていたと知り、均は少々驚いた。

(飛鳥さんもか。すごいな。全員僕よりは霊格がはるかに上だし。……でも、飛鳥さんは霊格の割には大したことないと思ってただけど。読み違えたか)

ついでに、さりげなく失礼なことを考えていた。

「当然。かくれんぼじゃぼ負けなしだぜ。そっちの猫を抱いてる奴と均も気づいてたんだろ?」

「気配丸出しだからね、あの人。流石に気がつくよ。僕が君に勝てる数少ないことだしね」

「風上に立たれたら嫌でも分かる」

「……へえ?面白いなお前」

均を除く三人はこの理不尽な招集に対する苛立ちを殺気に変えて、隠れていた人物に向ける。

均はその点では特に思うところもないのか、チラリとそちらを見やるだけだった。

と、そこで隠れていた人物が現れた。

「や、やだなく御四名様。そんな怖い顔で見られると黒ウサギは死んじやいますよ?」

ウサ耳を生やしたスタイルの良い少女だった。

「バニーガールか?」

「痴女かしら?」

「変態？」

「初対面の人の顔を怖いとか言ってくるし、まあ露出狂の類というこ
とでいいんじゃないですか？」

十六夜、飛鳥、耀、均の順で反応する。

均は地味に傷ついていた。

「皆様、失礼が過ぎます！それと最後の方ごめんなさい、適当に言いま
した。貴方様は全然怖くありませんので許してください、黒ウサギは
露出狂でもありません。他の皆さんは落ち着いてください」

シユンと落ち込む均に律儀に謝る黒ウサギ。

しかし、その律儀さが今回は仇となった。

「あ？俺達は何の前振りもなしに呼ばれた挙句、湖に叩き落とされた
上で全身ずぶ濡れにさせられたんだ。ついでに今、均と扱いで差別さ
れた。これじゃあ怒りを静めるなんてとてもできねえなあ？」

(十六夜……意地悪だな……それはさすがに理不尽……)

「同感ね」

「同じく」

(アレ、二人も乗っちゃった!?!……そうか、そういう人達か。これから
は楽しくなりそうだね)

均は十六夜との付き合いのおかげか、この発言で、飛鳥と耀の二人
も相応の問題児だと悟った。

「まあまあみんな、落ち着いて」

黒ウサギが不憫になってきてカバーに入る。

「そ、それは黒ウサギの責任外のことなのですよ……。庇っていただ
いてありがとうございます。優しいんですね」

「いえいえ。ほらみんな、この人もこうして謝ってるんだし、ね？」

「駄目だぜ均、それで許すと思うか？」

(あ、駄目だ。こうなったら何言っても聞かないや。黒ウサギさんに
心の中で黙祷を捧げよう)

均は長年の付き合いから十六夜が止まらないと悟り、恐らく残る二
人もそうだろうと予想すると説得を放棄した。黒ウサギを見捨てた
とも言う。

「ま、待つてください！ここは一つ穩便に黒ウサギの御話を聞いていただけたら嬉しいでございますヨ？できればそちらの方からも説得お願いします！」

「断る」

「却下」

「お断りします」

「ごめんね、黒ウサギさん。こうなったら僕には無理だ。止められない」

「あつは、取りつくシマもないですね♪そして救援が見込めません」

黒ウサギがバンザイのポーズを取り、降参の意を示す。

が、その眼は四人を値踏みしているようだった。

そんな黒ウサギに耀が近づく。そしてウサ耳を根っこから驚掴み、
「えい」

「フギャー！」

可愛らしいかけ声とともに力いっぱい引つ張った。

「ちよ、ちよっとお待ちを！初対面で遠慮無用に黒ウサギの素敵耳を引き抜きにかかるとは、どういう了見ですか!？」

「好奇心の為せる業」

「自由にもほどがあります！」

だが不幸にも、このやりとりはさらなる好奇心を呼んだようである……。

「へえ？このウサ耳って本物なのか？」

「……。じゃあ私も」

今度は十六夜が右耳、飛鳥が左耳を掴んで……。

「ちよ、ちよっど待——」

左右に引つ張った。

黒ウサギの声にならない絶叫が森中に響き渡る。

その間、均はずつとその惨状から目を逸らして、心の中で黒ウサギに向かって合掌していた。

第二話 黒ウサギの長い説明だそうですよ？

「あり得ない。あり得ないのですよ。まさか話を聞いてもらうために三十分も消費してしまうとは。学級崩壊とはこのような状況を言うに違いないのデス」

黒ウサギは涙目で落ち込んでいる。もつと長くなりそうだったので、均が三人を頑張つて説得したのだ。

それがなければ一時間は消費していただろう。問題児たちはそれほどどの勢いだった。

「いいからさっさと説明しろ」

「十六夜ひどいなあ……黒ウサギさん、頑張つて」

自分の行動を棚に上げてそんなことを言う十六夜。

均は黒ウサギのフォローをする。

「うう……頑張りマス。ありがとうございます。あと、さんは付けなくてもいいのですよ？」

「いや、僕はこれでいいんですよ」

「均はいっつもこんなだ。てか、ホント早くしろよ」

「うっ、それではいいですか、御四名様。定例文で言いますよ？ようこそ“箱庭の世界”へ！我々は御四名様にギフトを与えられたものだけが参加出来る『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼンさせていたかどうかと召喚いたしました！」

「ギフトゲーム？」

「そうです！既に気づいていらつしやるでしょうが、御四名様は皆、普通の人間ではございません！その特異な力は様々なものから与えられた恩恵でございます。

『ギフトゲーム』はその“恩恵”を用いて競い合う為のゲーム。そしてこの箱庭の世界はギフト保持者がオモシロオカシク生活出来る為に造られたステージなのでございますよー！」

「初歩的な質問をしていい？貴女の言う“我々”とは貴女を含めた誰かなの？」

黒ウサギの話に飛鳥が尋ねる。

「YES！異世界から呼び出されたギフト保持者は箱庭で生活するにあたって、数多とある“コミュニティ”に必ず属していただきます♪」
「嫌だね」

（オイ……茶々入れるなよ十六夜……そろそろ黒ウサギさん可哀想だぞ）

「属していただきます！そして『ギフトゲーム』の勝者はゲームの“主催者”が提示した賞品をゲット出来るというところでもシンプルな構造となっております」

（……なんかこの数十分で黒ウサギさんが強くなった気がする……まあ、コレは単に怒っただけだね。気配で分かる）

「……“主催者”って誰？」

耀が控えめに挙手して尋ねる。

「様々ですね。修羅神仏が人を試す試練と称して開催するゲームもあれば、コミュニティの力を誇示するために独自開催するコミュニティもあります。

特徴として、前者は自由参加が多いですが、凶悪かつ難解なものが多く、命の危険もあるでしょう。しかし、見返りは大きいです。

“主催者”次第ですが、新たな“恩恵”を手に入れることもあるかもしれません。

後者は参加するためにチップが必要です。参加者が敗退すればそれらは全て“主催者”のコミュニティに寄贈されるシステムです」

「後者は結構俗物ね……チップには何を？」

「それも様々です。金品・土地・利権・名誉・人間……そしてギフトを賭けあうことも可能です。

新たな才能を他人から奪えばより高度なギフトゲームに挑むことも可能ですよ。

ただし、ギフトを賭けた戦いに負ければ当然——ご自身の才能も失われるのであしからず」

（……ふーん。僕の力を悪用できるかも。しないけど）

「そう。なら最後にもう一つ。ゲームそのものはどうやって始めるの？」

「コミュニティ同士のゲームを除けば、期限内に登録していただければOK！商店街でも小規模のゲームを行っているのでよろしかったら参加していただくさいな」

飛鳥は黒ウサギのその発言に片眉をあげる。

「……つまりギフトゲームはこの世界の法そのもの、と考えていいのかしら？」

少し驚いた様子の黒ウサギ。

「中々鋭いですね。しかしそれは八割正解二割間違いです。我々の世界でも強盗や窃盗は禁止ですし、金品による物々交換も存在します。ギフトを用いた犯罪などもつてのほか！

そんな不逞の輩は悉く処罰します——が、しかし！『ギフトゲーム』の本質は全く逆！勝者だけが全てを手にするシステムです。

店頭に置かれている商品でさえ、店側が提示するゲームをクリアすればタダで手にすることも可能だということですね」

「中々野蛮ね」

「ごもつともです。しかしゲームの開催は全て自己責任。つまり奪われるのが嫌な腰抜けは初めからゲームに参加しなければいいだけの話でございます」

黒ウサギは一通りの説明を終えたのか、一枚の封書を取り出した。

「さて、皆さんの召喚を依頼した黒ウサギには、箱庭の世界における全ての質問に答える義務がございます。が、それら全てを語るには少々お時間がかかるでしょう。

新たな同志候補の皆さんを何時までも野外に出しておくのは忍びない。ということ、ここから先は我らのコミュニティでお話させていただきたいのですが……よろしいですか？」

黒ウサギは四人に確認を取るように聞く。

そんな中、十六夜が手を挙げて立つ。どこか真剣な表情を浮かべていた。

「待てよ。まだ俺が質問してないぜ？」

（あ、マジメな十六夜だ。久しぶりに見たなあ。ちよつとおちよくろつか）

「僕も質問してないけどねー」

「揚げ足を取るなつての」

「……どういった質問です？ルールですか？ゲームそのものですか？」

十六夜にずっと刻まれていた軽薄な笑みが、均におちよくられても戻らないのを見て、黒ウサギは構えるように聞き返した。

「そんなものはどうでもいい。心底どうでもいいぜ、黒ウサギ。ここでオマエに向かって何か言ったところで何かが変わるわけじゃねえんだ。」

俺が聞きたいのは………たった一つ、手紙に書いてあったことだけだ」

十六夜は視線を黒ウサギから外し、他の三人を見まわし、巨大な天幕に覆われた都市に向ける。

そして何もかもを見下すような視線で一言。

「この世界は……面白いか？」

十六夜の目は真剣だった。それもそうだ。手紙には全てを捨ててこいと書いてあった。

それに従って来たわけだから、それに見合うものはあってほしい。十六夜、飛鳥、耀の三人はそう思っているんだろう。均は十六夜と再会できたためそこまでではないが、それでも多少は気になる。

十六夜の質問に黒ウサギは笑みを浮かべながら宣言する。

「YES。『ギフトゲーム』は人を超えたもの達だけが参加できる神魔の遊戯。箱庭の世界は外界よりも格段に面白いと、黒ウサギは保証いたします♪」

四人の瞳に、期待の色がこもった。

第三話 コミュニティのリーダーと胡散臭い奴に出会うそうですよ？

「ジン坊っちゃーン！新しい方を連れてきましたよー！」

黒ウサギが手を振りながら一人の少年に近づく。

(……子どものように見えるな。ローブがダボダボだし。髪の毛が跳ねてる。癖っ毛かな？可愛らしい)

「お帰り、黒ウサギ。そちらの御三方が？」

「はいな、こちらの御四名様が——」

クルリ、と振り返る黒ウサギ。

ピシリ、と固まる黒ウサギ。

「……え、あれ？もう一人いませんでしたっけ？ちよつと目つきが悪くて、性格と口がかなり悪くて、全身から“俺問題児！”ってオーラを放っていた殿方が」

「ああ、十六夜君のこと？彼なら“ちよつと世界の果てを見てくるぜ！”と言って駆け出していったわ。あっちの方に。均君、誘われてなかった？」

「はい、“一緒に行くか？”って聞かれたけど断りましたよ。僕じゃあ十六夜のスピードについていけませんから」

あっちの方に。と指を指すのは上空四kmから見えた断崖絶壁。均たちの呑気な会話に、黒ウサギがウサ耳を逆立てて怒る。

「な、なんで止めてくれなかつたんですか！」

「止めてくれるなよ」と言われたもの」

「というかあんなった十六夜は基本止まりませんし」

「ならどうして黒ウサギに教えてくれなかつたのですか!？」

「黒ウサギには絶対言うなよ」と言われたから」

「嘘です、絶対嘘です！実は面倒くさかつただけでしょう御三人さん！」

「「うん」」

特に均は心から頷く。

(黒ウサギさん? あいつを止めるのは疲れるんだよ? 僕はそれをずっとやってたんだから、断言する。……というか息が合うな、僕たち) ジンが全力で叫ぶ。ついでに黒ウサギが前のめりに倒れた。

「大変です! 世界の果て”にはギフトゲームのために野放しにされている幻獣が」

「幻獣?」

「幻獣というと、ペガサスとかユニコーンとかのイメージですね。その類がいるんですか?」

耀が反応し、均が尋ねる。

「は、はい。”世界の果て”付近には強力なギフトを持ったものがいます。出くわせば最後、とても人間では太刀打ちできません!」

「あら、ということとは、もう彼はゲームオーバー?」

「ゲーム前にゲームオーバー?……斬新?」

「うーん、十六夜なら大丈夫だと思いますけど。あ、迷子にはなるかもしれませんね」

「縁起でもないこと言わないでください! あと、貴方は貴方で肝が据わった方ですね!」

「十六夜とは幼馴染ですし……。その経験から言いますが、十六夜は心配するだけ無駄ですよ?」

「……ジン坊っちゃん。申し訳ありませんが、御三人様のご案内をお願いしてもよろしいでしょうか?」

ゾンビのように黒ウサギがユラリ、と起き上がる。

(……すごい迫力だ、怒ってるっぽい。……心配するだけ無駄だと思うけどなあ)

「わかった。黒ウサギはどうする?」

「問題児を捕まえに参ります。ついでに——”箱庭の貴族”と謳われるこのウサギを馬鹿にしたこと、骨の髄まで後悔させてやります!」

黒ウサギの髪の色が変わる。綺麗な緋色だ。感情が昂ると変わるらしい。均は一応忠告する。

「心配するだけ無駄だと思いますが……あ、帰り道がわからないかもしれなので十六夜の道案内をお願いしますね」

それを聞いた黒ウサギは飛び上がりながら、

「なんですかそれ！一刻程で戻ります！皆さんはゆっくり箱庭ライフを御堪能くださいませ！」

と言つて均たちの視界から消えた。飛んでいって。

（速いなあ。……というか忠告したら怒鳴られた。理不尽だな。もう黒ウサギでいいや、敬語はやめよう）

均は心の中で一人そう決めると、あの二人のことを意識の隅に追いやった。

「箱庭のウサギは随分速く飛べるのね」

「ウサギたちは箱庭の創始者の眷属。力もそうですが、様々なギフトの他に特殊な権限も持ち合わせた貴種です。彼女なら余程の幻獣と出くわさなければ大丈夫だと思うのですが……」

「取りあえず、十六夜君のことは彼女に任せて箱庭に入りましょう。貴方がエスコートしてくださいさるの?」

「あ、はい。コミュニティのリーダーをしているジン＝ラッセルです。齢十一になったばかりの若輩ですがよろしくお願ひします。御三方のお名前は?」

「久遠飛鳥よ」

「春日部耀」

「僕は平均。均と呼んでください。先程も言いましたが、十六夜の幼馴染です。君のことはジン君と呼べば?」

ジンが礼儀正しく自己紹介し、飛鳥と耀はそれに倣い一礼する。均は友好の印に握手を求めた。

「ジンでいいですよ、均さん。それと、敬語でなくて大丈夫です。よろしくお願ひします」

均とジンは握手を交わす。

「わかった。こちらこそよろしくね、ジン」

「それじゃあ、箱庭に入りましょうか。軽い食事でもしながら話を聞かせてくれると嬉しいわ」

飛鳥はとても上機嫌な様子でジンの手を取り、箱庭の外門をくぐった。

「これはすごいな……」

均が呟く。

飛鳥、耀、均、ジン、三毛猫の四人と一匹は箱庭の幕下に出る。天幕に覆われているのに、中は日の光が降り注ぐ。

『お、お嬢！外から天幕の中に入ったはずなのに、御天道様が見えとるで！』

（三毛猫がなんか鳴いてる。視線の向きと意識の向け方からして……多分、耀さんに話しかけているんだろう）

「……本当だ。外から見たときは箱庭の内側なんて見えなかったのに」

（やっぱり会話が成立してるみたいだ。いいな、僕にもできるかな？）
均は箱庭の神秘に感嘆しながらも、冷静に周囲の状況を観察していた。

「天幕は内側に入ると不可視になるんですよ。あの天幕は太陽光を直接受けられない種族のためになるので」

「へえ？ならこの都市には吸血鬼でも住んでいるのかしら？」

「え、居ますよ？」

「……そう」

なんとも複雑そうな顔をする飛鳥。その隣で、均は顔には出さず、驚いていた。

（へえ、そうなのか。師匠のおかげでいろんな人と出会ったけど、純粋な吸血鬼は居なかったな。ぜひとも会ってみたいね）

四人と一匹は「六本傷」の旗を掲げるカフェテラスに座り、軽食を摂ることにした。

「いらっしやいませー。ご注文はどうしますか？」

注文を取るために店の奥から素早く猫耳の少女が飛び出てくる。

「えーと、紅茶を二つと緑茶を二つ。軽食にコレとコレと」

『ネコマンマを！』

「はいはい。ティーセット四つにネコマンマですね」

……ん？と飛鳥とジンが不可解そうに首を傾げる。均は予想していたようで、特に気にした様子はない。だが、耀は信じられない物を見たような目で猫耳の店員に聞いた。だす。

「三毛猫の言葉、分かるの？」

「そりや分かりますよー猫族ですもん。お歳のわりに随分綺麗な毛並みの旦那さんですし、ちよっぴりサービスさせてもらいますね」

『ねーちゃんも可愛い猫耳に鉤尻尾やな。今度機会があつたら甘噛みしに行くわ』

「やだもーお客さんつたらお上手なんだから♪」

猫耳店員は機嫌が良さそうに店内に戻る。

その姿を見送り、耀は嬉しそうに三毛猫をなでる。

「……箱庭つてすごいね、三毛猫。私以外にも三毛猫の言葉を分かる人がいたよ」

『来てよかつたなお嬢』

「え、ちよつと待つて。貴女、もしかして猫と会話ができるの？」

珍しく動揺した声の飛鳥に、耀はコクリと頷く。ジンも興味深かったようで、質問を続けた。

「もしかして猫以外にも意思疎通は可能ですか？」

「うん。生きているなら誰とでも話はできる」

「それは素敵ね。じゃあそこを飛び交う野鳥とも会話が？」

「うん、きつと出来……る？ええと、鳥で話したことがあるのは雀や鷺や不如帰ぐらいだけど……ペンギンがいたからきつとだいじよ」

「ペンギン!?!」

「う、うん。水族館で知り合った。イルカたちとも友達」

耀の声を遮るように飛鳥とジンの二人が声を上げる。まさかペンギンと会話する機会があるとは思わなかったのだろう。

均は静かに三人の話を聞いていた。

「しかしそれなら心強いギフトですね。この箱庭では幻獣との意思疎通が難しいですから」

「そうなんだ」

「はい。幻獣と同一種か、相応のギフトがないと意思疎通は難しいというのが一般ですね。

箱庭の創始者の眷属たる黒ウサギでも、全ての種とはコミュニケーションはとれないはずですよ。

先ほどから驚かれていますね、均さんはどうなんですか？」

「いや、今の僕には無理だよ。耀さんの、すごいギフトなんですよ今の。その言い方に、疑問を覚えた者はこの場にはいなかった。

「本当に……春日部さんは素敵な力があるのね。羨ましいわ」

飛鳥にそう言われ、困ったように頭を掻く耀。それに対して、飛鳥は憂鬱そうな声と表情で呟く。

均と耀は出会って数時間の間柄でも、飛鳥の表情が彼女らしいものではないと感じた。

「久遠さんは」

「飛鳥でいいわ」

「う、うん。飛鳥はどんな力を持っているの？」

「私の力は……まあ、酷いものよ。だって——」

「おんやあ？誰かと思えば東区画の最底辺コミュニティ“名無しの権兵衛”のリーダー、ジン君じゃあないですか。今日はお守り役の黒ウサギは一緒にやあないんですか？」

品が無いくせに上品ぶった声が会話に乱入し、飛鳥の話を遮った。

四人がそちらを見やると、ピチピチのタキシードを着た大男が立っていた。

冷たい風が、その場を通り抜けた。

第四話 均の本領発揮だそうですよ？

(……なんだコイツ？いきなり入ってきて。タキシードが似合ってなくて気持ち悪いんだけど。……どうしようか？武力行使で黙らせる？)

などと物騒なことを均が考えていたら、その大男は均たちのテーブルの空いている席に勝手に腰を下ろした。

「貴方の同席を許可してはいません。それと僕らのコミュニティは“ノーネーム”です。“フォレス・ガロ”のガルド・ガスパー」

「黙れ名無しが。聞けば新しい人材を呼び寄せたそうじゃないか。コミュニティの誇りである名と旗印を奪われてよくも未練がましくコミュニティを存続させたものだ——そう思わないかい、御三方」

ガルドと呼ばれた巨躯のピチピチタキシードは均たちに愛想笑いを向けるが、相手の失礼な態度に三人は冷ややかな態度で返す。

「席に座るなら名前くらい名乗るのが礼儀だと僕は思いますが」
「そうね。それと一言添えるのも礼儀よ」

「おっと失礼。私は箱庭上層に陣取るコミュニティ“六百六十六の獣”の傘下である

「烏合の衆の」

コミュニティのリーダーをしている、つてマテやゴリア！誰が烏合の衆だ小僧オオ!!!」

(お、ジンうまいな。グツジョブ。今のは面白かった)

ジンに横槍を入れられたガルドは怒鳴り声とともに激変する。

「口を慎めや小僧オ……紳士で通ってる俺にも聞き逃せねえ言葉はあるぜ……?」

筋肉が肥大しているのか、ガルドのシルエットが大きくなりタキシードがミチミチと悲鳴をあげる。

「森の守護者だったころの貴方なら相応に礼儀で返していたでしょうが、今の貴方はこの二一〇五三八〇外門付近を荒らす獣にしか見えません」

ジンはガルドの脅しに怯まずに真っ向から言い返す。

この男を紳士と表する人物は、少なくともこの場にはいないだろう。

「そういう貴様は過去の栄華に縋る亡霊と変わらんだろうが。自分のコミュニティがどういう状況に置かれてんのか理解できてんのか？」

「それなら推測くらいならできていますよ」

突然の均の言葉に全員が驚いた顔をする。

特に、ジンの驚きが大きかった。

（アレ？そんな驚くことかな？状況を推察できる材料は多かつたよね）

内心そんなことを思った均だが、平然として続ける。

「と言っても今のガルドさんの言葉で推測できたんですが」

「……その推測というのをお伺いしても？」

ガルドが均に話しかける。

それに笑顔を向けながらの均の心。

（こっち向くな息が臭い。……いけない、思考がだいぶ乱暴になっている。ボロを出さないように注意しなきゃ）

「わかりました。……ジン、君のコミュニティは弱く……いや、まだ言葉が足りないか。衰退したコミュニティなんですよ？」

均の言葉にジンが肩を震わせる。

ガルドも目を細めた。

「情報が少ないからさすがに何が起きたかまでは推測できませんが……かなり大きなどうしようもない何かがあったんだと思います。

“過去の栄華に縋る”ということは昔はすごかったということですよね？今こうして周りから嫌味を言われてしまうくらいには。それでも対抗できなかつたのなら途方もないことが起こつたのだと推測されます。そして、その再建のために僕たちを呼び出したのでしよう」

均は一息ついて、ジンに一度視線を向けてから口を開く。

「そのことを僕たちに伝えないのは、僕たちがジンのコミュニティに入らなくなる可能性を懸念しているから。つまり、僕たちはまだ入るコミュニティを選ぶことができる。恐らく、黒ウサギもグルでしょう」

う。僕らに茶化されたとき、結構本気で怒っていたようでしたから。取り敢えず推測したのはこの辺りですが……違いますか？」

「いやはや、目端の利く方ですね。その通りです。ジン君のコミュニティは数年前までこの東区最大手コミュニティでした。最もリーダーは別人でしたが。ジン君とは比べようもない優秀な男だったそうです。ギフトゲームの戦績も人類最高の記録を持っており、南北の主軸コミュニティとの交流も深かった。南区画の幻獣王格や北区画の悪鬼羅刹が認め、上層に食い込むコミュニティだったというのは嫉妬を通り越して尊敬する程にすごいのです。まあ、先代は、ですが」

ガルドはジンを見ながら嫌味つたらしく言う。
(……気分が悪いな。抑えないと)

均は嫌悪感を覚えながらも、自制を強くしてそれを押し隠す。

「名と旗印というのは？」

「コミュニティは箱庭で活動する際、“名”と“旗印”を申請しなくてはいけません。特に旗印は、コミュニティの縄張りを示す重要なものです。この店にもあるでしょう？」

ガルドは六本傷の旗を指して言う。

「例えばですが、もしここを自分のコミュニティ下に置きたいのであれば、あの旗印のコミュニティに両者合意でギフトゲームをすればいいのです。実際に私のコミュニティはそうやって大きくしました」

均は目を細めた。今の発言と黒ウサギの説明を統合して考察すると、不審な点がある。

均の瞳は絶対零度の冷たさを湛えているが、ガルドはそれに気づかない。

「旗を賭けてギフトゲームをしたの？それでこんなに君の胸元のマークと同じ旗を掲げた店が多いんだね」

均は今のガルドの発言から、敬語を使う必要がないと判断。猫かぶりをやめる。

些細な口調の変化に気づいたのか。ジンが、チラリと均を見た。

「はい、そうです。残っているのはこの店のように本拠が他区か上層にあるコミュニティか奪うに値しない名もなきコミュニティぐら

「いですよ」

「ガルドが下卑た笑みをジンに向ける。均が口調を変えたのに気づかなかったようだ。」

「それで？ジンのコミュニケーションが”ノーネーム”と呼ばれる理由はなかったよ。じゃあ、何が起きて”名”と”旗印”を失ったのかな？」

「均の様子が徐々に変わっているのに気づかず、ガルドは意気揚々と続けた。」

「箱庭の天災”魔王”に奪われたのですよ。名も旗印も主力も奪われ、名誉も誇りも失墜したコミュニケーション。それがジン君のコミュニケーションです。唯一できるギフトゲームに参加しようにも戦力がいないから参加する意味がほとんどない。戦力を補充しようにも、優秀な人材が失墜したコミュニケーションに加入すると思えますか？」

「誰も加入したいとは思わないだろうね」

「そうでしょうか？それに、彼はコミュニケーションの再建を掲げていますが、実際のところ黒ウサギにコミュニケーションを支えてもらっているだけの寄生虫ですよ。ウサギはコミュニケーションにとって所持しているだけで大きな”箔”が付きます。どこのコミュニケーションにも破格の待遇で愛でられるんですよ。なのに彼女は毎日毎日糞ガキどものために身を粉にして走り回り、僅かな路銀でやりくりしている。本当に不憫ですよ」

（うわ、頭に手を当ててヤレヤレとかやってるよ、ワザとらしい。キモいなあホント。……素が出まくってる。気をつけなきゃ。……まだバレてないみたいだし）

「なるほどね。ガルドさんが声を掛けてきた目的も読めたよ」

「ほう、それは？」

「多分、僕たちと黒ウサギを引き抜きたいんじゃないかな？もつとも、僕たちはまだ正式にコミュニケーションに所属しているわけではないから、引き抜きとは少し違うけどね」

「パチパチパチ、と。乾いた拍手の音が一名（匹？）分響いた。」

「本当に素晴らしい。まさにその通りです。黒ウサギ共々私のコミュニケーションに来ませんか？」

「な、何を言い出すんですガルドⅡガスパー!?」

ジンは怒りのあまりテーブルを叩いて抗議する。

「黙れ、ジンⅡラツセル。そもそもテムエが名と旗印を改めていれば最低限の人材はコミュニティに残ってたはずだろうが。それを貴様の我が儘でコミュニティを追い込んでおきながらどの顔で異世界から人材を呼び寄せた」

「そ……それは」

「何も知らない相手なら騙せると思ったか? その結果、黒ウサギと同じ苦勞を背負わせるっていうなら、こつちも箱庭の住人として通さなきゃならねえ仁義があるぜ」

ガルドの言葉にジンは何も言い返さない。ガルドのこの言葉には正当性を感じられる。だがガルドの言葉以上に、均たちに対する後ろめたさと申し訳なさがジンを怯ませていた。

(僕たちに後ろめたさを感じているんだろうね。そういう風によくないことをしているっていうことをしつかり自分で認識して受けとめることができるのは、ジンの美点かな。……そのクソ野郎とは違って。……でも、少しキツく注意しておこうかな?)

「……で、どうですか御三方。貴方たちは箱庭で三十日間の自由が保証されています。彼のコミュニティと私のコミュニティを視察してからでも——」

「その前に、一つジンに聞きたいことと、言いたいことがあるんだ。いいかな?」

「……ええ、どうぞ」

「……な、なんですか?」

ガルドは余裕のある態度で承諾し、ジンは恐る恐るといった感じで尋ねる。

「もしかして、どうせならさっきの話がバレるのがコミュニティ加入後だったら、とか思った?」

「……」

「この場合沈黙は是也、だよ。ならジン、次は言いたいことだ」

均はにこやかに笑いかけながら、

「あまりふざけたことはするなよ？僕たちから色よい返事が聞きたいなら、相応の礼儀でこい。あまり人を舐めたことをするな。信用を失うぞ。もう重要な隠し事は二度とするな」

殺気を全力で放ちながら言う。均の殺気に同席していた全員が震え上がり、周囲の野鳥が全て飛び立った。これでジンは二度と馬鹿な真似はしないだろう。

ガルドは殺気に当てられたせいで、誘いを断られたことに気づかなかった。

なので、均は親切丁寧に返事をしてやる。

「……んで、さっきのガルドさんの話だけど——その必要はないよ。僕は自分のやってる悪事を棚どころか屋根の上にぶん投げて、偉そうに他人に説教するクソ野郎なんかがいるコミュニティに入る気はないからね。ジンのところにさせてもらおうよ」

「なッ……！言いがかりはやめてもらってもいいですかねえ……。何を根拠に」

「謎解きはもう少し待ってね。まだ二人の意向を聞いてないから。それで、飛鳥さんと耀さんはどうするんですか？」

「私もジン君のコミュニティで間に合ってるわ。春日部さんは？」

「どっちでも。私はこの世界に友達を作りに来ただけだから」

「あら、じゃあ私が友達一号に立候補していいかしら？私たち、意外に

仲良くやっていけそうな気がする」

「なら、僕は二号に立候補していいですか？貴女たちと一緒にいると、面白くなりそうなので」

「……うん。飛鳥は私の知る女の子とはちよつと違うから大丈夫かも。均はなんか……不思議な人だから大丈夫。あと均、敬語やめていいよ」

「あ、私も敬語はやめてもらっていいかしら？」

「ん……わかったよ。これからよろしくね、飛鳥さん、耀さん」

リーダーたちをそつちのけで盛り上がる三人。

ジンは喜びと困惑が同居したような微妙な表情をしている。

ガルドの青筋がピクピク震えている。相当怒っているのだろう。

「……失礼ですが、理由を、お尋ねしても？」

「あ、それなら僕がさっき言ったことの根拠を示せば十分だと思うな。それでいい？多分拍車をかけて行く気が失せるけど」

「任せるわ」

「……ご自由に」

「じゃあ説明するね。ここに来てから聞いた黒ウサギの話とそのクソ野郎——いや、クソ虎の話を合わせて考えるとおかしな点があるんだ」

「……それは、何なん、でしょう、かねえ……？」

さらりと混ぜられる罵倒の句にガルドの顔が引きつっている。

ブサイクすぎて笑えない。

「黒ウサギはコミュニケーションが開催するギフトゲームにはチップが必要だつて言つてた。そしてそのチップはなんでもいいとも。双方の合意があればね。」

さて、こんな緩いルールだ。ゲームを開催したとき、相手が持ちかけて来たチップがどんなに魅力的だったとしても、自分たちのコミュニケーションの存続に関わるようなものを普通賭けるかな？賭けないよね。そうならないように上手くやるんだろうし、そもそも相手の話に乗らなきゃいい話なんだ。相手が開催したゲームなら尚更だ。コミュニケーション存続に関わるものをチップにして賭けるわけがない。

するとここで疑問点が浮かび上がる。ねえネコ科の畜生。さつき旗を賭けたゲームに勝って支配下に置いたって言ったよね。なんで相手は乗ったんだろう？

賭けるものがそれしかなかったから？違う。そうなる前に降りるんだ、コミュニティを運営する者なら。

賭けるものがそれしなくなるまで畜生のコミュニティにボコボコにされたから？これも違う。相手の力量がわかって、負ける可能性が高いなら、相手のゲームに乗るべきじゃない。また、一回でそのままやられてしまうような大勝負を未知の力量の相手にやるわけがない。

まあ、支配下に置かれてるのが一つのコミュニティだったらリーダーが馬鹿だったんだなってなるけど、ここら一帯全部がつていうのはあり得ない。これらの推測から導きだされることは何か？」

均が一息つく。空気はかなり張りつめていた。均の余計な煽りが主な原因だが。

ガルドが緊張でゴクリと喉を鳴らす。

「その結論は一つ……。ねえ、ガルド。」

……お前、何を脅迫材料にした？」

第五話 あのと装ロリの登場だそうですよ？

「……ッ！調子に乗るなよ！クソガキ！！」

『止まりなさい』。質問に答えてもらうわ。どうやって脅迫して、その後も言うことを聞かせているの？『そこに座って答えなさい』

飛鳥の言葉に力が宿り、ガルドがもの凄い勢いで椅子に座る。騒ぎを聞きつけて出てきた猫耳店員も驚いて目を丸くしていた。

(なんだ、これ……飛鳥さんがガルドを支配している?)

均が思考を進める中、ガルドの口が言葉を紡ぐ。

「相手のコミュニケーションから子供を攫ってゲームを受けざるを得ない状況に圧迫していった。そして子供を人質にとって、吸収したコミュニケーションに言うことを聞かせている」

「その子供たちはどこに幽閉されているの?」

「もう殺した」

その場の空気が凍りつく。ガルドが何をしているか予想していた均でさえ、自分の耳を一瞬疑った。

(……………まさか、そこまでだなんてね)

「初めてガキどもを連れてきた日、泣き声が頭にきて思わず殺した。それで自重しようと思ったが、親が恋しいと泣くのでやっぱイライラして殺した。それ以降は連れてきたガキはその日に全部まとめて殺すことにした。けど身内のコミュニケーションの仲間を殺せば組織に亀裂が入る。始末したガキの死体は証拠が残らないように腹心の部下が食^く

『黙れ!!』

グフツ……」

飛鳥の、先ほどよりも凄みを増した言葉でガルドが黙る。どさくさに紛れて、我慢の限界がきていた均がガルドの下顎を殴り上げていた。

「さすがは人外魔境の箱庭の世界。ここまでの外道とは中々出会えないわ……ねえ、ジン君?」

飛鳥の冷やかな視線にジンは慌てて否定する。

「か、彼のような悪党は箱庭でもそういません」

「そう？それはそれで残念」

「ジン？今の証言でこのクソ虎は箱庭（の法）で捌けるの？」

「捌いちや駄目です！裁いてください！」

「あ、つい本音が。それで、どうなのかな？」

「厳しいです。彼がやったことは勿論違法ですが、裁かれる前に箱庭の外に逃げられたらそれまでです」

「そう。なら仕方がないわ」

飛鳥が苛立たしげに指を鳴らす。

それが合図だったのか、飛鳥の力が解除された。

「こん、こ、この、が……ガキどもがああああ！」

ガルドが激昂するとガルドの身体が膨張し、体毛まで変化した。通称、ワータイガーと呼ばれる混在種だ。

「テメエら、どういうつもりか知らねえが……俺の上に誰がいるかわかってんだろ？箱庭第六六六外門を守る魔王が俺の後見人だぞ！俺に喧嘩を売るってことはその魔王にも喧嘩を売るってことだ！その意味が

『黙りなさい』。私の話はまだ終わっていないわ」

先ほどと同様にガルドの口が閉じられる。が、先ほどとは違い、制限されていない身体——丸太のように太い腕——が飛鳥に襲いかかる。

しかし、均がガルドと飛鳥の間に割り込み、——ガルドを背負い投げで投げ飛ばした。勿論周りには被害が出ないように。そしてかさずガルドをひっくり返してうつ伏せに変える。

間髪入れずに耀がガルドを押さえつけ、少女の細腕には似合わない力で、ガルドの腕を捻り上げる。

耀に組み伏せられたガルドはなぜか身動きが取れず、悔しそうに飛鳥を見上げることしかできない。そこに飛鳥の声が降り注ぐ。

「ガルドさん。私は貴方の上に誰がいようと気にしません。それはジン君も同じでしょう。だって彼の最終目標は、コミュニティを潰した“打倒魔王”だもの」

飛鳥に自分の目的を明確な言葉にされて最初は少し怯んだようだが、ジンは決意を宿した目で答える。

「……はい。僕らの最終目標は、魔王を倒して僕らの誇りと仲間たちを取り戻すこと。今更そんな脅しには屈しません」

「つまり貴方には破滅以外の道は残されていないのよ」

「くそがあ……」

動けないため、ガルドは悪態しかつけない。

(ざまあないね……おっといけない、抑えよう)

「だけどね。私は貴方のコミュニケーションが瓦解する程度のことでは満足できないの。貴方のような外道はズタボロになって己の罪を後悔しながら罰せられるべきだわ」

飛鳥が悪戯を思いついた少女のような笑みを浮かべながら、

「そこでみんなに提案なのだけれど」

素晴らしい提案をした。

「私たちと『ギフトゲーム』をしましょう。貴方の『フォレス・ガロ』存続と『ノーネーム』の誇りと魂をかけて、ね」

「な、なんであの短時間で『フォレス・ガロ』のリーダーに接触してしかも喧嘩を売る状況になったのですか!」「しかもゲームの日取りは明日!」「それも敵のテリトリー内で戦うなんて!」「準備するお金も時間もありません!」「一体どういう心算があつてのことです!」「聞いているんですか四人とも!!」

「『ムシャクシャしてやった。今は反省しています』」

「黙らっしやい!!」

ピツタリ揃った言い訳に黒ウサギは激怒。十六夜はニヤニヤと笑って見ている。均も怒られつつもニヤニヤしていた。別に特殊性癖の持ち主ではない。

目があった二人は悪そうな笑みを深める。そこで十六夜が止めに入った。

「別にいいじゃねえか。見境なく喧嘩売ったわけじゃないんだから許

「してやれよ」

「十六夜さんは面白ければいいと思ってるのかもしれませんが、この“契約書類”を見てください」

“契約書類”とは“主催者権限”を持たないものたちが主催者となつてギフトゲームをするときに必要なもので、そのギフトゲームに関する情報が記載されている。

今回は、均たちが勝つた場合ガルドは全ての罪を認め、正しく裁きを受けコミュニティを解散する。

負けた場合、今回に限らずガルドの罪を黙認することとなる。

かなり自己満足な内容だ。

「はあ、仕方がない人達です。まあいいデス。“フォレス・ガロ”程度なら十六夜さんが一人いれば楽勝でしょう」

その言葉に十六夜と飛鳥、均が不服そうな顔をする。

「何言ってるんだよ。俺は参加しねえよ?」

「あら、分かっているじゃない」

「当然だね。十六夜なんて参加させない」

「だ、駄目ですよ!御四名はコミュニティの仲間なんですからちゃんと協力しないと」

「そういうことじゃねえよ黒ウサギ」

「この喧嘩、売ったのは僕たちですから。十六夜には関係ないです」

「はつきり言うな、均。ま、そういうわけだ。俺が手を出すのは無粋なんだよ」

「……もう、好きにしてください」

「あはは……じゃあ今日はコミュニティへ帰る?」

黒ウサギの落胆した様子にジンが苦笑しながら聞く。

「あ、ジン坊っちゃんには先にお帰りください。ギフトゲームが明日なら“サウザンドアイズ”に皆さんのギフト鑑定をお願いしないと」

「“サウザンドアイズ”?コミュニティの名前か?」

「YES。“サウザンドアイズ”は特殊な“瞳”のギフトを持つ者たちのコミュニティ。箱庭の全てに精通する超巨大商業コミュニティです。

「幸いこの近くに支店がありますし」

「ギフト鑑定というの？」

「ギフトの秘めた力や起源などを鑑定することです。自分の力を正しく把握していた方が引き出せる力はより大きくなります。皆さんも自分の力の出所は気になるでしょう？」

同意を求める黒ウサギの声に三人は複雑な表情で返す。均はさしたる興味もなさそうだったが。

思うところはそれぞれあるのだろうが、拒否する声はなく五人と一匹は「サウザンドアイズ」に向かう。

その途中、並木道に桜の木のようなものがあり、それを見た飛鳥がとても不思議そうに呟く。

「桜の木……ではないわよね？花弁の形が違うし、真夏になっても咲き続けているはずがないもの」

「……今は秋だったと思うけど？」

「いや、まだ初夏になったばかり……そうか、均が言ってた奴か」

「うん、たぶんね。僕たちは別の時間軸、というか世界から呼ばれたんだと思うよ。その証拠に……僕は十六夜がいなくなってから半年経ってから手紙を受け取ったから。でも呼ばれたのが同一世界の同一人物の十六夜でよかった。最初聞くの怖かったんだよ。お前のことなんか知らねえって言われたらどうしようかってね」

飛鳥がきよんとしている。少しややこしいから何を言っているのかわからないだろう。

「それで、黒ウサギ。均の仮説はあってるのか？」

「はい、その通りです。均さんが言うように皆さんは違う世界から召喚されているのです。十六夜さんと均さんは例外のようですけど。」

元いた時間軸以外にも歴史や文化などに所々違いがあるはずですよ」

「それは、パラレルワールドってやつか？」

「ただしk」

「いや、たぶん違うよ十六夜。これは恐らく立体交差並行世界論だ。」

僕の考えはあつてるかな？黒ウサギ」

はい、あつていますよ。よくわかりましたね。でもセリフを横取りするなんてひどいです」

「あー、ごめん。黒ウサギに遠慮するのはやめたんだ。僕より強いのはわかるけど尊敬する対象じゃない気がするんだよね。なんて言うんだろう。ペットみたいなの？」

「そんなことより均。なんだよその立体交差並行世界論ってのは」

「黒ウサギのペット認識がそんなこと扱いですか!?!ひどいデス……」

あ、均さん、十六夜さん。着きましたのでその話はまたの機会にお願いします」

言われて均たちが見ると、ちょうど支店の女性店員が看板を下げるところだった。その女性店員に、黒ウサギは滑り込みでストップを、「まつ」

「待ったなしですお客様。うちは時間外営業はやっていません」

かける事もできなかつた。黒ウサギは悔しそうに店員を睨みつける。

「なんて商売つ気のないお店なのかしら」

「全くです！閉店時間の五分前に客を閉め出すなんて！」

「文句があるならどうぞ他所へ。あなた方は今後一切出入りを禁じます。出禁です」

「出禁!?!これだけで出禁とかお客様を舐め過ぎでございますよ!?!」

(店員さん全く退かないなあ。ここは僕が行こうかな?)

わめく黒ウサギを脇によけて交渉役を変える。

「貴女、店員さんですよね？店長さんをお呼びしてほしいのですが」

「オーナーは今はいません。話だけなら伺いましょう」

「そうですか、嘘はよくありませんよ。………中に少なくとも一人、遠い所はかなり強い方がいらつしやるじゃないですか。まあいいです、一つ確認したい事がありました」

「っ!?!………なんででしょう」

「ここを強引に突破してもかまいませんか？」

「………修繕費はあなた方に請求しますよ」

「大丈夫ですよ。貴女ほどの実力があればわかると思いますが、貴女相手なら何も壊さずに抜けられますので」

均は気負う事もなく告げる。

「……参りました。それで本日のご用件は？」

「分かってくれて助かります。ギフト鑑て

「いいいやほおおおおお！久しぶりだ黒ウサギイイイイ！」

いをお願いします、って言おうと思っていたんですよ」

（何かが店内から爆走してきて黒ウサギにぶち当たって吹っ飛ばして
るなんてあるわけがない。きつと幻覚だ。うん、そうだよね！）

「おい、均、逃避すんな。ところで店員、この店にはドツキリサービス
があるのか？なら俺も別バージョンで是非」

「ありません」

「なんなら有料でも」

「やりません」

二人は割とマジでやり取りしていた。

ちなみに飛んでいった白髪の着物を着た幼い少女は黒ウサギの胸
に頭を埋めてなすりつけている。

（……………なにやってんの、こいつら）

「十六夜、いい加減にやめなよ。——あと、あの子強いよ。気をつ
けてね」

「……マジかよ」

「し、白夜叉様!?!どうして貴女がこんな下層に!?!」

「黒ウサギに会うために決まっておるだろに！では、続きを……」

少女が喋ってるにもかかわらず、黒ウサギは白夜叉と呼ばれた少女
を引き剥がし、店に向かって投げつける。

くるくると回転した少女を、十六夜が足で受けとめた。

「てい」

「ゴバア！お、おんし、飛んできた初対面の美少女を足で受けとめると
は何様だ！」

「十六夜様だぜ。以後よろしく和装ロリ」

「返し方が小学生レベルだよ、十六夜。白夜叉様……でしたか？僕は

平均と申します。以後お見知り置きを」

「うむ。おんしは礼儀正しいの。均と言ったな、覚えておこう。それに対して小僧！この礼儀正しきを見習わんか！」

「チツ。おい、均。猫かぶんのやめろよ」

「なんのことかな？」

しらを切る均。と、そこで一連の流れに呆気にと取られていた飛鳥が白夜叉に声をかけた。

「貴女はこの店の人？」

「おお、そうだとも。この“サウザンドアイズ”の幹部様で白夜叉様だよご令嬢。仕事の依頼ならおんしのその年齢の割に発育がいい胸をワンタツチ生揉みで引き受けるぞ」

「オーナー。それでは売上が伸びません。ボスが怒ります」

冷静な声で女性店員が釘を刺す。

白夜叉が目線を逸らし苦言を聞き流した後、白夜叉の私室で話を聞いてもらえることになった。

「もう一度自己紹介しておこうかの。私は四桁の門、三三四五外門に本拠を構える“サウザンドアイズ”幹部の白夜叉だ。この黒ウサギとは少々縁があつてな。コミュニティ崩壊後もちよくちよく手を貸してやっている器の大きな美少女と認識しておいてくれ」

「はいはい、お世話になっております本当に」

なんとも適当に流す黒ウサギ。その隣で、耀が小首をかしげながら質問した。

「その外門って何？」

「箱庭の階層を示す外壁にある門ですよ。数字が若いほど都市の中心部に近く、強大な力を持つ者たちが住んでいるのです」

黒ウサギが箱庭を上から見た図を書く。

その図を見た四人は口をそろえて、

「……超巨大玉ねぎ？」

「超巨大バームクーヘンではないかしら？」

「そうだな。どちらかといえばバームクーヘンだ」

「僕もバームクーヘンに一票」

うん、と頷き合う四人。その感想に黒ウサギはガクリと膝をつき、白夜叉は楽しそうに笑って頷いた。

「ふふ、うまいこと例える。その例えなら今いる七桁の外門はバームクーヘンの一番薄い皮の部分に当たるな。」

更に説明するなら、ここは東西南北の四つの区切りの東側に当たり、外門のすぐ外は“世界の果て”と向かい合う場所になる。

あそこはコミュニケーションには属していないものの、強力なギフトを持ったものたちが住んでおるぞ——その水樹の持ち主などな」

十六夜が手に持つ水樹は、十六夜が世界の果てで蛇神を物理的にぶちのめして手に入れたものだ。

黒ウサギが十六夜を引つ張つて戻ってきた時、そんな話題が出た。

「白夜叉様はあの蛇神様とお知り合いだったのですか?」

「知り合いも何も、アレに神格を与えたのはこの私だぞ。もう何百年も前の話だがの」

「へえ?じゃあオマエはあの蛇より強いのか?」

「だから十六夜、さっき言ったでしょ。白夜叉様は十六夜より強いって。やめときなよ」

白夜叉が均の言葉に意外そうな目を向ける。均が彼我の戦力差を把握していたのが意外だったのだろう。

「ふふん、当然だ。私は東側の“階層支配者”だぞ。この東側の四桁以下のコミュニケーションで並ぶ者のいない、最強の主権者なのだからの」

その言葉を聞き、均を除く三人が瞳を輝かせる。

「なら、貴女のゲームをクリア出来れば、私たちは東側最強ということになるのかしら?」

「無論、そうなるのう」

「そりゃ景気のいい話だ。探す手間がはぶけた」

「あーあ。どうなっても知らないからね」

均は頭に手を当てて、呆れた表情を浮かべる。

彼女たちと触れ合ったのは少しの時間だが、それでもどんなことを

言い出すのか予想が付くようになっていた。

三人は闘争心を剥き出しにして白夜叉を見ている。

均は素知らぬ顔をして、出されたお茶を飲んでいた。

「抜け目がない童たちだ。依頼しておきながら、私にギフトゲームで挑むと?」

「え?ちよ、ちよつと御三人様!?均さんも止めてください!」

「僕には無理」

慌てて止めようとして援軍を求める黒ウサギにきつぱり断る。無理なものは無理だ。白夜叉も片手で黒ウサギを制した。

「よいよ黒ウサギ。私も遊び相手には常に飢えている」

「ノリがいいわね。そういうの好きよ」

「ふふ、そうか。——しかしだな、ゲームの前に一つ確認しておくことがある」

白夜叉が懐から“サウザンドアイズ”の旗印——向かい合う双女神の紋が入ったカードを取り出し、壮絶で不適な笑みを浮かべた。

均はこれから起きるだろう事態に備えて、心の中で少し身構える。

「おんしらが望むのは“挑戦”か——それとも“決闘”か?」

第六話 白夜叉とのギフトゲームだそうですよ？

「おんしらが望むのは“挑戦”か——それとも“決闘”か？」

その瞬間、四人の脳裏に様々な情景が流れる。

そして、四人が気づいたときには、そこは白い雪原と凍る湖畔、水平に太陽が廻る世界だった。

(……ん？すごいけど、何か違和感があるなあ、白夜叉様。なんだろう？)

唾然として立ち竦む三人と落ち着いて座っている一人に、再び白夜叉は問いかける。

「今一度名乗り直し、問おうかの。私は“白き夜の魔王”——太陽と白夜の精霊・白夜叉。おんしらが望むのは試練への“挑戦”か？それとも対等な“決闘”か？」

そこには、ふざけていた白夜叉の姿はなく、太陽と白夜の精霊として存在する白夜叉がいた。

その迫力に、均は素直に感心していた。

(すごいな。本気出さなくてもこれくらいは出来るんだ。見た目からは想像もつかないね。ちよつとからかってみようかな)

「白夜叉とは白夜と夜叉。つまりこの世界は白夜叉様の一面を表現しているということですね。白夜叉様に似て綺麗な世界だ」

「なっ……。……コホン。如何にも。この白夜の湖畔と雪原。永遠に世界を薄明に照らす太陽こそ、私が持つゲーム盤の一つだ」

均の言葉に照れつつもこともなげに答える白夜叉。

その様子を見て、均はほくそ笑んでいた。

「これだけ広大な土地が唯のゲーム盤!?むちやくちやだわ」

「そうだよ、飛鳥さん。だから言ったでしょ、十六夜。僕らじゃこの人には勝てないよ。喧嘩は相手を選びなね」

均の言葉に十六夜は悔しそうにしている。

均に理解できたことが自分に理解できなかったこと、それが我慢ならないのだろう。

「して、おんしらの返答は?“挑戦”なら手慰み程度に遊んでやる。」

——だがしかし“決闘”を望むなら話は別。魔王として、命と誇りの限り戦おうではないか」

（白夜叉様の目は怪しく輝いていて、言葉は威圧的。カッコイイ。流石強い人は違うねえ。……でも、嘘はよくないかな。ま、今の発言のおかげで違和感の正体が分かったからいいけど）

三人が黙り込む。自信家の十六夜ですら返事に躊躇ったということだ。

均がお茶を飲む音が、やけに大きく響く。

しばらくして——諦めたように笑う十六夜が手を挙げた。

「参った。やられたよ。降参だ、白夜叉」

「ふむ？それは決闘ではなく、試練を受けるという事かの？」

「ああ。今回は黙って試されてやるよ、魔王様」

（十六夜が言葉を撤回するなんて滅多にないからなあ。しばらくこれでイジろう。というか、試されてやるって言う辺りが十六夜らしすぎる）

つい、我慢ができなくなった。

「試されてやる、だって……く、くふっ」

「均ツ、てめっ、笑ってんじやねえ!!」

十六夜が掴みかかってくるのを、均は余裕を持って回避した。

そして、煽る。

「あれ？まさか、あの十六夜さんが!!言い合いで勝てないからって?!暴力に訴えるなんてこと!?!するんですか!!?」

その瞬間、均の顔に向かって突き出されていた十六夜の手がビタリと止まった。

「……………均、てめえ、本当に覚えておけよ」

「あれ？結構本気で怒らせちゃった?……………いや十六夜、ごめんって!今度手合わせするから許して!ほら、この通り!!」

幼子のようなやり取りを始めた均と十六夜を見て、白夜叉は堪えきれないといった様子で笑い飛ばした。

「く、くく……………あっははははははははは!!な、何をしておるのだ、おんしらは!?!……………ヒィー、ヒィー、は、腹が痛い……………はあ。

して、他の童たちも同じか？」

「……ええ。私も、試されてあげてもいいわ」

「右に同じ」

苦虫を噛み潰したような表情で返事をする二人。

全員、なんとも負けず嫌いである。

「……均だったの。おんしはどうする？」

均を値踏みするかのような目で見る白夜叉。

「僕の答えの前に貴女に一言いいですか、白夜叉様。十六夜たちは答えたことですし」

「……何かの？」

白夜叉は怪訝そうな目で均に先を促す。

「白夜叉様。嘘はいけませんね。貴女は今、魔王様ではないんでしよう？」

「……ほう？何故そう思った？」

目を細め、白夜叉が興味深そうに問う。

「僕はこれでもある程度修羅場をくぐってきているので、相手の強さを感じて推し量っています。白夜叉様、貴女は相当な實力をお持ちだ。僕の師匠と同等かそれ以上の。でも、白夜叉様の存在感の大きさと感じられる強さが釣り合わないんですよ。まあ、絶対に大きさと強さが一致するわけではありませんが、そういう方にも見えませんでした。だから違和感があったんですけど、これでスッキリしました。表現が適切かは分かりませんが、白夜叉様は全盛期ではない。――

今の白夜叉様は全盛期の師匠より弱いと思います。畏怖を、感じませんでした」

「その師匠とは？」

「言いたくありません。ところでさっきの返答ですが、参加しなくてはなりませんか？」

「……ほう。そうくるか、面白い。ならば参加しろ。私を客観的にだが弱いと言ったのだ。ならば、この白夜叉の力、自身の目ではなく身体で確かめよ」

均はため息を吐いた。先ほどの流れからこうなることは予想して

いたが、面倒なものは面倒だ。

「……はあ、わかりました。気が進みませんがやります。試練でお願いします」

「そうか。そういえば、その童たちが答えた後だからというのはどういう意味かの？」

「もし先に貴女が元・魔王だと知ったら、無謀にも突っ込むかもしれないでしょう？」元ならいけるかもってね。そこまで馬鹿じゃないと信じてますが、負けた彼らを慰めるのが面倒なので」

「なるほどの」

そこまで話すと、一連の流れをヒヤヒヤしながら見ていた黒ウサギが胸をなでおろしつつ文句を言った。

「もう！お互いに相手を選んでください！“階層支配者”に喧嘩を売る新人と、それを買う“階層支配者”なんて、冗談にしても寒すぎます！

補足しますと、均さんの考えは当たっています。白夜叉様が魔王だったのは何千年も前の話です」

と、黒ウサギがキレてるときに遠くから甲高い、獣とも野鳥とも思える叫び声がした。

その叫び声に、耀が即座に反応する。

「何、今の鳴き声。初めて聞いた」

「ふむ……あやつか。おんしら三人を試すにはうってつけかもしれない」

「嘘っ……本物!？」

耀が喜びと驚きに満ちた声を上げる。それも無理はない。なぜなら――。

「如何にも。こやつこそ鳥の王にして獣の王――グリフォンだ」

グリフォンが白夜叉に近づき、深く頭を垂れた。

「さて、肝心の試練だがの。こういうものにしようか」

『ギフトゲーム名 “驚獅子の手綱”

・プレイヤー一覧 逆廻 十六夜

久遠 飛鳥

春日部 耀

・クリア条件　グリフオンの背に跨がり、湖畔を舞う。
・クリア方法　“力”、“知恵”、“勇気”の何れかでグリフオンに認められる。

・敗北条件　降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

宣誓　上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

“サウザンドアイズ”印』

「私がやる」

読み終わるや否や、耀が立候補した。隣で十六夜と飛鳥が苦笑している。

「OK、失敗するなよ」

「気を付けてね、春日部さん」

「うん、頑張る」

耀がグリフオンの下へ駆け寄り、話しかけた。

「え、えーと。初めまして。春日部耀です」

『!?!』

グリフオンがビクリとし、戸惑ったような気配を醸し出す。

「ほう……あの娘、グリフオンと言葉を交わすか」

「私を貴方の背に乗せ……誇りを賭けて勝負しませんか?」

『……何?!』

グリフオンが瞳に闘志を宿す。

「ここからあの山脈を迂回して、ここを終着点と定めます。貴方は空を駆け、私をふるい落とせば勝ち。耐えることができれば私の勝ち……どうかな?」

『娘よ。確かに娘一人ふるい落とせなければ、私の名誉は失墜するだろう。——だが娘、誇りの対価に、お前は何を賭ける?』

「命を賭けます」

即答だった。均はその度胸に密かに感心していたが、黒ウサギと飛鳥が慌てだす。

「だ、駄目です！」

「春日部さん、本気なの!?!」

「貴方は誇りを賭ける。私は命を賭ける。もし転落して生きていても、私は貴方の晩ご飯になります。……それじゃ駄目かな?」

耀の言葉に、さらに慌てる飛鳥と黒ウサギ。

その二人を、白夜叉と十六夜が制する。

「双方、下がらんか。あの娘から切り出したゲームだぞ」

「ああ、無粋なことはやめとけ」

「そういう問題ではございませぬ!同志にこんな分の悪いゲームをさせるわけには——」

「——うるさいなあ。耀さんがそれでいいって言ってるんだから、外野がぎやあぎやあ騒ぐなよ」

その言葉に、黒ウサギの動きが一瞬止まる。誰の言葉かわからなかったのだろう。それか、そんなことを言う人間ではないと思っただけだからか。

その言葉を発した人間——均が耀に確認する。

「いいんでしょ、耀さん?」

「うん。大丈夫」

そう言い残し、耀はグリフォンの背に跨がり、飛び去った。

「な、なんてことを言うのですか、均さん!見損ないました!」

「アレ?十六夜、僕、間違ったこと言った?」

「いや、間違ったことは言っただけでねえと思うが……言い方の問題じゃねえか」

「ああ、そんなことか」

「そ、そんなこと?……!」

均は、声を張り上げようとする黒ウサギを見た。妙に冷めた、不思議な視線で。

「ねえ、黒ウサギ。君は僕の何を知ってるの?何も知らないのに、見損なうも何もないよね」

「そ、それは……」

「ところで白夜叉様。僕はどんなギフトゲームにするんですか?」

「ふむ。おんし、師匠とやらに何を師事していた？」

「主に徒手格闘ですけど」

「そうか。……お、戻ってきたの」

グリフォンが戻ってきた。背中には耀が乗っている。

あの速度と高度。間違いなくグリフォンの背は極寒の世界だろう。それに耐え切って、耀は戻ってきた。

しかしゴールしたその瞬間、耀が手綱を離し、落ちてくる。

駆け出そうとする黒ウサギを、十六夜が止めた。

「は、離し——」

「待て！まだ終わってない！」

耀は空中で足を踏み出したかと思うと、空を蹴り、地に降りてきた。

その跳ね方……いや、飛び方は、今しがたグリフォンが決闘で使っていたものだった。

そこで十六夜が声をかける。

「やっぱりな。お前のギフトって、他の生き物の特性を手に入れる類だったんだな」

「違う。これは友達になった証。けど、いつから知ってたの？」

「唯の推測。お前、黒ウサギと初めて会ったとき、風上に立たれたらわかる」って言っただろ。そんなの普通の人間には無理だからな。均も気づいてたんじゃないか？」

「え？」

十六夜に振られ、均は頷く。

「勿論。でも、唯単に特性を手に入れるだけじゃなさそうだけどね」

そこで、白夜叉の拍手が響いた。

「いやはや、たいしたものだの。このゲーム、おんしの勝利だ。ところでそのギフト、先天性かの？」

「違う。お父さんにもらった木彫りのおかげ」

「木彫り？」

「これ」

耀が白夜叉にペンダントを手渡す。

そのあと、白夜叉が興奮して騒いでいた。

芸術的価値も素晴らしい作品だったようだ。

しかし、均の関心は別のところにあった。

(あれ、使いたいな。戦いの幅が広がる。あとで頼んでみるか)

「それじゃあ、次は僕ですか?」

「うむ。内容はこれでどうかの?」

『ギフトゲーム名 "三十秒の攻防"』

プレイヤー一覧 平均

・クリア条件 三十秒間、白夜叉の攻撃を凌ぎきる。

・クリア方法 ギフト、体術を用い、白夜叉の攻撃によって流血を伴う傷を付けられることを防ぐ。血液が流れ出さず、傷口で滲む程度であれば続行とする。

・敗北条件 降参かプレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

“サウザンドアイズ”印

これを見て黒ウサギが絶句し、白夜叉に異議を申し立てる。

「し、白夜叉様!こんな無茶です!いくら今は魔王ではないと言っても白夜叉様は十分お強いです!それなのに三十秒なんて長すぎます!しかも一撃ももらわないなんて、不可能です!」

黒ウサギが声を荒げて白夜叉に必死に訴えかけるが、それを均が遮った。

先ほどあんな冷たい当たり方をされたのに、この対応。黒ウサギが本心から均たちの身を案じていることが窺えた。

「黒ウサギ、庇おうとしてくれてありがとう。でも、この条件は君にも無理なの?」

「い、いえ、三十秒なら黒ウサギには可能でございます。ですが……」

「ならそれまでだよ。このゲームはクリア出来るんだ。力があればね。この箱庭では、力のない方が悪い。違う?」

「そ、それはそうですが……」

項垂れる黒ウサギに、白夜叉が優しく笑いかけた。

「よく知つとるの。安心せい、黒ウサギ。本気は出さん」

「そういう問題でもございません!うう……」

「こやつの師匠より、私のほうが弱いというのだ。私が勝てる道理はあるまい?」

「そ、そんな……」

黒ウサギが絶望したような声を出す。

「心配してくれてありがとう黒ウサギ。でもちよつと黙つててね。ではやりましょう、白夜叉様」

「うむ。均よ、準備はよいな?」

均はコクリと頷く。

「ではギフトゲーム、スタート!」

そう言うや否や白夜叉が踏み込み、右手で殴りかかる。

(速いけど……師匠や十六夜ほどじゃない)

十六夜と軽く喧嘩したところのある均がこれくらい躲せないわけがない。結局、いつも喧嘩は十六夜にボコボコにされていたが。

均は身体を左に傾けて躲す。

「「なっ……!」」

飛鳥、耀、黒ウサギの三人が驚きを露にする。しかし白夜叉はこれくらい躲されることを想定していたのか、動揺することなく次の攻撃に移った。

続けて白夜叉は右足を軸にした回し蹴り。狙いは均の頭。流血を狙うなら皮膚の弱い頭部が手取り早い。

均は身体を反らせて回避しつつ、白夜叉に話しかける。

「白夜叉様、これは貴女を押しさえ込んでもいいんですか?」

白夜叉はその余裕っぷりに驚いたような顔をしたあと、真面目な顔になって踏み込み、左ストレートを打ちながら答える。

「構わんよ。それにし……何ッ!」

白夜叉の言葉を聞いた瞬間、均は白夜叉の左側に回り込み左腕を掴んで押しさえ込んだ。そのまま問いかける。

「何か仰いましたか?白夜叉様」

「……いやなに、随分余裕だのと言おうと思っただが……なぜ全身で押さえ込まんのかの？」

「そんな手には乗りませんよ白夜叉様。貴女は恐らくその体勢から反撃できるでしょう？となると、すぐに離脱出来るようにしておかなければ反撃をもらってしまいます。ところで、本気を出していただいても構いませんよ？あと数秒ですし」

「ほう、言ったな!?おんし、その言葉飲み込むでないぞ!」

その瞬間、白夜叉の目つきが変わる。本気になったか。白夜叉は押さえられたまま蹴りを放つ。均は押さえ込みを解除。蹴りを躲して、受ける体勢に入る。

残り時間、六秒。

(あれ?時間経つの遅くない!?)

均が驚愕すると同時に、白夜叉が一気に踏み込んできた。

「いくぞっ!」

怒濤の攻撃が始まる。

(うわっ、ヤバッ!)

均は調子に乗ったことを後悔した。

目にも留まらぬラツシュが均に襲いかかる。

右手左膝右のローキック右足軸の左回し蹴り左手左の裏拳右手頭突き右左左右左右右ひだ

「そこまでっ!!」

白夜叉と均の動きが止まる。

白夜叉の左拳は体勢を崩した均の蹴りに迎撃される寸前で止まっていた。

「三十秒経ちました!勝者、平均!」

(……危あつがな〜)。ギリツギリ勝てた。向こうで飛鳥さんたちが興奮して、すごいとか言ってるのが聞こえるけど……腕が相当落ちてるな、コレ。鍛えなおさなきゃ)

「……均、おんしやるな。あそこから本気で狩りにいったのだがの。全て躲すか捌くかされてしまった。おんしの勝ちだ。久々に楽しかったぞ」

「……いえ、危なかつたですよ。調子に乗ったことを後悔しました。最後のは躲すことも捌くこともできませんでした。ただ負けるのは癪なので迎撃に入りましたけど、打ち合えば負けるのは明白です。ギリギリでした。さすが、お強いです。無礼な言動の数々、お許しください」

「謙遜せんでよいよい。この白夜又相手に三十秒も保つたのだ、誇るが良い。しかも、ギフトを使わずにな」

「え、えっ！ギ、ギフトを使わずに、ですか!？」

黒ウサギが驚きの声を上げる。耀と飛鳥に至つては声が出ないよ。うだ。十六夜は不機嫌そうにしている。均は後でリハビリついでに相手して機嫌を直してもらおうと思った。

「うむ。こやつ、ギフトを使わずに私の攻撃を捌きおつたのだ。その師匠より私が弱いというのも納得だな。随分と強いものに師事していたのだろう」

「それは少し語弊があります、白夜又様。僕はギフトを使わなかつたのではなく、使えなかつたのです。決して白夜又様を舐めていたわけではありません」

「様など付けないでよい。しかし、使えなかつただと?」

「はい。しかしその話は後ほd

「すごいじゃない!均君、強いよね!見直したわ!」

「……話を途中で遮らないでもらえるかな?飛鳥さん……いや、飛鳥」

「え、えつと、ごめんなさい」

話を遮られたのが気に入らないのか、不機嫌そうに話す均。

その迫力に飛鳥は慌てて謝った。

「まあ、いいよ。褒めてくれてありがとう」

「ええ、どういたしまして」

「……均、すごい」

「ありがとう、耀。君もすごかつたね。グリフォンとの勝負、かつこよかつたよ」

「……?なんで呼び捨て?」

「耀のことを認めたから……かな」

「……？」

「そいつは変な奴なんだよ、春日部。」

「変って言うな」

自分が認めた奴と遠慮するのをやめた、もしくははその価値がない奴だけを呼び捨てにするのさ。わけわかんねえだろ？友達でも仲間でも、認めてない、もしくは遠慮してる奴には敬語でさん、君付け。つまりこいつの敬語はそいつとの距離感の表れなのさ。例外はあるがな」

十六夜はヤハハ、と笑いながら説明する。

均のツツコミは無視された。

「説明どうも、十六夜。そういうわけだから、耀、飛鳥、これからよろしくね」

「……そうなんだ。よろしく」

「ごちらこそよろしくね」

均は耀、飛鳥と軽いハイタッチを交わす。

「そろそろよいかの？」

タイミングを見計らって、白夜叉が声をかける。四人は白夜叉に向き直り、話を聞く体勢を整えた。

第七話 均の秘密とギフトネームがわかるそうですよ？

「ところで、均よ。おんし、師事していたのは徒手格闘だけなのかな？」

「いえ、一通りの武器を使った戦い方は習いました」

「そうか。ならば勝利の褒美にこの短剣とブーツをやろう。」

短剣の名は“ホワイトダガー”でブーツの名は“クリアブーツ”。まあネーミングセンスはちとアレだが、ダガーの材質は金剛鉄。

ブーツのつま先と踵、脛とふくらはぎの部分にも金剛鉄が仕込んである。しかもクリアブーツには一部の恩恵を無効化する力がある。ブーツを履いて恩恵を蹴りつける。こちらから蹴りつけても反動が返ってこないという優れ物だ。昔、鍛冶の友人からもらったものが、私は使わん。おんしが持つ方がよからう」

白夜叉が白い短剣と透明なブーツを取り出して均に渡す。

「え、でも……」

「もらっておけ。おんしは人の身だ。人は脆いからの」

「……わかりました」

均は短剣を振ってみる。手に馴染む感覚があつた。クリアブーツも履いてみる。ブーツは透明なはずなのに、内部が透けていない。さすがはギフトといったところだろうか。

「ちよ、白夜叉様!? 金剛鉄の武器をそんな簡単にあげるって何をお考えですか!? 金剛鉄の価値は——」

「うるさい。私がやると言っているのだからいいのだ。それより、今日は何の用件だったのかの？」

白夜叉が話を切り替えると、黒ウサギが思い出したように手を合わせた。

「あ、そうでした。白夜叉様。今日はギフト鑑定をお願いしたかったのですが」

「げっ。よ、よりにもよってギフト鑑定か。専門外どころか無関係も

いいところなのだがの」

そう言いながらも引き受けるようで、白夜又は四人をじっくり観察する。

「ふむ。四人とも素養が高いのはわかるがこれでは何とも言えんのおんしらは自分のギフトの力をどの程度把握している？」

「企業秘密」

「右に同じ」

「以下同文」

「他と同様」

十六夜、飛鳥、耀、均の順で息の合った回答をする。白夜又はずつこけた。

「お、おい。それじゃ話が進まんだらうに」

「別に鑑定なんていらねえよ。人に名札を貼られるのは好きじゃない」

残りの三人も同意するように頷く。ちなみに均は、それに加えて自分のギフトを把握しているからでもある。

「ふむう。まあ何にせよ、試練を見事クリアしたおんしらには”主催者”として、星霊のはしくれとして”恩恵”を与える。ちよいと贅沢な代物だが、コミュニケーション復興の前祝いとしては丁度よからう」

そう言つて白夜又は手を叩くと均たちの前に四枚のカードが現れた。

（十六夜はコバルトブルー、飛鳥はワインレッド、耀はパープルエメラルド、僕は透明。……ん？なんか僕のだけ色じゃなくない？）

それぞれのカードに

逆廻 十六夜・ギフトネーム”コード・アンソウン正体不明”

久遠 飛鳥・ギフトネーム”ゲナム・ツリ威光”

春日部 耀・ギフトネーム”ゲナム・ツリ生命の樹””コヒトリアライズノーフォーマー”

平均・ギフトネーム”均等分配””コヒトリアライズ模倣投影””ジャツジ・アイ”

”イージーチューン”

と書かれている。

「ギフトカード！」

「お中元？」

「お歳暮？」

「お年玉？」

「誕生祝？」

「ち、違います！というか何で皆さんそんなに息が合ってるんです!? このギフトカードは顕現しているギフトを収納できる超高価なカードですよ！」

「つまり素敵アイテムってことでいいの？」

「適当に聞き流しすぎです！ああもうそうです！超素敵アイテムなんですー！」

「投げやりだね黒ウサギ。僕はそういうのはよくないと思うな」

「誰のせいですか！誰の！」

「」「黒ウサギ？」「」

「こんなときまで息を合わせないでくださいー！」

四人のボケと黒ウサギのツツコミが炸裂したところで、白夜叉が口を開いた。

「我らの双女神の紋のように、本来はコミュニケーションの名と旗印も記されるのだが、おんしらは「ノーネーム」だから。少々味気ない絵になってるが、文句は黒ウサギに言ってくれ」

四人の後ろでは黒ウサギが「聞き流されました！」などと騒いだが、全員が無視していた。

「へえ……もしかして水樹ってやつも収納できるのか？」

十六夜が水樹にカードを向けると水樹は光の粒子になってカードに吸い込まれた。すると十六夜のギフトカードに水を生み出す樹の絵が差し込まれ、ギフト欄に「水樹」と追加されている。

（へえ、面白そうだな。僕もやってみよう。……お、できた。ギフト欄に「ホワイトダガー」と「クリアブーツ」って入ったぞ。……名前がださいなあ。んー、それはそうと、ちよつと試してみようか）

「十六夜、ちよつと水樹を出してくれない？」

「ん？何すんだ？」

「ちよつと実験」

「わかった。おい、白夜叉。どうやって出すんだ？」

「念じれば出るぞ」

「……お、ホントだ。ほい、均」

「さんきゅ、十六夜。じゃ、やるね」

均は水樹を受け取り、力を使う。その瞬間、均の手の中に水樹がもう一つ現れる。それは元の水樹と比べても、見分けがつかないほどそっくりだった。

「え？え？な、何が起こったのですか!?水樹が増えましたよ!?!」

「僕のギフトだよ、黒ウサギ。僕の“模倣投影”は“僕が触ったギフトをコピーする”っていうものなんだ」

「何ですかその便利ギフト!?!」

「でも、コピー製品は僕しか使えないんだ。いろいろ制約もある。物質しかコピーできないとかね」

「十分強力ですよ!」

「まあ黒ウサギは無視して」

「無視しないでください!」

均は本当に黒ウサギを無視して、耀に向き直った。

「耀、君の“生命の樹”をコピーさせてくれないかな?」

「……なんで?」

「戦いの幅が広がると思ったから。あと、動物とも話したいっていうのもあるかな」

「……正直だね」

「お願いしてる立場で余計な御託は並べないよ。で、どうかな?」

耀が均の瞳を見据える。均も視線を逸らさず耀の目を見つめ返した。

「……いいよ。三毛猫たちと仲良くしてくれるなら」

耀の中で何か納得がいったのか、耀が領いてペンダントを手に取り取る。

「もちろん。言ったでしょ、動物と話せるのも魅力的だって」

「わかった。はい」

「ありがとう。……はい、終わったから返すね」

一瞬で生命の樹を複製し、均は本物を耀に返す。

「うん」

「さてさっそく……ん？このギフト……。……そうか。なら仕方ない。"イージーチューン"」

均は生命の樹を使おうとして、あることに気がついた。そして何やら独りごちるとさらに力を使う。

コピーされた生命の樹は光を放ち、その光が晴れた時には全く別の形状の物に変わっていた。ペンダントからブレスレットにだ。

「な、何をしたんですか均さん！というかいくつギフトを持っているんですか！」

「さっきからうるさいよ黒ウサギ。そんなの秘密に決まってるでしょ。……って言いたいところだけど、まあ、ここにいるメンバーに知られても大丈夫かな。ただ、黒ウサギには貸し一つね。「何ですか!？」今のは"イージーチューン"。僕の持つギフトを、元のギフトに近く、かつ低い能力を持つギフトに作り変えるギフトだよ。元が"動物の特性を手に入れる"だから、話をするくらいはできると思うけど……。うん、大丈夫。いけそうだ。これを付けて……。よし。こんにちは、三毛猫さん。今までの会話は知ってるよね?」

『もちろんや!よろしくな、坊主!』

「うん、よろしくね。そちらのグリフォンさんも」

『うむ。先ほどの白夜叉様との戦い、見事だった。名前を聞いてもいいだろうか?』

「僕は平均と言います。グリフォンさん、貴方は?」

『私はグリーンだ。友と呼ばせてもらってもいいか?私はグリーンでいい』

「光荣です。よろしくお願いしますね、グリーン」

『うむ』

「それで、この便利グッズってなんなの?」

「それは、正式名称を"ラプラスの紙片"、すなわち全知の一端だ。そこに刻まれるギフトネームとはおんしらの魂と繋がった"恩恵"の名称。それを見れば大体のギフトの正体は分かるというもの」

全くである。下手したら均の能力など名前だけでほとんどバレかねない。

と、そこで十六夜が面白そうな声をあげた。

「へえ？じゃあ俺のはレアケースなわけだ？」

十六夜のカードには“正体不明”と書かれている。均はその可能性すら師匠に聞かされていたので、そこまで驚いてはいない。まあ、こんな形で目にするとは思わなかったが。

自分のギフトネームがハッキリと表示されているのに対して十六夜の正体不明なのはズルいなあ、などと呑気に考えていた。

しかし白夜叉は驚愕した様子で十六夜からカードをひったくり、睨みつけるように見ていた。

均は驚いていないことを白夜叉に悟られないように、ゆつくりと白夜叉の視界から外れる。

「もしかしてバグ？」

「いいやありえん、全知である“ラプラスの紙片”がエラーを起こすなど」

「何にせよ鑑定は出来なかったってことだろ。俺的にはこの方がありがたい」

十六夜が白夜叉からカードを取り返す。白夜叉は怪訝そうな目で十六夜を睨んでいた。

「今日はありがとう。また遊んでくれると嬉しい」

「駄目よ春日部さん。次は対等な条件で挑むのだから」

「吐いた唾を飲み込むなんて格好つかねえからな。次は渾身の大舞台で頼むぜ」

「僕は遠慮しておきます」

「ふふ、よかろう。楽しみにしておけ。……ところで」

均は話を聞いてくださいよとツツコミを入れようかと逡巡したが自重した。

白夜叉がえらく真面目な表情をしていたからだ。

「今更だが、一つだけ聞かせてくれ。おんしらは自分たちのコミュニティがどういう状況にあるのか、よく理解しているか？」

「名前と旗の話か？それなら聞いたぜ」

「最初は隠されてましたけどね」

均がさらりと毒を吐く。

黒ウサギが、ビクリと身体を震わせていた。

「なら、“魔王”と戦わねばならんことも？」

「聞いてるわよ」

「……では、おんしらは全てを承知の上で黒ウサギのコミュニティに加入するのだな？」

「そうよ。打倒魔王なんてカッコいいじゃない」

「カッコいいで済む話ではないのだがの……全く、若さ故なのか。無謀というか、勇敢というか。まあ、魔王がどういふものなのかはコミュニティに帰ればわかるだろう。それでも戦うなら止めんが、この娘二人は確実に死ぬぞ」

まるで予言だった。

白夜又は真剣な声音のまま続ける。

「魔王の前に様々なギフトゲームに挑んで力を付けろ。小僧と……まあ均はギリギリだが、技量はあるしの。生き残れる可能性はあるやもしれんが……。この二人はともかく、おんしら二人の力では魔王のゲームは生き残れん。嵐に巻き込まれた虫が無様に弄ばれて死ぬ様は、いつ見ても悲しいものだ」

「……ご忠告ありがとう。次は貴女の本気のゲームに挑みにくるから、覚悟しておきなさい」

白夜又にも虫呼ばわりされて神経を逆撫でされた飛鳥が、少々不満気に言う。

「ふふ、望むところだ。私は三三四五外門に本拠を構えている。いつでも遊びにこい。ただし、黒ウサギをチップに賭けてもらうかの」

「嫌ですー！」

「いいですね。それならこちらに痛手はありません。それで手を打ちましょー」

「何言っちゃってるんですか均さん！」

「冗談です」

「冗談に聞こえません！」

「おお、そうだ。均よ、おんしは少し残れ」

「「「「?」」」」

白夜叉が均を呼び止めたため、均以外の四人はコミュニケーションに帰った。

均は仲間を見送り、白夜叉に向き直る。

「それで、何でしょうか？」

「おんし……あれは全力ではなかったな？」

「……………」

均はのらりくらりと躲して明確な答えを出さないつもりだったが、白夜叉の真面目な表情を見て考えを改める。

「……何故、そう思われたのですか？」

「ギフトを使わなかったというのもそうだが……おんしの眼が、な。

見下している……とは違うが、何か……そう、余力を残して相手のことを観察しているというか……。どう遊ぶか考えているというか……。とにかく、強者のそれに思えたのだ」

「先ほども言いましたが、ギフトは使わなかったのではなく、使えなかったんです。正確に言うなら、使ったら大変なことになった、ですけど。思い違いですよ。僕は全力でした」

「ううむ……………」

白夜叉が納得がいけないというように唸る。そこに、均がさらりと続けた。

「まあ、僕は相手に触ることが出来れば、基本的には勝てますが」

「……………は？」

白夜叉が素っ頓狂な声をあげる。無理もない。目の前にいる少年が、相手に触れれば勝てるなどと豪語したのだから。

「先ほどの間違いを訂正させてもらうなら、『どう遊ぶか』などではなく『どうやって触るか』を考えているんです。相手の名前と容姿、相手が有名な者なら、その者に関する僕の知る伝承……それらから相手

の出来ることを予想して、そこから自分がどう立ち回れば有利な状況にできるかを考えてました。それと——」

「ちよ、ちよつと待て！触れば勝てるだと？私にもか？」

フリーズから立ち直った白夜叉が声を荒げる。

「はい、恐らく。いくら白夜叉様が全力ではなかったとはいえ、あれなら少なくともギフトを使えば一方的に負けることはないかと」

「……おんしのギフトは、何なのだ？」

「……白夜叉様だから言いますが。あまり言いふらさないでくださいね？」

「うむ、約束しよう」

白夜叉が頷いたのを見て、均が顔を近づけて囁いた。

「僕のギフトは、先ほど見せた物と、“均等分配”というものです。

これは僕が触れている二つの物体のある数値——質量でも体積でも構いませんが——を平均して、その二つの物体に分け与える、というものです」

「数値を平均……？……おんし、まさか!？」

「はい。これで霊格を数値と見なして平均、僕と相手に分け与えることが出来ます」

白夜叉が絶句する。無理もない。相手の霊格を強制的に奪えるなど、反則だ。

霊格とは、そのものの存在の大きさ。強さ。密度。そこにそれがある、という証。それを勝手に削り取るなど、神に唾を吐くような行爲だ。

普通は、そのようなものが“ギフト”として宿ることなどあり得ない。

あり得ないはずのことが起きている。

であれば、平均という存在自体が普通ではないことの証左に他ならない。

「この箱庭では霊格の大きさがものを言います。神格をもらうと霊格は肥大し、強くなる。特技、身体能力も霊格の大きさが関わります。

僕はそれを相手と同じに——つまり強制的に基礎スペックを同じ

にできるようなものですね。これがあつたからこそ、僕は師匠に技術を叩き込まれた。

霊格が低くても戦えるように——そして霊格において同格の相手に負けないように」

「そんな……そんなギフトがあつてよいのか……」

「霊格の大きい存在つて自然と霊格頼りな戦い方になりますからね。やりやすいですよ。僕はこの世界に入った天敵、という認識が正しいと思います」

均の告げた、箱庭の天敵という表現。

これは、正しくそのままの意味なのだが、この時の白夜又は比喻として受け取った。

そして、均も。知らず知らずのうちに正確な表現をしてしまっただけで、比喻の意味で言っていた。

均自身がこの表現の真の意味に気がついてしまうのは、もうしばらく先の話になる。

「……恐ろしいギフトだの」

「ちなみに“模倣投影”によるコピー品の性能は、コピー時の相手との霊格の比率を基準にして変動します。相手の値に関わらず、ね。わかりやすく言うなら、“模倣投影”をした時の僕と相手の霊格の比率を1:1として扱うということですね。

つまり、僕と十六夜の霊格が同程度になったら、さっきの水樹は一戦級の兵器と化すと思います。現状はかなり差があるので」

「……………おんしにぴったりだの」

「そうですね。話はそれだけですか?」

「……………なら、おんしは何故、私にギフトを使わなかった?自分で言うのもなんだが、私に使えばかなり霊格を上げられたと思うのだが」

「……………僕は、味方を蹴落としてまで強くなるつもりはありません。白夜様は味方で良い方だ。僕は、僕たちに不利益を持ち込むものだけを、全力で倒します」

均は自分の信念を述べる。

「それに、“階層支配者”が弱くては困るでしょう?」

笑いながらそう言う均に、白夜叉が畏怖と疑念の目を向ける。

「……おんしの目的は、何だ？」

「さあ？何でしょう？」

その問いを均は答える気がない。

——今は、まだ。

為すべきことを為すことになるよ——その言葉の意味を、均もまだ理解できていないのだから。

「それは答えられませんが、僕がここに来るのは必然だったそうです。師匠に言われました。教えてもらったので、箱庭の知識はある程度あります」

「……その師匠とは誰だ。はぐらかさずに答えよ」

「すみません、お断りします。でも、白夜叉様もご存知の方ですよ」

「……そうか。では最後に、頼みがある」

「何でしょう？」

均は小首を傾げる。白夜叉は均に向かって深く頭を下げた。

「黒ウサギの助けになってやってほしい。おんしの目的はわからんが、それに反しないのであれば、黒ウサギに協力してやってはくれんか」

「もちろん。彼らのコミュニティに入ると決めた時から、そのつもりですよ」

そう言って均は立ち去り、自分のコミュニティ目指して歩いていく。

白夜叉の不安そうな視線は、均が見えなくなるまでその背中に突き刺さっていた。

第八話 フォレス・ガロと決着だそうですよ？

均がコミュニケーションに戻ったとき、十六夜が水門を開けているところだった。

黒ウサギが苗の根を包んでいた布を外す。

その瞬間、もの凄い量の水があふれていった。

「ちよ、マテやゴラア!!さすがに今日はこれ以上濡れたくねえぞ、オイ！」

十六夜は即座に離脱。慌てている様を見て、均は爆笑していた。

ひとしきり笑った後、均はコミュニケーションにいる大勢の子供の存在に気づいた。

「黒ウサのねーちゃん、この人がさつき言ってた最後の人の？」

「YES!この人は平均さん!このコミュニケーションの仲間になる最後のお一人ですよ!元氣よく挨拶しましょう!」

その言葉に即座に反応した問題児三人はすさまじいスピードで耳を塞いでいた。

均がその行動に疑問を覚えるのと同時に、

「「「これからよろしくお願いします!!」」」

という声が大音量で響いた。

これは耳を塞ぐのも領ける。

その大音量に、しかし均は氣にした様子はなく、朗らかに挨拶を返した。

「はい、よろしくね。いま紹介があつたけど、僕は平均。均でいいんだけど、規律とかありそうだから呼びやすいのでいいよ。仲良くしてくれると嬉しいな」

元氣がよくて何よりだ、と言いながら嬉しそうに子供たちに近よる。

そして一人一人に名前を聞いていく。しかも全て憶えているようだ。

その後ろで、子供が得意ではない飛鳥と耀が驚愕していた。

「え?均君、子供好きなの?」

「……意外」

「あー、そういえば均のやつ昔からあんなだったな。子供は好きみたいだぞ。よく相手してんの見かけたし」

「……ロリコン？」

耀が汚物を見る時のような視線を均に向ける。

「いや、そうじゃないと信じた。……多分、恋愛感情はないと思う。守るべき存在って感じなんだろ。……多分」

後ろでかなり失礼な話をされているのには気がついていたが、均は無視して子供たちと交流していた。

——その夜。

女性陣が入浴しているとき、十六夜と均は総勢百二十人に達するという子供たちが寝るのに使っている別館の前に仁王立ちしていた。

正確に言うと十六夜が、だ。均は普通に立っている。

十六夜は木陰に向かって話しかけた。

「おーい……そろそろ決めてくんねえと、俺らが風呂に入れねえだろうが」

十六夜が言葉を発するが、答える声はない。

そもそも誰もいないように見える。

——あくまでも“見える”だけだが。

「ここを襲うのか？襲わないのか？やるなら早くかかってこいよ」

「無駄だよ十六夜。こんなこそこそと隠れて子供攫うしか能のないゴミどもに話しかけたって意味ないって。理解する頭がないんだから」

人当たりの良さそうな微笑みを浮かべながら、いつもの口調で辛辣な言葉を口にする均。

黒ウサギたちにはあまり見せていないが、これが彼の本質だ。

均は喋りながら十六夜に手のひらサイズの石を渡していた。

やれ、ということらしい。十六夜はため息をついた。

「はあ……お前ら、恨むんならこいつを怒らせた自分の行いを恨めよ」

そして均に渡された石を木陰に軽く投げる。

投げたときのフォームからは考えられないような破碎音がして、辺りの樹々とそこに潜んでいた人影を吹き飛ばす。

あまりの騒がしさに、ジンが慌てて別館から出てきた。

「ど、どうしたんですか!?!」

「侵入者っばいぞ。例の“フォレス・ガロ”の連中じゃねえか?」

「隠れて出てこないから吹っ飛ばしてあぶり出したんだ。ゴミにはちようどいい待遇でしょ?」

均の辛辣な言葉にビビるジン。

そして空中から落ちてくる人影。

その中の意識のあるものはなんとか立ち上がり、均たちを見つめる。

「な、なんてデタラメな……! 蛇神を倒したというのは本当だったのか」

「ああ、これならガルドの奴とのゲームにも勝てるかもしれない……」

均と十六夜は侵入者に近よって話しかける。

「おお?なんだお前ら、人間じゃねえの?」

侵入者たちは、全員が身体の一部が獣の物になっていた。

「我々は人をベースに

「そんなのどうでもいいから早く用件を言え。僕がおとなしく待つてるうちにさ」

均があからさまに不機嫌な口調で遮る。

十六夜は話を聞けなかったのが面白くないようで、均に文句を言っていた。

「オイ、均。遮んなよ。こいつらの秘密聞けなかったじゃねえか」

「十六夜、僕はイライラしてるんだよ。」

正直、こいつらをグチャグチャにしたいけど我慢してるんだ。なんか話すことあるみたいだから、一応ね。

なのにグダグダと無駄な時間使っさ。ちよつと痛い目に会わせたほうがいい気がするんだよね」

と、にこやかに笑いながら告げる。

ちなみにさっきの十六夜の分は痛い目にカウントされてない。

あれはあぶり出す目的、これは立場をわからせる目的、という判断で分かれているらしい。

「はあ……わかったよ。で、何を言いたかったんだ？ほれ、さつさと話せ」

侵入者は少しの間黙り込んでいたが、均が爆発するより早く意を決するよう頭を下げて、

「恥を忍んで頼む！我々の……いえ、魔王の傘下であるコミュニケーション・フォレス・ガロ”を、完膚なきまでに叩き潰してはいただけないでしょうか!!」

「嫌だね」

「黙れ死ぬ。君らを物理的に叩き潰してやろうか？」

決死の言葉をサラリと一蹴する。

それにしても均は言い過ぎである。

侵入者は皆絶句し、ジンも口をポカーンと開けている。

一転して十六夜はつまらなさそうな顔になった。

均は変わらず笑っていた。顔だけは。大事なことから二回。顔だけは。

「どうせお前らも人質を取られてる連中だろ？命令されてガキを攫いに来たってとこか？」

「は、はい。そこまで御見通しとは知らず失礼な真似を……我々も人質を取られている身分、ガルドに逆らうこともできず」

「その人質ならガルドの部下が食べましたよ。わあ、話が終わりましたね！というわけで、さつさと帰れ」

この発言もニコニコしながらだ。どんな神経してるんだか。

「な、均さん！十六夜さんも!!」

「隠す必要あるのかよ。お前らが明日勝ったら全部知れ渡るだろ？」

「そ、それにしたって言い方というものが」

「え、気を使えってこと？冗談キツイよ、ジン。その殺された人質を攫ったのこイツらでしょ？」

しかも今度はうちが対象だよ？いくら命令されてるからってこん

なゴミどもに使う気なんて残念ながら持ち合わせてないなあ」

「そうだな。悪党狩りはカツコいいけど、同じ穴のムジナに頼まれてまでやらねえよ、俺らは」

十六夜は正論を淡々と述べているだけだが、均のは明らかに悪意を含んでいる。

侵入者の一人が最後の希望に縋るようにジンに目を向ける。

「そ、それでは、本当に」

「……はい。ガルドは人質を攫ったその日に殺したそうです」

「そんな……!」

侵入者たちが悲壮の顔を浮かべる。

そこに未だに笑みを絶やさない均の言葉が降り掛かる。

「君たち、ガルドと”フォレス・ガロ”が憎い？」

「あ、当たり前だ!今までどんな目に……!」

「でも、自分たちじゃ弱くて手も足も出ないと」

「や、やつのギフトはこちらより格が上だ。それに魔王に目でも付けられたら」

「その”魔王”を潰すコミュニティーがあるとしたら？」

均と十六夜を除く全員が、は?という顔をする。

十六夜は均の狙いがわかったのか、ジンの後ろに回り込む。

「こちらにいるジン坊っちゃんか”魔王”を倒すためのコミュニティーを作るって言ってるんだよ」

侵入者とジンが驚愕する。

ジンは恐らく、何言っただコイツ!といったような心境だろう。

「魔王を倒すコミュニティー……?それは?」

「言葉の通りだよ。魔王やその傘下のコミュニティーの脅威から他のコミュニティーを守るコミュニティーだ。それをこのジン坊っちゃんが作るのさ。守られるコミュニティーは皆こう言うことだね。”押し売り・勧誘・魔王関係御断り。まずはジンⅡラツセルの元に問い合わせください”」

「じよ、じよっ」

冗談でしよう!?!と叫ぼうとするジンの口を十六夜が塞ぐ。

均と十六夜はお互いにアイコンタクトで労う。

「人質は残念だった。……でも大丈夫！明日「フォレス・ガロ」はジンたちが潰すし、その後は魔王を倒すために立ち上がるからね！」

ジンは口を挟もうと全力でもがく。が、十六夜の馬鹿力から逃れられるはずもない。

「さあ、さっさとコミュニケーションに帰るんだ。そして仲間伝えてね！僕たちのジン＝ラッセルが「魔王」を倒すって！」

「わ、わかった！明日は頑張ってくれジン坊ちゃん！」

そう言い残し、侵入者は走り去る。

ジンは十六夜から解放されたが、どうすればよいかわからず、膝から崩れ落ちるのだった。

その後、均と十六夜はジンに本拠の最上階まで引きずってこられた。

「どういうつもりですか、二人とも！」

「倒す対象がちよつと増えただけだろ。」

キヤッチフリーズは——「魔王にお困りの方、ジン＝ラッセルまでご連絡ください」——とかどうだ？」

「うん、いいんじゃない？」

均と十六夜が頷きあっていると、ジンが机を叩いて身を乗り出す。

「ふざけていいことじゃありません！魔王の力は理解できたでしょう！？」

「あ、あれやつぱり魔王の仕業か」

均の言う「あれ」とは、この本拠の一角にある廃墟のことだ。

他の三人は説明を聞いたようだが、均は白夜叉と話をしていた分間で間に合わなかった。

「ああ。魔王に襲われたのは三年前って話だぜ。ゲームできるのが楽しみだ。面白そうだよな」

「それはちよつと賛同しかねるけど。戦ってみたいってのはあるか

な」

あの荒廃っぷりは、生物が住まなくなつて数十年から百年単位で経過したような有様だった。

それがたったの三年でとなれば、何か特殊なカラクリがあるに違いない。魔王という存在の規格外さが感じられる。

「あ、貴方たちはそんな理由でコミュニティを滅亡に追い込むつもりなんですか!？」

「滅亡……? いや、作戦だけど」

均は本当に不思議そうな顔をする。

「作戦……? どういうことですか?」

そのジンの返しを聞いた均は、浮かべていた人当たりの良さそうな笑みを消して、目に理解と失望の色を宿した。

「えつと……。ちよつと聞きたいんだけど。ジンはどうやって魔王と戦うつもりだったの?」

ジンは少し考え込むような素振りをして、答える。

はつきりとした指針はなかったかのような間である。

「まず……水源を確保するつもりでした。でもこれに関しては十六夜さんが想像以上の戦果をあげてくれたので、素直に感謝してます」

「おう。感謝しつくせ」

十六夜はケラケラ笑う。

確かに、水源は大事だ。そこは均も納得できる。

「そしてギフトゲームを堅実にクリアして力をつけて、魔王のギフトゲームに対抗するつもりでした」

「期待一杯、胸一杯だったわけだ」

「それなのに……! 貴方たちは……!!」

「うーん。悪いけど失望したよ、ジン」

均が瞳だけではなく、声にも失望の風味を乗せる。

「同感だぜ。呆れた奴だ」

見れば、十六夜も軽薄な笑みは消している。

「ねえジン。ギフトゲームに参加して力をつけるなんてのは大前提だよ? その上で”どうやって魔王と戦うか”って聞いたつもりなんだけ

ど」

「だ、だからギフトゲームに参加して力を付けて、」

「なあ御チビ。前のコミュニティがギフトゲームで力をつけてなかったわけねえだろ？しかも、ギフトゲーム以外でも力をつけてたんじゃねえのか？」

「……それは………はい」

「僕たちはコミュニティを象徴する“名”も“旗印”もないんだよ？」

そのハンデを抱えたまま、ジンは先代を超えなきゃいけないんだ。わかってる？」

「先代を………超える………!?!」

「はあ………。その様子だと、ホントに何も考えてなかったんだなオマエ」

十六夜が呆れたように呟く。

「名も旗印も無いとなると——後はリーダーの名前を売り込むくらいしかないよね？」

ジンはハツとして、均と十六夜の狙いに気付く。

「僕を担ぎ上げて………コミュニティの存在をアピールするということですか？」

「悪い手じゃないと思うよ？」

「だが、リーダーがコミュニティの顔役になってコミュニティの存在をアピールするだけじゃあインパクトが足りねえ。ジン||ラツセルという少年が“打倒魔王”を掲げ、一味に一度でも勝利したという実績があれば——それは波紋となって広がるはずだ。魔王の以外の奴にもな」

「そ、それは誰に？」

「同じ様に“打倒魔王”を胸に秘めた人達に、だよ」

「今回の一件はチャンスだ。相手は魔王の傘下で勝てるゲーム。被害者は数多のコミュニティ。ここで御チビがしっかり勝てば」

均と十六夜が狙いを説明し終わる。

「一つだけ条件があります。今度開かれる“サウザンドアイズ”のギフトゲームに、均さんと十六夜さんの二人で参加してもらっていいです

か?」

「僕たちの力を見せればいいのか?」

「それもあります。ですが理由はもう一つあります。そのギフトゲームの賞品に元・魔王の仲間が出品されるんです」

「その人を取り返せばいいんだね?」

「はい。それが出来れば対魔王の準備もできますし、僕も二人の作戦を支持します。ですから、このことは黒ウサギには内密に……」

「あいよ」

「うん。わかった」

均と十六夜が席を立つ。そして、部屋を出る前に十六夜がジンに振り向き、声をかける。

「明日のゲーム、負けるなよ」

「はい。ありがとうございます」

「負けたら俺、コミュニティ抜けるから」

「あ、僕も」

「さっさと入ってくる均。」

「はい。………え?」

ジンは頷いて、固まった。

翌日。

均たちはギフトゲームの舞台である居住区に来ていた。

「ジャングル?」

「虎の住むコミュニティだ。おかしくはないだろ?」

「いえ、おかしいです。"フロレス・ガロ"の本拠は普通の居住区だったはずですよ。それに……この木」

ジンが木に手を触れ、状態を確認した時に均が口を挟んだ。
「鬼化しているね」

「!?……均さん、わかるんですか!？」

「うん。わかりやすく鬼化してるからね」

「いや普通わからねえよ」

均の発言に十六夜が突っ込む。耀と飛鳥も頷いていた。

均は吸血鬼に会ったことはない（はず）だが、鬼化した植物や動物を見たことがあった。

経験していれば流石にわかる。

「それよりジン君。ここに“契約書類”が貼ってあるわよ」

『ギフトゲーム名 “ハンティング”』

プレイヤー一覧 久遠 飛鳥

春日部 耀

平 均

ジン＆ラッセル

・クリア条件 ホストの本拠地に潜むガルドⅡガスパーの討伐。

・クリア方法 ホスト側が用意した特定の武器でのみ討伐可能。指定武器以外は“契約”によってガルドⅡガスパーを傷つけることは不可能。

・敗北条件 降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

・指定武器 ゲームテリトリーにて配置。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の元、“ノーネーム”はギフトゲームに参加します。

“フォレス・ガロ”印』

「ガルドの身をクリア条件に……指定武器で討伐!？」

「こ、これはまずいです!」

「このゲームはそんなに危険なの?」

耀が小首を傾げる。

「ゲーム自体は単純です。ですがこのルールでは、飛鳥さんのギフトで操ることや耀さんのギフトで傷を付けられないことを意味します!」

飛鳥がわからないというふうには首を捻っている。

「つまり“恩恵”じゃなくて“契約”で身を守ったんだよ。指定した武器以外では干渉できないように。“契約書類”のルールは絶対だからね。どんなにすごい“恩恵”でもガルドは倒せないってことになる」

飛鳥のために均が要約して伝える。

「“契約書類”を作ったときにルールも決めるべきでした。僕の落ち度です。すみません……」

「ジン、気にしない気にしない。誰にでも失敗はあるさ。それに、あのクソ虎にはこのくらいのハンデがちょうどいい」

均の言葉に飛鳥と耀も頷く。

さらに黒ウサギの激励に二人はやる気を見せる。

その後ろでは十六夜がジンに小声で話しかけていた。

均もジンたちに近づく。

「この勝負に勝てないと俺たちの作戦は成り立たない。だから昨日言った通りだ。予定に変更はない。いいな御チビ」

「……分かっていきます。絶対に負けません」

「大丈夫だよ、ジン。勝てるさ。僕らがコミュニティを去らなくていいように頑張ろうね」

自らあんなことを言ったくせに、何とも矛盾した発言である。

ジンもそう思ったようで、

「均さんが言わないでください」

と言った。だが均はそれを無視した。

「じゃあ、行こうか」

大したメンタルだ。

均たちは門をくぐる。

「かなり生い茂ってますね。これでは隠れていてもわかりません」

「大丈夫。近くから何の匂いもしない」

「耀がそう言うなら大丈夫だろうね。ちなみに、僕も何の気配も感知してないよ」

居住区は草木に覆われていて、道もわからないような状況だった。が、均と耀の索敵能力の前では関係ない。

「風下にいるのにガルドの匂いがしないから、建物の中に潜んでる可能性が高いと思う」

「なら、まずは外で指定武器を探す方がいいだろうね」

飛鳥とジンが指定武器を探す間、均と耀で周囲の警戒にあたる。

耀は樹の上に立っていた。均は歩き回り、索敵範囲をフルに使ってガルドの居場所を探る。

「駄目ね。それらしい武器やヒントも見つからないわ」

「もしかするとガルド自身が防衛の役割を担っているのかもしれない」

「なら方針を変えましょう。春日部さんのギフトでガルドを探して」

「もう頼んだよ」

「もう見つけた。この森を抜けた先の屋敷にガルドらしい人物が見えた」

均と耀はいつの間にかそんなことをしていた。

屋敷の方角に歩いていくと、ツタで全体を覆われた屋敷があった。

「すんなりと入れたわね」

「奇襲どころか罠の一つもないなんて」

そうなのだ。植物が生えまくっているこの状況なら罠なんていくらでも設置できる。だが、それがなかったことを均はひどく不気味に感じた。

「二階にガルドはいた」

「なら、戦力をわけよう。飛鳥とジンは一階で待機していて。僕と耀が行ってくる」

「ちよつと！なんで私が待機なの!？」

「そうです！僕だってギフトはあります！足手まといにはなりません！」

「二人とも落ち着いて。頭良いんだからわかるよね？今回は指定武器での討伐だよ。これじゃあ飛鳥のギフトが効かない。ジンのギフト

はどんなものかわからないけど……機動力のある耀と捌くのが得意な僕が行く方がいい。あと、退路の確保もお願いしたいな。逃げられなくなりました！とか冗談じゃないからね」

均の正論に二人は渋々納得した。

「じゃあ、行こうか」

「うん」

屋敷の二階には、大きな扉の部屋があった。その扉を開け放つと、中では虎の怪物が白銀の十字剣を背に守るように立ちふさがっていた。

「飛鳥！ジン！すぐに逃げて！」

均はすぐさま声を張り上げた。さらに思考する。

(恐らくあれはガルドだ。そして鬼化された植物に白銀の十字剣。これが意味するところは——ガルド自身が吸血鬼化しているということ、かな。まずいな。捌ききれるかな)

「耀！僕がガルドの相手をする！その間に剣を！」

「わかった」

均はガルドの前に踊り出て、耀に指示を出す。

ガルドが両腕の——いや、両足の鋭い爪を均に振り下ろす。

捌けるかどうかすら怪しい一撃に、均はすぐに回避の判断を下した。

全力で横に移動し、続く連撃は後ろに下がって躲す。

いつもの癖でカウンターを入れる。が、少しだけ押すことは出来たものの、全くダメージを与えられなかった。

(くそっ、わかってはいたけど”契約”は堅いな！でも、耀が剣をとったぞ！)

しかしその瞬間、ガルドが身を翻し、耀に襲いかかった。

今まで相対していた均のことなど眼中にないかのように。

「なっ！」

想定外の行動だった。一瞬、均の足が止まる。

それ故、間に合わない。こちらは扉付近で、耀は奥の壁際だ。

「耀っ！」

ガルドの右の爪が耀の右腕を切り裂き、鮮血を散らせる。

均は飛び上がり、ガルドの側頭部に全力全開で蹴りを入れた。

(ダメージがなくても押しつけられれば……！)

その蹴りが功を奏したのか、ガルドの身体が横へ押しやられる。

(ついでだ……！)

均は自身の持つ最高の“恩恵”を使う。

ブーツを装備している状態の足による接触という、接触とも言えないような状況だったが“均等分配”は発動した。

ぶっつけで初めてやってみたが、成功するようである。“契約”に守られているガルド相手に、ブーツ越しで発動できるとなると戦略の幅が少し広がるが、今はそんなことを言っている場合ではない。

ガルドと均の霊格が平均化され、均とガルドに同じ霊格が分け与えられた。

結果的に、均の霊格が増大する。

「耀！逃げるぞー！」

痛みで辛そうな耀に声をかけながら、均は耀を連れて逃げ出した。

飛鳥たちを探し、何とか合流する。

均の腕の中には、お姫様だっこされた耀。

均の手の中には、本物の剣とコピーされた剣。

それらは見た目だけでなく、性能も完璧に同じだと均は感じていた。

コピー品は通常、僅かながらも性能に霊格の差による影響を受ける。

ガルドが持ち主に設定されていたようだ。

飛鳥とジンは、そんな様子の二人を見て、驚愕の表情を浮かべた。

均は二人に状況を説明する。

「だ、大丈夫、春日部さん!？」

「大丈夫じゃない。すごく痛い」

「ごめん、助けられなかった。……悪いけど、ジン、飛鳥。耀の介抱を

「任せてもいいかな?」

「え?ど、どういう意味ですか!?!均さん!?!」

「あのクソ虎の腹をかつさばいてくる。絶対に許さない」

「待ちなさい。私も行くわ」

「え、え?飛鳥さんも何を言いだすんです!?!」

「ジン君、春日部さんのことをお願い。行きましょう、均君」

「危険だよ?僕は君を守りきれないかもしれない」

「大丈夫よ。作戦があるの。乗る?」

「……わかった、乗ろう。耀、ごめん。すぐに片付けてくるから、もう少し耐えてて。ジン、僕らはこれから勝ってくるから、安心して。真面目にやってくる」

「待っててね、春日部さん。——行きましょう」

均と飛鳥は二人を残し、森の中へ入っていった。

「それで、作戦って?」

「屋敷に火をつけるの。そして、森に命令して一本道を作るわ。そこにガルドが突進してきたら、また森に命令して縛り付ける。一瞬なら動きを止められるはずよ。そこで剣を刺すつもりだったんだけど、それは貴方に任せるわ」

「わかった。いい作戦だね」

二人は適当な場所で作戦を実行する。

ガルドはそれほど時間がかからずに釣れた。

「G E E E E Y A A A A A a a a a a a a a a a!!」

「思っていたより早かったのね」

ガルドは飛鳥が持っている瓦礫についた火に怯え、すぐには突っ込んでこなかった。

飛鳥は瓦礫を投げ捨て、手ぶらになる。

「さあ、来なさい」

その言葉を理解したわけではないだろうが、ガルドが飛び出す。

「GEEYAAAAAa a a!!!」

「今よ、『拘束なさい!』」

その声に森の樹々が呼応し、ガルドを両側から圧迫する。

ガルドの動きが止まった一瞬に均はガルドの前に滑り込み、その額に白銀の十字剣を突き立てた。

すぐに引き抜き、続けてガルドの腹を切り開く。

「ナイス、飛鳥。……じゃあね、クソ虎。その頭で出来るかは怪しいけど、出来るなら僕の仲間を傷つけた罪を後悔しながら死ね」

飛鳥は均の底冷えのするような声に戦慄した。

一緒に黒ウサギをからかったりはしていたが、均からそんな言葉を聞くことになるとは思わなかったのだ。

その言葉を放ったときの均は絶対零度の瞳でガルドの死体を見下ろしていた。

こうして、“フォレス・ガロ”とのギフトゲームは呆気ない幕切れとなったのだった。

怪我が酷かった耀は、ゲーム終了後、治療のためにすぐさまコミュニティに運ばれた。

“フォレス・ガロ”に奪われた“名”と“旗印”は、元のコミュニティに返還された。

“ジン”“ラツセル”の率いる“ノーネーム”というフレーズを集まった人たちに伝え、ジンをコミュニティの顔役にするという作戦はひとまずの成功を収め、“フォレス・ガロ”騒動は終結した。

第九話 クソお坊ちゃんのご対面だそうですね？

コミュニティに戻った均たちは、耀が二、三日も休めば回復すると聞いて、呆れていた。

今は均、十六夜、黒ウサギが本拠の談話室で話をしている。

「すごいね、箱庭。あの傷が三日って……………」

「ああ、流石は神様の箱庭だな」

「YES♪ただ出血が激しいので、増血を施しました。輸血となるとお金がかかるので」

「金がかからない方法があるならそっちでいいだろ。それで、例のゲームはどうなった？」

話の内容は仲間が景品に出されるギフトゲームのことだ。

均と十六夜が参加すると聞いて、黒ウサギは狂喜乱舞していたのだが、申請から戻ると泣きそうになっていた。

「ゲームが延期？」

「はい……………申請に行った先で知りました。このまま中止の線もあるそうです」

「それ、白夜叉様に言ってどうにかならないの？」

「どうにもならないでしょう。巨額の買い手がついてしまったそうですから」

均と十六夜の顔が不機嫌なものへ変わる。

「チツ。所詮は売買組織か。"サウザンドアイズ"にプライドはねえのかよ」

「仕方がないですよ。"サウザンドアイズ"は群体コミュニティです。今回の主権は"サウザンドアイズ"の傘下コミュニティの幹部、"ペルセウス"。」

双女神の看板に傷が付くことも気にならないほどのお金やギフトを得れば、ゲームの撤回くらいやるでしょう」

「……………ねえ、それさ。さらに金額を上乘せして買い取るってのはダメなの？」

「……………ちゅー」

十六夜と黒ウサギがハモる。

「いやいや、何言ってるんだよ、均。そんなのできるわけねえだろ」

「そうですよ。うちにはそんなお金はどこにも……」

「だから、お金があればできるんだよね？」

「それはまあ、はい……」

「ならいいや。ところで黒ウサギ、そのお仲間ってどんな人なの？」

「お、それは俺も気になるな」

「そうですね……一言でいえば、スーパープラチナブロンドの超美人さんです。思慮深い人で、黒ウサギより先輩でとても可愛がってくれました」

それを聞いて、均はさらに目を細める。

「へえ。それって今窓の外に来た人？」

均の言葉に黒ウサギがバツ！と振り向く。

その視線の先——窓の外に金髪の少女が浮いていた。

「レ、レティシア様!？」

「様はよせ。今の私は他人に所有される身分だ。それにしても、よく私に気がついたな」

レティシアと呼ばれた少女は、均に興味深そうな視線を向ける。

「見たことない霊格が見えたのでもしかしたらと思つて。金色が一瞬見えた気もしましたし。当たつていてよかったです」

「そうか。君が均か。白夜叉の話通りだな」

「え。白夜叉様、なにか言っていたんですか？」

「それは本人に聞くといい。それよりこんな場所からの入室ですまない。ジンには見つからずに黒ウサギと会いたかったんだ」

「そ、そうでしたか。あ、すぐにお茶を入れるので少々お待ちください！」

黒ウサギはともうれしそうに茶室に向かう。すぐにも踊りだしそうだ。

十六夜がじっと見ているのに気付いたレティシアは、その行動に小首を傾げる。

「私の顔に何か付いているか?..」

「別に。前評判通りの美人……いや、美少女だと思って。目の保養に観賞してた」

「確かにすごい可愛いよね」

「ふふ、なるほど。君が十六夜か。君もまた白夜叉の話通り歯に衣着せぬ男だな。」

しかし観賞するなら黒ウサギも負けていないと思うのだが」

「あれは愛玩動物なんだから、観賞するより弄ってナンボだろ」

「僕も同感」

「ふむ。否定はしない」

「否定してください！」

紅茶のティーセットを持って来た黒ウサギが怒りながら言う。

ティーセットが乱暴に机に置かれ、ガチャリと音を立てた。

「レティシア様と比べられれば世の女性のほとんどが観賞価値のない女性でございます。黒ウサギだけが見劣るわけではありませんっ」

「いや、全く負けちゃいねえぜ？違う方向で美人なのは否定しねえよ。好みで言えば黒ウサギのほうが断然好みだからな」

「僕はレティシアさんのほうが好きですね」

「……………。そ、そうですか」

「……………照れるな」

男二人の不意打ちのストレートな物言いに、女性二人が顔を赤らめて照れる。

この空気を頑張って元の空気に戻したのは、黒ウサギだった。いつでも苦勞人である。

「して、レティシア様！どのようなご用件ですか？」

「あ、ああ。用件というほどのものじゃない。新生“ノーネーム”がどの程度の力を持っているか見に来たんだ。」

ジンには合わせる顔がないからな。お前達の仲間を傷つける結果になってしまった」

「あ、やっぱりレティシアさんが吸血鬼なんですね」

「なるほど、だから美人設定なのか」

「え？」

「ああ、気にしないで続きをどうぞ」

十六夜の発言に止まった二人に均が続きを促す。

二人が、均たちの世界の吸血鬼美形設定を知っているはずもない。「実は黒ウサギ達が”ノーネーム”としてコミュニティの再建を掲げたと聞いた時、愚かなことを……と憤っていた。

だが、コミュニティを解散させるよう説得しに行ける準備が整った時に、聞き捨てならない話を聞いた。

神格級のギフト保持者がコミュニティに参加したと。しかも白夜又相手に一步も引かなかった者も一緒に参加したとな」

黒ウサギの視線が均達に移る。

ギフトで言えば均の”均等分配”も大概なのだが、均はまだ白夜又にしか伝えていないためかそこまで騒ぎにはなっていない。

白夜又が約束を守ってくれているようで、密かに安心した均だった。

「そこで私はその新人達がコミュニティを救えるだけの力を秘めているのか試したくなったのだが……残念ながらガルドでは当て馬にもならなかったよ。どうしたものか」

「……アンタは”ノーネーム”が魔王相手に戦えるのかが不安なんだろう？ならその身で、その力を試せばいいじゃねえか。——どうだ、元・魔王様？」

十六夜の発言に、少し驚いたようなレティシアはすぐに微笑んだ。「ふふ、なるほど。実にわかりやすい。初めからそうしていればよかったか」

「レティシアさん？乗り気なところに悪いですけど、今の貴女じゃ十六夜に勝てませんよ？」

均はレティシアにそつと近づき、耳元で告げる。

「……なぜそう言いきれぬ？元とはいえ魔王で、鬼種の純血の私人間相手に遅れを取ると？」

「うん。貴女の霊格が小さい。それが元々の貴女の実力なのかはわかりませんが、そんな状態で勝てる程十六夜は弱くないです。それが貴女の本来の実力とは思えませんし。まあ、どうしてもやるといふな

ら止めはしません」

「……………そうか。ではやろうか、十六夜」

均の言葉に一瞬の躊躇いを見せたが、レティシアはすぐに気を取り直して十六夜に話しかける。

「おう。ゲームのルールはどうする?」

「共に一撃ずつ打ち合い、受け合う。受け切った方が勝ちだ。どうだ?」

「いいね、シンプルイズベストって奴?」

そう言つて二人は窓から中庭に飛び降りていった。

均も木から木へ飛び移りながら後を追う。十六夜と同じように窓から直接飛び降りたら骨折すること間違いないので、当然の措置だった。

(どーせ十六夜は全力でやるんだろうから、なにかあつたら僕が助けなきゃ……………はあ。めんどくさい)

「へえ?箱庭の吸血鬼は翼が生えてるのか?」

「ああ。翼で飛んでいるわけではないがな」

レティシアがギフトカードを取り出す。

それを見た黒ウサギは驚愕して声をあげる。

「レ、レティシア様!?それは」

「下がれ黒ウサギ。力試しとはいえ、コレが決闘であることに変わりはない」

レティシアがギフトを顕現させる。

「互いにランスを一打投擲する。受け手は止められねば敗北だ。悪いが先手は譲ってもらおうぞ」

「好きにしな」

レティシアはランスを構えると、力を溜めて十六夜に向けて打ち出す。

「ハアア!!!」

空気を割るほどのスピードで迫るランスを前にして、十六夜は――

「カツ――しやらくせえ!」

それを殴りつけた。

「……は………?」

レティシアと黒ウサギの声が重なる。

打ち返されたランスは砕けちり、無数の破片となってレティシアが避けられないスピードで向かっていく。

避けられないと悟り、ダメージを覚悟したレティシアに、衝撃が――

こなかった。

それどころか――

「……え?」

「大丈夫ですか、レティシアさん。怪我とかはないと思いますけど」
均にお姫様抱っこされていた。

「え、ええ、え、つと……?」

均がレティシアを助けたようで、レティシアもそれを理解したから

こそ、声が出なかった。

第三宇宙速度に匹敵する速度で迫るあの鉄の嵐をただの人間が躲せるわけがないのだ。

それも、自分を抱えたままなど。

「あの……大丈夫ですか？」

「……………」

「おい、均。いつまでお姫様抱っこしてるつもりだ？」

「え？だってレティシアさんが全く降りようとする素振りを見せないから。落とすわけにもいかないし」

「え!?う、うわあ!?!す、すまない!」

レティシアが慌てて均の腕から転げ落ちた。

焦りすぎである。

「ああ、大丈夫ですよ。それより怪我はありませんか？」

「あ、ああ。心配いらぬ。助かった。でも、どうやって……?」

「十六夜が何をしてくれるかなんて予想つきますから。レティシアさんが槍を投げた直後に動いたんですよ」

「うそだ! 仮に私が投げた直後に動いたとしても間に合うはずがない!」

私は確かに打ち出した後の体勢で、迫り来る鉄の塊を見ている!

あそこから間に合うためには何か秘密が——」

レティシアが動揺もあって早口でまくしたてている最中、黒ウサギはレティシアに近づくとその手からギフトカードを引ったくった。

「く、黒ウサギ! 何を!」

レティシアはすぐに抗議の声をあげるが、黒ウサギはそれには反応せずにレティシアのギフトカードを見つめて震えながら言った。

「……やっぱり、ギフトネームが変わってる。神格が残っていない」

「なんだよ。もしかして元・魔王様のギフトって吸血鬼のギフトしか残ってねえの?」

「……はい。武器は残してありますが自身に宿る恩恵は……」

「ハッ。どうりで齒ごたえが無いわけだ」

「レティシアさん、わかりました? 勝てないって」

「……ああ、そうだ、な」

「さっきの耳打ちはそのことを言ってたのですか……。それにしても、どうしてこんなことに……!」

その問いに対し、レティシアは口を開き、閉じることを繰り返した。

「まあ、あれだ。なんか話すなら中に戻ろうぜ」

「そう、ですね……」

そのとき、遠くから褐色の光が射し込んだ。

いち早く気がついたのは、レティシア。

「あれは、ゴーゴンの威光!? まずい、見つかった!」

レティシアは三人を庇うために前に出る。

均と十六夜は咄嗟に構えた。

黒ウサギが光を見て、驚愕の声をあげる。

「ゴーゴンの首を掲げた旗印……!?!だ、駄目です! 避けてくださいレティシア様!」

黒ウサギの叫びも虚しく、レティシアに光が届く――

寸前で、均が光を蹴りつけた。

ついでにレティシアを守りやすいように抱きかかえる余裕も見せる。

「「……はっ」」

均以外の三人の声が揃う。

光が来た方角からも光を撃ったと思われる騎士風の男達が押し寄せ、慌てる。

「ど、どういうことだ!? 吸血鬼が石化してないぞ!」

「わ、わからん! 仕方ない、もう一度だ!」

「例の“ノーネーム”もいるようだが、どうする!」

「邪魔するようなら構わん、斬り捨てろ!」

「吸血鬼を抱いてる奴は!」

「まとめて石化させろ!」

それらの発言で十六夜が普段の調子を取り戻した。

「まいったな、生まれて初めておまけに扱われたぜ。手を叩いて喜べばいいのか、怒りに任せて叩き潰せばいいのか、どっちだ？」

「そ、そんなことより今は均さんを！」

「その吸血鬼を持つてる奴！逆らわずに吸血鬼を渡せば貴様に手荒な真似はしない！」

「そ、そうだ均！私のことはいいい！放すんだ！」

騎士風の連中の先頭にいる男とレティシアから次々に声をかけられるが、均は頷かない。

というより、そんなことそちのけで内心とても感心していた。

(すごいな、このクリアブーツ。本当に恩恵を打ち消せるのか。手応え的に、限界はありそうだけど……)

ゴーゴンの威光という単語、レティシアの行動から石化に関わる攻撃が行われると推測し、行動し始めたのはよかった。

しかし、どうにかするための手段が白夜叉が譲ってくれたクリアブーツしかなく、石化するのも覚悟して光線を蹴りつけたのだ。

ぶつちやけ半信半疑だった。白夜叉とその友人に感謝だ。これは、とても使える。

「遠慮します。ところで貴方達に相談があるんですけど」

「ハッ、なにが相談だ！石化のギフトを準備しろ！準備できしだい——」

ペルセウスのメンバーの聞き耳を持たない態度を、均の声が遮る。

「——僕がレティシアを買い取ります」

「——なに？」

均の発言に場が静まる。

「僕が、レティシアを、買い取る、と言いました。確かレティシアに買い手が付いたからギフトゲームが中止になったんですよ？どうせ見知らぬ他人に取られるくらいなら、僕の物にします」

「……クッ、クハハハハ!!」
「ノーネーム」などにそんな金があるわけがないだろう！寝言は寝て言うんだな！

「「ノーネーム」にじゃない。「僕」にその金があるんです。貴方達のリーダーに会わせてくれませんか？」

均はペルセウスのメンバーの嘲笑をにこやかに流し、静かに笑って返す。

すさまじい怒気を放ちながら。

そのただならぬ気配にペルセウスのメンバーがたじろぐ。

「……君らのリーダーは、今どこにいる？まあ、予想はつくけどね。大方、白夜叉様のところにいるんだろう」

ペルセウスのメンバーに動揺が走る。

リーダーの場所を完璧に当てられたからだ。

均としては、その予想を立てることは難しくはなかった。

レティシアは、現在「サウザンドアイズ」の所有物だ。その所有物が、逃げ出してくるなど容易なことではないだろう。協力者がいるはずだ。そして、「ノーネーム」とレティシアのために協力してくれそうな者と言えば……。

ペルセウスのリーダーが余程の間抜けではない限り、白夜叉のところでレティシア捕獲の報告を待っているに違いない。

「当たりか。十六夜、黒ウサギ。他のみんなを呼んで来て。白夜叉様のところに行くよ」

「お？おうわかった。ちょっと待ってろ」

「え？お、お待ちください十六夜さん！」

その一言で全てを理解し本拠に戻る十六夜と、それを追う黒ウサギ。

「じゃあ、僕は直接交渉に行きますので。そのときにレティシアも返しますし、貴方達はもう帰って大丈夫ですよ」

「そ、そんなことできるわけがないだろう！馬鹿なことを抜か——」

「か・え・れ」

「だ、だま——」

「……帰れと言っているのが聞こえませんか？では、そんな耳は要りませんね？ついでに、命もまとめてここに置いていきますか？貴方達百人程度なら、殺すことは簡単ですが」

ハツタリか事実か。

均が笑顔で平然と宣った内容に、ペルセウスのリーダー格の男が怒

りに肩を震わせる。

「わ、我々を愚弄するのもいい加減にしろ！石化のギフト、撃て！」
光が飛んでくる。

均は宣言してくれるなんて優しいなあと思いながら、光を蹴り返した。

「「なっ!?!」」

「……今の僕に石化のギフトは効きません。貴方達の実力ならレティシアを抱きかかえたまままで十分対処できます。だから、か・え・れ」「くっ……」

「それとも、やりますか？貴方達から吹っかけてくることになりますから正当防衛ですけど」

「そ、そうか！証拠がなければ正当防衛にはならない！後で口裏を合わせればいい！お前ら、かかれ！」

それだ！と言わんばかりに顔を輝かせるペルセウスのメンバー。

「なっ！や、やめろー！」

レティシアが均を庇うために声をあげる。

だが、そのことに触れたのが均だという事実を忘れてはいけない。

「会話は録音してますけどね。それでもいいならどうぞ?」

均の言葉にペルセウスの面々が止まる。

自分で言うておいて、対応するための準備をしていないわけがない。

「……はあ。そんなことで躊躇うくらいなら無駄に頑張ろうとしないでよ。ほら、帰って」

ペルセウスのメンバーは悔しそうにしてその場を立ち去った。

だが――。

均は怜悯な殺気を庭の一面に放つ。

「おい、そこに隠れてる奴。帰れよ。ふざけたことしてると本当に殺すよ?」

「チッー！」

「な、あれは不可視のギフト!?!」

不可視のギフトで姿を消していた者がいたのだ。

均は靈格が見えるのでバレバレだったが。

「はあ、やっと全員いなくなつた」

「均、よかつたのか……？ 私なんかのために……。そ、それよりそんな大金をどこから……？」

「え？ ああ、大丈夫だよ。レティシアは仲間だつたんだし。それにさつきも言つたけど、こんな可愛い娘を他人に取られるくらいなら僕が買い取るよ。そうすればコミュニティにも貢献させられるでしょ？ お金は心配しないでいいよ。諸事情であるから」

「……………」

均にさらつと可愛いと言われたレティシアは赤面して照れる。

そこで、十六夜達が飛鳥を連れて戻つて来た。

「この人は？」

「昔の仲間の元・魔王様」

「ま、話は道中でね。じゃあ、行こうか」

“サウザンドアイズ”の支店に着いた均達は店員の中に通された。

白夜叉と、“ペルセウス”のリーダーのルイオスという者が待つているという。

“ペルセウス”のリーダーは“余程の間抜け”ではなかつたらしい。

「うわお、ウサギじゃん！ うわー実物初めて見た！ ミニスカにガーターソックスつて随分エロいな！ ねー君、うちのコミュニティに来いよ。三食首輪付きで毎晩可愛がるぜ？」

ぺらぺらとまくしたて黒ウサギの脚をねぶるように見るルイオスに、嫌悪感を感じ脚を両手で隠す黒ウサギ。

その黒ウサギの前に出た均がレティシアを自分の横に立たせて切り出す。

「貴方がルイオスさん？ 貴方のところの商品であるレティシアを連れて来たよ」

十六夜とルイオス以外のメンツは、均が敬語じゃないことに違和感を覚える。

そして十六夜が言っていたことを思い出した。

——均は敬語をつける価値もないと思った相手には最初から砕けた言葉で話す——

ルイオスの態度を見て、納得したメンバーだった。

「ん？ああ、どうも。こっち持つて来て」

「うん。でもその前に貴方に言いたいことがあるんだ」

「なに？早くしてよ」

「僕にレティシアを売ってくれ」

「——はい？」

ルイオスが目を困惑の色に染めて訊き返す。

「だから、レティシアを売ってくれて言っただ」

「なに言ってるんのお前？ソレにはもう買い手が——」

「その買い手以上の額を出せばいいよね？」

「え？本当になに言ってるの？頭大丈夫？お前達“ノーネーム”にそんな大金あるわけ——」

「……なんでこの話聞く人間は全員、コミュニティが買うと思いつくわけ？僕が買うって言ってるよね。それで？その買い手はいくら出したのさ」

「——これぐらいだけど」

ルイオスが契約書の金額の欄のみを見せる。

それをチラリと一瞥した均は、

「え？そんなものなの？それならその倍は余裕で出せるけど」

などと言いつつ切った。

「——は？」

「信じられないなら見る？」

「で、でも、サウザンドアイズで買物をするならコミュニティが発行してる硬貨じゃないと——」

「疑り深いなあ。ほら」

均はおもむろにギフトカードを取り出すと、金を顕現させる。

もの凄い枚数の硬貨が床に散らばった。

「はあ!？」

ルイオスが急いで手に取って確認する。

確かにそれはサウザンドアイスが発行している硬貨だった。

ルイオスが確認したのを見届け、均は全てギフトカードに収納する。

「僕はこれで、レティシアを——正確に言うとレティシアの権利を買い取りたい。どう？」

「——権利？権利なんて買い取ってどうするのさ」

レティシア本人ではなくレティシアの権利という妙な言い方をした均を不審に思うルイオス。

「それで再びレティシアをギフトゲームの賞品にしてもらおうと思っ
てね。やっぱりちゃんとギフトゲームをしてほしいな——と思って——」

「断る」

「——え？」

聞き間違えたかと思い均は訊き直す。

「それならお前との商談は不成立だ。さっさと返せよ」

聞き間違いなどではなかったらしい。

この拒絶の言葉を受けて、均は即座に道中で話していた作戦に切り替える。

「へえ。こつちから金を払ってまで穩便に済ませようと思ったのに。
なら仕方ない。白夜叉様、お話ししたいことが」

「うむ、なんだ？」

均はみんなと決めた、『レティシアが“ノーネーム”の敷地で暴れ、取り押さえるときにも様々な暴言を吐いた』という作り話を、さも本当のこのように語る。

「と、いうわけです。ご理解いただけましたか？」

「う、うむ。確かに受け取った。ヴァンパイアよ、相違ないか」

「……私はやっていない」

事実だ。それでもこういう場合は、口裏を合わせるものである。

だが、均はあえてこう言わせるようにした。

均は心の中でレティシアに再度謝りながら——道中ではもう何度

も謝っている——半ば吐き捨てるように——もちろんこれも演技だ——レティシアの発言をぶった切る。

「やった奴はみんなやってないって言うものですよ」

均の底冷えするような声音に、白夜叉が少々たじろぐ。

「そ、そうか。では、謝罪を望むのであれば後日」

「いえ、それでは僕たちが受けた屈辱の割に合いません。双方のコミュニティの決闘によって決着をつけるべきかと思えます。"サウザンドアイズ"にはその仲介をお願いしたくて参った次第です。"ペルセウス"が拒むようなら"主権者権限"の名の下に」

「いやだ」

唐突にルイオスが声をあげた。

「は?」

「決闘なんて冗談じゃない。それにその吸血鬼が暴れたっていう証拠はあるの?それに口裏を合わせているだけかもしれない」

「いやいや合っていない口裏合っていないから」

たまらず均はツッコむ。

「そもそもそいつが逃げ出した原因はお前達だろ?実は盗んだんじゃないの?」

その言葉に黒ウサギが反応し声を荒げる。

「な、なにを言いだすのですか!そんな証拠がどこに」

「まあいいけど。どうしても決闘したいならちゃんと調査しないとね。もっとも、調査されて一番困るのは別の人だろうけど」

「そ、それは……」

黒ウサギは言葉に詰まる。

今回のレティシア脱走を手助けしたのは間違いなく白夜叉だ。

白夜叉にはノーネームを支える上で世話になっている。

黒ウサギはこれ以上白夜叉に迷惑をかけたくなかった。

それゆえ二の句が継げなくなってしまったのだ。

「しっかし可哀想だよねーソイツも。箱庭から売り払われるだけじゃなく、恥知らずな仲間のせいでギフトまで魔王に譲り渡すことになっちゃったんだし」

黒ウサギは箱庭の外に出されるといふ発言に腹を立てた。

吸血鬼は、箱庭の中でないと陽の光を浴びることができない。

だが、それよりも動揺のほうが強かった。

ルイオスはそれを見逃さずに畳み掛ける。

「報われない奴だよ。『恩恵』は魂の一部だ。それを馬鹿で無能な仲間の無茶を止めるために捨てて、他人の所有物つていう屈辱を耐えてまで駆けつけたのに、その仲間があっさり自分を見捨てた！

今ソイツはどんな気持ちなんだろうねえ!？」

レイシアは自分の力を失った理由を暴露され、唇を噛んでうつむく。黒ウサギ達には知られなくなかったのだろう。

黒ウサギはみるみる蒼白になっていった。

「そこでだ、黒ウサギさん。取引をしよう。吸血鬼を『ノーネーム』に戻してやる。代わりに、君は生涯僕に隷属するんだ」

その言葉に飛鳥は憤慨し、黒ウサギを連れて席を立とうとする。

が、黒ウサギは動こうとせず、その瞳は困惑に揺れていた。

それに気付いたルイオスは、厭らしい笑みを携えてまくしたてる。

「ほらほら、君は『月の兎』だろ？君達にとって自己犠牲つて奴は本能だろ？ウサギは義理とか人情とか好きなんだろ？箱庭に招かれた理由が献身なら、安い喧嘩を安く買っちゃまうのが筋だよな!？ホラどうなんだ黒ウサ」

「『黙りなさい』！」

飛鳥が言葉に力を込める。

「貴方は不快だわ。『頭を地に伏せてなさい』！」

ルイオスの身体が徐々に下がる。

だが、何が起きたのか理解したルイオスは強引に身体を起こし、言葉を紡ぐ。

「おい、おんな。そんなのが、つうじるのは——格下だけだ、馬鹿が!」
ルイオスは激昂し、ギフトカードから鎌を取り出し、飛鳥に向かって振り下ろす。

その鎌を、側で静観していた十六夜が止めた。

「な、なんだお前……!」

「十六夜様だよ色男。喧嘩なら利子付けても買うぜ?」

そう言つて鎌を押し返そうとした十六夜と、未だに振り下ろされようとしているルイオスの鎌を、均が同時に抑えた。

そして白夜叉に声をかける。

「ねえ、白夜叉様……。アレ、やつちやつていいですか?」

アレ、が何を指しているのか理解した白夜叉は、慌てて全員を止めにかかる。

均は結構キレていた。

「ならん、やめんか戯け共!話し合いで解決出来ぬなら門前に放り出すぞ!」

その言葉に一応は場が静まる。

「ねえ、ルイオスさん。黒ウサギの件だけど、こつちで話し合う時間をくれないかな?黒ウサギも今この場で即決、というのは難しいだろうし」

「ちよつと均君!」

均は飛鳥を無視する。

「オツケー。こつちは取引ギリギリの日程——一週間だけ待つてやるよ」

そしてその場はお開きとなった。

コミュニテイへ帰る途中。

先に出ていった飛鳥と黒ウサギが大声を上げて喧嘩している。

均と十六夜が追いつくと、飛鳥が食つてかかつてきた。

「均君!なぜあんなことを言ったの!」

「一つは黒ウサギに馬鹿なことをさせないように説得するため。もう一つはあの場を仕切りなおして時間を稼ぐため。あそこで話してても埒があかなかつたから」

均は冷静に根拠を述べる。

飛鳥はぐうの音も出なかつた。

「それで、飛鳥と黒ウサギの性格を考えればお互いの言い分は容易に

想像出来るけど——これは黒ウサギの考えが間違ってるって僕は思うな」

「な、なぜですか!」

「レティシアは“ノーネーム”の本拠に来た時覚悟を決めてたはずだよ。あの目は助けを求めてる目じゃなかった。まあ僕は石化は許せなくてつい助けちゃったけど」

「た、助けを求めないから助けないというのは詭弁でございます!」

「それはそうさ。でもレティシアがギフトのことを黙ってたのは黒ウサギに身代わりになつてほしくないからだと思うな。理由が暴露されたときも黒ウサギに知られたのを悔しがっていたみたいだったから。十六夜はどう思う?」

「俺も同感だ。それとお嬢様も言い方が悪いな。もっと素直に気持ち伝えてよ」

(あ、十六夜には会話の内容聞こえてたのね。やっぱりすごいな、十六夜)

二人の言葉に黒ウサギが黙る。

飛鳥はわたわたりしていた。

飛鳥と黒ウサギがひとまず仲直りしたところで、何はともあれジンや耀にも話さねばならないということで、四人は本拠に戻った。

第十話 ペルセウスと決闘だそうですね？

あのルイオスとの嬉しくもない出会いから三日後。

ジンに謹慎処分を受けていた黒ウサギは外に降る雨を見て黄昏れていた。

あの後、本拠に帰ってきた後の説明で少々ヒートアップした黒ウサギ、飛鳥、耀の三人は謹慎ということになったのだ。

ちなみに均と十六夜は傍観に徹していた。

そんな中、黒ウサギの部屋の扉がノックされる。

「はい、鍵もかかっていますし中に誰もいませんよー」

「……。入ってもいいということかしら？」

「そうじゃないかな？」

なんとも愉快的な理屈である。

「あら、本当に鍵がかかっているわ」

「ホントだ。こじあける？」

「いつそ壊したらどうかしら？」

「そうだね」

「お二人とも、ちょっと待ってください——」

黒ウサギの制止虚しく、黒ウサギの部屋のドアはバキンツ！という音とともにただの壁と化した。

飛鳥達はコミュニケーションの子供達が作ったお菓子を持ってきていた。

あの騒ぎのあと、飛鳥達は少なからずギスギスしてしまっていたし、均と十六夜はどこかへ行ってしまった。

十六夜のみならず均にまで見捨てられたのかと、コミュニケーションのメンバー、とりわけ均によくしてもらっていた子供達は落胆した。

そんな状況の中、子供達が必死に考えたのがこれだ。

これで仲直りしてほしいという計らいらしい。

三人がすっかり仲直りをして、これからどうするべきか話し合っていたところに誰かの声が響いた。

「邪魔するぞ」

十六夜だった。ドガアン！という効果音を伴って、ドアを蹴破って部屋に入る。

「い、十六夜さ——」

黒ウサギが何か言いかけたところで、

「お邪魔しますね」

と、言葉遣いだけは丁寧な均が、傘をさしたまま窓を蹴り割って入ってきた。

最早やつてるのが賊以外の何者でもない。

「な、均さんも！貴方達今まで何処に、って破壊せずに入れないのでございますか貴方達は!？」

「だって鍵かかってたし」

と、十六夜。

「こっちからの方が近かったので」

と、均。

「あ、なるほど！じゃあ黒ウサギが持つてるドアノブは何なんですかのお馬鹿様!!そして均さんもノックするとかあるでしょう！」

「ノックのつもりだったんだけど」

「もう手に負えません!!」

黒ウサギはキレてドアノブを十六夜に投げつける。

十六夜が持つていた風呂敷でそれを均の方に打ち返すと、均も似たような風呂敷でドアノブを外に打ち出した。

「ココーン!と、妙に軽快な音がしたのが尚更腹立たしい。」

「危ないなあ。何するんだよ十六夜」

「文句は黒ウサギに言ってくれ」

「何するんだよ黒ウサギ」

「誰のせいでこうなったと思ってるんですか!？」

「「黒ウサギ?」「」」

「そのくだりはもういいです!!」

四人で黒ウサギをからかってから、耀が尋ねる。

「それで、その風呂敷には何が入ってるの?」

「ゲームの戦利品。見るか？」

耀が十六夜の風呂敷を覗き込み、驚きに目を丸くする。

「……………これ、どうしたの？」

「だから戦利品だって言ってるだろ」

「僕の方もだよ。飛鳥、見る？」

飛鳥は均の風呂敷を覗き込む。

少ししてそれが何なのか理解した飛鳥は小さく嘖き出して、笑った。

先ほど黒ウサギが言っていた物ではないか。

「もしかして……………貴方達、これを取りに行ってたの？」

「ああ。均と競争してただけだな。負けちゃった」

「運悪く、十六夜が選んだ方が十六夜がそんなに得意じゃないゲームだったんだよ。これで十六夜に何か一つ命令できるんだ。やったね」

均は嬉しそうに笑う。それに対して十六夜は少し悔しそうだ。

「なるほど。でもねえ均君、十六夜君。こういう面白いことを企むなら、次からは一声かける事。いい？」

「そりゃ悪かったな。次は一声かけるぜお嬢様」

二人は悪戯っ子のように笑う。

そして最後に均は黒ウサギに声をかける。

「これで準備はできた。後は黒ウサギがどうするかだよ」

十六夜から風呂敷を受け取って、二つとも黒ウサギに渡す。

風呂敷の中身をすでに察している黒ウサギは、声を震えさせながら均に尋ねる。

「……………あの短時間で、本当に？」

「うん。まあ一番時間かかったのはどっちが短い時間で倒したかの確認だったけどね」

均は何でもないことのように微笑む。

だが、黒ウサギはこれらを手に入れるためのギフトゲームがどんなゲームかを知っている。そこまで楽ではなかったはずだと確信した。

「ありがとうございます……………ございます。これで“ペルセウス”に戦いを挑めます」

「いいって。僕のは憂さ晴らしも兼ねてるから」

「……………憂さ晴らし？」

「うん。倍額出してまで買い取るって言ってあげたのに断ったあのクサレお坊っちゃんに思い知らせてやりたくてね」

一瞬で均の柔らかい微笑みが怖い笑顔に変わる。

均の怒気にあてられて、黒ウサギは先ほどとは別の理由で涙が出そうになっていた。

その涙が溢れる前に拭き、黒ウサギはしっかりと宣言する。

「ペルセウスに宣戦布告します。我らが同士、レティシア様を救い出しましょう」

さらに三日後、均達はペルセウスの本拠で均達が集めた宝玉——ペルセウスが指定したこれをペルセウスに提出すると、伝承になぞらえたギフトゲームを挑める——をルイオスの前に突き出し、ギフトゲームを開催させた。

『ギフトゲーム名 “FAIRY TALE in PERSEUS”

・プレイヤー一覧 逆廻 十六夜

久遠 飛鳥

春日部 耀

平 均

・“ノーネーム”ゲームマスター ジン||ラツセル

・“ペルセウス”ゲームマスター ルイオス||ペルセウス

・クリア条件 ホスト側のゲームマスターを打倒

・敗北条件 プレイヤー側のゲームマスターによる降伏。

プレイヤー側のゲームマスターの失格。

プレイヤー側が上記の勝利条件を満たせなくなった

場合。

・舞台詳細・ルール

*ホスト側のゲームマスターは本拠・白亜の宮殿の最奥から出てはならない。

*ホスト側の参加者は最奥に入ってはいけない。

*プレイヤー達はホスト側の（ゲームマスターを除く）人間に姿を見られてはいけない。

*姿を見られたプレイヤー達は失格となり、ゲームマスターへの挑戦資格を失う。

*失格となったプレイヤーは挑戦資格を失うだけでゲームを続行する事はできる。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、“ノーネーム”はギフトゲームに参加します。

“ペルセウス”印

ペルセウス本拠の扉に貼付けられている“契約書類”を見て、十六夜が呟いた。

「姿を見られれば失格、か。つまりペルセウスを暗殺しろってことか？」

「なら伝承通りに寝ててくれればいいんだけどね。そこまで簡単じゃないよなあ」

均が望んでもいない希望的観測を口にする。

均はルイオスを直接倒したくてウズウズしているのだ。

「YES。伝承と違い、ハデスのギフトを持たない黒ウサギ達には綿密な作戦が必要です」

「これは——大きくわけて三つの役割分担が必要ね」

「うん。ジン君と一緒にゲームマスターを倒す役割。見えない敵を感じて撃退する役割。それと、失格覚悟で囮と露払いをする役割」

「春日部は鼻が利く。耳も眼もいい。不可視の敵は任せるぜ」

「黒ウサギは審判としてしかゲームに参加できません。ですからゲームマスターを倒す役割は、十六夜さんをお願いします」

「僕は全体のサポート兼十六夜の控えつてところかな」

「あら、じゃあ私は囷と露払い役なのかしら？」

少し不満そうな飛鳥。

自分の力がルイオスに効かないことはわかっているも不満なものは不満なんだろう。

「悪いなお嬢様。俺も譲ってやりたいのは山々だけど、勝負は勝たなきゃ意味がない。あの野郎の相手はどう考えても俺が適してる」

「……ふん。いいわ。今回は譲ってあげる。負けたら承知しないから」

了解、というふうに着を疎める十六夜。それに対して、黒ウサギは真面目な顔で懸念を言う。

「残念ですが、必ず勝てるとは限りません。油断しているうちに倒せねば、非常に厳しい戦いになると思います」

「……あの外道、そんなに強いのか？」

「いえ、ルイオスさんご自身の力はさほど。問題は彼が所有するギフトです。黒ウサギの推測が外れていなければ、彼のギフトは——」

「隷属させた元・魔王様」

「そう隷属させた——って、え？」

「もしペルセウスの神話通りなら、ゴーゴンの生首がこの世界にあるはずがない。あれは戦神に献上されているはずだからな」

「なのにあのクズ共は石化のギフトを使ってる。——星座として招かれたのが箱庭の“ペルセウス”。てことはクサレお坊っちゃんの首にぶら下がっているのは、アルゴルの悪魔ってところかな？」

均と十六夜の話が分からないように、飛鳥と耀は首を傾げている。

それに対して、黒ウサギは戦慄していた。

「均さん、十六夜さん……まさか、箱庭の星々の秘密に……!?!」

「うん。ちよつと前に十六夜と星を見てたことがあったんだけど、その時に推測して、アイツを見て確信したよ」

「その後手が空いた時に考えを固めたつてところだな。白夜又も機材は貸してくれたし、調べるのは楽だったぜ」

「で、十六夜。アルゴルの悪魔なんだけど、僕がリタイアしてなければやらせてくれない？どんなものか知りたくて。もちろん、不可視の奴らも相手にするから安心して」

「わかった。ていうか、オマエならそう言うと思つてたしな」

十六夜が不敵に笑う。

その様子を見ていた黒ウサギが少し口角をあげながら話しかける。

「均さんはなんとなくわかりますが……十六夜さんつてば、意外に知能派でございます?」

「何を今さら。俺は生粋の知能派だぞ。黒ウサギの部屋の扉だって、ドアノブを回さずに開けられただろうが」

その言葉に、黒ウサギの頬がヒクついた。

「いや、ドアノブが付いてませんでしたから。扉だけでしたから」

「僕なんて手すら使わずに部屋に入れたしね」

「あれは不法侵入も同然です!」

「あはは。さ、十六夜。その扉開けちゃつてよ。もちろんドアノブを使わずに」

「おう。任せとけ」

ヤハハ、と笑いながら十六夜が扉の前に立つ。

その様子を黒ウサギが冷ややかに見つめる。

「……………参考までに、方法をお聞きしても?」

「そんなもん、こうやって開けるに決まってるだろッ!」

十六夜が扉を蹴つてぶち破り、ペルセウスとのギフトゲームの火ぶたが切つて落とされた。

「飛鳥はしっかりと罠をやってくれてるみたいだね」

敵地のど真ん中にあるのにのんびりとした雰囲気均。

耀が五感を使って不可視の敵の位置を探る。

「人が来る。隠れて」

三人が隠れた後、耀が近づいてきた不可視の敵をぶん殴って倒し、兜を奪う。

「これが不可視のギフトみたい」

「助かるよ。さっそくそれ貸してもらえる？」

「?うん。はい」

「じゃあやるね」

“模倣投影”を発動させる。それで均の持つ不可視のギフトが二つになった。

「できた。これはジンに渡しておくね。かぶってて」

均はコピー品の不可視のギフトをかぶって倒されたペルセウスのメンバーに近づき、“均等分配”を発動させた。

均の霊格が僅かながらに上がり、姿だけでなく気配も消えた。ただし匂いはまだあったようだ。

「わっ。ありがとうございます」

「お?いきなり均の気配が消えたな」

「匂いはある。元のより性能がよくなったみたい」

「元々僕の方が霊格が下回ってたからだね。ところで、僕と耀でもう一つギフトを手に入れてくるよ。耀の分もほしいけど、欲を言ってしまうと意味がないからね」

「気にしなくていい」

「ごめんね。埋め合わせは必ずするから。黒ウサギが」

「わかった。期待してる。黒ウサギに」

そのとき、どこかから「なんでですか!」という謎の音声が届いてきた。

「じゃあ、行こうか」

「うん」

耀と、不可視のギフトを使用中の均が飛び出す。二人は次々と敵をなぎ倒していく。

そんな中、均は耀に近づくと不可視の敵を発見した。なぜか耀は気が

ついでいない。

「耀！」

つい叫んでしまったが構わず敵を蹴り飛ばす。

その敵は壁に叩き付けられ、不可視のギフトを落とした。

「耀、無事？」

「え？あ、私、危なかった？」

「うん。本物を使ってる奴がいたみたいだね。あそこで伸びてる奴」

そう言っただけが耀の顔を向けると、その方向に倒れている男がいた。ルイオスの側近だ。

レプリカと違い、本物は匂いも気配も隠せるようだ。

「よつと。このギフトはもらっていきますよ」

「待て……。お前、どうやって私の居場所を感知した？」

「僕の眼は特別製でして。気配がなくても存在していれば見えるみたいです。耀の近くに何かがいると思って全力で蹴らせてもらいました」

「……そうか。見事。お前達にはルイオス様に挑む資格がある」

側近はそれだけ言うと、意識を失った。

十六夜にも不可視のギフトを渡し、三人は最奥に辿り着く。

そこは闘技場のような造りになっていた。

「ふん。ホントに使えない奴ら。今回の一件でまとめて粛清しないと」

(一番使えないのは君だろうに)

均は言葉に出さないで、そんなことを思っていた。言葉にしない理由は言ったら面倒くさそうだと思っただからである。

ルイオスはブーツから生やした羽を使って飛び、均達の前に降り立つ。

「ま、ようこそ白亜の宮殿・最上階へ。ゲームマスターとして相手をし

ましよう。……あれ、この台詞を言うのってはじめても」

その発言に均は眉を顰め、使うつもりがなかった”恩恵”を使うことにした。

均は本気で集中し、ルイオスの意識と呼吸の合間を縫ってルイオスに肉薄して”均等分配”の力を解放した。

いくら親の七光りとはいえ、そこそこの霊格を持っていたルイオス。

その霊格を糧にして、均の霊格が増大する。

ルイオスは均を振り払う。

「なっ、お前、何をした!？」

自身の霊格が縮小したことにルイオスが驚愕を露にする。

「さてね。ほら、早くやろうよ」

「くっ……!」

ルイオスは空に飛び上がり、ギフトカードから炎の弓を取り出す。

「炎の弓? ペルセウスのギフトで戦うつもりはない、ということでしょうか?」

「当然。僕はゲームマスターだ。僕の敗北はそのまま”ペルセウス”の敗北に繋がる。そこまでリスクを負う決闘でもないだろ?」

「余裕ぶってるけど、アイツ自身は雑魚になってるから気にしなくていいと思うよ」

その言葉にルイオスは激昂し、ギフトカードが強く光り輝いた。

それを受けて均と十六夜が構える。

「ゴミが、僕を侮辱したことを後悔しろ! 目覚めろ——”アルゴールの魔王”!!」

「ra……Ra、GEEEEEEYYAAAAAaaaaaa
aaaaaaa!!」

現れた女は体中に拘束具と捕縛用のベルトを巻いている。

女は両腕を拘束するベルトを引きちぎり、絶叫をあげ続ける。その声に黒ウサギが耳を塞ぐ。

そのとき異変が起こった。

「うわ、これ僕にはカバーできない! 悪いけど十六夜、二人は任せた

！」

「おう！避ける、黒ウサギ！」

チラリと頭上を見た均は一瞬で判断を下し、ジンと黒ウサギを十六夜に任せる。

十六夜がジンと黒ウサギを助け出す。

頭上からは、石化した雲が降ってきていた。

“アルゴールの魔王”はこの世界の闘技場にいるメンバー以外の全てを石化させたのだ。

十六夜がジンに声をかける。

「下がってろよ御チビ。守ってやる余裕はなさそうだ」

「すみません……。本当に何も出来ず……」

「別にいいさ。それより、例の作戦は覚えているか？」

「目論見が外れちやったよね。レティシアの力を借りて魔王に対抗する予定だったんでしょ？」

「……………はい」

確かに元のレティシアの実力なら、魔王に対抗することもできたのだろう。

しかし、彼女は多くの魂を削っていたのだ。

「どうする？例の作戦は止めておくか？」

十六夜は真摯にジンに尋ねる。

しかしその言葉に、ジンは首を横に振った。

「均さん、十六夜さん。僕らにはまだ貴方達があります。貴方達が本当に魔王に打ち勝てる人材だというのなら——この舞台でそれを証明してください」

「OK。よく見てな御チビ」

「わかった。直接倒せるかは微妙だけど、全力でやるよ」

——“均等分配”は使わずに——その言葉を、均は飲み込んだ。

「さ、それじゃ準備はいいかよゲームマスター」

「ん？三人でかかってこないのかい？後ろの子がリーダーなんだろう？」

「寝言は寝て言いなよ、クサレお坊っちゃん。君ごとき、うちのリー

ダーが手を出すまでもない」

均はお得意のさわやかな柔らかな笑顔を浮かべる。完全にルイオスを馬鹿にしていた。

「——はっ。名無し風情が、精々後悔するがいいッ!!」

ルイオスとアルゴールが叫び、臨戦態勢に入る。

「じゃ、約束通り、僕にアルゴールの相手をやらせてね」

「ああ、俺もやりたいけどな。譲ってやるよ」

「さんきゅ。お礼にルイオスをあげるよ」

「いらねえよ」

十六夜が苦笑いを返す。

その二人を狙ってルイオスが炎の矢を放つ。

それを十六夜がものともせず弾き返したのを見て、均はアルゴールの下へ向かう。

「さあやろうか、アルゴールッ!」

「GEEEEEYAAAAA
AAAAA!!!」

アルゴ!ルはまるでその声が聞こえたかのように今までで一番強い叫びを返し、両腕を振り下ろす。

だがそれは、白夜叉ほど洗練されたものでもなく、十六夜ほど速いわけでもなかった。

そんなものを均が躲せないはずはない。

「——ほっと。じゃあ、少し寝ててね!」

躲すどころでは済まなかった。

均はアルゴールの横に回り込み、片腕に自分の手を添えて、相手の力を利用して地面に叩き付ける。

合気道の要領だ。

「いいいよおつとおお!!」

地面に伏せたアルゴールの脳天に渾身の力で踵落としを食らわせる。

人の身で出来るかぎりの体術を極めた均の一撃は、地面を少し陥没させた。

十六夜が規格外すぎて印象が薄い、十分に化け物だ。

む。

ルイオスが血を吐きながら吹っ飛んだ。

ルイオスは苦しうにしながらもアルゴールに命令する。

「クソっ、アルゴール！ 宮殿の悪魔化を許可する！ 奴らを殺せ！」

その命令が出た瞬間、白亜の宮殿が黒く染まり、床から怪物が湧き出る。

「ああ、そういえばゴーゴンにはそんなのもあったな」

「うわあ……これはめんどくさそうだな……」

「この宮殿はアルゴールの力で生まれた新たな怪物だ！ 貴様らの相手は魔王とその宮殿の怪物そのものだ！ このギフトゲームの舞台に――」

ヒートアップするルイオスの言葉を均が遮る。

「なら、この宮殿ごと壊せばいいんだね？ 僕には無理だから十六夜よろしく。僕はその辺の怪物殲滅してるよ」

「おう。わかった」

さざりとすごいことを言う均と十六夜。

瞬時に嫌な予感が体中を駆け巡ったジンと黒ウサギが反射で体を寄せ合い、危険に備える。

そして、十六夜が実行に移した。

魔宮となったものを殴って、四階部分を粉々に打ち砕く。

すでに生まれていた怪物達は、崩れゆく足場をもともせず跳び回る均によって細切れにされていた。

その手にはホワイトダガーが握られている。

途中から十六夜も怪物の殲滅に加わり、二人して崩れる足場から足場に跳び移って怪物たちに何もさせなかった。

数秒後。悪魔化によって生まれた怪物たちの姿はなくなっていた。

「おい、ゲームマスター。これで終わりってことはないよな？」

十六夜が少し退屈そうに声を出す。

十六夜を潰さなければ万に一つも勝ち目がないと悟ったルイオス

は、アルゴールに静かに指示を出す。

「——もういい。終わらせろ、アルゴール」

アルゴールの石化のギフトを解放する。

その石化の光を十六夜は——踏みつぶした。

「「はっ？」」

ジン、黒ウサギ、ルイオスの声が重なる。

「「こらこら、ダメじゃないか。そんなつまらないことをしたら」

平時のような穏やかな声音で、均がアルゴールに向けてダガーを振るう。

均の攻撃は、少しずつだが確実にアルゴールを傷つけていた。

その光景に呆然としていたルイオスだが、何とか気を持ち直し、叫ぶ。

「仕方ない、アルゴオール！ そのゴミだけでも石化させろ！」

再度ルイオスの指示を受け、今度は均に石化の力が襲いかかる。

が、均も光を蹴りつけて、何事もなかったかのようにアルゴールへの攻撃を続ける。

「僕にもギフトは効かないよー」

均はのんびりとした口調でルイオスにさらなる絶望を与える。

「さあ、続けようぜゲームマスター。"星霊"の力はそんなもんじゃないだろ？」

「いや、十六夜。コイツはこれで打ち止めだよ」

「なに？」

均はアルゴールを切り刻み続けながら十六夜と会話する。

「ルイオスが未熟なんだよ。アルゴールが拘束具に繋がれてたのがその証拠。本来の力を発揮できるならまだまだ終わらないだろうけど、

この状態だとね」

ルイオスは憤怒と憎悪を瞳に宿して均を睨みつける。

が、唇を噛んで何も言い返さない。否、言い返せない。均の言葉が事実だからだ。

「ハッ。所詮は七光りと元・魔王様。長所が破られれば打つ手なしつてか」

勝敗は誰の眼にも明らかだった。黒ウサギが宣言しようとした、その時――。

均は晴れ晴れとした、十六夜はこの上なく凶悪な笑みでルイオスを追いつめる。

「ああ、そうだ。もしこのままゲームで負けたら……お前達の旗印。どうなるかわかっているんだろうな？」

「な、何？」

「レティシアを取り戻すのは後でも出来るでしょ？まずは旗印を盾にしてもう一度ゲームを申し込もう。――そうだね。次は名前をもらおうかな」

ルイオスの顔が蒼白になる。そしてやっと周りの惨状に気がついたようだ。

仲間は石化し、宮殿は崩壊。アルゴールは切り刻まれてズタズタ。自分もかなりのダメージを負っている。

「その二つを手に入れた後“ペルセウス”の名も、旗印も徹底して貶め続ける。お前らがコミュニティの存続そのものが出来ないほど徹底的に、だ。……まあ、それでも縫つちまうのがコミュニティってものらしいけど？だからこそ貶めがいがあるってもんだよね？」

「や、やめろ……」

ルイオスは、自分たちのコミュニティが崩壊の危機に瀕していると理解した。

そこに、悪魔の提案が投げかけられる。

「そこで、僕からの提案。僕は今の僕たちの勝利をなかつたことにす

る権利をかける。君はアルゴールをかけて、僕と勝負しろ。嫌ならいいよ？十六夜が言ったことをするだけだし」

「ちよ、均さん!?!何を言っているのですか!?!」

「うんとね。実は僕、まだ怒ってるんだよ。僕を馬鹿にするのはいいけど、レティシアの気持ちを踏みにじる発言をしたコイツを許す気はないんだ。コミュニティの仲間まで下に見てるしき。ちようどコイツをボコボコにできるチャンスだし、コイツは逃げられない。アルゴールもほしいし。なら、餌に食いつくしかない状況で殴りたいなって。こういうのは一回思い知らせた方がいいと思っただけで、ダメかな?」

「え、ええつと……」

黒ウサギは困惑する。

ジンの方をチラリと見るが、ジンは何も言わなかった。

「いいじゃねえか、やらせてやれよ。均がここまで我が儘を言うなんて中々ねえぞ?」

「……………いいでしょう。均さんの行動を許可します」

「ジン坊っちゃん!?!」

黒ウサギが驚愕の悲鳴を上げる。本当に許可を出すとは思わなかったのだろう。

「ありがとう、十六夜、ジン。さあ、どうするルイオス? あ、ちなみにアルゴールを使うのは禁止ね」

「くっ、くっそおおおおお!! やってやるよ、やればいいんだろお!?!」

「そ。じゃあやろうか」

「うおおおおお!!」

ルイオスが絶叫しながら均に殴りかかる。

均も拳を構えた。

別口で開催されたギフトゲームは、一瞬で均の勝利に終わった。
それに伴い、ギフトゲームは「ノーネーム」の勝利で幕を閉じた。

第十一話 決着のその後だそうですよ？

「ノーネーム」は「ペルセウス」を下し、レテイシアを取り返した。
ご丁寧にレテイシアは石化させられていた。

その石化を解いて、覚醒したレテイシアに問題児三人と均——いや、問題児四人は完璧に口を揃えてこう言った。

「「じゃあこれからよろしく、メイドさん」」

「「は……………？」」

ジン、黒ウサギ、レテイシアが固まる。

そんな三人に問題児たちが優しく告げる。

「だって今回活躍したのって私達だけじゃない？ 貴方達はくつついてきただけだったし」

「うん。まあ私もあんまり活躍できなかったけど。本物のハデスのギフトを持ってた人には気づけなかったし、石化させられちゃったし」「俺もお坊っちゃん潰したただけだけだな。均にアルゴール任せたから。でもまあ挑戦権持ってきたの俺達だろ。なあ、均？」

「うん。僕は我が儘言っちゃらせてもらったし、アルゴールも隷属させたけど、それはみんなのおかげでもあるから僕の貢献度は十六夜と耀に少し返すとして。所有権は僕：十六夜：飛鳥：耀で2：3：3：2で話をついたんだよ」

「何言っちゃってんでございますかこの人達!？」

黒ウサギが素っ頓狂な叫び声をあげる。

その横でレテイシアも驚きに目を見開いていた。

「あ、アルゴールの魔王を？ 隷属？ 均がか？」

まあ、驚きの内容は黒ウサギとは違うが。

それに均が答える。

「あ、うん。実際はあのクサレお坊っちゃんにギフトゲーム仕掛けて奪ったんだけど。魔王って、ちよつと使ってみたかったんだよねー」
ニコニコしながらそんなことを宣っているが、魔王はちよつと使ってみたなどという理由で隷属させるものではない。

均の問題児の一端がここに見て取れた。

そして、ジンと黒ウサギが混乱する中で、レティシアだけが回復した。

「だが……ふむ、そうだな。今回の件で、私は皆に恩義を感じている。君達が家政婦をしろというなら、喜んでやろうじゃないか」

「レ、レティシア様!」

黒ウサギが驚愕の声をあげる。

そんな黒ウサギを無視して、飛鳥は晴れやかな笑みを浮かべる。

「私、金髪の使用人に憧れていたの。これからよろしく、レティシア」
「よろしく……いや、主従なのだから『よろしくお願いします』のほうがいいかな?」

「使い勝手がいいのを使えばいいよ」

耀の言葉を受けて、レティシアがさらに考え込む。

「そうか。……いや、そうですか? んん、そうでございますか?」

「黒ウサギの真似はやめとけ」

十六夜が笑いまじりに言う。

そこに均が乗った。

「そうだよ、はつきり言ってそれは気持ち悪いよ? あと、僕には敬語はいらぬから」

「気持ち悪いってなんでございますかこのお馬鹿様!!」

復活した黒ウサギが均の頭をハリセンで叩く。

いや、正確に言えば、均をハリセンで叩くために、黒ウサギが復活した。

スパアーン! という小気味いい音が響く。

「痛いなあ。何するんだよ黒ウサギ」

「誰のせいだろうなったと思っているんですか!」

言ってから、黒ウサギは後悔した。

このパターンは――

「「黒ウサギ?」」

「いやホントこのくだりもういいから!!」

いつもの口調がどこかへ行くほどに黒ウサギは荒れていた。

「ヤハハ。まあ許してやれよ。均がここまで自然体でいるなんて、お前らかなり信頼されてるぞ?」

「まあねー。この人達、いい人が多いから」

十六夜が思ったことを告げた。

均の自然な言葉に黒ウサギの怒りがするすると消滅する。

そこで、黒ウサギがあることを思い出した。

「そういえば、均さんに触れられてルイオスさんがかなり動揺されていましたが、何をしたんですか?」

その質問を受け、均は言ってもいいものか瞬時に検討する。

導きだした結論は、『ま、この人達なら大丈夫かな』というものだった。

「ああ、それね。僕がギフトを使ったんだよ」

「ギフトでございませうか?」

「うん。前に黒ウサギが言ってた質問に答えるよ。あ、黒ウサギには貸し一つ追加ね。」

「だから何ですか!?!」

僕が持つ先天性のギフトは四つ。

一つ目は“模倣投影”。皆の前でやってみせたよね。一部例外はあるけどギフトをコピーできる。創作系のギフトなら大体はいけるね。

二つ目は“イージーチューン”。これも皆の前でやったね。自分の持つギフトを能力的に劣るギフトに作り変えるギフトだね。これも創作系のギフトを対象にすることが多いかな。

三つ目は“ジャツジ・アイ”。これはパッシブなものだから使うって感じじゃないけど……。相手の霊格が自分との比で見えるってやつ。

そして最後。四つ目は“均等分配”。これは僕が触れている二物体のある数値を平均して分け与えるっていうものだよ。

ルイオスに使ったのは四つ目

「それで何が起きるのですか?」

黒ウサギでもわからないようで、首を傾げている。

「うーん。白夜叉様は当てられたんだけど、わざわざ時間を使う必要もないか。絶対に他言無用でお願いね？」

均の言葉に六人が頷く。それを見届けた均は口を開いた。

「僕とルイオスの“霊格”を数値化して、平均した」

場に静寂が訪れる。

たつぷり二分ほど経過したところで、黒ウサギが素つ頓狂な叫び声を大音量で上げた。

「は、はあああああああああああああ!?!」

その叫び声に均は顔をしかめる。

「うるさいよ、黒ウサギ」

「い、いやいやなんでございますかそのギフト!? つまりなんですか!?

均さんは相手と霊格を合わせることができると!?!」

「まあ端的に言えばそういうこと」

「すごいです!! すごいです均さん!! うつきゃー!!!」

黒ウサギが奇声を上げてそこから中を跳ね回る。

他の五人は均のギフトの恐ろしさがわかるものは愕然と、わからないものは展開についていけずにボケつとしていた。

均は黒ウサギの奇声に不愉快そうな表情を浮かべている。

黒ウサギが近くに來たタイミングを見計らって、

「うるさい黙れ」

「ギニャー!!」

均は——ウサ耳を全力で引っ張った。

黒ウサギは絶叫する。

「さつきから騒ぎすぎ。とにかくこのことは他言無用だよ。皆もいい?」

黒ウサギも含めた六人はコクコクと頷いた。

場が落ち着いたところで均がこう締めくくって、この場はお開きとなった。

「ま、これからよろしく、レティシア」

——次の日。

均はコミュニケーションの外に出て、世界の果てに向かう方角へ歩いていった。

均がこんなことをしているのにはもちろん理由がある。

「——よし、ここならいいかな」

ある場所で均は立ち止まる。

そこはとても開けた場所だった。ぶつちやけ何もない。

「さてと、じゃあやろうか。——出てこい、”アルゴールの魔王”」

均が呟くと同時に、均のギフトカードが光り出す。

その光が晴れるのと同時に、耳障りな絶叫が辺りに響き渡った。

「GEEEEEEYAAAAAAA!!」

「うるさい」

均の呟きはアルゴールには届かない。

それに届いたとしても、アルゴールは均の言うことを聞かない。

ルイオスが所持していた時と拘束具のレベルは変わっていない。

ルイオスの霊格が十分な状態で、かつ伝承のおかげで一応命令できる状態であったアルゴールが、伝承もなくそれよりも少ない霊格の持ち主の言うことなどどうして聞こうか。

ギフトゲーム中はルイオスに隷属していたから、ルイオスの霊格が縮小してもそのまま従っていたが、新しい主なら関係ない。

アルゴールは叫び続ける。

「R a a a a a a a A A A G E E E Y a a a a A A A A A A

!!!」

「だからうるさいって」

叫び続ける。

「GEEYAAA——」

「うるさいって言ってるのが聞こえないの?」

「aaa……………」

先ほどと声の音量は変わらない。

しかしアルゴールは押し黙る。

均から放たれる殺気に、アルゴールは恐怖する。

アルゴールの元・魔王としての本能が告げていた。

——逆らってはいけない。殺される——

「Rururu……………」

「お、えらいね。自分の立場がやっと理解できたんだ。あと二秒遅かったら殺しちゃうところだったよ」

アハハ、と笑いながら均が軽やかに告げる。

とても笑いながら言うことではない。

「僕は君を使ってみたいとは思っただけど絶対必要ではないし。むしろ君の霊格を盗れるなら丁度いいかな、って思い始めてたところだよ」
その言葉にアルゴールがますます縮こまる。

今やアルゴールの均に対する認識は『霊格は自分よりも小さいが、自分よりも確実に化け物の何か』であった。

消されたくはないアルゴールはおとなしくなる。

「これで僕の言うことは聞いてくれるのかな?」

均の問いにアルゴールが首を思いつきり縦に振る。

先ほどの『うるさい』が効いていて、とても声を出そうとは思わなくなっていた。

「そっか。ありがと。君は素直でえらいね。僕としては君をこき使う気はないんだ。命令には従ってもらうけど、極力君の意志を尊重したい。その拘束具も外そうと思ってる。もちろん君が暴れなければ、だ
けど。できる?」

アルゴールがコクコクと頷く。

その態度はもはや犬と言って差し支えなかった。

「君って今の姿で僕達の言葉を話せる?」

今度は首を横に振る。

それを受けて均は何か考える姿勢を見せた。

「ふーむ。それだと何かと不便だな。アルゴールは人化とかできないの?」

「RU?」

アルゴールが小首を傾げる。

そして考え込む様子を見せる。

「Ru……RuRu ru?………RU!」

アルゴールは何かを数秒考えた後、一つ大きく頷いた。

——そして、一瞬で人の姿に変わっていた。

「ふう………。これでよろしいですか?ご主人様」

人へと変幻したアルゴールが流暢な日本語を話す。

それには均も驚いた。

「うわ、すごいね。やってもらいたかったけど、まさか本当にできるなんて」

「はい、やろうと思っただけできました。このような容姿でよろしいでしょうか?」

アルゴールの見た目はレティシアよりも年上か、というくらいの容姿だった。均よりは年下に見える。

ちなみに服はどこから出したのかメイド服である。

「うん、完璧。というかさっきのご主人様ってなに?」

「今私を隷属させているのは貴方様なので、ご主人様とお呼びするのは当然のことです」

「へえ。でもそれって認めてなかったらそんなことしないよね?」

均が先ほどから聞きたかったことを口にする。

ビックリするほど従順だったからだ。

「はい。それはもちろん」

「じゃあ僕は認められたってことでいいのかな？」

「はい。先ほどは本気で死を覚悟しました。あれで認めないなど愚かなことは考えません」

アルゴールは自分で言葉にしながら身震いする。

(――ちよつと怖がらせすぎた)

少し反省する均だった。

「そ。じゃあ君の拘束を解くね。基本的には君が自由に動いていいけど、命令には従うこと。あと、勝手に暴れないことと、仲間に危害を加えないこと。これさえ守ってもらえれば、僕は君の言動を尊重するよ」

そう言いながらアルゴールにずっとついていた拘束具を外す。

人化した後も腕やら腰やらに拘束具がついていたのだ。

「ありがとうございます、ご主人様」

アルゴールが綺麗な礼をした。

(いつ練習したんだ、こんな完璧な礼)

均がそう思うくらい、綺麗な四五度の礼だった。

均は心の中で密かに戦慄する。

「これからは君のことアルルって呼ぶね。いちいちアルゴールじゃ長いし」

「はい。わかりましたご主人様」

「……………あと、その『ご主人様』ってのやめてくれない？」

無駄かとも思いついながらもそう言わずにはいられない均。

すると、アルルはあつさりと従った。

「わかりました。では、均様と呼ばせていただきます」

「……………いや、あの……………これは命令じゃないから、君の自由にしていいよ？自分で言っついていてなんだけど。命令の時はちゃんと命令だつて言うから」

本当に自分で言っついておいて、という感じだったが、均はアルルのあまりの従順さについて口を出してしまう。

均はこういう対応には慣れていない。

「いえ、均様でお願いします」

「そ、そう？わかった……………」

ここで均は気を取り直し、アルルに聞きたかった質問をすることにしました。

「いまから色々質問するから、可能な範囲で答えてね」

「はい」

まだ従順すぎるのには慣れないが、そこはもう無視することにした。

「まず、その状態でどのくらいの力が出せる？」

「どのくらい、と仰られましても……………。拘束を解いていただいたので全力が出せますが」

「うーんと、そうだなあ……………。じゃあ、そっちに向かって全力で拳を打ち出してみてくれる？」

そっち、と均が指差したのはかなり遠くに森が見える方向。

世界の果ての方向だ。途中には何も無い。

これなら余程のことがない限りは大丈夫だろう。

均はそう思った。

「かしこまりました、均様」

均に向かって一礼した後、そこまで気負った様子もなく拳を振り抜く。

ドンツ！と空気が割れる音がして、遠方に見えていた木々が倒れた。

その衝撃波は留まるところを知らず、どこなのかもわからない遠くで水飛沫をぶち撒けたところで行方の把握ができなくなった。

これには均も動揺を隠せなかったようで、

「……………え？」

と、一言だけこぼした。

「どういうことだ？ 僕とやりあったときはこんなに威力がなかったのに」

いくら拘束具をつけられて力を制限されていたとはいえ、これほどならもう少し手応えがあった……というより、今の均なら少々苦戦したはずだ。

「恐れながら意見を申してもよろしいでしょうか？」

アルルがものすごいビクビクしながら均に尋ねる。

「うん、いいよ。というかそんなに畏まらないで。さつきはちよつとやりすぎた。謝る。さつき言った通りに、命令した時に従ってくればいいから。意見とかは気軽に言っていよいよ」

均は先ほどのことを結構反省していた。

いくら躡けるためとはいえ、やりすぎたと後悔する。

アルルは均の言葉を受けて少し安心したようだった。

「は、はい。わかりました。恐らくですがこの姿になったことでちから靈格が凝縮されたような状態になり、このような事態が起こったのかと同じ人口でも、小さい範囲の方が人口密度は大きくなる。そんな感じだと均は考えた。

「なるほど。そういうことか。アルルはどのくらいの知識を保有しているの？」

「申し訳ありません。ここ最近はずつとあの姿でしたので知識の収集などの行為をしたことがありません。この世界の常識程度ならある程度わかりますが、なにかの詳しい知識と言われると……」

「あ、そうなんだ。わかった。気にしなくていいよ。アルルは頭はいみちだだから、これから頑張っていけばいい」

均は思ったことを素直に述べる。

「ありがとうございます。精進します」

「というか言葉が完璧なだけど。なんで？」

「私にもわかりません。この姿になった時に逆らってはいけないと思っただけの話し方ができるようになっていました」

アルルの嫌味ではない言葉が均の心に突き刺さる。

「……………うん、ホントごめん。ちよつと怖がらせすぎた」

「いえ、大丈夫です。命令に逆らわなければ優しくして頂けるのもわかりましたので。逆らおうとしていた私が愚かだったのです」

「……ありがとう。じゃあ、僕が聞くことは今はもうないかな。アルルは何か僕に言いたいこととかやってほしいこととかある？現実的なら要望に応えられるかもしれないし」

ひとまず聞きたいことを聞き終えた均はアルルに尋ねる。

これくらいは均は当然だと思っていた。

こういうところはまともなのだ。

「………では、まずは一言。このたびは、私をルイオス・ペルセウスから救い出していただき、ありがとうございます」

「あれ？そういう認識になるの？」

「はい。ご存知の通り、あの者では全力の私をコントロールできず、私は力を抑えられていました。均様は拘束を解いてくださいました。本当に感謝しています」

ここでふと均に疑問が湧いた。

「でも、僕に呼び出された時点じゃ僕が拘束を解くかわからなかったよね？あのときはどう考えてたの？」

その質問を受けて、アルルが均から目を逸らした。

そしてとても言いにくそうに言葉を発する。

「………言わなくてはいけませんでしょうか」

「うーん、僕が考えついてないからなあ。でも、強制はしないよ。できれば教えてほしいな、って感じかな」

均は極力プレッシャーをかけないようにして言う。

こういうのも結構神経を使う。

「……わかりました。あのときの私の心情を言葉にすると、

『やったー自由だー！あとはコイツ殺せば完璧に自由の身だ！わーい！』

といったところです。生意気なことを考えていて申し訳ございませんー！」

アルルが深々と頭を下げる。

「ああ、いいよ。僕みたいに大したことない奴が隷属してるって知っ

たら嬉しくもなるよね。逃げられる可能性が上がるし。それであんなに叫んでたのか」

「本当に申し訳ございません」

さらに頭を下げる。

「ああっ、だからそんなに畏まらなくていいってば！」

均は放っておいたら土下座でもしそうな雰囲気のアルルを止める。

「もうさっきのことで謝るの禁止！これ命令ね！それで、他には何かある？」

いい加減に疲れてきた均は命令を使って黙らせることにした。

「はい、もう一つだけ。——均様、可能であれば私に毎日稽古をつけてくださらないでしょうか？」

「——稽古？」

均は一瞬自分の耳を疑った。

魔王が人間に師事をしたいと頼むとは何事か。

「はい。私も元・魔王としてある程度は生きてきましたが、力でねじ伏せられることはあつても、均様のように力で劣る者に投げ飛ばされた経験は今までありませんでした。そこで私もこのような姿になったことですし、師事したいと思った次第です」

その申し出に均はたじろぐ。

「……いや、あれはアルルが大きくて攻撃が大雑把だったからできただけであつて、今のアルル相手にできるとはとても思えないんだけど」

大雑把な攻撃に、掴みやすい拘束具。それにあの威力。

全てを利用すれば、あの状態のアルルを投げ飛ばすのは均に取っては簡単なことだった。

「そうなのですか？」

アルルがきよとんと首を傾げる。

なんとも可愛らしい仕草だった。

「うーん、じゃあここで手合わせしてみようか。丁度ここは周りに何も無いしね。でも、最初から全力でこられて僕が木っ端微塵にされても困るから、最初は五〇%くらいの力をお願いするよ」

「かしこまりました。よろしくお願いします」

少し距離を取って向かい合った二人。

準備が整ったところで均はアルルに声をかけた。

「じゃあ、どこからでもかかってきていいよ」

「はい。では、よろしくお願いします！」

アルルが言葉とともに飛び出す。

二人の間にあった距離が一瞬でなくなった。

アルルが拳を突き出す。

五〇%という言いつけを守っているのか、今回はソニックブームは出なかった。

均はそれを軽々と躲し、アルルの伸びた腕を掴む。

アルルに躲されることなく投げることができを確認した均は、アルルに話しかける。

「七〇%まであげていいよ」

「はいー」

アルルが再び拳を打ち出す。

それも難なく躲した均だったが、均の服がバタバタと煽られた。

それだけの拳速だったのだ。

(これは、これ以上はキツイかな……………)

自分とアルルの地力の差を考えながら、均はアルルの腕を取る。

事前にアルルにはこちらの接触をできる限り躲すように言っている。

だが、今回も掴むことが出来た。

(七〇%も一応は問題なし、と……………。じゃあ、無理だと思っけど次もやってもらうかな)

「アルル、一回の攻防だけ、一〇〇%で来て」

「わかりました」

均の懐に飛び込んできたアルルが手を握りしめる。
そして見た目は無造作に、拳を振り抜いた。

(くっ……………!)

均はかろうじてその拳を躲す。服の端が拳圧で切り裂かれる。
が、その直後、身体を強烈な風に煽られ、体勢を保つていられなくなった。

(こんなにすごいのか……………!これは無理に堪えようとするとも身体がバラバラになる!ここは無理せずに飛ばされよう……………!!)

均は風から受ける影響を少しでも抑えようと、後ろに飛びながら退避しようとする。

だがしかし、身体が宙に浮いた瞬間に思いっきり吹き飛ばされた。

(うわっ……………!?)

なんとか地面に着地した均。

アルルとの距離は、最初の時よりも離れていた。

(なんて力だ……………。これが元・魔王の星霊の力……………。今の僕じゃ肉体の強度が足りなくて絶対に受けられない。十六夜なら大丈夫だろうけど、飛鳥や耀は一瞬でやられちゃうだろうな)

均は元・魔王の力に戦慄しながら、アルルを呼ぶ。

「おい、アルル!こっちに来て!」

「はい、お呼びでしょうか均様」

均がアルルを呼ぶと、ほとんどタイムラグなしにアルルが均の前に現れた。

ちなみに今のアルルの移動のせいで、均の周りには突風が吹き荒れている。

均は引き攣った笑顔で目を細める。

突風が収まってから均はアルルに話しかけた。

「やっぱり今の僕じゃアルルの一〇〇%を受けきるのは無理。七〇%くらいなら大丈夫だと思う。それでいいならだけど、どうする?」

「ぜひお願いしたいです」

さらに大事なところを確認する。

「毎日は無理だと思うよ?僕にも色々用事があるだろうし、場所の間

題もあるし」

「はい。毎日というのはただの要望にすぎませんので、大丈夫です」

「あと、僕が教えるのは無駄の少ない体捌きが中心になるけど大丈夫？」

「はい。むしろそれをお願いしたいです」

アルルの決意は固いようだ。

最後に均は約束をさせる。

「僕に習う以上、無闇矢鱈に力を使うことは許さない。アルルの力は十分に脅威に値するからね。それと、自分よりも弱い者に力を振るうことは基本的に許さないからそのつもりで。僕が許可した時か、そいつの性根が腐つてるとかいう場合は別だけど。いい？」

「はい。心得ております」

均はアルルの瞳を見て、大丈夫そうだと判断する。

「わかった。僕も精一杯師匠を頑張るよ。一緒に強くなっていこう」

「はい、均様」

ここに箱庭の世界において天敵となる“恩恵”を持つ者と、元・魔王の星霊の奇妙な師弟関係が作られた。

そしてその二日後の夜。

子供達を含めた“ノーネーム”一同は水樹の貯水池の近くに集まっていた。

ものすごい人数である。

「えーそれでは！新たな同士を迎えた“ノーネーム”の歓迎会を始めます！」

黒ウサギの号令で子供達からワツと歓声上がる。

テーブルの上に並べられたささやかな料理に子供達が駆け寄る。

均達、問題児四人集はその微笑ましい光景を見守っていた。

「だけどうして屋外での歓迎会なのかしら？」

「うん。私も思った」

「黒ウサギなりの精一杯のサプライズってどこじゃねえか？」

「この箱庭ならまだ何かありそうな気もするけどね」

穏やかに会話する均達。

だが、十六夜が先ほどから気になっていることを聞いた。

「ところで均、お前の隣にいるメイドは誰だよ」

「あ、そういえば会わせるのは初めてだっけ。うーん、紹介は自分でしてもらおうかな」

「かしこまりました、均様」

「均様?!」

十六夜達は、格好から少しは予想していたが、実際にその言葉が発せられると違和感が半端無いようだった。

だが、続く発言でそんな違和感など吹き飛ぶ。

「皆さん、初めまして………ではない方もいらっしやいますが。

私は「アルゴールの魔王」。均様に隷属している元・魔王にございます。アルルとお呼びください」

「はあぁっ?!」

再び三人の声が重なる。

そして三人が立て続けに質問する。

「ちよつと待て!アルゴールは蛇みたいな女だったろ!」

「均様に人のような姿になれないか、と言われ、挑戦したら出来ました」

「「アルゴールの魔王」ってあの外道が使役していた魔王よね?!なんで均君のメイドを!」

「今は均様の所有物だからでございませう」

「なんで人の言葉を話せるの？」

「この姿になると同時に話せるようになりました」

三人は一通りの質問を終えると、一旦は落ち着いたようだったが、そこで十六夜があることに気づく。

「そーいやオマエ、拘束具してたよな？それはどうした？」

「——均様に外していただきました」

その言葉を聞くや否や、十六夜が臨戦態勢に入った。

一瞬も油断することなく均に問う。

「均、オマエなんでそんなことをした？」

「だって可哀想じゃない。力が抑えられてるんだよ？」

「んなこと言ってもオマエの霊格って今ルイオスよりも低いだろ？命令を聞かなかつたらどうすんだ」

「もちろん殺すけど？」

場を沈黙が支配した。

均があまりにもいつも通りに言うものだから、十六夜達は一瞬理解できなかつたのだ。

均はそれがさも当然であるかのように告げた。何の気負いもなく。

アルルはそれが当然であるかのように受け入れた。

それを見て、問題児三人は理解する。

——この二人の間には、すでに確固とした上下関係がある、と。

場の静寂を破つたのは均だった。

「もし仲間に危害を加えたり、暴れたりしたら殺すって言うてあるから大丈夫——と言っても、完璧に不意を打たれたら一人くらいは殺さ

れちゃうかもしれないけど。早々させるつもりはない」

十六夜が臨戦態勢を解いて言う。

「ああ、そうみたいだな。まったく、緊張して損したぜ」

十六夜が悪態をつく。だが、その直後、真剣な雰囲気均に告げた。「だがな、均。もしオマエとアルゴールのせいで“ノーネーム”に被害が出るようなら——場合によっちゃ命を覚悟しろよ」

「——うん。わかってるよ」

均も、微笑みを浮かべてはいたが真面目な雰囲気均で応える。

と、黒ウサギの大きな声が聞こえた。

「それでは、本日の大イベントが始まります！皆さん、天幕に注目してください！」

コミュニティのメンバー全員が黒ウサギに促されて頭上の天幕を見上げる。

すると、流星群が起こった。

誰もが感慨に浸っていると、均達の耳に黒ウサギの声が届いた。

「この流星群を起こしたのは他でもありません。我々の新たな同士がこの流星群のきっかけを作ったのです」

「「「え？」」」

これにはさしもの問題児達も驚いた。

黒ウサギは話を続ける。

「先日、同士に倒された“ペルセウス”のコミュニティは、“サウザンドアイズ”を追放されたのです。そして彼らのはあの星々からも旗を降ろすことになりました」

十六夜達が絶句している。

均はその場を離れ、アルルと二人で流星群を眺めることにした。

「箱庭はホントにすごいなあ。まさに神々の遊び場って感じだよ。アルルは知ってた？箱庭にこんなことが出来るってこと」

「いえ、存じ上げておりませんでした」

「そっか。まあこれが見られたのはいい経験になったよ。……アル

ルはペルセウスに暗殺されたゴーゴンの属性を持つてるよね？彼らのコミュニティが軽く失墜したことに關して何かある？」

「……………いえ、昔のことですので。ただ、あそこに所有されていたおかげで均様にお会いすることができました。そのことには感謝しています」

「そう、それはよかった。……………そうだ。この箱庭で個人的にやりたいいことを思いついたよ」

「……………なんでございましょう？」

「アルルを隷属してみてもわかったんだけど、魔王様って面白いんだね。もっとほしくなったよ。———というわけで」

均は瞳に楽しそうな光を宿しながら、宣言した。

「僕はこれからできるかぎり魔王を隷属させたいと思う」

「——均様ならきつとやり遂げることが出来ます。私も微力ながらお手伝いさせていただきます」

「うん。頼りにしてるよ」

無駄に壮大な野望を話す二人の上では、まだ流星群が続いていた。

番外編 “魘”がやってくるそうですよ？

“六本傷”のカフェテラスを陣取っていた均達は、黒ウサギの言葉に耳を疑った。

十六夜が呟くように尋ねた。

「ギフトゲームが……全面禁止？この一帯で？」

「YES！これはちよつとした緊急事態でございますよー！」

黒ウサギはちよつとした、と言ったが、そんな甘いものではない。

「どういうことだ？ギフトゲームが開催されないってことは、流通が止まるのと変わらないだろ？金銭でのやり取りがあるとはいえ、メインはギフトゲームによるものはずだ」

飛鳥が緊張した面持ちで黒ウサギに問う。

「もしかして……魔王が現れたの？」

飛鳥のその問いに、黒ウサギが慌てて首を振る。

耀と均が思うところを述べる。

「街はそんな雰囲気じゃない。怖がつてるというよりも、困ってる感じ？」

「そうだね。昔の飢饉の時と違ってこんな様子だったのかな？って感じ」

「YES！魔王ほどの脅威ではありませんが、困った事態になったのは事実です。実は箱庭の南側から東側に、干ばつがやってくるそうなのですよ」

黒ウサギの発言に十六夜、飛鳥、耀の三人はそろって、はあ？と声をあげた。

均は、何かを思索するように静かにしている。

代表して飛鳥が眉をひそめながらも尋ねる。

「………どうということなの？まさか干ばつに手足が生えて向かってくるとでも？」

「YES！正確には手足が一本ずつ生えていたそうですけども」

「なにそれ奇抜」

飛鳥と耀は何が何だかわからないという風に首を傾げる。

そんな中、十六夜は何かに気づいたような反応をし、均は合点がいったというように頷いていた。

「なるほど、やっぱりね。"魘"が現れたってことでいいんだよね？」

「腕一本に足一本の干ばつ……。やっぱりそういうことなのか？」

「多分ね。黒ウサギ、当たってる？」

「YES！流石ですな均さん、十六夜さん。正確には、遠い系譜の怪鳥ですけど」

「魘」とは、中国神話に登場する干ばつを呼ぶ神獣である。

黄帝の血筋である"魘"は、生まれつき陽の光を呼び込み、雨を消し去る力を持っていたという。

魔王"蚩尤"との決戦のときにその力を使った"魘"は、穢れをあびて天に還れなくなる。

だが、いるだけで干ばつを呼ぶ"魘"を地上に放置しておくわけにもいかず、黄帝は迷った末に箱庭で保護することにしたのだ。

そして長い月日が流れてもなお天に還ることを望み続けた"魘"の末裔は、姿を怪鳥に変え、箱庭を彷徨っているのだという。

話を聞き終えた均と十六夜は、それぞれの感想を残した。

「うーん、ちよつと可哀想な末路だね……」

「……ギリシャ神話の"ペルセウス"。仏話の"月の兎"。そして中国神話の"魘"ときたか。流石は神様の箱庭だぜ。もう何でもありだな」

均と十六夜で感想が違いすぎる。

個性が如実に表れていた。

「それはNOですよ十六夜さん。"月の兎"も"ペルセウス"も、外界での功績が認められたからこそ箱庭に招かれているのです。

"恩恵"は読んで字のごとく、神仏から与えられた恩恵！"伝承がある"ということとは、"功績がある"ということなのです！」

ムンツ、と力を入れて力説する黒ウサギ。

「まあ、中には"魘"のような理由で箱庭に招かれる者もおります。穢れによって神格をなくし、神気も衰え、知性らしいものも残ってはお

りません。残っているのは、何世代も受け継ぐ故郷への思いだけでございましょう……」

「なんだ、神気が衰えちゃってるのか……。利用できるのかと思っただけだな……」

明らかに自分の力を強化することを企てる均。

“魃”を糧えきとしか見ていないらしい。

少々怖い笑みが浮かんでいた。

黒ウサギはそれを見ないように全力で均から視線を逸らしながら、明るく言った。

「なので今二一〇五三八〇外門に住むコミュニティは、これから訪れる干ばつに備えて大忙しということなのでございますよ！これは我々“ノーネーム”にとつては備蓄を増やす大チャンスでございます！」

均達の四人は察したように、均は苦笑いを浮かべ、残りの三人はニヤリと笑って言った。

「なるほどな。俺達には“水樹”がある。しかも均の持つてるコピーも合わせて二つもだ。他の連中がどれくらいの水源を確保しているかは知らないが……。この様子を見る限り、多くの蓄えがあるとは思えないな」

「そうね。これを機に、他のコミュニティと契約して定期収入にするのも悪くないわ」

「うん。あの宝物庫もいつまでもガラガラだと寂しいし」

「そうだね。ちよつとセコい手だけど」

「そうですね。本当はこんなヤラシイ手段など使わず、堂々と契約者を募りたいのですが……。我々“ノーネーム”は、組織の“名”も“旗印”も奪われている身分。広報しようにもできない状態です。が、干ばつ期に水源があることをアピールできれば希望者もあらわれるはず！ということ皆さんには“魃”の現在の状況を確認してきてほしいのです」

「ああ、暇だしいいんじゃない？」

「幻獣の情報収集なら春日部の得意分野だな。頼んだぜ」

「そうね。頑張った」

「うん。確認するけど、腕一本、足一本の怪鳥でいいんだよね？」

「YES！」左右の足の大きさが違う怪鳥を探していたかとよろしいかと。あと、常に高温を発生しているそうですので、不自然に陽炎が発生している場所を探してもいいですね。ですが、くれぐれも気を付けてください。危険を感じたら帰ってきててもかまいませんから」

黒ウサギの言葉を背に受け、問題児四人は“魅”を探しに行った。

四人は平野を歩いていった。

前方にあるものを見て、耀が皆に知らせる。

「あの辺で陽炎が出てる」

「あ、ホントだ。……………ん？ねえ耀。あの陽炎の近くにるのはなに？」

「え？……………あ！大変！ユニコーンが襲われてる！」

「なんですって!？」

耀の衝撃的な報告に問題児たちに一瞬動揺が走る。

そして全員が即座に動いた。

「出てこいアルル！僕をあそこに向かって投げろ！」

「かしこまりました」

均が呼んだ瞬間にアルルが顕現し、均を“魅”に向かって投げつける。

『『止まりなさい』！』

飛鳥が力を使い、“魅”を足止めする。

その隙に耀が旋風で十六夜を上空へ押し上げた。

「十六夜、任せた」

「任せられたツ!!」

アルルの投擲のおかげで十六夜よりも早く“魅”の下へ辿り着いた均は、“魅”を一瞥した後“均等分配”を使う。

今の均よりも“魅”の方が霊格が高いのがわかったからだ。

衰えたとはいえ元・神格持ち。そこはさすがだった。

そして、十六夜に向かって蹴り上げる。

「はい、十六夜。パース」

「からのシュートッ!!!」

十六夜の胴回し回転蹴りが“魘”に炸裂し、“魘”を一撃で葬った。

四人はユニコーンの下へ集まっていた。

アルルはすでにギフトカードに収納済みである。

「お怪我はありませんか？ユニコーンさん」

『ええ。おかげで助かりました。どうもありがとうございます』

「いえいえ。困った時はお互い様ですよ。では、お気を付けてお帰りくださいね」

『いえ、助けられて何も礼をしなかったとなれば一族の名折れ。何かお礼をさせてほしいのですが……』

別れようとした均をユニコーンが呼び止めた。

「うーん、ちよつと待っててください。耀はどう？」

「別にいい。お礼がほしくて助けたわけじゃないから」

「十六夜と飛鳥は？ユニコーンさんがお礼をしたいって仰ってるんだけど」

「俺も別にいらねえな」

「私も。お礼をされるほどのことじゃないわ」

「とまあこんな感じなんですよ」

均は肩を竦めてユニコーンを見る。

『ですが、貴方達は私の命を救うだけではなく一族の仇敵を倒してくれた恩人。何もしないわけにはまいりません』

話によるとユニコーンの一族は“魘”に散々苦しめられ、また“魘”を討伐しようとした他のユニコーンの中には命を落とした者もいたと言う。

「うーん、このままじゃ平行線ですね。……あ、なら一つお願いがあります」

『なんでしよう？私にできることなら善処します』

「僕達のことを知り合いに広めてください」

『……………と言いますと？』

ユニコーンは狙いがわからないという風に首を傾げた。

中々シユールな光景である。

「僕達は“打倒魔王”を掲げています。魔王関係のことで何かありましたら、“ジン＝ラッセルのノーネーム”までお知らせください。このことを貴方の仲間にも広めてほしいのです」

『……………それだけでいいのですか？』

「はい、それをお願いします。僕たちは今、致命的に知名度が足りないのです。では、帰り道気を付けてくださいね」

均達はユニコーンと別れ、コミュニティに戻るため歩き出した。

「でも、“魅”を倒しちゃったね」

「そうだな。黒ウサギが怒るのが目に浮かぶぜ」

「あのユニコーンを助けるためには仕方がなかったとはいえ……………」

「それを言うのも照れくさいよね」

均の言葉に四人で頷き、今のことと言わない方向に決まった。

そして、黒ウサギの下へ戻った問題児達は仲良く正座させられていた。

「お馬鹿様ツ！お馬鹿様ツ!!このつ……………お馬鹿様方ツ!!!いいですか!?黒ウサギは“魅”の情報収集をしてきてほしいと頼んだのです！それが!どうして!“魅”を倒してくる結果になるのですか!!」

「“ムシヤクシヤしてやった。今は反省しています”」

「黙らっしやこ!!」

スパパパーン!!と、黒ウサギのハリセンが炸裂する。

「うう………。ようやくコミュニティ再建の大きな足がかりができた
と思ったのに………。なぜ倒してしまったのですか………?」

「諸行無常」

「弱肉強食」

「世道人心」

「天理人道」

「ええい、言い訳するならせめて一つに絞ってください!」

黒ウサギに文句を言われても問題児達は頑なに理由を話そうとはしない。

その後、“サウザンドアイズ”で“魘”を買い取ってもらった五人は
コミュニティに戻った。

黒ウサギとは別れ、均、十六夜、耀の三人は本拠に向かう。

その三人を出迎えたのは年長組の、狐耳と割烹着が特徴的な少女、
リリだった。

「お帰りなさいませ均様、十六夜様、耀様………あれ、飛鳥様は?」

「先に風呂へ向かったよ。汗を流したいんだと」

「“魘”が近くにいたせいでずっと蒸し暑かったから」

「でも、“サウザンドアイズ”で買い取ってもらえてよかったよ」

「買い取り……? あ、そうでしたか! ご苦労様でした!」

リリの耳が元気に立つ。

均達の成果を期待したようだが、すぐにはしたなと思ったのか、
耳を伏せて顔を赤らめた。

「大物を狩ってきたからね。しばらくは食料には困らないよ」

「サウザンドアイズ”にいっぱい食料を注文したから。明日の朝には

届く」

「受け取りと保存の管理、頼んだぜ」

三人の言葉を受けて、リリは元気よく返事をする。

「はい！承りました！御三人様はどうされますか？食事でしたらすぐにでも用意できますけど」

「いや、お嬢様が風呂を上がったらでいいや。均は？」

「僕もそれでいいかな。ちよつと読書もしたいし。耀は？」

「私は……ん」

耀が珍しく歯切れを悪くして言葉を切る。

そして何かに気づいたのか厨房のほうをじっと見つめてリリに問いかけた。

「懐かしい匂いがする。筍の灰汁抜きでもしてた？」

その言葉を受けて一瞬リリが固まる。

そして気まずそうに答えた。

「ええと……はい。耀様が『和食が恋しい』と呟いていたのを聞いて、サプライズのもりで色々と用意していました」

「え」

「あっちゃあ」

今度は耀が固まった。均も思わずといった様子でうめく。

耀の鋭い五感が仇となった形だ。

二人ともとても気まずそうにしているのを見かねて、十六夜が助け舟を出した。

「それで？ライナップはなんなんだ？」

「は、はい。いい若鶏と筍、山野菜が手に入りましたので、合わせて天ぷらにする予定です。筍は収穫したたなのでいい具合に甘みが出ています。他にも裏手の小さな菜園で育てた菜の花をお吸い物にして

――

「ごめん十六夜。私先に食べる」

「ごめんね十六夜。僕もお先に。読書なんてしてる場合じゃない」

「気にすんな。俺も先に食べる。――ところで、その筍余ってるか？余ってるんなら筍飯もリクエストしたいところだが」

「あ、それいい提案。お願いできる?」

「は、はい!すぐに用意いたします!」

「さらにおいしそうなメニューになったね」

三人のわかりやすい反応に嬉しそうな反応を返すリリ。

その後、風呂から上がってきた飛鳥に三人は先に食べていたことに関して激しく文句を言われた。

さらにその後。

問題児四人は黒ウサギに謝られていた。

「確認もせずに怒鳴ってしまって申し訳ございませんでした!!」

「二「はい?」三」

四人の疑問の声が揃う。

黒ウサギがその疑問を解決してくれた。

「先ほどユニコーン様がこちらにいらっしやいました。お礼を言いにきたと」

その言葉を聞き、問題児達が居心地の悪そうな顔になった。

「あー、なるほど。聞いちゃった」

「はい」

「ユニコーンさん、それは余計だ……!」

均が天井を仰ぎ見て呟く。

「ですが、そのおかげで黒ウサギ達は皆さんの優しさを再確認することができました。よかったです。そんな皆さんがコミュニティの間でいることに誇りを感じます」

「やめろよ。そんな大層なことをしたわけじゃない」

「そうよ。当然のことをしたただけだわ」

「困ってる人を助けるのは当然」

「てなわけだからこの話終わりでいいよね?お休み黒ウサギ!」

問題児四人はその場から足早に立ち去る。

そこにはニコニコした黒ウサギが本当に嬉しそうに立っていた。

あら、魔王襲来のお知らせ？

第一話 問題児たちが北側に行こうとするようです
よ？

「ペルセウス」とのいざこざから一か月後。

飛鳥は朝の惰眠をむさぼっていた。

心地よく目覚めた彼女が二度寝を敢行しようとしたとき――

コンコン、とドアを叩く音が耳朶を打った。

「えっと、春日部です。年長組の子と朝ご飯を持ってきた。飛鳥は、起きてる？」

「……………」

さあ困った。

二度寝をしようとしたときに起こされること程苛つくことは
……………結構あるが。

まあそれはそれとして。

飛鳥は以前いた世界ではお嬢様だった。

それ故「二度寝」なるものを経験したことがない。

今日はそういう気分になったから二度寝を楽しみたい。

だが、わざわざ起こしにくれた友人の厚意を無為にするのも心
苦しい。

その二つで葛藤していた飛鳥だったが、今日は欲が勝った。

あと五分だけ。そう自身に言い聞かせ、飛鳥はさらなる快樂を求め
て意識を手放そうとする。

――コンコンコン。

「飛鳥……………寝てるの……………」

困ったような、寂しそうな声が飛鳥の耳に届く。

だが、眠いものは眠い。飛鳥は頭から布団をかぶりなおす。

――コンコンコンコン。

回数が一回ずつ増えていくノック。

しかし飛鳥は申し訳なさを胸に抱えながらも、意識を本格的に手放

コン

「ごめんなさい。私が悪かったわ」

朝の死闘の結果は、耀の勝利で幕を閉じた。

場所は変わって“ノーネーム”本拠地下三階にある書庫。

そこでは二人の人物が眠りこけ、一人の人物が本を読みながらその様子を見守っていた。

寝ていた二人の内の一人——十六夜が少しでも意識を覚醒させ、寝ているもう一人——ジンに話しかける。

「……………ん……………御チビ、起きてるか……………??」

「……………く……………」

「寝てるか……………」

そこに、起きていた人物——均が苦笑いを浮かべて声をかける。

「そりゃあ十六夜の読書ペースに合わせてたら限界がくるって」

「均は平気なのか……………?」

「僕はちよいちよい寝てたからね。大丈夫」

「そうか……………。じゃ、お休み……………」

「うん、お休み」

十六夜とジンは気持ち良さそうに寝息を立てる。

いくら十六夜といえども、朝早く本拠を出る↓帰ってきたら読書↓朝早く本拠を出る↓(以下略)という生活サイクルでは限界がきたのだろうか。

そんな中、飛鳥達が慌ただしく階段を駆け下りてきた。

「均君！十六夜君！何処にいるの!?!」

飛鳥は十六夜の姿を認めると、散乱した本を踏み台にして、十六夜の側頭部に飛び膝蹴りを放った。

——別名、シャイニングウィザード。飛鳥は大技で十六夜を強襲す

る。

「起きなさい！」

「させるか！」

「グボハア!？」

その強襲をジンⅡラッセルという名の盾の側頭部で受けきった十六夜。

ジンは錐揉み回転しながら吹っ飛ぶ。

だが飛鳥はその結果を見ることなく均をも強襲。

……………下を向いて読書にふけていたら、寝ていると勘違いされたようだ。

それよりも、飛鳥はこんなに身体能力が高かったのだろうか？

「均君、貴方もよー」（飛鳥、再びシャイニングウイザード）

「そんな大技喰らうわけにはいかない！」（均、飛翔中のジンをむりやり捕獲、盾として装備）

「ぐげふやっ!!」（ジン、均にまで盾にされて三回転半を経て本の山に着弾）

その光景を見たりりと耀が驚く。

「ジ、ジン君がぐるぐる回って吹っ飛びました!?大丈夫!？」

「……………側頭部を膝で蹴られて大丈夫なわけないと思うな。しかも二回」

突然の事態に混乱しながらもジンに駆け寄るリリ。

眉一つ動かさずに合掌する耀。

慌てるリリを微笑ましいと穏やかな表情で見守る均。……………こいつ頭大丈夫か？

ジンを吹っ飛ばした張本人は、特に気にすることなく腰に手を当てて叫ぶ。

「均君、十六夜君、ジン君！緊急事態よ！寝ている場合じゃないわ！」
「そうかい。それはありがたいがお嬢様。側頭部にシャイニングウイザードはやめとけ。俺は頑丈だから兎も角、御チビの場合は命に関わ」

「って、僕を盾に使ったのは十六夜さん達でしょう!？」

本の山から起き上がるジン。それを見て素朴な疑問を覚えた均が一言。

「あれ？生きてたんだ」

「均さん!!まさか死ぬかもしれないと思った上で盾にしたんですか!?!」

「均君も十六夜君も大丈夫よ。だってほら、生きてるじゃない」

飛鳥の結果しか見ていない非情なお言葉。

「デッドオアアライブ!?飛鳥さんはもう少しオブラートにと黒ウサギからも散々」

「御チビも五月蠅い」

・十六夜の（リアルな）投書攻撃！

・ジンの頭に直撃！

・角が当たった！

・会心の一撃！

・ジンは後方に吹っ飛んだ！

という流れで先ほど以上の速度で飛んでいったジン。リリはもうパニックに陥っている。

だが、そんなことは気にせず、十六夜は不機嫌な顔をして飛鳥を睨む。

「……で？人の快眠を邪魔したんだから、相応のプレゼンがあるんだよな?」

殺気の籠った視線にかまわず、飛鳥は手に持っていた招待状を十六夜に渡す。

「いいからこれを読みなさい。絶対に喜ぶから。均君も」

「うん?」

「わかった」

不機嫌そうな十六夜と、いつも通りの均が招待状に目を通す。

十六夜が声に出して読んだ。

「双女神の封蠟……白夜叉からか?えー何々?北と東の“階層支配者”による共同祭典——“火龍誕生祭”の招待状?」

「そう。よくわからないけど、きつとすごいお祭りだわ。均君も十六夜君もわくわくするでしょう?」

どこか自慢げに言う飛鳥に対し、腕を震わせる十六夜と眼を輝かせる均。

均は“祭”と名のつくものに目がないのだ。

「オイ、ふざけんなよお嬢様?こんなクソくだらないことで快眠中の俺は強襲されたのか?しかもなんだよこの祭典のラインナップは!?

『北側の鬼種や精霊達を作り出した美術工芸品の展覧会及び批評会に加え、様々な“主催者”がギフトゲームを開催。メインは“階層支配者”が主催する大祭を予定しております』だど!?

クソが、少し面白そうじゃねえか行ってみようかなオイ♪」

いつもの十六夜からは考えられないようなテンションの上がりっぷりだった。

「楽しそう!僕も、僕も賛成!!」

そしてこれまたいつもの均からは考えられない程の豹変ぶりだった。

「ノリノリね」

飛鳥の言う通り本当にノリノリだった。

十六夜はすでにいそいそと制服を着込んでいる。

均も明らかに上機嫌で準備していた。

そんな様子を見て、リリが必死に止める。

「ま、ままま、待ってください!せめて黒ウサギのお姉ちゃんに相談してから……ほ、ほら!ジン君も起きて!皆さんが北側に行っちゃよう!?!」

「北……北側!?!」

北側に行くというワードが聞こえたジンが飛び起きる。

中々頑丈だ。

「ちよ、ちよつと待ってください!北側に行くって、皆さん本気ですか!?!」

「え?うん」

「そうだが?」

均と十六夜が言葉を返す。

「何処にそんな蓄えがあるというのですか!?ここから境界壁までどれだけの距離があると思っっているんです!?リリも、大祭のことは皆さんには秘密にと——」

「秘密?」

四人の声があもった。

ギクリ、としたジンが失言に気がついて振り返るが——ちよつと遅かった。

邪悪な笑みと怒りのオーラを放つ十六夜・飛鳥・耀の三人の問題児。

均は、いつも以上にこやかな笑みを浮かべていたが………目が笑っていない。

「……そつか。こんな面白そうなお祭りを秘密にされてたんだ、私達。ぐすん」

「コミュニティを盛り上げようと毎日毎日頑張ってるのに、とっても残念だわ。ぐすん」

「ここらで一つ、黒ウサギ達に痛い目を見てもらうのも大事かもしれないな。ぐすん」

「僕的にはいっぺん地獄を見せたいんだけどね。ぐすん」

泣き真似をする裏で、ニッコリと物騒に笑う四人。

その笑みを見て、冷や汗ダラダラの可哀想な少年少女。

——この時の均の心境。

(さて、まずは哀れなジン君に地獄を見てもらおうか、な?)

………ジンよ、南無。

その少し後。

「く、黒ウサギのお姉ちゃああああん!た、大変——!」

“ノーネーム”の魔王に荒らされた農園跡地を見ていた黒ウサギとレティシアの下に、リリが血相を変えて走ってきた。

「リリ!? どうしたのですか!？」

「じ、実は飛鳥様が均様と十六夜様と耀様を連れて……………あ、こ、これ、手紙!」

かなり慌てているリリから手紙を受け取った黒ウサギ。

そこには、こう書かれていた。

『黒ウサギへ。』

北側の四〇〇〇〇〇〇〇外門と東側の三九九九九外門で開催する祭典に参加してきます。

貴女も後から必ず来ること。あ、あとレティシアもね。

私達に祭りのことを意図的に黙っていた罰として、今日中に私達を捕まえられなかった場合、四人ともコミュニケーションを脱退します。死ぬ気で捜してね。応援しているわ。

P/S ジン君は道案内に連れていきます』

黒ウサギは、それを読んだ後たっぷり硬直し、手をワナワナ震わせて、叫んだ。

「な——何を言っちゃってんですかあの問題児様方あああ——
!!!」

ジンを拉致ってきた四人は、いつも通りに“六本傷”のカフェテラスに陣取っていた。

「それで、北側まではどうやって行けばいいのかしら?」

飛鳥が口を開いた。

「耀が自分の考えを述べる。」

「んー、でも北にあるっていうなら、とにかく北に歩けばいいんじゃないかな?」

間違っではない。確かに間違っではない。

だが、その無計画さに一同は思わず苦笑した。

「で？我らのリーダーは何か素敵なプランはないのか？」

ニヤニヤと笑みを浮かべながらジンに問う十六夜。ちなみに均はニコニコしている。

ジンは大きくため息をついて、答えた。

「予想はしてましたけど……もしかして、北側の境界壁までの距離を知らないのですか？」

「知らねえよ。けどそんなに遠いのか？」

怪訝そうな十六夜。それに対して、ジンは頭を抱えて答えた。

「やっぱり何も知らずに出発してたんですね……なら説明する前に聞いておきますけど。この箱庭の世界が、恒星級の表面積だという話は知っていますか？」

え？といった様子の飛鳥と耀。

均と十六夜は、頷いていた。

「それなら黒ウサギから聞いた。けど箱庭の世界はほとんどが野ざらしになってるって聞いたぞ。それに、大小はあっても、この都市以外にも街は存在するとも」

「あれ？ちよつと待って、ジン。まさか、都市の大きさを恒星に対する比率で考えるとか言わないよね？」

均の脳裏を嫌な思考が過る。ジンに否定してほしくて、均は問いかける。

しかし、返答は非情なものだった。

「え、均さんすごいですね。確かに、箱庭都市と他の街では表面積を占める割合が段違いです。でも、よくわかりましたね」

嫌な予感の中するものである。

十六夜は警戒しながら、ジンに再び問いかける。

「まさか、恒星の一割ぐらいを都市部が占めている……とか言わねえよな？」

「さ、さすがにそれはありえませんかよ。比率といっても、その数字は極少数になります」

それを聞いて、均は内心胸をなでおろしていた。能力がら、均は日頃から色々なことを比率で考えている。

それでこの考えが浮かんだのだが………びつくりするようなことを言われなくてよかった。

「そ、そうよね。それで、この場所から境界壁まではどれくらいの距離があるの？」

飛鳥もホツとしながら回答を催促する。

ジンは思考しながら、言った。

「ここは少し北寄りなので、大雑把でいいなら………九八〇〇〇〇k mくらいかと」

「二二うわお」

その莫大な距離を聞いた四人は、同時に様々な声音で声を上げた。

その頃、黒ウサギとレティシアは、コミュニティの年長組の子供達に手伝ってもらって均達が領地内にいないことを確認していた。

「食堂にはいなかったよ！」

「大広間、個室、貴賓室、全部見てきた！」

「貯水池の付近にもいない！」

「お腹空いた！」

一人だけ違うぞ。

「それはまた後でな。……それで、金庫はどうだ？」

レティシアが黒ウサギに状況を尋ねる。

黒ウサギは力強く返答した。

「コミュニティのお金に手を付けた形跡はございません！均さんなら自腹で境界門を起動するだけのお金を持っていますが、以前皆さんが話していた時に十六夜さんが『お前から金なんて借りられるかよ』と言っていたので均さんのお金を使うことはないと思われれます！上手くすれば外門付近で捕まえることが可能です！」

そして、レティシアが招待状を送ってきた白夜叉のところへ行くこ

とを決めた後、黒ウサギは髪を淡い緋色に染めながら、爆走していったのだった。

場所は戻ってカフェテラス。

飛鳥がテーブルを叩いて立ち上がった。

「いくらなんでも遠すぎるでしょう!?!」

飛鳥の叫びにジンも負けじと叫び返す。

「ええ、遠いですよ!箱庭の都市は、中心を見上げた時の遠近感を狂わせるように出来ているため、肉眼で見た時との差異が大きいんです!」

だから止めましょうってあれほど言ったんじゃないですかーツ!!とジンが叫ぶ。

こんなに叫んで店側の迷惑にならないのだろうか?

その横で、十六夜は冷静に考察し、均は素直に感心していた。

「なるほど。ここに呼び出されたとき、地平線が見えたのは、縮尺そのものを誤認させるようなトリックがあったわけか」

「さすが、神様の箱庭だ。でも、なんでそんなトリックが必要だったんだらう?」

「さあな」

……ただ感心してただけでなく、新たな疑問を見つけていたようだ。

ジンは叫びまくって幾ばくか落ち着いたのか、先ほどよりも静かに四人に問いかける。

「今なら笑い話で済みますから……皆さんも、もう戻りませんか?」

「断固拒否」

「右に同じ」

「以下同文」

「他と同様」

その返答にジンは肩を落とす。

だが、四人もあんな挑発的な手紙を残してきたため引くに引けないのだ。

「黒ウサギ達にあんな手紙を残して引けるものですか！行くわよ三人ともー！」

「おう！こうなったら駄目で元々！"サウザンドアイズ"に交渉に行くぞゴラア！」

「行くぞコラ」

「いざとなったら脅してでも祭りに行ってみせる……！」

少し自棄気味な十六夜と飛鳥。ノリで乗ってみた耀。祭りに行きたすぎるあまり、ちよつとアブナイ人と化している均。

この四人は、ジンを引っ張って"サウザンドアイズ"の支店に向かうのだった。

第二話 サウザンドアイズに交渉に行くそうですよ？

五人は「サウザンドアイズ」の支店の前に来ていた。

店前で掃き掃除をしていた割烹着姿の店員に一礼され、

「お帰りください」

「まだ何も言っていないでしょう?」

「まさかの秒殺ですか」

「ヤハハ。嫌われたもんだな」

「……なんでだろう?」

物の見事に門前払いを受けていた。

ここにはギフトゲームで手にした商品を捌きによく来るのだが、その度にこの店員には絡まれている。

飛鳥が口を尖らせて抗議した。

「そこそこ常連客なのだし、もう少し愛想よくしてくれてもいいと思うのだけれど」

「常連客というのは店にお金を落としていくお客様のことを言うのです。」

いつも換金しかしない者は、取引相手と言うのです」

「あら、それもそうね。じゃあ、お邪魔します」

均は一人感心していた。

女性店員の言い分はもつともだし、飛鳥のスルースキルもすごい。

しかし均も何も言い出さず、店に上がり込もうとする五人の前に女性店員が立ちふさがって止める。

「だからうちの店は!」ノーネーム”御断りです!オーナーが居る時ならともかく今は」

「だから嘘はよくないですよ店員さん。白夜又様なら中に——」

「やつふおおおお!!」ようやく来おったか小僧どもおおおお!!」

叫びを上げながら、何処からともなく白髪の和服美少女が降ってきた。

空中で何回転になるのかわからないアクセルを決めて着地した者の名は白夜叉。

今回の招待状の送り主であり、均達の目当ての人物でもある。

「——居る、いや、居たじゃないですか」

「ド派手な登場じゃなきゃ気が済まねえのか、此処のオーナーは」
「……………」

白夜叉の着地とともに舞い上がった土煙を煩わしそうに払いながら呆れの表情で言った均と十六夜に、女性店員は何も言い返せずに頭を抱えた。

一番前にいて土煙で咳き込む羽目になった飛鳥に代わり、一番後ろに居た耀が招待状を見せる。

「招待、ありがと。だけどどうやって北側に行くのか分からなくて……………」

「よいよい、全部分かっておる。まずは店の中に入れ。条件次第では路銀は私が支払ってやる。…………秘密裏に話しておきたいこともあるしな」

最後の言葉だけ真剣な声音で言う白夜叉。ジンを除いた四人は顔を見合わせ、悪戯っぽく笑った。

「それ、楽しいこと？」

「さてな。まあおんしら次第だな」

意味深な白夜叉の態度に、四人は嬉々としてジンを引き摺って暖簾をくぐった。

五人は営業中の店内を通らず、中庭経由で白夜叉の座敷に招かれた。
賑わう喧騒を横目に、耀が呟いた。

「この店、ギフトは売ってるの？」

「売っているとも。レティシアもその一つだったしの。ギフトの購入に関しては、うちの発行している貨幣に限られるがな」

「へえ？なんでまた？」

十六夜が興味深そうに尋ねる。

それを受けた白夜又は、愉快そうな笑みを浮かべて均に話を振った。

「均、おんしはわかるか？以前レティシアを買い取りたいと言ったときに迷わずうちの貨幣を出していたが？」

「えっと、想像でいいなら。恐らくですが、“サウザンドアイズ”との交流の多さの目安にしているのでは？以前“サウザンドアイズ”以外のコミュニティで発行されている貨幣とこの貨幣を比較したとき、金銀銅それぞれの種類が全く同じ大きさと質量でした。つまり比重も同じだと言うこと。

また、ここで商品を捌いた時に品物の金額表記を見ましたが、一つしか明記されていませんでした。

ここは他のコミュニティの貨幣でもギフト以外の買い物ができるようですので、貨幣の価値はこのコミュニティも同じだと考えられます。

となると、差別化できるのは交流のような使用している貨幣から推測できることだと思います。

ついでに貨幣を発行している理由ですが、何かギフトゲームでもしてるんじゃないですか？情報が少なく、内容は僕には想像できませんが」

均が自説を披露すると、白夜又はが拍手した。

十六夜も納得がいったのか頷いている。

「均の考えがほとんど正解だの。

補足すると、ギフトとは恩恵であり奇跡の結晶なのだからして、より多くの交流、信頼を持ったコミュニティに授けるのは当然である？一つだけ均の間違いを訂正するならば、発行元のコミュニティによって貨幣の価値は違うぞ。ちゃんと価値に応じた換算レートもある。

貨幣を発行している理由も均が言った通り、ギフトゲームをしているからだ。貨幣の発行元のコミュニティで、その流通と価値を競うギフトゲームをな。自らの旗印を貨幣に刻んでいるのはそのためだ」

「あ、なるほど。そういう趣旨のギフトゲームでしたか。納得です」
「ふうん……流石は超大手の商業コミュニティ。やることのスケールがデカイ」

十六夜は嬉しそうに笑う。

「けどこれで“ノーネーム”御断りの理由もわかった。流通を淀みなく行うためには、客も選ばなきやいけなかったってことか」

「ん……まあ、そういうことだの」

白夜叉は適当に濁して、本題に入りたい姿勢を見せる。

十六夜も納得して話を聞く体勢を整えた。

白夜叉が煙管で灰吹きを叩いて問う。

「本題の前にまず、一つ聞きたい。“フォレス・ガロ”の一件以降、おんしらが魔王に関するトラブルを引き受けるとの噂があるそうだが……真か？」

「ああ、その話？それなら本当よ」

飛鳥が正座したまま頷く。白夜叉はそれに頷きを返すと、ジンに視線を向けた。

「ジンよ。それはコミュニティのトップとしての方針か？」

「はい。名と旗印を奪われたコミュニティの存在を手早く広めるには、これが一番いい方法だと思いました」

ジンの返答に、白夜叉が鋭い視線を返した。

「リスクは承知の上なのだな？そのような噂は、同時に魔王を引きつけることになるぞ」

「覚悟の上です。それに今のコミュニティの力では上層には行けません。誘き寄せるしかありません」

「仇とは無関係な魔王と敵対するやもしれん。それでもか？」

白夜叉の鋭い追求に、十六夜が受けて立つ。

「それこそ望むところだ。倒した魔王を隷属させ、より強力な魔王に挑む“打倒魔王”を掲げたコミュニティ。——どうだ？こんなカッコいいコミュニティ、他にはないだろ？」

「……ふむ」

さらに、均が補足する。

「魔王を隷属させるっていうくだりは、僕の要望も入ってるんですけどね。」

実は、すでに一人隷属させた魔王は居るんですよ。アルル、出ておいで」

「はい、均様」

「ぬおっ!」

突如出現したアルルに、白夜叉が驚いて仰け反る。

しかしすぐに平静を取り戻し現れた存在を一目見て、

「何!?! アルゴルの魔王”だど!?! 均、おんし、どうやってこれを隷属させた!?!」

再び驚愕した。と言うのも、今のアルルには拘束具が付いていなかったからだ。

白夜叉は、均が”アルゴルの魔王”を隷属できる力など持っていないことを感覚で理解している。

「えっと、O☆H A☆N A☆S H I してですかね?」

「……は?」

白夜叉が素っ頓狂な声を上げる。無理もない。

「白夜叉様も御存知の、アレで脅しました。本能なのか、僕が本気でやったら敵わないことを理解したようですので。」

アルルは、今では拘束具がなくても僕の命令には逆らわないいい子ですよ」

そう言いながら、均は隣で正座しているアルルの頭を撫でる。

その光景を見て、啞然としていた白夜叉が笑い始めた。

「ク、クク、クククク……。フハハハハハ! 面白い、面白いぞ均! やはりおんしは面白い!」

………他の者も本気のようにだし、これ以上は老婆心というものだな」

均も十六夜も表情は笑っているが、目は笑っていないかった。

それを白夜叉は、しっかりと理解していたのだ。

「ま、そういうことだな——で、本題はなんだ?」

「うむ。実はその”打倒魔王”を掲げるコミュニティに、東のフロアマ

スターから正式に頼みたいことがある。此度の共同祭典についてだ。よろしいかな、ジン殿？」

「は、はい！謹んで承ります！」

白夜叉は、子供に対してではなく組織の長に対しての物言いに変えた。

少しでも認められたことに、ジンが表情を明るくする。

「さて、どこから話そうかの……そうだ、北のフロアマスターの一角が世代交代したのを知っておるかの？」

白夜叉はしばしの間思索して、そんなことを言った。

「え？」

「いえ、情報がありませんでしたから。そうなんですか。一体なぜ？」

飛鳥は確な反応ができなかったが、均がしつかり反応して返した。淀みない模範的解答と言える。

「急病で引退だとか。まあ歳だったからのう。此度の大祭は新たなフロアマスターである、火龍の誕生祭だな」

「龍？」

龍というフレーズに、十六夜と耀が反応した。

白夜叉は苦笑しつつ説明を続けた。ちなみに均も苦笑いである。

「五桁・五四五五外門に本拠を構える、“サラマンドラ”のコミュニティ——それが北のマスターの一角だ。

ところでおんしら、フロアマスターについてはどのくらい知っている？」

「私は何も知らないわ」

「私も何も知らない」

「僕はある程度ですね。十六夜と同じくらいでしょうか」

「おう、俺らはそこそこ知ってる。要するに、下層の秩序と成長を見守る連中だろ？」

“階層支配者”とは、箱庭の秩序を守り、下位のコミュニティの成長を促すために設けられた制度だ。

彼らは箱庭内の土地の分割・譲渡や、コミュニティが上の階層に行けるかどうかを試す試練を行うなどの様々な役割がある。

そして天災・魔王が現れた時は率先して戦う義務がある。

彼らはその義務と引き換えに、膨大な権力と最上級特権・ホストマスター主催者権限”を与えられているのだ。

「しかし、北には複数のマスター達が存在します。精霊に鬼種、それに悪魔と呼ばれる力のある種が混在した土地なので、その分治安もよくないですから……」

ジンの言葉を聞いて、均はワクワクしてきた。これからその北側に行くのだ。面白そうな種族がいると聞いて何よりである。

「けど、そうですか。”サラマンドラ”とは親交があったのですが、頭首が替わっていたとは知りませんでした。

それで、どなたが頭首を？やはり長女のサラ様ですか？それとも次男のマンドラ様が？」

「いや、頭首は末の娘——おんしと同年のサンドラが火龍を襲名した」

は？と、ジンが小首を傾げる。それと同時に、均は瞬時に考察した。(ジンの今の言い方だと、サラって人は相当優秀なんだろうね。マンドラって人はそこそこって感じかな？男だから候補に挙げた、そんな感じがするね。にも関わらず、サンドラって子が選ばれた。これは訳アリだな)

次の瞬間、ジンは驚嘆の声を上げて前のめりになった。

「サ、サンドラが!?!ちよ、ちよつと待ってください!サンドラはまだ十歳ですよ!?!」

「あら、ジン君だつて十一歳で私達のリーダーをやっているじゃない」

「そ、それはそうですけど……!いや、だけど……」

「なんだ?御チビの恋人か?」

「え、そうなの?ジンもすみに置けないね」

「違つ、違います!失礼なことを言うのは止めてください!」

今回は均も悪ノリしてジンをからかう。

全く興味のない耀が白夜叉に先を促した。

「それで?私達に何をしてほしいの?」

「まあ、そう急かすな。実は今回の祭だが、次代マスターであるサンド

ラのお披露目も兼ねていてな。

しかしサンドラはまだ幼い。故に東のマスターである私に共同の主権者を依頼してきたのだ」

「あら、それはおかしな話ね。他にいる北のマスターにお願いして共同主権すればいいだけじゃないかしら？」

飛鳥が当然の疑問を口にする。

「うむ……。それはそうなのだが……」

しかし、急に白夜叉の歯切れが悪くなる。

それで大方の事情を推測した均と十六夜が助け舟を出す。

「幼い権力者をよく思わない組織がある——とか、そんな在り来たりなところだろ？」

「だろうね。どこの世界もそういうことはくだらない」

半ば吐き捨てるように言った均の言葉に、飛鳥が露骨に嫌そうな顔をする。

飛鳥は元の世界でそんなことを何回も経験してきたのだろうし、そういうった方面で他の三人より多くの物を捨てて来ただけに、落胆も大きいのだろう。

「……そう。いくら神仏が集う箱庭とはいえ、その長達の思考回路は人間並みなのね」

「うう、手厳しい。だが全くもってその通りだ。」

私に話が持ちかけられたのも、様々な事情があるのだ」

白夜叉も今の状況を快く思っていないのか、苦い表情だ。

話を続けようとした白夜叉を、しかし耀が遮った。

「ちよつと待って。その話、まだ時間かかる？」

「ん？そうなの、あと一時間程度はかかると思うが」

均もそこで耀の質問の意図を理解したのか、ハツとなって続けた。

「そうか、それはまずい。追っ手が」

「「あ」」

十六夜、飛鳥、ジンの三人も気づいたのか、揃って眩きを漏らした。

今、四人と黒ウサギは追いかけてこの最中だ。一時間もここに留まれば、見つかるのは必至。

それに気づいたジンが、

「し、白夜叉様！どうかこのまま」

「ジン君、『黙りなさい』！」

飛鳥がジンの言葉に被せて叫び、ジンの口が勢いよく閉じた。

飛鳥の支配の力だ。

「白夜叉様、今すぐ北側に！お願いします！」

「お、おう？別に構わんが、何か急用か？それと、内容を聞かずに受諾してよいのか？」

「構わねえから早く！事情は説明するし何より——その方が面白い！俺が保証する！」

「——そうか、面白いか。それなら、ジンには悪いが仕方ないのう？娯楽こそ我々神仏の生きる糧なのだからな」

白夜叉は朗らかに笑い、頷いた。ジンが必死に首を横に振っているが、すでに遅い。

十六夜が嬉々としてジンを羽交い締めにし、白夜叉は彼らを横目に柏手を打つ。

そして白夜叉が柏手を打ち終わった瞬間、均がバツと入り口の方を向いた。

「……………これは？」

「お、均は気づいたかの？おんしは本当に面白いな。御望み通り、北側に着いたぞ」

「——は？」

均を除く状況が呑み込めていない問題児三人は、揃って素っ頓狂な声を上げた。

かく言う均も、状況を正確に把握できたわけではない。

「——白夜叉様の言う通り、さっきの一瞬で外の気配が変わった……？」

三人にも疑問はあったが、白夜叉に断言されかつ均がそれを肯定するような発言をしたので、ひとまず疑問などは置いて期待を胸に外に駆け出す。

もちろん、均も疑問を携えつつも追従した。

第三話 北側到着！だそうですよ？

四人が店から出ると、明らかに東側の物ではない熱い風が頬を撫でた。

何故か高台にある“サウザンドアイズ”支店からは、街の風景が一望できる。

そこは、均達が見知った街並みではなく――

「赤壁と炎と……硝子の街……!?!」

今、飛鳥が感嘆の声を上げたように、そこには幻想的な景色があった。

北と東を区切っているのだろう、天を衝かんばかりに聳え立つ巨大な赤壁。境界壁。

鉦石で彫像されたモニュメントに、境界壁を削りだすようにして建築されたゴシック調の尖塔群のアーチ。

それと、外壁に聳える二つの外門が一体となった巨大な凱旋門。

巨大な境界壁によって翳る一帯はこれまた巨大なペンダントランプが数多にも設置されて暖かく照らしている。

キャンドルスタンドが二足歩行するという珍妙な光景を見て、均と十六夜が喜びの声を上げた。

「すごいな……あれはどうやって動いているんだろう……?」

「へえ……流石に九八〇〇〇〇kmも離れていると、文化様式も大きく違うんだな。歩くキャンドルスタンドなんて奇抜な物、この目で見ることになるとは思わなかったぜ」

「ふふ、しかし違うのは文化だけではないぞ。其処の外門から外に出ると雪原が広がっていてな。」

それを箱庭の都市の大結界と灯火で、常秋の様相を保っておるのだ」

白夜叉の自慢げな言葉を聞きながら、均は思考に耽っていた。先ほどキャンドルスタンドに驚いた直後からである。素早い切り替えだった。

（しかし、どうやって白夜叉様は僕達をここまで連れてきたんだ……

? 転移したという感じじゃなかった。

言うなれば、店の外だけを丸ごと入れ替えたような感じかな……?
)

そして、思考に耽っていたために、それへの反応が遅れた。

感動した飛鳥が街を見て回りたいと言い、白夜叉が許可を出した時に空から降ってきた、それ。

「見イつけた——のですよおおおおおおお!!!」

(ヤバツ!!くそつ、アルルを戻したのは間違いだったか!?)

ドップラー効果を効かせた絶叫と共に跳んできて、爆撃もかくやという着地をしたのは、我らが同志・黒ウサギその人。

その声を聞いた瞬間に逃げる体勢を整えた均と違い、白夜叉を含む四人は跳ね上がった。

「ふ、ふふ、ふふふふ………! よおおおおやく見つけたのですよお、問題児様方ア……!」

淡い緋色の髪を戦慄かせ、怒りのオーラを振りまくその姿は、お世辞にも帝釈天の眷属には見えない。

仁王、閻魔……何とは言わないが、そういったもののそれにしか見えない。

危機を感じ取った問題児の中で、素早く動けるのはやっぱり十六夜だ。

「逃げるぞツ!!」

「逃がすかつ!!」

「え、ちよつと」

十六夜は隣に居た飛鳥を抱きかかえ、展望台から飛び降りる。

自分が後手に回ったことを理解していた均は、黒ウサギの行動をしっかりと把握するために逃げる体勢を整えたままじっとしていた。

耀が旋風を巻き上げて上空への脱出を図るが、ちよつと遅い。

黒ウサギが大ジャンプで耀のブーツをガッチリ掴んだのだ。

それを見届けた均は、耀が逃げようとした方から遠い方向へ飛び降

りる。

耀を囮にするように気が引けたが、これぐらいしないとあの状態の黒ウサギからは逃げられないと悟ったのだ。

そしてその途中で、あの存在を呼び出すことも忘れない。

「アルル、頼む！ 僕を受けとめてくれ！」

「了解しました、均様」

今回も均の呼び出しと同時に現れたアルルが崖を蹴って均より先に着地し、均を受けとめる。

「ごめん、ありがとう。助かった」

「いえ、均様をお助けするのは当然ですので」

「行こう」

「はい」

展望台から降りる方法は二つ。

十六夜の様に飛び降りるか、展望台に設置されている階段を降りるかだ。

今は一刻を争うので均も飛び降りる方法を選択したわけだが、十六夜ほど身体が頑丈ではない均では着地した時に骨折などの怪我をする可能性はある。

均も、やろうと思えばダメージをほとんど散らして着地することは可能だったが、スムーズな離脱に繋げるならアルルを呼ぶ方が早い。街を一望にできるほどの高さの展望台なのだ。普通は、ただ単に飛び降りて無事では済まない。

そのため、格好がつかなくても均はアルルの力に頼むことを選んだわけだ。

「逃いいがさないのですよおおおお!!」

後ろから聞こえてきた絶叫を無視して、均はアルルと共に雑踏に紛れ込んだ。

その頃、黒ウサギに捕まった耀は“サウザンドアイズ”の支店で白夜
叉に事情を説明していた。

耀は捕まった時の黒ウサギのヤバい様子に抵抗する意志を捨てて
いる。

「ふふ、なるほど。おんし達らしい悪戯だが……脱退とは穏やかでは
ないな。ちよいと悪質だとは思わなんだか？」

「……うん、私も少しだけ思った。でも、黒ウサギだって悪い。事情を
説明してくれれば、私達だつてこんな強行手段には出なかつたもの」
「普段の行いが裏目に出た、とは考えられんか？」

「それは………そ、そうだけど。それも含めて信頼が無い証拠。少し
は焦ればいい」

耀の珍しく拗ねた様な物言いに、白夜叉が可笑しそうに笑う。

二人の歓談は続き、耀があることについて切り出した。

「そういえば、大きなギフトゲームがあるつて言っていたけど、本当
？」

「本当だとも。特に、おんしに出場してもらいたいゲームがある」

「私に？」

耀は座敷に着いた時に茶と共に出された和菓子を口いっぱい頬
張りつつ、小首を傾げる。

白夜叉は、先ほど黒ウサギが跳んでくる直前まで問題児達に見せて
いたチラシを袖から取り出して見せた。

『ギフトゲーム名 “造物主達の決闘”』

・参加資格、及び概要

・参加者は創作系のギフトを所持。

・サポートとして、一名までの同伴を許可。

・決闘内容はその都度変化。

・ギフト保持者は創作系のギフト以外の使用を一

部禁ず。

・授与される恩恵に関して

・階層支配者”の火龍にプレイヤーが希望する恩恵を進言できる。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、両コミュニティはギフトゲームを開催します。

ウザンドアイズ”印

”サ

”サラマンドラ”印』

「……………？創作系のギフト？」

「うむ。誰が造ったかを問わず、製作者が存在するギフトのことだ。

北では、厳しい環境を耐え忍ぶための恒久的な創作系ギフトが重宝されておつてな。その技術や美術を競い合うゲームがしばしば開催されるのだ。

そこでおんしが父親から譲り受けたギフト——『ゲーム・ツリ生命の目録』は技術・美術共に優れておる。

だが、展示会は出場期限が過ぎておるしの。その木彫りに宿る”恩恵”ならば、力試しのゲームも勝ち抜けると思うのだが……………」

「そうかな？」

と、耀が疑問を挟んだ。が、白夜叉はしつかりと頷きを返す。

「うむ。幸いなことにサポーター役としてジンも……………ああ、均もいたの。まあ兎も角本件とは別に、祭りを盛り上げるために一役買ってほしいのだ。

勝者の恩恵も強力なものを用意する予定だが……………どうかの？」

白夜叉の問いかけに、あまり気乗りしなさそうに首を左右に倒す耀。

龍などの生物的なものに興味はあつても、ゲームそのものには興味がないらしい——と、何か思い立ったように質問する。

「ね、白夜叉」

「何かの？」

「その恩恵で……………黒ウサギと仲直りできるかな？」

それを受けて白夜又はやや驚いたような顔をしたものの、すぐに温かく優しい笑みで答えた。

「できるとも。おんしにそのつもりがあるのならの」

「そっか。じゃあ、出場してみる」

耀はコクリと頷いて立ち上がる。時刻は昼を廻り始めた。

「さて、次はどうしようか?」

「均様の仰せのままに」

「……………」

場所は移って出店が立ち並ぶ区域。

均とアルルは並んで歩いていった。が、均が言葉を失っている。理由は明快。アルルの返答の所為だ。

「……あのね、アルル。このやり取り、五回目だよ?」

「……何かいけませんでしたか?」

「いや、僕はその度に訊き返してるよね?」

「はい」

「ということは、最初から答えを求めてるわけじゃない?」

「仰る通りです」

「そう返すってことは、アルルは理解できてるよね?」

「はい」

「なら、最初から意見を返してくれると嬉しいな。訊き直したら答えにくれてたわけだし。欲求がないわけじゃないんでしょ?」

「かしこまりました」

アルルはどこか融通が利かない。まあちよつと前まで人化などしていなかったから当然と言えば当然だが。

言って理解できないわけではないので、その点は均も安心している。

「それで、次はどうしたい?」

「でしたら、あれを食べてみたいですよ」

「クレープか。いいね」

アルルが指差した先にはクレープの屋台があった。

均はすぐに屋台に行き、クレープを二つ買ってくる。

「ほら、アルル」

「ありがとうございます」

「歩きながら食べようか」

「はい」

それぞれがクレープを手に持ち、均は大きな口を開けてかぶりつく。

しかし、アルルは手に持ったままだ。そこで、均は食べ方を教えていないことに気づいた。

「ほら、こうやってそのまま齧りつくんだ。食べてごらん？ 美味しいよ」

「はい」

均に言われた通りに、アルルがクレープに齧りつく。そして、目を見開いた。

「……………美味しいですよ！」

「そっか。気に入ったならよかったよ」

普段、あまり感情が表に出ないアルルがここまで感情を露にするのも珍しい。大分ツボにハマったようだ。

クレープを食べ終わった二人は、再び歩き出す。

二人は、黒ウサギが自分達の所に来たら大人しく投降するつもりだ。

それまでは、とことん楽しむと決めていた。

「さて、次はどう——」

「アレを見ろーウサギだ！ 月の兎が誰かと戦っているぞー！」

「……………何してんのあいつら」

聞こえてきた言葉に、均の素が思いつき出た。

こんな下層に、“月の兎”が二人もいるわけがない。すなわち、件の“月の兎”は、我らが同志黒ウサギ。

そしてその黒ウサギと戦いになるような人物は、均が知る限り二重の意味で一人しかいない。……………十六夜だ。

補足しておくのと、二重の意味とは状況的にも戦力的にもという意味だ。

「……………はあ。アルル、行くぞ。何が起きてるのかは確認しておかないと……………」

「かしこまりました」

疲労感を滲ませながら、均はアルルを伴って騒ぎの方へ歩き出す。

時は少し戻って。

十六夜と飛鳥は散策を続けていた。正午を過ぎて一時間といったところか。

話の過程で、ハロウインの話題になっていた。

来た時代の関係上、ハロウインを知らなかった飛鳥から十六夜がハロウインへの憧れなど、色々な話を聞き終わったところで、十六夜が切り出した。

「ところでお嬢様、ハロウインが元々は収穫祭だったことは知ってるか？」

「え？」

飛鳥が疑問の声を挟むも、十六夜は聞こえてないフリをして続ける。

「ついでに言うのだ。“ノーネーム”本拠裏手には、莫大な農園跡地があっただな。あそこを復活させればコミニティも大助かりだと思うんだが……………如何なものだろう？」

「え、ええ。そうね。それは知ってるわ」

農園をコミニティ再建に活かすことは、今朝も耀とリリと話して

いたことだ。しかし、飛鳥は十六夜の質問の意図が分からずに首を傾げる。

十六夜は笑いながら飛鳥に顔を近づけ、
「農園を復活させて——いつか俺達で、俺達のハロウインをしよう——
—という提案なんだが、お嬢様はどう思う？」

ハロウイン、したいんだろ？と、十六夜は自身の考えを告げた。

十六夜の言葉の意味を、飛鳥は正確に理解した。

「私達のコミュニティで——ハロウインのギフトゲームを主催する、
—ということ？」

「ああ。箱庭で過ごす以上、少なくとも一度は“主催者”を経験しておかないとな」

十六夜の提案に、飛鳥は顔を輝かせて頷いた。

「素晴らしい提案だわ！それならコミュニティも助かるし、とても楽しそうなもの！」

「ヤハハ、流石に話がわかるなお嬢様！じゃあ俺達が最初に“主催者”
—をするギフトゲームは、ハロウインで予約しておこうぜ。あと、アレ
ンジも考えておかないとな」

飛鳥はコクコクと勢いよく頷く。頬を緩ませながら、夢心地に呟いた。

「私達が主催するハロウインか……ふふ、じゃあ収穫祭を行うためにも、
—農地を復活させておかないとね」

「応とも。それにこの案なら白夜叉にも借りが返せて一石二鳥だ」

「黒ウサギは兎も角、白夜叉へのお礼にもなるの？」

「ん？ああ、ハロウインは元々、太陽に一年の感謝をする収穫祭でな。
—元はケルト民族の祭りで——いや、それはいいか。そんなことを気に
—する奴じゃないだろ」

飛鳥は相槌を打つ。よく理解はできなかったが、白夜叉には自分達
—のみならず黒ウサギもお世話になっていたらしい。感謝してもした
—りない。お礼をするには打ってつけだろう。

「そうね。何時かお礼をするために、白夜叉を招くに相応しい“主催者”
—を目指しましょう」

「とはいえ、今は無理だけだな。まずはギフトゲームに勝って力をつけないと」

「もちろん。こんなに大きな祭りなんだから。凄いギフトが貰えるゲームがあるはずよ」

「YES！祭典では創作系のギフトを競い合う二大ゲームが進行中なのでですよ！」

「創作系？何か作るのかしら？」

「はいな。耀さんの持つ“生命の目録”のように人造・靈造・神造・星造を問わず、様々な創作系ギフトを持つ者達が参加できるギフトゲームなのでございますよ♪」

「へえ？よくわからんが、凄いギフトが貰えるのか？」

「それはもう！新たにフロアマスターとなったサンドラ様から直々に貰えるとなれば、よっぽどのものでございますよ！」

「そう。なら春日部さんに連絡して出場してもらおうかしら。黒ウサギ、伝言を頼める？」

「YES！任されたのですよ♪それではそれでは御二人様！今から向かうので黒ウサギニオトナシク捕マツテクレマスヨネ？」

途中から見事に会話に入ってきていた黒ウサギが壮絶な笑顔で問う。二人は即答した。

「断る!!」

そう言うや否や、十六夜が地面にクレーターを作る勢いでスタートダッシュ。

飛鳥は反対方向へ逃げようとするが、空から跳びついてきたレティシアに捕まる。

「きゃー!!」

「ふふ、観念してもらおうぞ、飛鳥」

抱きついてブラブラぶら下がるレティシアに、両手を上げて降参の意を示す飛鳥。

最後に、十六夜に向かって叫んだ。

「十六夜君！均君はどこにいるかわからないけど、貴方も簡単に捕まったら許さないわ!!」

「了解、任せとけお嬢様！」

飛鳥に叫び返し、高笑いしながら赤窓の歩廊を走り抜ける。黒ウサギも負けじと追従した。

「逃がさないのですッ!! 今日という今日は堪忍袋が爆発しました! 捕まえたら黒ウサギの素敵なお説教を長々と聞かせて差し上げるのですよ——ッ!!」

緒が切れたのではなく堪忍袋そのものが爆発したというところに、普段の黒ウサギの苦労が窺える。

「ハッ、そりゃ素敵な申し出だ! 帝釈天の眷属のご説法、聞かせたいなら捕まえてみな!」

十六夜が逃げる軌道を直線から三次元的に変えて、建造物を蹴り上がるようにして尖塔群の頭部に躍り出る。

黒ウサギも壁を垂直に走ってすぐに追いつく。

騒ぎを聞きつけた野次馬の一人が、黒ウサギを指差してこう叫んだ。

「アレを見るろ! ウサギだ!」月の兎が誰かと戦っているぞ!

「箱庭の貴族がこんな最下層に!」

「まさかサンドラ様の就任式のためにわざわざ上層から祝いに来たのか!?!」

黒ウサギも屋根に登り、十六夜と睨み合う。

「…………ルールを確認するぜ。黒ウサギは、俺と均を捕まえれば勝ちだが——もう均は逃げる気はないみたいだな」

「はて?」

黒ウサギが、何のことやらという顔をする。

十六夜は、眼下のある一点を指差した。

「ほれ、あそこ」

「え?——な、均さん!」

黒ウサギもそちらを見やると——均がギヤラリーを掻き分け、こちらに向かって歩いて来ていた。

その顔には、思いつきり面倒くさいと書いてある。恐らく、ギヤラリーか誰かの言葉を聞いて、状況確認だけでもしようと思ったのだろ

う。

「どうかあいつ、最初から逃げる気なかつたな？まあいいや、確認の続きだ。」

黒ウサギは俺を捕まえれば勝ち。俺は今日一日逃げ切れれば勝ち。そうだな？」

「YES。黒ウサギは十六夜さんを捕まえてお説教します。十六夜さんが逃げ切れれば——」

「そう、それだ。実は手紙に書いたのは冗談半分だったんだが」

「ほ、ほほう？ほほほう？コミュニケーション脱退を賭けた勝負を冗談で持ちかけた？それはそれは、随分と笑えない話でございますねえ」

黒ウサギの額に怒りの象徴が何本も浮かぶ。黒ウサギの怒りの原因は、どうやらここにあるらしい。

確かに組織の脱退を軽々しく口にするというのは、十六夜達の悪ふざけにしては悪質すぎた。

十六夜もその自覚はあったのか、肩を竦めて言葉を発する。

「まあ、確かにな。冗談にしては質が悪い。悪戯つてのは、後で笑って誤魔化せるくらいじゃないとな。そこは認める」

「……………では、大人しく降参すると？」

「まさか。ここまで盛り上げといて何もしないなんて、ギャラリーが許さねえよ」

再び眼下を指差す。野次馬の数は膨れ上がり、大きな歓声を上げていた。

“月の兎”を生で見られることなど滅多にないためだ。

均も、野次馬を掻き分け終えて十六夜達を見上げていた。

「そこで提案なんだが、俺と黒ウサギだけで、短時間別のゲームをしないか？」

「え？」

「そうだなあ。謝罪代わりに、そっちのチップは無しでいい。こっちのチップは——ん、どうする？一回分の命令権くびわとか？」

「は——!？」

黒ウサギは仰天していた。二人には見えていないが、均も地上で凄

い勢いでアルルの方を向き、何事が問いただしている。

この、何者にも縛られない、一つ間違えれば傍若無人な男に一回分の首輪を付けることができるなら願ってもないことだ——が、黒ウサギは苦笑気味に首を横に振る。

「そ……それはダメでございますよ、十六夜さん」

「そうか？なら金品か？」

「い、いえ、そうではなくてですね。十六夜さんの謝意は伝わりました。まあ、黒ウサギの頭が少々固かったことも認めます。

ですからやはり……ギフトゲームをするなら、それは対等の条件でなければ」

今度は十六夜が驚く番だった。つまり黒ウサギも、一回分の首輪を賭けるということだ。

「ギフトゲームは対等の条件でのみ行われるべきです。ペナルティのあるゲームで得たギフトなんて貰っても、達成感は何れられません。

なのでやるならば正々堂々！そして真正面から、黒ウサギは十六夜さんにお説教をするのです！」

「……ハッ。黒ウサギのくせに生意気言いやがって」

十六夜が獰猛に笑う。互いの自由を賭けた、対等な勝負。

それを挑まれて手を抜くほど、十六夜は人として終わってはいない。

十六夜から、遊び心が消えた。

「……………はあ、なんであんなことになってるんだ……………」

地上では、均がため息を吐いていた。周りはギャラリーが五月蠅いため、均の呟きを聞いているものなどいない。

均はこんなことを言っているが、事情は理解している。アルルに上の状況を教えてもらっていたからだ。

均なんかでは比べ物にならないくらいのスツペクの元・魔王様に

は、そんなことは朝飯前である。

「十六夜が首輪を賭けた所為で、ややこしいことになってるし……」

これには均も吃驚した。思わず二度見ならぬ二度聞きしてしまっただほどだ。

「まあ、止めるのは無理だし……被害が少しでも小さくなるように、頑張るか……」

「均様、私も微力ながらお手伝いさせていただきます」

「ああうん、かなり力を貸してもらうことになると思うからよろしく」

「仰せのままに」

アルルの返事を聞いてから、均は億劫そうに頭上を見上げる。

問題児と黒ウサギの追いかけてこは、最終局面に移ろうとしていた。

第四話 魔王襲来のお知らせだそうですよ？

二人の宣誓をしっかりと耳で捉えたアルルが、その内容を均に伝える。

その内容とは、

- ・ゲーム開始のコールはコイントス。
- ・参加者がもう一人の参加者を、“手の平で”捕まえたら決着。
- ・敗者は勝者の命令を一度だけ強制される。

均はそれを聞いて一つ頷くと、アルルに最初にやることを伝えた。頭上の二人の手に“契約書類”が舞い落ちたところだった。

「まず、ゲームスタートと同時に黒ウサギが逃げるように走り出すはずだから、それを追おう」

「後ろに……ですか？」

「うん、何故なら——って、ゲームが始まる。続きは移動しながらだ。

あの二人が本気で走ったら僕じゃ追いつけない。アルル、頼んだよ」

「はい、均様」

均の言葉通り、ちょうど十六夜がコインを投げたところだった。

——キンツ。

コインが地面に落ちるのと同時に、十六夜は全力で前にダッシュした。

黒ウサギは同じ方向に逃げようとしている。

「あらら。やっぱり気づかれましたか」

「ハッ、当然だ!!」

黒ウサギの耳は箱庭の中枢と繋がっている。ということは、さぞかし耳はいいはずだ。

そんな黒ウサギを相手に、かくれんぼと鬼ごっこが混ざったような

このゲームで十六夜が勝つためには――。

「お前を見失わないことが最低条件ってなあ!!」

十六夜は獯猛に笑うと、全力で黒ウサギの後を追った。

「――ってわけだよ」

十六夜が考えていたのと同じ頃、均もアルルに同じ内容の説明をしていた。

均や十六夜が知る由もないが、箱庭の中核と繋がっている“月の兎”のウサ耳は、審判時ならゲームの全範囲、プレイヤー時でも1kmの範囲までなら情報収集できる。

つまり、二人の考えは大正解だったというわけだ。

「なるほど、そういうことでしたか。さすが均様です」

アルルはいたく感心していた。均への尊敬の念が一段と高まったようである。

「これくらいなら思いつく人はいっぱいいるよ。アルルも慣れれば大丈夫さ。心配することはないよ」

「――はい」

均に密かに少し落ち込んでいたことを見破られたアルルは、恥ずかしさに頬を染めつつも嬉しそうに微笑んでいる。

ところで、今の二人は十六夜と黒ウサギに引き離されないように、アルルが均をおぶって全力疾走している。もちろんギャラリーに被害は出さないようにしつつだ。

その状態で、先ほどの会話をしていたのだ。酷くシユールな光景だった。

一方その頃。

追いかけてっこをしている二人はと言うと。

「オイどういふことだ黒ウサギ!? スカートの中が見えそうで見えねえ

ぞ!!」

尖塔群の中心にある巨大な時計塔の頂上に上った黒ウサギを見上げる十六夜が、そんなことを抜かしていた。

「あやや、怒るところはそこなのですか?」

黒ウサギは呆れたように眩くと、スカートの端をつまみながら続けた。

「この衣装は白夜叉様のご好意で、絶対に見えそうで見えないという鉄壁ミニスカートなギフトを与えられているのでございますよ♪」

「はあ?あの野郎、チラリストかよ。ふざけんなクソが」

十六夜は舌打ちとともに吐き捨て――。

「こうなったら直接、スカートの中に頭を突っ込むしかねえ!」

「何言っちゃってるんですかこのお馬鹿様!!!」

しかし黒ウサギは余裕を保っていた。

眼下を一望できる高さにいる黒ウサギ。

自分を見上げる十六夜に舌を出して悪戯っぽく笑った黒ウサギは、勝利宣言をした。

「もつとも、そんなお馬鹿なことを言えるのはそこまでです。黒ウサギの勝利なのですよ、十六夜さん」

「何?」

十六夜が疑問の声を上げると同時に、黒ウサギは眼下の歩廊に向かって全力の跳躍を見せた。

「上手いな、黒ウサギ」

「均様、どういうことですか?」

追いかけてくをする二人に追従してきた主従の主は、歩廊目掛けて跳んだ黒ウサギを見て賞賛の声を出していた。

主従の主の方は、意味を理解できず自らの主に尋ねる。

「うーん、教えてあげてもいいんだけど、この後すぐに十六夜が何かしらの行動を取ると思うんだよね。その対処をしなくちゃならないし……宿題ってことで。自分で考えておいてみて。多分わかるよ」
「かしこまりました」

「うん。さあ、来るよー」

均がアルルに呼びかけた瞬間、十六夜の楽しそうな声が響く。

「やるじゃねえか黒ウサギ。お前のゲームメイク、中々のもんだったぜ。だがここからは、俺のゲームメイクだ！」

そう言うや否や、十六夜は時計塔を力いっぱい蹴りつけた。蹴り飛ばされた時計塔の上半分は第三宇宙速度に匹敵する速度で黒ウサギが降りた歩廊に向かって飛んでいく。

「……は？え、ちよ、な、何してるんですかお馬鹿様ああああ!!」
小躍りしながら喜んでいた黒ウサギが一転、十六夜の暴挙に絶叫する。

「二あ……あの人間滅茶苦茶だああああ!!」

遠くで見ているギャラリーも、絶叫した。

パニックを起こし、逃げ惑う。

「やっぱりこうなったか……僕が十六夜の立場でもそうするし、しようがないのかなあ……」

取り敢えずアルル！飛んでくる大きな瓦礫を砕くよ！

「はい」

あの位置ならギャラリーに人的被害はないだろうが、念のためだ。

均はギフトカードからホワイトダガーを顕現させ、主に柄の部分で瓦礫を割り砕く。さすがは金剛鉄製の武器。たまに使わざるを得ない刃の部分も、刃こぼれする兆しは一切ない。

アルルは拳で瓦礫を叩き割っていた。原始的な方法だが、元・魔王の星霊の膂力なら容易いことだ。

二人が被害を抑えるのに尽力している中、事を起こした張本人は黒ウサギを捕まえるために追って飛び降りていた。

「射程距離だぜ、黒ウサギ」

「ッ、十六夜さん……！」

瓦礫を蹴り飛ばしその影から十六夜の手が伸びる。

黒ウサギは間一髪でそれを手の甲で弾き、お返しとばかりに手を伸ばす。

十六夜は手首で弧を描くようにしてそれを躲し、再び掴みかかる。

二人が刹那の時間に数えきれない程の攻防を繰り返す中、頭上から倒壊した建物の塊が降ってきた。

そこが勝負の分かれ目となった。二人は頭上に拳を振り上げ建物を吹き飛ばす。

その一撃に割いた分、守りが薄くなる。お互いに掴みかかった二人の手は――。

「あっ」

同時にお互いの腕を掴み取った。

二人の“契約書類”が発光し、勝敗を定める。

『勝敗結果：引き分け。以降この“契約書類”は、命令権として使用可能です』

「……………は？」

黒ウサギの腕を掴んだまま、十六夜は訝しげな声を上げた。

「ふう……………さてアルル、二人のところに行こうか」

「はい」

降ってくる瓦礫を粗方壊し終えた均は、二人の下に駆け寄る。アルルがその後ろに付いて行った。

「あ……………コレは、アレです。引き分けなので、互いに命令権を一つ得たみたいです」

「そんなことはどうでもいい。俺が気に入らないのは、“引き分け”の結果だけだ。どう見ても俺の方が速かっただろ」

「やや、そんなことはないのですよ？箱庭の判定は絶対なのです」

駆け寄る均の耳に十六夜と黒ウサギの会話が聞こえてくる。

「はあ？なんだそれどこ神様が決めた判定だよぶぎけん今すぐ——」

「ぶぎけるなはこっちの台詞だよ馬鹿十六夜」

——そして均は二人の下に着いたその勢いで十六夜の頭を殴りつけた。ボコンツという鈍い音が響く。

「痛ってえな」

「痛ってえなじやないよ何やってんのさ。確かにあの状況ならああするしかなかったのもわかるけど、少しは周囲の被害も考えろ」

文句を言う十六夜をピシヤリと切り捨て、そのまま黒ウサギに向き直る。

「そして黒ウサギ」

「は、はい」

怒っているのは黒ウサギの方だったはずなのだが、十六夜との色々今の均の気迫に押されそのことがすっかり抜け落ちていく黒ウサギは、ウサ耳を垂れて均の言葉を待った。

「確かに、僕らの冗談は悪質だった。それは認める。そのことに関しては後で僕を叱ってくれてもいい。でもね？」

そこで一旦均は言葉を区切ると、黒ウサギに顔を近づけてニツコリ笑って言った。

「前に僕、ジンにも怒ったんだよね。隠し事するなって。あの後黒ウサギにも個別にちゃんと言った記憶があるんだけど、それは僕の勘違いだったのかな？それなら僕がさらに謝るけど……そうじやなかったら後でもう一回説教な。骨の髄まで思い知らせてあげるから覚悟してね？」

目が笑っていない均お得意の笑顔を至近距離で向けられ、黒ウサギは今にも泣きそうだった。

「は、はいなのですよ……」

「んじやあ、お迎えも来たようだしこの場はここまでだね」

「そこまでだ貴様ら!!」

厳しい声音が歩廊に響く。

均の言うように、四人の周囲を蜥蜴の鱗を肌を持つ集団が囲んでい

る。

北の“階層支配者”——“サラマンドラ”のコミュニティが騒ぎを聞き付けてきたのだ。

均と黒ウサギは両手を上げて降参するのだった。

——境界壁・舞台区画。“火龍誕生祭”運営本陣営。

均達は“サラマンドラ”のコミュニティに連行され、“火龍誕生祭”を行うための本部まで来ていた。

真つ赤な境界壁を削り出すように造られた宮殿と繋がっている輪郭を円状に造られたゲーム会場では、現在白夜叉が持っていたチラシのギフトゲームが開催されており、最後の決勝枠が争われていた。

ちなみに客席は会場を取り囲むように設けられている。

『お嬢おおおおお!!そこや!今や!後ろに回って蹴飛ばしたれえええええ!!』

「あれ、三毛猫さんも付いて来てたんだ」

舞台の側から聞こえてきた大きな歓声に、均が眩きを漏らす。

この歓声からもわかるように、今舞台上で戦っているのは“ノーネーム”の春日部耀だ。

相手は“ロツクイーター”のコミュニティに属する自動人形オートマター、石垣の巨人だった。

ちなみに、均と一緒に連行されて来たのは十六夜と黒ウサギだけでなく、アルルもだ。ギフトカードに戻すタイミングがなかったのである。

「これで……終わり……!」

旋風を巻き上げ石垣の巨人の背後を取った耀は、その後頭部を蹴り崩す。

そして間髪入れずに自身の体重を“象”へと変幻させ、落下に合わせ巨人を押し倒す。

観衆が沸いた。

『お嬢おとおおお！うおおおおおお！お嬢おとおおおおお！お嬢おとおおおおおお！』

ついでに三毛猫も沸いた。

大半の人間にはにやーにやー鳴いてるようには聞こえないだろうが、当然耀は聞き分けられたのだろう。

耀は三毛猫に目配せと片手を向け、微笑を見せる。

宮殿の上から見ていた白夜叉が柏手を打つと、歓声がピタリと止む。

白夜叉はバルコニーから朗らかに笑いかけ、耀と一般参加者に声をかけた。

「最後の勝者は”ノーネーム”出身の春日部耀に決定した。これにて最後の決勝枠が用意されたかの。決勝のゲームは明日以降の日取りとなっておる。明日以降のゲームルールは………そうだな、もう一人の”主催者”にして今回の祭典の主賓から説明願おう」

白夜叉が振り返り、宮殿のバルコニーの中心を譲る。

テラスに現れたのは、深紅の髪を頭上で結び、色彩鮮やかな衣装を纏った少女。

龍の純血種——星海龍王の龍角を継承した新たな”階層支配者”。

炎の龍紋を掲げる”サラマンドラ”の幼き頭首・サンドラが玉座から立ち上がる。

サンドラは大きく深呼吸し、凜とした声音で挨拶した。

「ご紹介に与りました、北のマスター・サンドラ・ドルトレイクです。東と北の共同祭典・火龍誕生祭の日程も、今日で中日を迎える事が出来ました。然したる事故もなく、進行に協力くださった東のコミュニティと北のコミュニティの皆様にはこの場を借りて御礼の言葉を申し上げます。以降のゲームにつきましては御手持ちの招待状をご覧ください」

観衆が招待状を手に取ると、書き記されたインクは直線と曲線に分解され別の文章を紡ぎ始めた。

『ギフトゲーム名 ”造物主達の決闘”』

・決勝参加コミュニティ

・ゲームマスター・"サラマンドラ"

・プレイヤー・"ウイル・オ・ウイスプ"

・プレイヤー・"ラツテンフエンガー"

・プレイヤー・"ノーネーム"

・決勝ゲームルール

・お互いのコミュニティが創造したギフトを比べ

合う。

・ギフトを十全に扱うため、一人まで補佐が許さ

れる。

・ゲームのクリアは登録されたギフト保持者の手

で行う事。

・総当たり戦を行い勝ち星が多いコミュニティが

優勝。

・優勝者はゲームマスターと対峙。

・授与される恩恵に関して

・"階層支配者"の火龍にプレイヤーが希望する恩

恵を進言できる。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、両コミュニティはギフト

ゲームに参加します。

"サ

ウザンドアイズ"印

"サラマンドラ"印』

これで今日の大祭は御開きだ。日が傾き始め、巨大な境界壁の影が街を包んでいた。

「随分と派手にやったようじゃの、おんしら」

「ああ。ご要望通り祭りを盛り上げてやったぜ」

「胸を張って言わないで下さいこのお馬鹿様!!!」

スパアーン!と黒ウサギのハリセンが奔る。

「黒ウサギも人の事はそんなに言えないよね」

「うう……ごめんなさいなのですよ……」

均のツツコミも奔る。

ジンが後ろで頭を抱えていた。

「いやあ、ジンも悪いね。僕じゃ全く止められなかったよ」

「いえ……もういいです……」

「というか、均も発端の一人じゃろ?おんしも人の事は言えまい」

「そうなんですよね」

均が頭を掻いて笑う。

喋っていないアルルも含めた四人は連行された後、運営本陣營の謁見の間まで連れてこられたのだ。

白夜叉が笑いを必死に噛み殺しつつも、なるべく真面目な姿勢を見せる。

ここにはサンドラもいる。主賓にいつも通りのはしたない姿を見せるわけにもいかないのだろう。

「ふん……ノーネーム」の分際で我々のゲームに騒ぎを持ち込むとは! 相応の罰は覚悟しているだろうな!?!」

サンドラの側近らしき男の高圧的な物言いに、均の片眉がピクリと上がる。

「これサンドラ。それを決めるのは頭首のサンドラであろう」

白夜叉がサンドラと呼ばれたその男を窘める。

サンドラは謁見の間の上座にある豪華な玉座から立ち上がると、均達に声をかけた。

「箱庭の貴族」とその盟友の方々。此度は「火龍誕生祭」に足を運んでいただけありますがどうございます。貴方達が破壊した建造物の一件ですが、白夜叉様のご厚意で修繕してくださいました。負傷者は奇跡的になかったようなので、この件に関しては私からは不問とさせていただきます」

「チツ」

「……あ？」

サンドラの沙汰を聞いて舌打ちするマンドラ。

本当に小さく苛立ちの声を漏らし、もう片方の眉も上げたあと両方下げる均。

そして十六夜が意外そうに声を上げる。

「へえ？太っ腹なことだな」

「うむ。おんしらは私が直々に協力を要請したのだから。路銀と修繕は報酬の前金とでも思っておくがよい」

均は軽く頷き、黒ウサギは胸をなで下ろす。十六夜は軽く肩を竦ませた。

「……ふむ。いい機会だから、昼の続きを話しておこうかの」

白夜叉が連れの者達に目配せをする。

サンドラも同士を下がらせ、側近のマンドラだけが残った。

この場に残ったのは彼らを除けば均、十六夜、黒ウサギ、アルル、ジンの五人だ。

サンドラは人がいなくなると、硬い表情と口調を崩してジンに駆け寄り、愛らしい笑顔を向けた。

「ジン、久しぶり！コミュニケーションが襲われたと聞いて随分と心配していたー！」

「ありがとう。サンドラも元気そうでよかった」

二人は年相応の笑顔になる。微笑ましい光景だった。

「ふふ、当然。魔王に襲われたと聞いて、本当はすぐに会いに行きたかったんだ。けどお父様の急病や継承のことで中々会いに行けなくて」

「それは仕方ないよ。だけどあのサンドラがフロアマスターになっていたなんて——」

「その様に気安く呼ぶな、名無しの小僧!!」

ジンとサンドラが親しく話していると、マンドラが獠猛に牙を剥き帯刀していた剣をジンに向かって抜く。

白刃がジンの首筋に触れる直前、その刃を十六夜が足の裏で受け止めた。

同時に今の一瞬で、均が逆手に持ったホワイトダガーをマンドラの首筋に押し当てている。

「くっ、貴様……!?!」

「……………あんた、どういうつもりだ?」

均が怒りを滲ませながらマンドラに詰問する。さらに押し当てたのか、マンドラの首から血が一筋垂れる。

均の顔にはいつものものにこやかな笑顔すら浮かんでいない。

「……………知り合いの挨拶にしちゃ穏やかじゃねえぜ。止める気なかっただろオマエ」

十六夜は軽薄な笑みを浮かべてはいるが、目は笑っていない。

均は十六夜が止めると信じていたから攻めに転じたのだ。そして手加減ができそうにない(面倒だったとも言おう)十六夜は、攻めを均に任せることにした。息がピッタリだ。

十六夜にも睨まれたマンドラが声を荒げる。

「当たり前だ! サンドラはもう北のマスターになったのだぞ! 誕生祭も兼ねたこの共同祭典に"名無し"風情を招き入れ恩情を掛けた挙句、馴れ馴れしくされては"サラマンドラ"の威厳に関わるわ! この"名無し"のクズどもが!!」

マンドラがその言葉を吐いた瞬間、部屋の一角から濃密な殺気が迸る。

「……………今のは、均様への侮辱と受け取っても、よろしいですか?」

アルルだった。

「……………やめろアルル。今の発言で僕が貶められたわけじゃない」

「……………かしこまりました」

アルルが均に言われて殺気を収める。

均は怒りを声音に乗せながらもホワイトダガーを仕舞った。

今、アルルは本気でマンドラを殺すつもりだった。それはさすがにマズイので止めたが、窘めた均が武器で脅しつけたままというのは言っていることと矛盾するためだ。ジンにも被害はなかったことだし、ここは退く。

(……………まあ、怒ってないわけじゃないんだけどね…………)

「ノーネーム」を馬鹿にする発言を平然と受け流せるほど、均は薄情ではないが。

均は一度深呼吸すると、いつもの優しげな微笑に戻る。表面上は全く怒っているようには見えない。

剣呑な雰囲気が出る十六夜とマンドラの間にサンドラが割って入る。

「マンドラ兄様！彼らはかつての『サラマンドラ』の盟友！此方から一方的に盟約を切った挙句にその様な態度を取られては、我らの礼節に反する！」

「礼節よりも誇りだ！そのようなことを言っているから周囲から見下されるのだと」

「これマンドラ。そこまでにせんか」

白夜叉が呆れた口調でマンドラを諫める。しかし、マンドラはなおも食ってかかった。

「『サウザンドアイズ』も余計な事をしてくれたものだ。同じフロアマスターとはいえ、越権行為にもほどがある。『南の幻獣・北の精霊・東の落ち目』とはよく言ったものだ。此度の噂も、東が北を妬んで仕組んだ事ではないのか？」

「マンドラ兄様ツ！いい加減にしてください!!」

サンドラが厳しい口調でマンドラを叱りつける。

その叱責がなければ、均の怒りが再び爆発していたかもしれない。

マンドラは、白夜叉までをも馬鹿にしたのだ。

その一瞬の怒気に気がついたのか、白夜叉が均を見て微笑む。

均は怒りを霧散させ、白夜叉に目礼を返した。

そして「ノーネーム」側は、先程のマンドラの発言の事情がわからず首を傾げている。

「おい、噂って何の事だ？」

「僕達に協力してほしいことと何か関係が？」

十六夜と均が白夜叉に尋ねる。

白夜叉は頷いて全員の顔を見回すと、一枚の封書を取り出した。

「この封書に、おんしらを呼び出した理由が書いてある。己の目で確

かめるがいい」

怪訝な表情のまま十六夜が封書を受け取る。

均も一緒に覗き込み……均の顔から笑みが消えた。見れば、十六夜の表情からもいつもの軽薄な笑みが消えている。

そこには、こう書かれていた。

『火龍誕生祭にて、“魔王襲来”の兆しあり』

均と十六夜の表情を見て不思議そうな顔をした黒ウサギが軽く跳ねて二人の後ろに立つ。

「均さん、十六夜さん……何が書かれているのです?」

「自分の目で確かめな」

「その方がいいよ」

十六夜が背中越しに手紙を渡す。二人の声には抑揚がなかった。

「……………なっ」

後ろから黒ウサギの驚愕した声が聞こえてきた。次に見たジンも同様だ。

均と十六夜は鋭い視線のまま、しかし無表情で白夜叉に問い返す。

「正直意外だったぜ。てつきり、マスターの跡目争いとかそんな話題かと思つてたんだがな」

「僕も、もつとくだらないことかと思つてたよ」

「何ッ!?!」

いきり立つマンドラをサンドラが慌てて止める。

しかし三人は無視して進める。

「謝りはせんぞ。内容を聞かずに引き受けたのはおんしらだからの」
「全くもつてその通りですね」

「だな。……それで、俺達に何をさせたいんだ?魔王の首を取れって言うなら喜んでやるぜ?」

「それをするならその前に僕にちよつとやらせてほしいことが……」
「均がすつと十六夜の言葉に割り込む。十六夜は苦笑して均に訊く。

「なんだ?またアレか?」

「そう、アレだよ。まあ、ダメだったら別にいいんだけどね」

「ヤハハ。ま、もし余裕があったらやってみるよ」

「うん」

そんなことを話す二人。あまりに軽く話すものだから、マンドラとサンドラは場違いな印象を覚えた。これがまさか魔王を隷属させるなどということについて話しているとは想像もしていないだろう。

「んで、何をさせたいんだ？つーかこの封書は何なんだ？」

少し脱線したが十六夜が話題を元に戻す。

「うむ。まずはそこから説明しようかの」

白夜叉がサンドラに目配せする。

サンドラが頷いて了承の意を示すと、白夜叉は神妙な面持ちで話し始めた。

「まずこの封書だが、これは“サウザンドアイズ”の幹部の一人が未来を予知した代物での」

「「未来予知？」」

均と十六夜が声を揃える。

「うむ。知つての通り、“サウザンドアイズ”は特殊な瞳を持つギフト保持者が多い。その中には未来の情報をギフトとして与えている者もある。そやつから誕生祭のプレゼントとして贈られたのが、この“魔王襲来”の予言だったわけだ」

「その人格がいいたか悪いたか判断に困りますね……誕生祭のプレゼントって……」

確かに事前に教えてくれるのはありがたい。しかしそれを祝いの場のプレゼントにするのはどうなのかと思わないでもない。

「なるほどな。予言という名の贈り物^{ギフト}ってことか。それで、この予言の信憑性は？」

「上に投げれば下に落ちる、という程度だな」

白夜叉の例えに、十六夜は一瞬疑わしそうに顔を歪ませた。

それは要するに、絶対に当たるということだ。

均は何かを少し考え込んでいる。その例え方に、引つ掛かりを覚えていた。

「……………それ、予言なのか？上に投げれば下に落ちるのは当然だろ」

「……………白夜叉様。まさかとは思いますが、その人には他の要因が見え

ている、などと仰いませんよね?」

「恐らく、おんしの想像通りだと思うぞ」

自身の考えを口にする均に、白夜叉が素っ気なく答える。

それで納得したのか、均は二、三度頷いた。

「均、どういう事だよ? いや、待て。まさか……」

十六夜が均に尋ね、そしてすぐに何かに思い当たる。

「多分それで正しいんだよ。白夜叉様の例えが何故さっきのだったのか疑問だったんだけど……少し考えたら推測はできた。"投げる"という行為には、"誰が" "何故" "どうやって" という他の要因が関わってくる。そしてそれがわかれば……"何処に落ちるのか"ということも推理することができる。これはそういう予言……ということですか?」

「うむ。均の推測は完璧だ」

十六夜は理解したものの、どこか釈然としない表情だ。他の面々はその事実言葉に言葉を失っている。

犯人、犯行、動機。その全てがわかっているのに未然に防げないというのだから無理もない。

マンドラが何か喚いているが、十六夜は無視して思考を続ける。そして、頭の中で情報を整理し終えたのか、確認するように白夜叉に問う。しかしそれは、確信を得ているような響きだった。

「今回の一件で、魔王が火龍誕生祭に現れるために策を弄した人物が他にいる——その人物は口に出す事ができない立場の相手ってことでいいんだな?」

ジンがハツとした表情でサンドラを見る。ジンは北側に来る際の白夜叉の話を思い出していた。

『幼い権力者をよく思わない組織がある』と白夜叉は言っていた。

それらの事が意味するのはつまり——。

「まさか……他のフロアマスターが、魔王と結託して"火龍誕生祭"を襲撃する?!」

ジンの叫び声が響く。秩序の守護者である"階層支配者"が、秩序を乱そうとしているのだ。確かに恐ろしいことだ。

「まだわからん。この一件はボス直々の命令で、私はまだ確信には至っていない。……しかし、北の他のマスターがサンドラの誕生祭に非協力的だったのは認めねばなるまい。私に御鉢が回ってきたほどだからな。その理由が“魔王襲来”に深く関与しているのであれば……これは大事件だ」

白夜又は唸り、ジンと黒ウサギは絶句する。

しかし均と十六夜の二人は、得心がいかないように首を傾げている。

「それ、そんなに珍しいことですか？」

「だよなあ？」

二人は首を傾げたまま顔を見合わせ、同時に頷く。

「へ!？」

「珍しいも何も、最悪ですよ！フロアマスターは魔王から下位のコミュニティを守る、秩序の守護者！魔王という天災に対抗できる数少ない防波堤なんですよ!！」

「だが所詮は脳味噌のある何某だ。秩序を守る者が謀をしないなんてこと、幻想にすぎないだろ？」

「そうだよ。それが考える頭と感情を抱く心を持っているなら、そんなことは儂い幻想だ」

この二人は、そんなことが珍しくない冷めた時代から来ている。二人は一瞬冷めた笑みを浮かべていた。

それを察した白夜又は首を振る。

「なるほど、一理ある。だがなればこそ、我々は秩序の守護者として正しくその何某かを裁かねばならん」

「けど目下の敵は予言の魔王。ジン達には魔王のゲーム攻略に協力してほしいんだ」

サンドラの言葉に、一同は合点がいったという表情で頷く。新生“ノーネーム”の初仕事だ。

事の重大さを理解したジンは、重々しく承諾した。

「わかりました。“魔王襲来”に備え、“ノーネーム”は両コミュニティに協力します」

「うむ、すまん。おんしらからすれば敵の詳細がわからないことは不本意であろうが、これは魔王を退ければいいというだけのもではない。箱庭の秩序を守るためにも、この一時の秘匿は必要なことなのだ。主犯には何れ相応の制裁を加えると、我らの双女神の紋に誓おう」

「サラマンドラ」も同じく。——ジン、頑張つて。期待してる」
「わ、わかったよ」

ジンは緊張しながら頷く。白夜又は表情を一変させ、哄笑を上げた。

「そう緊張せずともよい！魔王はこの最強のフロアマスター、白夜又は相手をするからな！おんしらはサンドラと露払いをしてくれればそれでよい。大船に乗った気でおれ！」

扇をパンツと広げ、白夜又は明るく笑う。

その発言を聞いて、目を細めて不満そうにする男が二人。

白夜又は口元を扇で隠しながら苦笑を向けた。

「やはり露払いは気に食わんか、おんしら」

「いいえ？白夜又は様になって、今回は黙って見ていきましょう。現魔王というのがどの程度か知るにはいい機会ですし」

「そうだな。今回は露払いでいい。——だが、何処かの誰かが偶然に魔王を倒しても、問題はないよな？」

「ないんじゃない？それと同様に、何処かの誰かが勝手に魔王を隷属させても構いませんよね？」

前半は十六夜に、後半は白夜又はに向けて均が言う。

好戦的な二人に、白夜又は呆れた笑いを返す。

「よかろう。隙あらば魔王を好きにして構わん。私が許す」

こうして交渉は成立した。

均の笑みが深まったことに気づくことができた人間は、この場に何人いただろうか。

第五話 何やら雲行きが怪しくなってきたようですよ？

“サウザンドアイズ”旧支店に戻ってきていた均は、用意された来賓室で十六夜、ジン、あの女性店員とともに歓談に勤しんでいた。

女性店員は指名されて嫌そうにしていたが。

「そう言えば、僕らってどうやってここに来たんですか？なんか、転移って感じはしなかったですけど。なんて言うか、接続先が変更したって感じ？」

均がここへ来た時から持っていた疑問を女性店員にぶつけると、彼女はあっさり答えた。今は別に嫌そうには見えない。あくまでも見えないだけかもしれないが。

「おや、中々鋭いですね。貴方の感覚通りですよ。”境界門”と似通ったシステムと言えば分かります？」

「いや全然」

「十六夜、即答かよ」

「だって分かんねえし。つーか考えんのがめんどくせえ」

「だと思っただよ。なんかすごいリラックスしてるし」

均が呆れながら十六夜に突っ込む。女性店員もため息を吐いて、少し砕けた口調になって話し始めた。

「要約すると、数多の入り口が全て一つの内装に繋がるようになってるの。例えばそうね……蜂の巣——ハニカム型を思い浮かべてくれれば分かりやすいはずですよ」

それを聞き、十六夜は興味津々な様子で先を促す。

「へえ？つまり本店も支店も全て兼ね備えている、ということか？」

「違います。けどそうね、語弊がありました。境界門と違う点はそこです。境界門は全ての門と繋がっているのに対し、“サウザンドアイズ”の出入り口は各階層に一つずつハニカム型の店舗が存在しているの」

「なるほど、そういうことだったんですね」

「つまり、”七桁のハニカム型支店”、”六桁のハニカム型支店”ってことか？」

「そう。無論、本店への入り口は一つしかありませんが」

均と十六夜は得心がいったように頷く。

「この高台の店は立地が悪く、閉店となった過去の店。今回は白夜叉様が共同祭典に来られるということになり、一時的にこの店へ出入り口を繋げ、私室部と店内の空間を別々に切り分けているの」

「ということは、店内に繋がる正面玄関は開かない仕組みになっているんですか？」

均が確認を取る。

「そうですね。壊してでも開けようなどとなさりませんように」

「あいよ」

女性店員が十六夜に念を押す。

「そんなことは僕がさせませんのでご安心を」

「お願いしますよ」

均と女性店員が頷き合う。

女性店員は、均の本性を知らない。何かあっても十六夜を必ず止めてくれると信賴しているようだ。

まあ、いくら均でもこういう事情の時にふざけたりはしないだろう。

「あら、そんなところで歓談中？」

話が一段落ついたところで、湯殿から飛鳥達が来た。

実は飛鳥が怪我をして戻ってきて、汚れているのを見かねた女性店員が飛鳥を風呂に放り込んだのである。

そして、飛鳥を心配した黒ウサギと耀、白夜叉やレティシアといった女性陣もお風呂に入っていたのだ。

なんでも、群体精霊からはぐれたであろう単体で行動していた精霊を見つけ、気になって追っていった飛鳥は、その先で立ち寄った展示会場で何者かに襲われたのだという。

飛鳥達は備えの薄い浴衣を着ており、首筋から上気した桃色の肌を見せている。飛鳥の玉のような肌には、傷一つなかった。流石は”サ

ウザンドアイズ”。水からして別格らしい。

十六夜は椅子からそっくり返って湯上りの女性陣を眺めた。均は正面から眺めている。

「……おお、これは中々いい眺めだ。そうは思わないか、均、御チビ様？」

「はい？」

「激しく同意」

均の同意は十六夜とジンのどちらに向けたものだったのか。十六夜以外はわかっていない。

「黒ウサギやお嬢様の薄い布の上からでもわかる二の腕から乳房にかけての豊かな発育は扇情的だが——」

十六夜が意味深に言葉を切り、均に目配せする。

均は一つ頷き、口を開く。

「相対的にスレンダーだけど健康的な素肌の耀やレティシアの髪から滴る水が鎖骨のラインを流れ落ちる様は視線を自然に慎ましやかな胸のほうに誘導するのは確定的でそんな現象を起こすことができる素晴らしいプロポーションであることは疑いようがない」

スパスパアーン!!

均と十六夜がかなりの早口で喋っていたのにも関わらず、これだけしか言わずに止めるほどの速さでツツコミが入った。

耳まで紅潮させた飛鳥と黒ウサギのものである。

「変態しかいないのこのコミュニティは!？」

「白夜叉様も均さんも十六夜さんもみんなお馬鹿様ですツ!!」

「ま、まあ二人とも落ち着いて」

「均もそっち側だった。意外」

「そりや僕も男だからねー」

軽く頬を染めつつも慌てて宥めるレティシア。無表情なまま驚きを露わにする耀。ケラケラ腹を抱えて笑う白夜叉。さらっと返す均。一人、絶望的な顔をして両手で頭を抱えるジン。均がそっち側に付いたことが意外と応えたようだ。ジンの肩に同情的な手を置く女性店員。

「…………君も大変ですね」

「…………はい」

身近に問題児がいるという虚しい哀愁を分かち合う二人。

その裏側で均、十六夜、白夜叉の三人が同好の士を得たように右拳を合わせていた。

その後、レティシアと女性店員は来賓室を辞した。今は均、十六夜、飛鳥、耀、黒ウサギ、ジン、白夜叉、そしてとんがり帽子の精霊がこの場に残っている。この精霊が件のはぐれ精霊だ。

白夜叉はテーブルに肘を置き、とてつもなく真剣な声音で口を開いた。

「それでは皆のものよ。今から第一回黒ウサギの審判衣装をエロ可愛くする会議を」

「始めません」

「始めます」

「始めませんッ！」

白夜叉の提案に悪乗りする十六夜。黒ウサギは即座に突っ込むが、彼女は一つ忘れていた。

——今日この場では、悪乗りするのが十六夜だけではないということを。

「と言いつつも、始めます」

「だから始めませんッ!!均さんまでやめてください!」

もう黒ウサギは涙目である。

ちよつと可哀想になったので、均は真面目に白夜叉に先を促すことにした。

「それで、本題はなんですか白夜叉様?」

「ん、実はだな。明日から始まる決勝の審判を黒ウサギに依頼したいのだ」

「あやや、それはまた急な話でございますね。何か理由でも？」

「うむ。おんしらが起こした騒ぎで“月の兎”が来ていると公になってしまつての。明日からのギフトゲームで見られるのではないかと期待が高まつているらしい。“箱庭の貴族”が来臨したとの噂が広がつてしまえば、出さぬわけにはいくまい。黒ウサギには正式に審判・進行役を依頼させて欲しい。別途の金銭も用意しよう」

全員がなるほど納得する。

「分かりました。明日のゲーム審判・進行はこの黒ウサギが承ります」「うむ、感謝するぞ。……それで審判衣装だが、例のレースで編んだシースルーの黒いビスチエスカートを」

「着ません」

「着ます」

「断固着ません！あーもう、」

「喜んで着ます」

「着・ま・せ・ん!!いい加減にしてくださいお二人ともー!」

茶々を入れる均と十六夜に、黒ウサギがウサ耳を逆立てて怒る。

と、これまでのやり取りには一切合切無関心だった耀が思い出したように白夜叉に訊ねる。

「白夜叉。私が明日戦う相手ってどんなコミュニティ？」

「すまんがそれは教えられん。“主催者”がそれを語るのはフェアではなかる？教えてやれるのはコミュニティの名前までだ」

パチン、と白夜叉が指を鳴らす。すると、昼間のゲーム会場で現れた羊皮紙が現れ、同じ文章が浮かび上がる。

そこに書かれているコミュニティの名前を見て、飛鳥は驚いたように眼を丸くした。

「ウィル・オ・ウィスプ」に——“ラッテンフェンガー”ですって?」「うむ。この二つは珍しいことに六桁の外門、一つ上の階層からの参加でな。格上と思つてよい。詳しくは話せんが、余程の覚悟はしておいた方がいいぞ」

白夜叉の忠告に、耀はコクリと頷く。

一方、均と十六夜は“契約書類”を見ながら笑つていた。

「へえ……」ラッテンフエンガー」？成程、ラッテンフエンガー「ネズミ捕り道化」のコミュニケーションか」

「ということは、明日の敵はハーメルンの笛吹き道化だったりするのかな？」

え？と飛鳥が声を上げる。均はそれを耳聴く聞きつけたが、飛鳥の隣に座る黒ウサギと白夜叉の驚嘆の声に飛鳥の声は掻き消され、他の者に届くことはなかった。

「ハ、ハーメルンの笛吹きですか!？」

「待て、どういうことだ小僧ども。詳しく話を聞かせろ」

黒ウサギと白夜叉の食いつきに、均と十六夜が思わず瞬きする。

白夜叉はその様子を見て幾分声のトーンを下げ、質問を具体化する。

「ああ、すまんの。最近召喚されたおんしらは知らんのだな。——」

ハーメルンの笛吹き”とは、とある魔王の下部コミュニケーションだったものの名前だ」

「何？」「へえ」

十六夜と均が同時に声を出した。

「魔王のコミュニケーション名は^{グリムグリモワール}“幻想魔道書群”。全二〇〇篇以上にも及ぶ

魔書から悪魔を呼び出した、驚異の召喚士が続べたコミュニケーションだ」
「しかも一篇から呼び出される悪魔は複数。特に目を見張るべきは、その魔書一つ一つに異なった背景の世界が内包されていることです。魔書の全てがゲーム盤として確立されたルールと強制力を持つという、絶大な魔王でございました」

「——へえ？」

「面白そうな魔王ですね」

均と十六夜の瞳が鋭さを増す。

黒ウサギの説明は続く。

「けどその魔王はとあるコミュニケーションとのギフトゲームで敗北し、この世界を去ったはずなのです。……しかし均さんと十六夜さんは“ラッテンフエンガー”が“ハーメルンの笛吹き”だと言いました。童話の類は黒ウサギも詳しくありませんし、万が一に備えご教授して欲し

いのです」

均と十六夜は何かを考えた後、お互いに視線を交わす。そしてニヤリと笑って頷くと、十六夜が隣に座っているジンの頭をガシツと掴んだ。

「なるほど、状況は把握した。そういうことなら、我らが御チビ様にご説明願おうか」

「え？あ、はい」

一同の視線がジンに集まる。ジンも承諾はしたものの、いきなり話題を振られて顔を強張らせる。が、十六夜がジンに何事かを耳打ちし、ジンは一つ咳払いをしてから話し始めた。

「ラッテンフェンガー」とはドイツという国の言葉で、意味はネズミ捕りの男。このネズミ捕りの男とは、グリム童話の魔書にある「ハーメルンの笛吹き」を指す隠語です」

ふむ、と頷く一同。均と十六夜の頷きは他のメンバーと意味が違うものだが。

ジンはそのまま説明を続ける。

「大本のグリム童話には、創作の舞台に歴史的考察が内包されているものが複数存在します。『ハーメルンの笛吹き』もその一つ。ハーメルンとは、舞台になった都市の名前のことです」

グリム童話の「ハーメルンの笛吹き」の原型となった碑文にはこうある。

—— 一二八四年 ヨハネとパウロの日 六月二十六日

あらゆる色で着飾った笛吹き男に一三〇人のハーメルン生まれの子供らが誘い出され、丘の近くの処刑場で姿を消した——

この碑文は実際に起きた事件を示すものであり、一枚のステンドグラスと共に飾られている。

「ふむ。ではその隠語が何故にネズミ捕りの男なのだ？」

「グリム童話の道化師が、ネズミを操る道化師だったとされるからです」

それを聞き、飛鳥が何やら息を？んでいる。

「ふーむ。『^{ラッテンフェンガー}ネズミ捕り道化』と『ハーメルンの笛吹き』か……………となる

と、滅んだ魔王の残党が火龍誕生祭に忍んでおる可能性が高くなってきたのう」

「YES。参加者が”主催者権限”^{ホストマスター}を持ち込むことが出来ない以上、その路線はとて有方になつてきます」

「うん？なんだそれ、初耳だぞ」

「僕も聞いた覚えがないかな」

それに答えるのは白夜叉だ。

「おお、そうだったな。魔王が現れると聞いて最低限の対策を立てておいたのだ。私の”主催者権限”を用いて祭典の参加ルールに条件を付け加えることだな。詳しくはこれを見よ」

白夜叉が白い指を振ると光り輝く羊皮紙が現れ、誕生祭の事項を記す。

『§ 火龍誕生祭 §

・参加に際する諸事項欄

一、一般参加は舞台区画内・自由区画内でコミニテイ間のギフトゲームの開催を禁ず。

二、”主催者権限”を所持する参加者は、祭典のホストに許可なく入ることを禁ず。

三、祭典区画内で参加者の”主催者権限”の使用を禁ず。

四、祭典区域にある舞台区画・自由区画に参加者以外の侵入を禁ず。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

ザンドアイズ”印

”サウ
”サラ

マンドラ”印』

手元に現れた羊皮紙に目を通し、小さく頷く十六夜。

「参加者以外はゲーム内に入れない”、参加者は主催者権限を使用できない”か。確かにこのルールなら魔王が襲つてきても”主催者権限”

を使うことは不可能だな」

「うむ。まあ、押さえるところは押さえつつもりだ。……どうしたのだ均。何か気になることがあるのか？」

「均も羊皮紙の内容を読んでいたが、響めつ面で何かを考え込んでいる。」

「いえ、何がというわけではないんですが……どこか引つかかかっていて……でも、明言できそうにないです。すみません」

「……いや、気にするでない。何か分かったら教えてくれればよい」

白夜叉の慰めるような声音を受けて、均はしっかりと頷く。

「それにしても、情報として有益なものだったぞ。しかしゲームを勝ち抜かれてしまったのはやや問題ありだの。サンドラの顔に泥を塗らぬよう監視を付けておくが——万一の際は、おんしらの出番だ。頼むぞ」

“ノーネーム”一同は頷いて返す。

「さて、それではこの場は解散だ。——つと、均、おんしは少し残っておくれ。話がある」

「わかりました」

均と白夜叉以外の全員が宛がわれた自室に戻った。

均は白夜叉と向かい合って座り、白夜叉の言葉を待つ。

特に間をおかずに白夜叉は口を開く。

「実はな、おんしに出場してもらいたいギフトゲームがあるのだ」

「僕にですか？それは個人で？」

「いや、実は春日部に出場を勧めたギフトゲームなのだ。ほれ、おんしも聞こえたであろう？」

「ああ、三毛猫さんが騒いでたやつですね」

白夜叉が、うむ、と頷く。

「これを読んでもらえばわかるが、あのギフトゲームには一人までなら補佐が許されている。そこで、おんしにはその補佐としてギフト

ゲームに出場してほしいのだ。おんしも参加条件は満たしておるからの」

「確かに、僕の“模倣投影”でコピーしたギフトや白夜叉様から頂いた二つのギフトはこの条件を満たすので、問題がないことはわかります。耀の補佐をするのも吝かではありません。ですが、何故僕なんですか？そこは教えていただけますか」

“契約書類”を読んで、均は自身が参加条件を満たしていることを理解する。だが、参加して欲しいと頼むなら理由くらいは教えて欲しい。

「……なら単刀直入に言うが、おんし、春日部が他人を——コミュニティの同志であろうと頼ろうとしないことに気づいておるだろう？」

「……それはまあ、はい」

「やはりな。そんな均なら、上手くやってくれるのではないかと思つての」

「………コミュニティの同志に言われることを、耀が良しとするでしようか」

「わからん。気を悪くさせるやもしれん。だが、キツカケの一つにはなるはずだ」

「……」

均は一度口を閉じ、瞑目する。

「そういうことなら、分かりました。ですが、やはり全くの他人に言われる方がいいでしょうね……。誰か耀の様子に気づいて、助言してくれる聡明な人が居ればいいんですけど」

「そうだな。心当たりがないわけでもないのだがな……」

「そうですか。……それにしても、意外でした」

「ん、何がだ？」

均が話題を変えようとしていることを察し、白夜叉は目元を和らげてそれに乗る。

が、続く均の発言でその表情が凍り付く。

「白夜叉様が、ここまで耀の——いえ、僕らのことを気にかけてくださっていることが、です」

「……………」

「ああいえ、勘違いはしないでいただきたいのですが、僕としてはありがたいと思っています。東側最強の“階層支配者”フロアマスターが自分の所属するコミュニティを気にかけてくれるというのは、とても心強いですから」

当て付けと受け取られては困る均は、速やかに補足する。

均が自分をフォローしようとしていることに気づいた白夜叉は、儂げに微笑む。

「……………そう言ってもらえるとありがたいの。余り褒められたことではないと思っておる。……………だが、春日部は見ていて少々心配になるのだ」

「まあ、傾倒し過ぎるのは良くないのでしようが、今の程度であれば問題ないのではないでしようか。確証は全くありませんけど」

「……………そうだな。さて、頼みは聞いてくれるということの良いのか？」

均は頷き、白夜叉に言葉を返す。

「はい。僕にできる限り、何とかやってみます」

「そうか、助かる。では、頼んだぞ」

「任せました。では、白夜叉様。おやすみなさい」

「うむ。しっかり休むのだぞ」

均は一礼して部屋を出て、部屋に向かって歩き始めた。

コンコン。

「ん？誰だ？」

「レティシア、僕だ。こんな夜遅くにごめんね。今ちよつといいかな？」

レティシアが扉の向こうに呼びかけると、返事が返ってくる。均だ。

レティシアは立ち上がり、声を出しながら扉に歩み寄る。

「均か、大丈夫だ。ちよつと待つてくれ、今開ける」

レティシアが扉を開けると、柔らかな笑みを浮かべた均が立っていた。

「大したもてなしもできないが、入つてくれ」

「うん、遠慮なく」

レティシアは均を招き入れる。

「……ふう。さて」

レティシアが出してくれた紅茶を一口飲み一息吐いた均が切り出す。

「今日飛鳥にあつたことを教えて欲しいんだ。飛鳥の様子はチラリとだけ見たけど、小さな傷が多かつたように思う。どうしてあんなつたのか、ちよつと気になってね。レティシアは何か事情を知っているようだったからさ」

「そういうことだったか。わかつた、知つていることは話そう」

「ごめんね。ありがとう、レティシア」

「ふつ。主の要望を叶えるのも使用人の務めさ」

そう言い切るレティシアはとてもカッコよかった。

「さて、どこから話そうか」

レティシアは顎に指を添えて考える。

均はレティシアが回答しやすくなるように、自分の知つていることを伝える。

「僕が知つていることは何も無いよ。飛鳥と別れたのは高台で黒ウサギに強襲されたときだし」

「そうか、なるほど。なら最初からだな。主殿達が置いて行つたあのふざけた手紙を読んだ後、黒ウサギは転移門で北側に、私は白夜叉に

会いに「サウザンドアイズ」の支店に行ったんだ」

「うぐっ……」

レティシアはレティシアで怒っているらしい。当て付けのようにふざけたを強調してくる。均も自覚があるだけに呻くことしかできない。

「ふふっ、整った顔が台無しだぞ？均」

「……そりゃあ顔を顰めてるからねえ。レティシアは笑っていつも以上に綺麗だよ」

「ッ……」

均がサラツと言った言葉で、レティシアが固まる。

「——ははっ」

「……これは一本取られたな。均も意趣返しとは人が悪い」

均が顰めつ面を微笑に変えたことで、レティシアがからかわれたことに気づく。苦笑を浮かべて均を軽く睨む。

「はは、ごめん。でも本心ではあるから。許してもらえるとありがたいかな」

「そうやって齒の浮くようなセリフをたくさんの方に言ってきたのか？悪い奴だ」

「いやいや、そんなことないから」

お互いに微笑を浮かべて軽口を叩きあう。随分気安い関係になっていた。

「さて、話が逸れたな。まあ私は「サウザンドアイズ」に行って白夜叉にこつちに連れてきてもらえたんだ。黒ウサギが着いていることを確認してから外で色々探して、黒ウサギと合流して主殿達の搜索に加わった。と言っても、黒ウサギに付いて行ったただけだな」

「何というかざっくりとした説明だね」

「ん？均が知りたいのは飛鳥の動向だろう？」

レティシアがキョトンとした様子で小首を傾げる。均は一つ頷いてレティシアに話を促す。

「あ、うん。レティシアの説明の仕方が正しいと思う。口を挟んでごめん。続けて？」

「わかった。それで私が飛鳥を見つけたのは十六夜と一緒に居たところだ。十六夜は黒ウサギが追っついていき、私は飛鳥とそこら辺をぶらつくことにした」

「ああ、それもの凄く心当たりあるわ」

均がしみじみと頷く。レティシアは再度苦笑いになる。

「そう言えば、念のためあの二人の尻拭いをしたんだっただか？均も大変だな」

「いやまあ、向こうに居た時はともかく、箱庭に来てからというもの問題児側でやつてるからあまり人のことは言えないだけどき……」

均には自分が問題児側だという自覚はあつたらしい。驚愕の新事実だ。それを理解していながら直そうとしない辺りが問題児たる所以なのだろうが。

「……まあそれについてはノーコメントとしておこう。そういうわけで飛鳥と行動を共にしていたんだが、クレープを買って食べていた時に、飛鳥がはぐれの精霊を見つけてな。追いかけて行ってしまったんだ」

均は、先ほど集まっていた時の光景を思い出す。

「ああ。飛鳥が連れていた、手の平サイズの身長でとんがり帽子を被ってたあの女の子の小人のことだね」

「そう、それだ。私はそこで飛鳥を見送ってしまったな。今思えば失態だ……」

レティシアが俯き肩を震わせる。均はどうしたものかと少し思案し、レティシアに声をかける。

「レティシア、過ぎたことを悔やんでも仕方がないよ。これを教訓にして次に繋げる方が建設的だ」

「わかっているさ。ありがとう、均。そこで私は一旦店に戻った。飛鳥もしばらくすれば戻ってくると思っていたんだ。だが、飛鳥は暗くなり始めても店に戻って来なかった。北側の夜は街の中でも危険だ。私は慌てて飛鳥を探しに出た」

均のかけた言葉はありがちな慰めだったが、レティシアは微笑んでくれる。

「しばらく飛び回っていると、ある展示場の方角が騒がしくなった。たくさんの人々が悲鳴を上げながら駆け出して外に出てきたんだ。その内の一人を捕まえて事情を訊いたところ、長い髪の女の子と小さい精霊が真っ黒な影と赤い光の群れに襲われているらしいことがわかった。襲われているのは飛鳥だと判断して、私は中に飛び込んだんだ」

「なるほどね。そこに飛鳥が居たと」

「そういうことだ。そこで飛鳥はネズミの群れに襲われていた」

「——なんだって？」

「……どうした、均？顔が怖いぞ？」

「いや、ここで繋がるのかと思ってね……」

均はため息を吐き、先ほど話した内容をレティシアにも要約して伝える。

「……なるほど。そうなると飛鳥を襲ったコミュニティは“ラッテンフエンガー”だという可能性が濃厚だな」

「決めつけるのは良くないけどね。飛鳥は何か言ってた？」

レティシアはしばし考え、飛鳥との会話を思い出す。

「……そうだな。あれは私に言ったわけではないと思うが……『恩恵が効かなかった』と呟いていたのが聞こえた」

「となると、相手の支配が上回っていたと考えるのが妥当かな。ハーメルンの笛吹き道化はその名の通りに笛を吹いていたとされている。笛の音色で対象を支配するギフト……といったところだろうね」

「均の予想が正しいように思える。私も何やら不協和音を耳にしたからな。他に訊きたいことはあるか？」

「……いや、もうないよ。夜遅くに本当にごめんね。助かったよ。おやすみ」

「ああ、均もゆっくり休むんだぞ」

「それじゃあまた明日」

均は挨拶をして部屋を出る。均が廊下の角を曲がるまでレティシアは部屋の前で見送っていた。

均は自室に戻る——かと思いきや。

暖簾を潜っていた。

「この時間も風呂は解放されていることはあの女性店員に確認済み、っと」

というか、流石は箱庭というべきなのかお湯を張り替える必要がないらしい。

「さて——アルル、出ておいで」

「はい」

均は脱衣所でアルルを呼び出す。別にいかがわしいことをしようとかそういうことではなく——。

「アルル、今日お風呂に入っていないだろ？」ノーマム「本拠では毎日入ってたし、入りたいんじゃないかと思って」

「お心遣いありがとうございます。それと、毎回ご迷惑をおかけして申し訳ございません」

「いいって。もう慣れたよ」

丁寧に頭を下げるアルルに手を軽く振る均。何故かは分からないが、アルルは均が居ない状況では風呂に入れないのだ。本当に意味が分からないが、そのため均は何度もアルルの風呂に付き合わされている。

「タオルはそこにあるのを使っていいそうだから。僕は先に入ってるから後から来てくれ」

「かしこまりました」

「ふう……………さつきも入ったけど、やっぱり気持ちいいなあ……………」

均が湯に浸かりながら気持ち良さに眩く。身体の芯から温まるよ
うだ。

「均様、お待たせいたしました」

アルルが身体を流してから湯に浸かりに来る。均の意図もしっかり理解している様子だ。

「ああ、お湯にゆつくり浸かりながらでいいから聞いてね」

「はい」

均はついでに話をしようと考えていた。

アルルが意を汲み取ってくれて均も助かる。

「僕が何を訊こうとしてるか予想はついてる?」

「はい。宿題についてではないでしょうか?」

「正解。考えたかい?」

「はい。頑張って考えました」

「そっか。なら、アルルの考えを聞かせてもらおうかな」

「はい」

そう言つて、アルルは自身の考えを話し始める。

「あの時の黒ウサギ様の行動を均様が褒められたのは、黒ウサギ様が
上手く逃げおおせる可能性が高くなったからではないでしょうか」

「ふむ。その心は?」

「あのゲームを見ていた限り、十六夜様と黒ウサギ様の走力はほぼ互
角。つまり、あの時十六夜様の不意をついて跳び降りた黒ウサギ様を
追いかけて十六夜様が跳び降りても、その間に黒ウサギ様に逃げられ
てしまいます。よつて、黒ウサギ様の勝ちの可能性が高くなるので、
均様は黒ウサギ様を褒められた。……どうでしょうか?」

アルルの考察を目を閉じて聞いていた均は、一つ頷いてから目を開
ける。

そして、こう切り出した。

「うん、その回答は五十点だね」

「そうですね……。では、正解をお聞かせ願えるでしょうか」

「わかった。まず、僕が黒ウサギを褒めた理由だけど、黒ウサギがあ
の行動を取ったことで黒ウサギの勝ちがほぼ決まったから。まあ結果

はああなつたけどさ。逃げおおせるって限定しちゃったのが拙かったね」

「……悔しいですが、分かりません。均様、続きをお願いします」

「うん。十六夜はあの瞬間、黒ウサギに出遅れた。ここまではいいよね?」

アルルが無言で頷く。

「いくら十六夜でも、空中で跳躍の軌道を変えることは不可能だ。黒ウサギを追って跳べば、黒ウサギなら確実に十六夜を捕まえられる。つまり十六夜は、黒ウサギ目掛けて跳ぶことはできなくなったわけだね」

均がアルルに視線をやると、頷きが返ってくる。十分に理解できているようだ。

均は続ける。

「となれば、十六夜は黒ウサギから少し離れた地点に跳び降りるしかない。ここで問題となるのは、何処に跳び降りるのが良いのか。黒ウサギの身体能力を考えると、十数メートルは容易に合わせてくる。かと言って遠すぎれば、黒ウサギを見失い、逃げられてしまう。その時点で十六夜の負けはほぼ確定だ。だからこそ僕は、黒ウサギを褒めたんだよ」

「なるほど……。均様が私の回答に半分の点をくださったのは、逃げるといふ片方の選択肢は合っていたからなんですな」

「そういうこと。まあアルルはギフトゲームに慣れていない割には、十分に考えられていると思うよ。これからも頑張っていこうね」

「はい、均様」

「うん。じゃあそろそろ上がろうか。先に上がって、着替え終わったら僕を呼んでくれ」

「かしこまりました」

均はアルルから視線を逸らし、美しい夜空を見上げる。

ザパアッと水音を立てながらアルルが立ち上がる。濡れた髪の毛が月明かりを跳ね返し、キラキラと輝いた。

均は暖簾を潜つて廊下に出ると、自室に向かつて歩を進める。

明日は白夜叉から頼まれた大事な仕事がある。均自身も気になつていたことだ。疎かにすることはできない。

均は部屋に戻ると、明日に備えてすぐに就寝する。

——造物主達の決闘。その決勝戦が、明日、始まる。

第六話 造物主達の決闘だそうですよ？

次の日。

白夜叉の頼みを聞き入れた均は——耀を説得していた。

「納得できない。私は一人でも戦える」

「まあ、そう言わずにさ。僕もちよつと暴れたいんだよ。サポートだけでもさせてくれないかな？」

「そんなの知らない。私の知ったことじゃない」

場所は、闘技場の舞台袖。

舞台からはマイクを使った黒ウサギの進行の声と、野郎どもの野太い絶叫が聞こえてきている。

耀が少々気を悪くしてしまうのも仕方がないだろう。

何故なら、セコンドについたジンとレイシアが対戦相手の情報を伝え終わった直後に、同じくセコンドにつくかと思われていた均がいきなり『あ、僕もサポートとして参戦するから』などのたまったのだから。

耀には、誰かの力を借りるつもりはない。故に、断固として拒否する姿勢を見せる。均に舞台までついてこられたら、攻撃してでも叩き出すつもりだった。

「……なら、こういうのはどう？もし耀が僕の助けを一切受けずに”ウィル・オ・ウィスプ”に勝つことができたら、僕は潔く退こう。土下座でもなんでもするよ。これから耀の言うことに絶対服従することを誓ってもいい」

色々考えて耀にそう提案するも。

「断る。私にメリットがない」

耀はまたしても拒否する。当然だ。耀の気は変わらない。——
——はずだった。

「……ふうん。なるほど、よくわかったよ。——耀は怖いんだね」

「……どういう意味」

静かで抑揚のない声音だったが、微かに怒りが滲んでいる。均もそれがわかるようになるくらいには耀と関わり、耀という人間を観察してきた。均は手応えアリと判断し、なおも挑発を続ける。

「いや、別に？耀が僕をサポートにしたくないわけって、恐れてるからでしょ？僕に助けられて、自分が“ウィル・オ・ウィスプ”に負けてるという事実を突きつけられることを、ね」

「……わかった。そこまで言うなら勝手にしてくれればいい。でも、私が均に助力を求めることはないし、均に助けられることも絶対にな
い」

「了解。ならそうさせてもらうよ。本当に倒せなさそうってなったら助けるけど、それ以外では手は出さないから安心していい。頑張つて
ね」

「均に言われるまでもない」

これは耀だけでなく、問題児全員に言えることだが……負けず嫌いにもほどがある。いずれ大変なことになりそうだ。

今回は、耀が他人を頼ることを覚えるというのが第一目標だ。なので均は、完璧に嫌われても構わないとまで考えていた。自分は頼られなくても、耀が今回のことをキツカケに他の誰かを頼るようになったのならそれでいい。故に耀に、顔も見たくないと言われてもいいやくらい
の気概で耀のサポートに臨んでいた。

舞台の真ん中では黒ウサギがクルリと回り、入場口から迎え入れるように両手を広げた。準備が整ったのだろう。

『それでは入場していただきましょう！第一ゲームのプレイヤー・“ノーネーム”の春日部耀と、“ウィル・オ・ウィスプ”のアーシャ・イグニファトウスです!!』

耀が撫でていた三毛猫をジンに預け、耀と均は舞台へと歩き出す。

——時を少しだけ遡って。

境界壁・舞台区画。"火龍誕生祭"運営本陣営。

"ノーネーム"の十六夜、飛鳥は運営側の特別席に腰掛けていた。

一般席が空いておらず、舞台を上から見る事のできる本陣営のバルコニーに席を用意してくれるよう、サンドラが取り計らってくれたのだ。

嬉々としてゲームの開始を待ちわびていた十六夜が、ふと思いついたように白夜叉に訊ねる。

「ところで白夜叉。黒ウサギが審判をする許可は下りたのか？」

「うむ。黒ウサギには正式に審判・進行役を依頼させてもらったぞ」

「そうか。けど"箱庭の貴族"に審判を依頼することにどんな意味があるんだ？」

ゲームの進行は"箱庭の貴族"の審判がなくても出来るだろう？と言ふような表情で小首を傾げる。

この問いには、中央に座るサンドラが前に出て答えた。

「ジャツジマスターである"箱庭の貴族"が審判をしたゲームは、"箔付き"のゲーム。ルール不可侵の正当性は、箱庭の名誉ある戦いに昇華され、記録される。箱庭の中枢に記録される事は両コミュニティが誇りの下に戦ったという太鼓判になるから、とても大事」

「へえ？じゃあサンドラ……いや、サンドラ様の誕生祭は見事箔付きのゲームに認定されたわけだ」

マンドラに睨まれた十六夜が、肩を竦めてサンドラの呼び方を改める。

その隣では、飛鳥が珍しく落ち着きなくそわそわしていた。

「どうした、お嬢様。落ち着きないぞ」

「……昨日の話を聞いて心配しない方がおかしいわ。相手は格上なのでしよう？」

うむ、と返すのは白夜叉。彼女が手を翳すと、空中に光り輝く文字で対戦相手の名前が刻まれる。

「ウイル・オ・ウィスプ」と"ラッテンフェンガー"。両コミュニティは六桁外門に本拠を構えるコミュニティだ。フロアマスターから得るギフトを欲してきたのだろうな。魔王の一件を抜きにしても、一筋縄

ではいかんだろう」

「そう……白夜叉から見て、春日部さんに優勝の目は？」

「ない」

白夜叉が即答をもって返す。苦虫を噛み潰したような顔をする飛鳥。

「——だが」

白夜叉が含みのある言い方をし、飛鳥と十六夜が白夜叉に注目する。

「春日部が均を頼ることが出来れば、あるいは可能性があるやもしれん」

飛鳥は首を傾げているが、十六夜は思い当たる節がある様子で目を細める。

飛鳥が心配しているのは、耀が舞台上で魔王に襲われたりする可能性だろう。あり得ないとは言いつれない。

耀のことをとても大切な存在だと思っているのだろう。

そんな飛鳥を見かねて、白夜叉が優しい声で告げる。

「安心せい。ジャツジマスターが取り仕切る以上、殺し御法度の今ゲームで命を落とすことはない。春日部にも、無理だと思えば降参するように諭してある。大事には至らんよ」

「ああ。それに例の参加事項がある。あのルールを飛び越えて現れるっていうのもそれはそれで面白そうだが、今のところそんな心配もないしな。それに、均がいる。最悪の事態にはならねえだろ」

「そう」

飛鳥は小さく相槌を打つ。しかし、飛鳥の懸念は他にもあった。飛鳥は自分の膝の上に座る精霊を見つめる。

この精霊は、昨日出会った後に名前を訊ねた時、「ラッテンフェンガー」と答えた。昨夜の話通りなら、このとんがり帽子の精霊もこの一件に関わっていることになる。自分が連れてきた存在の所為でコミュニケーションに迷惑をかけるような事態は避けたかった。

そんな飛鳥の心配を余所に、決勝の準備が進んでいく。

日が昇り切り、黒ウサギが開催の宣言のために舞台中央に立つ。胸いっぱい息を吸い込むと、満面の笑みを円状の観客席に向ける。

『長らくお待ちいたしました！火龍誕生祭のメインゲーム・“造物主達の決闘”を始めたいと思います！進行及び審判は、“サウザンドアイズ”専属ジャッジでお馴染み、黒ウサギが務めさせていただきますー！』
黒ウサギが笑みを振りまくと、観客の声が舞台を揺らした。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお月の兔が本当にきたああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

「黒ウサギいいいいいいいいいいいい!!お前に会うために此処まできたぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「今日こそスカートの中を見てみせるぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

……半分以上が奇声だった。

黒ウサギは持ち前の精神力で笑顔を保ちつつもへにより、とウサ耳を垂れさせて怯む。

飛鳥が生ゴミを見るような冷め切った目で観客席の一部を見下ろす。

十六夜は有象無象の観客席の声を聞き、重要な事を思い出したように真剣な表情になって白夜叉に向き直る。

「そういえば白夜叉。黒ウサギのスカートを絶対に見えそうで見えないスカートにしたのはどういう了見だオイ。チラリズムなんて趣味が古すぎるだろ」

白夜叉は、双眼鏡に食いついていた視線を外して十六夜を一瞥する。その表情には落胆が浮かんでいた。

「フン。おんしも所詮はその程度の漢であったか。おんしは真に芸術を理解する漢だと思っていたのだがな」

「……へえ?言ってくれるじゃねえか。つまりお前には、スカートの

中を見えなくすることに芸術的な理由があると言うんだな？」

「無論だ」

白夜叉は首肯する。そして、まるで決闘を受けるかのような気迫で十六夜に凄んだ。

「考えてみよ。おんしら人類の最大の動力源はなんだ？ エロか？ 成程それもある。だが、それを時に上回るのが想像力！ 未知への期待！ 知らぬことを知ることへの渴望！ 小僧よ、貴様程の漢ならばさぞかし数々の芸術品を見てきたことだろう！！ その中にも、未知と言う名の神秘があつたはず！！ 乙女のスカートに宿る神秘性もそうだツ！！ その他数々の神秘も含め、神秘に宿る圧倒的な探究心は、同時に至ることのできない苦渋！ その苦渋はやがて己の裡においてより昇華されるツ！！ 何物にも勝る芸術とは即ち—— 己が宇宙の中にあるツ！！」

「なツ……己が宇宙の中、だと……!?」

ズドオオオオオオオオオオ!! という効果音がバツクに出そうな雰囲気

の十六夜。彼は、自分の知らない境地に衝撃を受けていた。

それと同時に、サラマンドラ一同も別種の衝撃を受けていた。

「し、白夜叉様……? 何か悪いものでも食べたのですか……!?」

「見るな、サンドラ。馬鹿が感染る」

マンドラは切り捨てるようにそう言うと、サンドラの視線を覆い隠して知らぬフリを決め込んだ。だがこの場合、マンドラの判断は正しいだろう。英断と評してもいいくらいだ。マンドラの冷たい視線が白夜叉を射抜く。

だが白夜叉は一向に構わない。芸術を追い求める彼女にとって、そんな物は些事にすぎない。

白夜叉は胸の前で拳を握り、己の説法をこう締めくくった。

「そうだツ!! 真の芸術は内的宇宙に存在するツ!! 乙女のスカートの中身も同じなのだツ!! 見えてしまえば只々下品な下着達も——

見えなければ芸術だツ!!!」

ズドオオオオオオオオオ!! という効果音を背後に幻視させながら白夜叉が言い切る。恥も外聞もなく言い切った白夜叉は、何処いずこからか取り出した双眼鏡を右手で十六夜に差し出す。好敵手を見るような

清々しい眼差しだ。

「この双眼鏡で、今こそ世界の真実を確かめるがいい。若き勇者よ。私はお前が真のロマンに到達できる者だと信じているぞ」

「……………ハッ。元・魔王様にそこまで煽られて、乗らないわけにはいかねえな……………」

双眼鏡を受け取り、二人は黒ウサギのスカートの裾を目で追い始める。

訪れるかもしれない、奇跡の一瞬を逃したりしないように。

白夜叉から頼みを聞き入れた均が頑張つて耀について行くこうとしている時に、当の本人がこんなことを力説していた事を均が知る由もない。あるいは、知らない方がお互いが幸せでいられるのかもしれない。

飛鳥が生温い目で二人のことを空気として扱うことを決意した時、黒ウサギの声が響き渡った。

『それでは入場していただきましょう——』

耀が通路から舞台に続く道に出た瞬間、彼女は後ろから引っ張られた。

「え？」

素っ頓狂な声を上げる耀が、均に一瞬支えられて体勢を立て直させられた。特に耀は力を入れていない。均が耀の身体を誘導し、勝手に体勢を整えるように仕向けたのだ。

そんな地味に高度な技術を使った均は、耀を引っ張った反動で前に飛び出し、左足を使って自身の右前方の空間を蹴りつける。

「Y A ッ F U F U F U U U u u u u u u u u u u ! ? !」

「チツ、躲されたか」

「え……何、今の……」

耀の眩きが漏れる。

理由は不明だが、耀が通路から出た瞬間、均は僅かながら何者かの攻撃の意思を右方向から感知した。

先方にも傷つけるつもりはないようだったが、ただ黙って先に仕掛けられるのを見過ごすのも気分が悪い。

舐められるのも癪に障るし、笑いの種にされるのはもつと腹が立つ。

故に均は、迎撃することを選んだ。まあ、それは目の前を横切ろうとしていた火の玉の超反応によって躲かれてしまったが。

均と、状況を理解できないまま通路から出てきた耀が見上げる先には、火の玉の上に腰掛けている人影があった。

「へー、あんたやるね。こっちが仕掛けるの、気づいてたんだ？」

その少女が、均に話しかける。この少女の名は、アーシャ・イグニファトウス。耀の対戦相手だ。

「ええ、まあ。その彼のの高機動力に躲されましたけどね」

「その火の玉……もしかして」

耀もじつと火の玉を見つめている。正確には、その中身を見つめているようだ。

「はあ？何言ってるのオマエ。そっちの奴はわかってるみたいだけど、アーシャ様の作品を火の玉なんかと一緒にすんなし。コイツは我らが“ウィル・オ・ウィスプ”の名物幽鬼！ジャック・オー・ランタンさー！」

オマエ、で耀を、そっちの奴、で均を示したアーシャが火の玉に合図を送る。

すると火の玉は自身を取り巻く炎陣を振りほどいてその姿を顕現させる。

轟々と燃え盛るランプと、実体のないマントのような黒い布の服。

そして人の頭の十倍はあろうかという巨大なカボチャ頭。

「ああ、あれは気にしないでもいいよ。ちよつと舐められたくなかっただけだし」

耀の謝礼をあつさりと躲し、耀が舞台上がるのを待つ均。

耀は少しだけ複雑そうな顔をしながらも舞台上がり、その円状の舞台を見まわした。最後に、バルコニーにいる飛鳥に手を振る。

均も耀に続いて舞台上がり、バルコニーに向けて一応、軽くだが手を上げておいた。

飛鳥がそれに気づいて二人に手を振り返す。

十六夜も面倒臭そうにしながらも軽く手を上げてそれに応える。

「大した自信だねーオイ。私とジャックを無視して客とホストに愛想ふるってか？何？私達に対する挑発ですかそれ？」

皮肉気にアーシャがそう言うや否や。

「うん」

耀が即答する。アーシャはカチンと来たようで唇を尖らせる。

負けず嫌いな耀のことだ。馬鹿にされた態度が気に入らなかったのだろう。あと、僅かに八つ当たりも入っているように見受けられる。均に助けられる結果になってしまったじゃないかどうしてくれる、といったところだろう。

そのやり取りを見て溜飲が下がったのか、黒ウサギは宮殿のバルコニーに手を向けて厳かに宣言する。

『——それでは第一ゲームの開幕前に、白夜叉様から舞台に関して説明があります。ギャラリーの皆様はどうかご静聴の程を』

その瞬間、ギャラリーの声がピタリと止んだ。

バルコニーの前に出た白夜叉は静まった会場を見渡し、一つ頷く。

「うむ。協力感謝するぞ。それではゲームの舞台についてだが……まずは手元の招待状を見て欲しい。其処にナンバーが書いておらんかの？」

観客が一齐に招待状を取り出し探し始めた。持ってくるのを忘れたのか、頭を抱える者まで出る始末だ。

「ではそこに書かれているナンバーが我々の出身外門——“サウザンドアイズ”の三三四五番となっている者はおるかの？おるのであれば

招待状を掲げ、コミュニケーションの名を叫んでおくれ」

観客席がどよめく。するとバルコニーの正面の観客席で、樹霊コダマの少年が招待状を掲げていた。

「こ、ここにあります！」アンダーウッド”のコミュニケーションが、三三四五番の招待状を持っていきます!!」

おおおっ！と歓声が起こる。白夜又はニコリと笑うと、バルコニーから姿を消し、次の瞬間にはその少年の前に立っていた。

「ふふ、おめでとう。”アンダーウッド”の樹霊の童よ。あとで記念品でも届けさせてもらおうかの。よろしければおんしの旗印を拝見してもよろしいかな？」

少年が勢いよく頷く。彼は白夜叉に腕輪を手渡した。そこには、巨大な大樹の根に囲われた街が描かれている。

白夜叉はそれを見て一、二度頷くと少年に微笑みながら腕輪を返し、次の瞬間にはバルコニーに戻っていた。

「今しがた、決勝の舞台が決定した。それでは皆の者。お手を拝借」
白夜叉が両手を前に出す。全ての観客も倣って両腕を前に出した。
パン！という乾いた柏手の音が揃って響く。

——その瞬間、世界が一変した。

バフン、と着地した均は、すぐさま周囲を確認する。

そこは、樹木に囲まれた場所のようだった。

均の隣では、耀が鼻で何かの匂いを嗅ぎ取りながら呟く。

「この樹……ううん、樹だけじゃない。此处、樹の根に囲まれた場所？」

「あらあらそりやあどうも教えてくれてありがとよ。そっか、ここは根の中なのね」

小馬鹿にしたような物言いはアーシャだ。この少女、余程耀のことが気に入らないらしい。

「……………」

しかし、耀は顔を背けて無視。

恐らく耀の今の行動に面倒だったから以上の理由はないと思うが、受け手はそうは受け取らなかったらしい。

隣にいるジャックと共に臨戦態勢に入る。

しかし、耀が冷静な声音で制した。

「まだゲームは始まってない」

「はあ？何言って」

「勝利条件も敗北条件も何も提示されていない。これじゃゲームとして成立しない」

「ま、当然のことだね」

均が余計な一言を付け加えた。アーシャが明らかにむっとする。しかし、発言に正当性は感じたのかぎやーぎやー騒ぐことはなかった。

その時、耀とアーシャの間の空間に亀裂が走り、輝く羊皮紙を持った黒ウサギが現れた。

ホストマスターによって作成された“契約書類”の内容を、黒ウサギは淡々と読み上げる。

『ギフトゲーム名 “アンダーウッドの迷路”』

・勝利条件 一、プレイヤーが大樹の根の迷路より野外に出る。

二、対戦プレイヤーのギフトを破壊。

三、対戦プレイヤーが勝利条件を満たせなくなった場合（降参含む）。

た場合（降参含む）。

・敗北条件 一、対戦プレイヤーが勝利条件を一つ満たした場合。

合。

二、上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

』

「――ジャツジマスター“審判権限”の名において、以上が両者不可侵で有ることを、御旗の下に契ります。御二人とも、どうか誇りある戦いを。此処に、ゲームの開始を宣言します」

ゲームの火蓋は切って落とされた。だが、両者共に睨み合ったまま動かない。お互いの出方を探っているようだ。

しばしの空白の後、アーシヤが先に口を開く。

「睨み合っても進まねえし。先手は譲るぜ」

「……………」

耀が理解ができないという表情でアーシヤを見つめる。

アーシヤは肩を竦めながらそれに答えた。

「ま、さっきの一件があるしね。後でいちゃもん付けられても面倒だし?。」

ツインテールを揺らしながら、アーシヤは余裕の表情だ。自信があるのだろう。

耀は無表情で少し考えた後、おもむろに口を開いた。

「貴女は……“ウィル・オ・ウィスプ”のリーダー?。」

耀の質問の意図を察し、均がいそいそと準備を進める。ギフトカードからヘルメスの靴を取り出し、クリアブーツと履き替える。耀が全力で走ったら、今の均では追いつくことが出来ない。なら、空を飛べばいいじゃん!という発想である。これはあの腐れお坊ちゃんとの戦闘の時に、どさくさに紛れてコピーしておいた物だ。本物はルイオスが持っているはずである。

一方、耀の意図を知る由もないアーシヤは、嬉しそうに返答する。

「あ、そう見える?。なら嬉しいんだけどなあ。残念ながらアーシヤ様は、」

「そう。わかった」

リーダーに間違われたことが余程嬉しかったのか、愛らしい笑みを浮かべ身体をくねくねさせながら質問に答えるアーシヤ。

しかし、耀は聞いていない。思いつきり会話をぶった切ると、背後の通路に疾走を開始した。

耀が何をするつもりか予想できていた均は、遅れず耀についていく。

アーシャはしばし唾然とする。だが、自分が無視されたと理解するや否やわなわなと震え、思いの丈をぶちまけた。

「オ……オウウウウケエエエエイ！そっちがその気なら容赦なんざしねえ！行くぞジャック！木の根の迷路で人間狩りだ！」

「YAHOHOhohoh」

アーシャは怒りを露わにして猛追する。耀は背中を向けて通路と思いき根の隙間を次々登る。均は空中で器用に回転しながら木の根の尽くを躲し、耀に遅れずについていく。

アーシャは二人の背中に向けて叫んだ。

「地の利は私達にある！焼き払えジャック！」

「YAUFUUUUuuuu!!」

アーシャが左手を翳すと、ジャックの右手に持つランタンとカボチャ頭から悪魔の業火が吹き出し、木々を焼き払って耀と均を襲う。

しかし耀は、最小限の風を起こして炎を逸らした。

（今の回避……耀は気づいてるみたいだね、あの炎の秘密に。でも、何か嫌な予感がするなあ……）

均は炎を散らした耀に感心しながら、しかし直感が齎した嫌な予感を拭えずにいた。

耀は均の予想通りに、ジャック・オー・ランタンの秘密に気が付きつつあった。

（あの炎……ジンの話していた“ウイル・オ・ウイスプ”のお話通りだ）
耀は試合前に、ジンに教えられた知識を思い出す。

———Will^{ウィル}o,^オwis^{ウィス}pとJack^{ジャック}o,^{オー}lan^{ラン}tern^タnの
伝承。

前者は鬼火と云われる現象で、後者は幽鬼と云われる逸話。この二つの伝承には、それぞれに共通した逸話が残っている。

その一つが、『二度の生を受けた大罪人の魂に、名もなき悪魔が篝火を与えた』という点。

伝承では、生前のジャックは二度の生を大罪人として過ごし、永遠

に生と死の境界を彷徨うこととなる。それを哀れに思った悪魔が与えた炎こそ、ジャックのランタンから放つ業火。

——「伝承がある」ということは「功績がある」と同義。つまり、「ウィル・オ・ウィスプ」のコミュニティのリーダーは『生と死の境界に現れた悪魔』のはずだ。

(だけど……彼女はリーダーじゃない。なら別の悪魔か種族のはず)

耀はそう思考を進めながら樹の根の空間を駆ける。

(仮にアーシャの正体が、生と死の境界を行き来できる程の力を持った悪魔なら、耀に勝ち目はなかった。でも、彼女は違うと答えた。なら、耀にも勝ち目はあるはずなのに……うーん、何だろう、この嫌な感じ……)

均は奇しくも耀と同じことを考えながら、正体のわからない嫌な予感を感じ続けていた。最近、この手の感覚が多い。しかもそれが中々外れないのだからタチが悪い。

均がそんなことを考えている間に、アーシャが次の行動を取った。

「あーもう、ちよこまかと避けやがって！三発同時に撃ち込むぞジャック！」

「Y A ッ F U U U U u u u u !!」

アーシャが再び左手を翳し、ジャックが右手のランタンから業火を放つ。

それを耀は、鷲獅子のギフトを使うことなく避け切った。

耀は、業火の正体を確信する。

(やっぱりそうだ。あの炎は、ジャックが出してるんじゃない。あの子の手で、可燃性のガスや燐を撒き散らしてるんだ)

これが、「ウィル・オ・ウィスプ」の伝承の正体である。大地から溢れ出た、可燃性のガスや物質の類なのだ。

(それで間違いない。耀の嗅覚が、僕では捉えきれない違和感を感じ取っているようだし……正しいはずなのに、なんでこんなにも嫌な予感が続くんだ!?)

均も考察だけで同じ結論に行きついていてしたが、それでもまだ嫌な予感は拭えない。それどころか、どんどんと増してきていた。

アーシヤは種を見破られたことに気が付いた。

「くそ、やべえ……このままじゃ逃げられる！」

しかし、走力は耀と均が圧倒的に上。さらに、耀の五感の外からの僅かな気流を捉えている。迷路の意味はなかった。

その見る見るうちに離れていく二人の背中をアーシヤは見つめ――

諦めたようにため息を吐いた。

「……くそつたれ。悔しいが後はアンタに任せるよ。本気でやっちゃって、ジャックさん」

「わかりました」

その瞬間、均の身体を怖気が駆け巡った。

え？と耀が振り返ったのを横目に見ながら、自身も振り返り体勢を整える。

遥か後方にいたカボチャ頭の姿はなく、耀のすぐ前方に霞のごとく姿を現した。耀が驚愕して足を止めてしまう。

「嘘」

「嘘じゃありません。失礼、お嬢さん」

ジャックの真つ白な手が強烈な音と共に耀を薙ぎ払い、樹の根の壁に叩き付ける。

「貴方も、失礼して」

次いで、ジャックは均をも吹き飛ばそうとする。耀ほど頑丈ではない均としては食らうわけにはいかない。

「フッー」

「ほう……？……貴方、やりますね」

鋭く息を吐き、ヘルメスの靴の効果で飛びながら器用に攻撃を回避した均は、警戒を最大にしてジャックと距離を取る。ジャックは自身の攻撃を回避した相手に感嘆の声を上げた。

「さ、早く行きなさいアーシヤ。この方々は私が足止めします」

「悪いねジャックさん」

悔しそうにそう言い残し、アーシヤが三人に背を向けて走り去る。きつと自分の力だけで勝ちたかつたのだろう。

「ま、待っ」

「待ちません。そして貴女は此処でゲームオーバーです」

追い継ろうとする耀をジャックが止める。そして、ランタンから篝火を零す。

その小さな火種は瞬く間に樹の根を燃やし、轟々と唸る炎の壁となった。

先程までとは比べ物にならない、圧倒的な熱量だ。

「……貴方は」

「はい。貴女の御想像はきつと正しい。私は、アーシャIIイグニファトウス作のジャック・オー・ランタンではありません。貴女が警戒していた存在——生と死の境界に顕現せし大悪魔！ウイラーIIザイグニファトウス製作の大傑作！世界最古のカボチャお化け、ジャック・オー・ランタンでございます！」

明確な意思と魂と威圧感を、そのカボチャの奥の瞳に灯したジャックが堂々と名乗りを上げる。口調はふざけていても、その存在感は本物だ。

それを上空で聞き、均は嫌な予感の正体を理解した。

（そういうことだったのか……。僕が感じていたのは、違和感。アーシャの作品というわりに、ジャックの霊格は大きかった。確証はなかったからスルーしてたけど、やっぱり“ウィル・オ・ウィスプ”のリーダーの作品だったわけだ……）

別種の嫌な予感が身体の中で渦巻いているのを感じながらもそれを無視し、均は思考を進める。眼下では、耀とジャックが何か話していた。

（あのジャックは間違いなく嘘は言っていない。今のままじゃ、僕でもアレは倒せないだろうし。耀なら尚更だ。ああいうのを倒すのに必要なのは、純粋な力じゃないからね。つまり、耀がこのゲームに勝つには、僕の力を頼るしかないってことになる……。勝てないまでも、僕にジャックの足止めをさせて、自分は先に進むべきだ。それが最善策だけど……。耀が素直にやるかな？）

均が足元に意識を向けると、ちょうどジャックが腕を広げ、声高に叫んだ。

「いざ来たれ、己が系統樹を持つ少女よ！聖人ペテロに烙印を押されし不死の怪物——このジャック・オー・ランタンがお相手しましう！」

——アーシヤが先行した今、耀が勝利するにはジャックを破壊するか、ジャックを誰かに任せて自分も全力でアーシヤを追うしかない。相手は不死存在。ならば、壊せないと思っただ方がいい。しかも相手は、耀の“生命の目録”の力さえ見破っている。ただでさえ勝ち目がないのに、それがどんどん薄くなる。

ジャックを任せる存在と云えば——。
対峙する二人を見下ろしていた均と、チラリと上を見上げた耀の目があつた。

交錯は一瞬、耀は視線を逸らし自身の首にかかったペンダントを見つめる。

その喉がゲームの終了を宣言する——。

「ハアッ!!」

前に、均の上空からの飛び蹴りがジャック・オー・ランタンを襲つた。

ジャックには、攻撃がわかっていたかのように躲されてしまう。

「え……」

「……耀、早く行きなよ。ここは僕が抑えるから」

均はジャックと対峙したまま、振り返らずに言う。

耀は、動かないまま言葉を紡ぐ。

「ど、どうして……」

「どうして？ そんなことは決まってる。僕は言ったはずだよ。本当に倒せなさそうになつたら助けるって」

「……………頼んでない」

「……………」

そつぽを向いて拗ねたような表情をしているんだろうな、などと考えながら、均はため息を吐いて耀に言葉を叩き付ける。

「……………春日部耀。お前はそれでもプレイヤーか？」

「……………どういう意味」

「どういう意味も何も、そのままの意味さ。勝てるかもしれない手段があるのに、それを使おうともせずに負けを認める。そのどこがプレイヤーなんだ？……………勝ちの目が潰えたわけでもないのにそのゲームを諦めるなんて、ゲームに対する冒涇だ。そんな奴にゲームプレイヤーを名乗る資格はない。——恥を知れ」

絶対零度の冷たさを孕んだ言葉に、耀の動きが固まる。正論を叩き付けられて羞恥に顔を歪めるも、均の言葉に正当性を感じたようだ。鷲獅子のギフトを使い、出口に向かって飛び去って行く。

その気配を背中で悟った均は、ジャックの炎の瞳を見つめて言った。

「行かせてよかったのですか？ ジャック・オー・ランタンさん？」

「ヤホホ、ジャックでいいですよ。なに、彼女を行かせた方がアーシャの成長に繋がると考えてのこと。それに、貴方とはお話したいと考えていたのです」

「奇遇ですね、僕もです。躲された時からもしや、とは思っていましたが。やっぱりそうだったんですね」

「ああ、バレているのではないかという私の推測は正しかったのですね。アーシャは気づいていなかったようですが」

均がジャックの正体について疑いを持ったのは、最初に耀を脅かそうとした時だ。

半信半疑ですらない、もしかしたら？程度のものだったが、合っていたらしい。それに、ジャックも何かを悟っていたようだ。

——『その彼』。均の発言にあったこのフレーズは、無意識下でジャックの正体を見破っていたから出てきた言葉だ。アーシャは、均が火の玉ではなくジャック・オー・ランタンだと気づいての発言だと思っただろう。

「貴方の名乗りはしかと聞きましたので、今度はこちらから。"ノーネーム"所属にして春日部耀のサポート、平均です。以後お見知りおきを」

「これはこれは御丁寧に。ウィラーザイグニファトウス作のジャック・オー・ランタンでございます。……それにしても」

「はい、何でしょう？」

小さく問いかけてきたジャックに、均が首を傾げて返す。二人を囲っていた業火の壁は、徐々に勢いを失いつつあった。

「何故今になって援護を？貴方の腕前ならば、あのお嬢さんが攻撃されるのを防ぐこともできたと思うのですが」

全くもってジャックの言う通りである。業火による攻撃でさえなければ、均なら受け流すくらいのことではきただろう。

均は軽く肩を竦め、ジャックの疑問に答えた。

「……それが、耀との約束でしたので」

ジャックはカボチャ頭をゆっくりと縦に振ると、

「……やはり彼女は、人に頼ろうとしないのですね」

わかつていたように呟いた。それが少々意外で、均は驚きを少し露わにして訊ねる。

「……わかるんですか」

「ええ、まあ。あのお嬢さんの瞳を見れば。少々物寂しいものでしたからね」

「そうですか……ジャックさん、貴方に一つお願いしたいことがあります」

「ヤホホ、お聞きしましょう」

朗らかに笑うジャック。

「耀に、何か助言してやってください。僕が言っても、恐らく劇的な効果は見込めません。お願いします」

均は真摯に頭を下げる。恥も外聞もなく、などと付ける必要はなかった。均自身が、コミュニティの仲間のために頭を下げるのが耻だとは思っていないからだ。

「……はい、承りました。微力ながら、やらせていただきましょう」

「ありがとうございます。……こんなお願いをした後に何ですが」

「——何でしょう?」

これは少し非常識だと思っているのか、均はぼつが悪そうにしながらも自分の伝えたいことを口にする。

「まだゲームは続いています。……世界最高のジャック・オー・ランタンに、お手合わせ願いたい」

「……ヤホホ、いいでしょう。不肖このジャック・オー・ランタンが相手いたします!」

均はギフトカードからホワイトダガーを取り出し、構える。ジャックは軽く腕を広げた。

——業火の壁が消滅する。

「シッ!」

「ヤホホホホ!」

均は彼我の距離を一瞬で詰めてジャックに斬りかかる。ジャックはそれを軽々と躲し、炎を連射してくる。

均は樹の根に手をつけて目を瞪るような動きで回避すると、再びジャックに斬りかかった。

「ヤホホホホ、貴方も中々の使い手のようですが……まだ甘いッ!」
「なっ!?!」

均は気を抜いたわけではない。

にも関わらず、ダガーが均の手から弾き出されてしまった。ジャックを見れば、左手が振り抜かれている。

「チッ」

今の攻撃が見えなかったことへの怒りを舌打ち一つに詰めて吐き出し、右手のみにダガーを持った戦闘に頭を切り替える。

一気に距離を詰め、カボチャ頭に斬り上げるような一撃。

それを頭を振って回避した僅かな隙を見逃さずに、ランタンに強烈な右の蹴りを叩き込む。

「ヤホッ!？」

「取った!」

ランタンを吹き飛ばし、カボチャ頭に突き刺すように攻撃を仕掛け

「残念でしたね」

「くっ!？」

ジャックの左手に強烈な平手打ちを叩き込まれた。

ヒットの直前に何とか左に向かって跳び、衝撃を受け流すと共に受け身を取ってダメージのほとんどを散らす。

「ヤホホ……今のは少々焦りました。ですが、私は純粋なヒトではありません。人間とは違う動きで攻撃が飛んでくることは念頭に置いておいた方がいい」

「……ご忠告、感謝します」

今のタイミングなら、本来は決まるはずだった。

人間相手なら、余程の化け物染みた能力を持っていない限り蹴りの一撃でのけ反らされ、ダガーの一撃を食らうことになっていただろう。

しかし、自分はそのうちではないと、ジャックは言っているのだ。

警戒を解かずに均が二、三步跳び退り、弾き出されたダガーの下まで行きそれを拾う。

「行きますー!」

再び双短剣を構えなおした均がそう言って跳びかかろうとした時

——会場の舞台はガラス細工のように碎け散り、元の円状の舞台に戻ってきていた。

黒ウサギのアナウンスが響く。

『勝者、アーシャ・イグニファトウス!』

割れんばかりの歓声が舞台を包む。

均は感情を伺わせない表情で短剣を消失させジャックに一礼する

と、周囲を見回す。

目的の人物を発見し、そちらに歩いて行った。ジャックも耀の方に行ってくれたようだ。

「やあ、アーシャさん」

「……何だよ、アンタか」

「……なにか、不機嫌そうですね」

「んなことねえよ！んで、何か用か？」

明らかに不機嫌な口調のアーシャ。しかし言及すれば面倒なことになるのは目に見えているので特に何も言わない均。

「いえいえ、ちよつとお話したいなーとか思っただけですから」

「私には話すことなんて特にな……いや、アンタ名前は？」

「名前ですか？平均です」

「……タイラ、ナオね……サンキュー、覚えとくよ」

そう言つて、アーシャはジャックの下に向かっていく。

話を切り上げられてしまった均だったが、別に不機嫌になるわけもなく呟く。

「うーん、ジャックさんとやってみてわかったけど、まだ鈍ってるなあ……こりや鍛錬が足りないね。あと鍛え方も悪いのかな」

頭をポリポリと搔いて反省していた均は、何かを感じて上空を仰ぐ。

そこから降り注ぐ、黒い封書。均は靴の飛行能力を使って空へ舞い上がり、手に取って開けた。

笛を吹く道化師の印が入った封蝋を開封すると、中から出てきたのは黒い“契約書類”。

そこには、こう書かれていた。

『ギフトゲーム名“The P I E D P I P E R o f H A M E
L I N”

・プレイヤー一覧

・現時点で三九九九九外門・四〇〇〇〇〇〇

外門・境界壁の舞台区画に

存在する参加者・主催者の全コミュニティ。

・プレイヤー側・ホスト指定ゲームマスター

・太陽の運行者・星霊 白夜叉。

・ホストマスター側 勝利条件

・全プレイヤーの屈服及び殺害。

・プレイヤー側 勝利条件

一、ゲームマスターを打倒。

二、偽りの伝承を砕き、真実の伝承を掲げよ。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

”グリムグリモワ―

ル・ハーメルン”印』

「これは……!」

均が事態を理解すると同時に、観客の誰かが叫びを上げた。

「魔王が……魔王が現れたぞおおおおおおお!!」

ついに魔王が、現れた。

第七話 魔王の登場だそうですよ？

「あれが……魔王……！」

均は黒い“契約書類”が降ってくる上空を見上げ、“魔王”のことを捕捉していた。敵影は四。詳細まではわからない。

ザワツ……!!

十六夜達が座っている一角がにわかに騒がしくなる。

何事かと均がそちらを振り仰ぐと、白夜叉の様子に異変が生じていた。

「なっ——!?!」

白夜叉が黒い霧のようなものに包まれ、姿を覆い隠されてしまっている。

その霧はどんどん膨らむと、白夜叉を包んだままバルコニーにいる他の存在を弾き飛ばした。

「あれは……!?!」

均はどう行動すべきかの判断材料が足りず、見ていることしかできなかった。

「均!!」

「春日部さん!」

「均さん、耀さん!」

“ノーネーム”の全員が舞台上に集まってくる。

十六夜は飛鳥を抱えて飛び降りて、ジンとレティシア、黒ウサギは駆けて集まった。

「魔王が現れたってことでいいんだな？」

十六夜の問いかけ。それを向けられた黒ウサギは、真剣な表情で頷く。

「なら、誰がどう動く？黒ウサギ、指示を」

「待て均、焦るな。まだ確認することはある。黒ウサギ、白夜叉の“主催者権限”が破られた様子は無いんだな？」

均が険しい声でそう言うのを遮り、十六夜は問いを重ねた。

そこで、均は冷静になれた。どうにも、気が急いでいたらしい。

「ごめん十六夜、冷静じゃなかった」

「均にしては珍しかったな。ま、もう大丈夫だろ。それで、黒ウサギ?」

「十六夜さんが懸念していることはありません。黒ウサギがジャツジマスターを務めている以上、誤魔化しは利きませんから」

そこで十六夜は笑った。

「なら連中、ルールに則ってゲーム盤に現れているわけだ。期待を裏切らねえぜ」

会話が途切れたのを見て、黒ウサギが口を開く。

「均さんの先程の質問に答えると、やるべきことは3つあります。上空に見える敵影を止めること。"階層支配者"であるサンドラ様を捜すこと。そして、白夜叉様に会いに行つて指示を仰ぐことです。役割を分けましょう」

「なら俺は上の奴らの相手をする」

いち早く反応したのは十六夜だ。その一言を残し、猛烈な速度で上空に跳び出した。

「あつ、十六夜さん!?!……もうっ!迎撃に出てもらうつもりだったの
でいいですけども!」

予断を許さない状況だからかその先は続かなかったが、黒ウサギはせめて指示を聞きなさい!と言いたかったに違いない。

「均さん、レティシア様は十六夜さんと同様敵の相手を!可能ならば避難誘導もお願い致します!」

「分かった。行こう、レティシア」

「うむ。了解したよ均」

均はフワリと舞い上がると、レティシアと共に落ちてくる敵影に向けて飛んで行った。

「黒ウサギがサンドラ様を捜しに行きます。先程、観客席の方へ飛ばされてしまったようですので。ジン坊ちゃん達は白夜叉様をお願い
します」

「分かったよ」

ジンが頷く横で、飛鳥が不満そうに呟きを漏らした。

「ふん……また面白い場面を外されたわ」

「そう言わないでください、飛鳥さん。」契約書類”に書かれている白夜叉様がゲームマスターであるということの意味を確認しないと――

「お待ちください。魔王を迎え撃つというなら我々”ウィル・オ・ウィスプ”も協力しましょう」

そのように声を掛けてきたのは、舞台会場に上がっていたジャックとアーシャだ。

堂々としているジャックとは違いアーシャは緊張していたが、それでも頷いた。

「では御二人は黒ウサギと一緒に！サンドラ様を捜して指示を仰ぎます！」

その場に残っていた全員は頷き合い、各々の役目のために走り出した。

均は、自分よりもさらに上空で十六夜が交戦を開始したのを見ていた。

「十六夜が止めたのは……黒服の男みたいだね。他には……斑模様のワンピースを着たちっちゃい女の子と白装束のケバい女。それに、変な陶器みたいなデカイやつか」

「均……言っていることに間違いはないが、その表現はどうなのだ……？あの中に魔王がいるのだが」

「言っていることが間違っていないならいいんだよ――ぐっ!?!」

「相手はグリムグリモワール・ハーメルン……てことは、今のが本物の”ネズミ捕り道化”か……!」

均が耳を押さえながら上空を仰ぎ見ると、白装束の女が笛を吹いて

いる。

奴が、「ネズミ捕り道化」ということだろう。

レティシアは頭を振り魔笛の音色を振り払う。

そして、心配そうに均に声を掛けた。

「均、大丈夫か!?十六夜ならば兎も角、均にはこれは……!」

「大、丈夫……少しだけ、待って……くれれば……」

均は苦しそうにしながらも、じっと佇む。

数秒後、目を開けた時には均は平然としていた。

「均……う。何をしたんだ?」

「秘密。さてレティシア、来るよ」

「あら。あなた達が私の相手をしてくれるの?」

空中で佇んでいた均とレティシアの前に、斑模様の服を着た少女が降りてきて口を開く。

わざわざこんなところに留まっている連中、迎撃に出てきた者だと判断したのだろう。

「マスタあゝ、待つてくださいいよおゝ」

笛を持った白装束の女も近づいてきて、斑模様の少女に声をかけた。

その言い方からして、少女の方が立場は上のようだ。

そういえば、魔笛の音色が止んでいる。さっきの演奏が何の目的だったのか、均とレティシアには判断材料が少なすぎてわからなかった。

「ラッテン、遅いわよ。私はこの吸血鬼さんを見定めるから、貴女は他で仕事をしてちょうだい」

「はあゝい。シュトロムは要らないので、置いていきますね。では、また後ほど」

「行かせると思うか?」

レティシアから強気な発言が飛び出す。

戦意を高めていくレティシアを前に、斑模様の少女は余裕の表情を崩さない。

「逆に訊きたいのだけど、邪魔をさせると思う?」

「君がどう思っているよ、邪魔させてもらうよ」

そこで、均が会話に割り込んだ。

明らかに少女の眼中になかった均が、強烈な回し蹴りを少女の顔面に容赦なく叩き込む。

パン！と、小気味いい音が鳴って。

「……………貴方、不愉快だわ。死にたいの？」

「……………はは、ダメージなしか。こりや、一筋縄ではいかなさそうだね。流石は魔王様ってところかな」

一切ダメージを受けていない、冷めた表情が均を至近距離から見つめる。

仕方なく距離を取った均は、隣のレティシアに問いかけた。

「レティシア、あのケバい女を止める余裕、ありそう？」

「すまないが、そんな余裕はなさそうだ」

「だよ。あのケバい女は諦めるか……………」

そのやり取りに、白装束の女がぶち切れる。

「ぐおら貴様ア!!聞こえてるわよ!!ケバいケバいうるっさいわね!!喧嘩売ってるのかしら!？」

喧嘩を売るものにも、敵対している者同士、何があってもおかしくないと思うのだが。

実際、均は聞かせるつもりで言ったのだし。

事実、斑模様の少女はそんなことを気にした様子ではなく。

「はあ、ラッテン。あまり私を怒らせないで。早く行って仕事をしなさい」

「ぐぐぐ……………もう、マスター!そいつら、ケチヨンケチヨンにしちやってくださいね!」

そのまま飛び去ろうとする背中に聞かせるために、均は大きめの声で呟いた。

「ケチヨンケチヨンとかいう表現がもう年寄り臭いよね」

「だあああもうクソガキいいいいいい!!今度会ったらぶっ殺してやるからね!覚悟しなさいよこのお!!」

「……………ラッテン」

「あああああもおおおおお仕事よお仕事おおお死ねえええええ
エクソガキいいいいいい!!」

情緒不安定な状態に陥った白装束の女は飛んでいってしまったが、
それを止める術を均もレティシアも持ち合わせてはいなかった。

「……厳しいな」

状況を冷静に見たレティシアの言葉。

均も同意を込めて頷く。

「敵一人が野放しになるっていうのがよくないよね」

「……そんなことを再確認するくらいなら今後の相談でもしていた方
がよかつたんじゃない? さて、行くわよ」

「あ、ちよつと待った」

律儀に攻撃を宣言してきた斑模様の少女に待ったをかける均。

「……なに?」

向こうにそれを聞く義理はなかったが、何か目的があるのか。会話
に付き合ってくれるつもりのようなのだ。均はせっかくの機会を有効に
活用する。

「さっきの、ラツテンって言ってたね。そして、そのデカイやつがシユ
トロム。"ネズミ捕りの道化"に"嵐"か。それに上のやつは、
ヴェーザーらしいね。"ヴェーザー河の化身"までいるなら、簡単だ。
君たちは、ハーメルンの笛吹きラツテンフェンガーの伝承から産まれた悪魔。一三〇人の
子供たちの殺し方を霊格化したものだ。あの伝承は、人攫いに神隠
し、果ては天災まで色々な考察があるから。"契約書類"にあった『偽
りの伝承を砕き、真実の伝承を掲げよ』というのは、ハーメルンの伝
承の謎を解けていることだと推察できる。じゃあ、ここで魔王様に
質問だ。君は、何の魔王なのかな? 無知な僕に、教えてよ」

「……いいわ。教えてあげる」

均の話聞いて、斑模様の少女はニコリと微笑んだ。

ヒトの本能が警鐘を鳴らす、冷徹な微笑み。

少女は漆黒の風を吹かせながら、堂々と名乗りを上げた。

「初めまして。私は、"黒死斑の魔王"。ハーメルンの悪魔を率いる、し

がない魔王の端くれよ。よろしくね、人間さんと吸血鬼さん?」

「……なるほど、やっぱりね。そういうこと」

その均の眩きは、隣にいるレティシアだけが聞き取ることができた。

「均……?」

「取り敢えず、この風を何とかしないと—— ツ!」

均が風を散らそうと踏み出す寸前、"黒死斑の魔王"の後方から炎の渦が飛んできて風を飲み込んだ。

ついでとばかりにシウトロムを溶かして粉碎する。

"黒死斑の魔王"が、嬉しそうな声音で振り向いた。

「あら……そっちから出向いてくれるなんて光荣ね、"サラマンドラ"の火龍、サンドラ」

「ハーメルンの魔王……貴女の好きにはさせません!」

屹然と言い放ったサンドラに対し、魔王の少女は嘲笑って答えた。

「それは大層フロアマスター立派ね、"階層支配者"?でも残念、私たちは、貴女の許可なんてなくても勝手に始めるの。蹂躪劇という名の、パーティーをね」

その隙に背後から蹴りを叩きつけようとした均だが、振り向いた魔王の袖に食い止められる。

「僕らがいることも忘れないで欲しいな、"黒死斑の魔王"。それとも、黒死病ペストちゃんとも呼ぼうか?」

一瞬、魔王の少女は目を見開いたが、すぐに顔を顰めた。余程嫌な呼ばれ方だったらしい。恐らく、ちゃん付けが。

「やめて。虫酸が走る。殺すわよ?」

「ははっ、おつかない。殺されるのは嫌だから、おとなしくペストちゃんって呼ぶことにするよ」

少女の額に青筋が浮かぶ。

「……………そう、わかった。死にたいのね?なら死になさい」

目からハイライトが完璧に消えた"黒死斑の魔王"から吹き荒れる風を回避しながら、均はレティシアと共に攻撃の機会を窺う。

「こら、均!不用意に激昂させてどうするんだ!?!それに、私たちでは火

力が足りない！」

「そこは、サンドラに頑張ってもらおう……んッ、この音！」

いち早くその音を捉えたのは、均だった。

耳の奥に侵入してくるかのような、不快な甲高い音色。

それは、人とネズミをいのように操る、魔性の笛の音。

「あのケバい女あ!!」

どこかから、「黙れクソガキいいい、だあれがケバいつてえええ!!」
という声が、均の耳に届いた気がした。

笛の音に操られた影響でそこから同士討ちが始まるのを目にしつつも、対処のしようがない均とレティシアが「黒死斑の魔王」の相手をサンドラと協力して続けていた時。

空に、雷鳴が轟いた。

「……今の音は」

その音を聞き、魔王が動きを止める。

レティシアもハツとした様子で、ある方向を見つめた。

均もそれに釣られ、同じ方向を見やる。

そこには――。

「ジャツジマスター審判権限」の発動が受理されました！これにより、ギフトゲーム「THE PIED PIPER of HAMELIN」は一時中断し、審議決議を執り行います！プレイヤー側、ホスト側は、共に交戦を中止し、速やかに交渉テーブルの準備に移行してください！繰り返しします――」

その宣言を聞き、この場の戦闘を有利に進めていた斑模様の少女は、微笑んだ。

均の目が細められる。

(……まるで、狙っていたかのようだね)

「あら。残念、止められてしまったわ。このままあなた達を倒して、ギフトゲームに勝利してしまおうと思っていたのに」

「あ、待ってペストちゃん」

「……………その呼び方はやめなさいと言ったはずよ。死にたいの？」

「たった今黒ウサギが言ったことを聞いていなかったの？ 交戦は、中止なんだよ」

「……………」

ただ煽られたただけだと判断した“黒死斑の魔王”は、こちらに向かってきたラツテンの下へ行こうとする。

実際に話があった均は、慌てて呼び止めた。

「ああ、ごめんごめん。ペスト、ちよつと待って。言いたいことがあるのは本当なんだ。からかってごめん。少しだけ、聞いてくれないかな」

“黒死斑の魔王”は呆れを多分に含んだ視線を均に向ける。

「あのね。貴方と私は敵なの。わかる？ 話を聞いてあげる義理はないわ」

そのまま去ろうとした少女の背中に、均は言葉を投げかけた。

「——聞かずに行ったら、後悔するよ」

ピタリと。魔王の少女が動きを止める。

「マスターあー、一緒に向かいますようー。……マスター？」

ラツテンがその顔を不安そうに見つめる。

背を向けられていた均には、その表情はわからない。

彼女がどんな表情をしていたのか。それは、ラツテンにしかわからないのだ。

「……………いいわ、聞いてあげる。早く言いなさい？」

「均？ 一体何を」

レテイシアやサンドラも訝しむ中、均は柔らかな微笑みをたたえて言った。

「君達は恐らく、この後こちらに不利な条件を付けてくるよね」

「……………」

「なっ!？」

サンドラが驚きで声を漏らす中、少女は黙して答えない。

均も答えを求めてはいなかった。

「まあ、それはいいんだ。こつちでも仲間にも忠告はするしね。

大事なのは、この先。ねえ、ペスト。僕は——」

ゴクリと、誰かが唾を飲み込む。

均の真剣な気配に、中てられたのか。

この場にいる誰もが静かに均の次の言葉を待つ——。

「僕は必ず、”黒死斑きせきの魔王まみ”を隷属させる。だから、そのつもりでいてね」

「二」「………は？」

敵と味方、四人の女性の心が一つになった、最初で最後の瞬間だった。

「あ、十六夜」

「お、均か」

均は、前方を歩いている十六夜の背中に声をかける。

均に気がついた十六夜が少し歩くペースを緩め、二人で並んで歩く。

「審議決議って言っていたね」

「だな」

「如何やって魔王がこの区画内で”主催者権限”を使ったのか。そこに不正はないかってところかな」

「ああ」

「それなんだけどね、十六夜。たぶん、向こうは不正は一切してないよ」

「——ほう？」

十六夜の目がスツと細められる。

自らを良く知る均の前で笑っている必要はないということだろう

か、その口元の笑みも消えている。

「あの魔王の少女の態度から考えるとね。僕にも、方法の仮説はある」
「へえ？」

「ただ、仮説の域を出ないから口にしたくない。僕、この後そこらを見て回って考えを固めるよ。十六夜の考察も済んだら、答え合わせといこう」

「ヤハハ、了解だ」

「というわけで、審議決議は任せるね。変な条件付けられないですよ？」
「任せとけ」

二人が角を曲がると、前方の部屋の前でマンドラが指示を出していた。

会場の設営は「サラマンドラ」が仕切っているのだろう。ホームでもあるし、当然か。

均と十六夜は同時に壁際に寄りかかる。

お互いの雰囲気、まだ話があると察しているのだ。

十六夜が先を譲る気配を発しているので、均から話しかける。

「ヴェーザー、如何だった？」

「あん？お前、アレが「ヴェーザー河の化身」だってわかったのか」

十六夜が驚きの表情を浮かべる。

均はまだ確信には至っていないと考えていたのだろう。

「うん。聞こえてきた。それで？」

「……………まあ、悪魔って名乗るだけあって弱くはなかったな。俺の敵じゃねえけど」

十六夜は均の表現に違和感を覚えたようだったが、それについては言及せず話を進める。

「ふうん。なら、そっちは十六夜に任せて大丈夫そうだね」

「ああ。さっさと片付けて他の加勢に向かうぜ。そっちは？」

「シウトロムは倒した。けどサンドラの火炎で一撃だったのが少し気になるかな。流星に脆すぎる気がする」

十六夜は腕を組んだまま反応しない。

話を続ける、ということだろう。

「ラッテンだけど、笛の音が厄介すぎる。アレによる同士討ちが一番の懸念材料だと思う。あのケバおばさんを如何やって止めるか……」

何処かから、「どうあああああああるえがああああああ!! ケエバおばさんですつとうええええええええええ!!」という謎の怒声が聞こえてくる。

十六夜は怒声が聞こえてきた方角に視線をやって首を傾げつつ、「そうだな」と均に同意する。

均は謎の怒声には一切反応しなかった。

「最後に魔王の娘^{むすめ}だけど、如何にもならないわけじゃない。サンドラなら相手の風の攻撃を散らすことはできる」

ギロリと、たまたま通りがかったマンドラに睨みつけられる。均はそちらを一瞥して、話を続けた。

「ただ、サンドラの攻撃だと相手の守りを崩せていなかった。僕やレティシアの攻撃はもちろん防がれてたし。攻撃では役立たずだったけど、僕らのフォローがないと若干キツそうな戦いぶりだったから、もう一人あの娘に痛手を与えられる人がいるといい感じかな。相手の風を散らすのは、耀が適任だと思う」

マンドラの圧を丸々無視して、サンドラの呼び方を変えずに言い切った均。マンドラのことを嫌いすぎである。

十六夜は均のまとめを聞いて、納得したように頷く。

「なるほどな。じゃあ俺はヴェーザーを倒したら魔王の加勢に行く感じかね」

「たぶんね。ケバさんの対処法はないこともないんだけど、ちよつと非人道的な方法なんだよねえ……」

何処かから、「せめて略さずに言えやああああああ!! あんのクソガキアアアアアアアアアア!!」という怒号が聞こえてくる。

さらに「おいラッテン!! さつきから五月蠅えぞ!! 何なんだ急に!!」
「聞いてよヴェーザー!! 何処ぞのクソガキがね、私のことをケバいおばさんとか言ってくるのよ!」「は?んなこと知るかよ。つか事実だろうが」「はあああああああ!」などという怒鳴り合いも聞こえてきたが、均と十六夜は無視する。

「まあその辺りは、再開のルールが決まったらだな」
「そうだね」

均と十六夜がひとまず会話を終えると、ちょうど会場の設営も終わったようだった。

再び均達の前を通って会場の方へ戻っていったマンドラが声を張り上げる。

「審議決議はこの部屋で執り行う!!ホスト側、プレイヤー側の代表はこの部屋に集まるように!!」

十六夜は部屋の方へ。均はその逆側へ。それぞれ歩き出す。

「じゃ、伝えることは伝えたから。そっちは任せた」

「おう、任せられた」

パアン!と、ハイタッチの小気味良い音が高らかに鳴った。

(ん、耀だ)

これから考察のために街中に出ようとしていた均は、耀の姿を見つける。

彼女はアーシャ・イグニファトウスやジャック・オー・ランタンと協力して、負傷者の手当てをしていた。

わざわざ声をかける必要はないか、と考えた均がその場を通り抜けようとする、均に気がついた耀が駆け寄ってくる。

「均」

「うん?耀、どうしたの?」

「訊きたいことがある。飛鳥を見てない?」

「飛鳥?いや、見てないけど」

そういえば舞台の上で別れた面々の中で、飛鳥の姿だけ見ていない。

飛鳥は、ジンや耀と共に白夜叉の下に向かったはずだ。

一緒にいたはずの耀がそれを訊いてくることに均が嫌な予感を募

らせていると、耀が均に一步近づいてくる。

「あの……………お願いが、ある」

「お願い？」

「うん。飛鳥を、捜してきてほしい」

正直、均は驚いていた。

今日、“造物主達の決闘”でお節介をしまくった均に耀が頼みごとをしてくるとは。

背に腹は替えられないほどに飛鳥が心配なのか、それとも――

「わかった」

内心の驚きはおくびにも出さず、均はすぐに承諾する。

「……………いいの？」

「そんな不安そうな顔しないの。仲間が頼ってきたんだ。手伝うのは当然だよ」

ひどく不安そうな表情を浮かべる耀に、均が微笑みかける。

「でも……………私、均にキツイこと言ったし」

「耀。そこで、余計なことを言う必要はない。言うべき言葉は一つだけだよ」

「……………ありがとう、均」

「うん、それでいい。じゃあ、僕は少し出てくる。耀は？」

「わたしは、手当ての手伝いを続ける。だから、この辺りにいると思う」

「わかった。また後で」

「うん」

均は耀と別れ、“ヘルメスの靴”の効果で飛翔しながら街へ飛び出した。

考えをまとめるために散策しながらも、飛鳥の搜索だ。

まずは――飛鳥達が向かったはずの、白夜叉に話を訊くべきだろう。

均はバルコニーに進路を定めて飛翔する。

「白夜叉様」

「ん、おお、均か。どうした？」

「飛鳥がどこに行つたのか、ご存知ありませんか？」

その質問に、白夜叉は微妙な表情を浮かべる。

その意味がよくわからずに均が首を傾げると、白夜叉はため息をついた。

「はあ……わざわざここまで来て何を訊いてくるかと思えば……。あの娘なら、あの白装束の女に気絶させられ連れていかれた。今は休戦中だから。捜しても無駄だと思うぞ」

「ご忠告、感謝します。しかし、そうですか……あのケバあに」

何処かから「もうババア扱いじゃないのよお!! 本当にぶっ殺すわよクソガキイイイイ!!」という声が聞こえてくる。

というか、連中は今は審議決議の最中ではないだろうか。会場で叫んでいるのだとしたら、迷惑もいところである。

「周囲への迷惑を考えろよ、ババア」

均がボソリと呟いた言葉。

それを受けてか「もうせめてケバいは付けろおおおおおおおおおとおお!!! 耳がそれで慣れちゃってるのにiiiiiiiiii!!」という怒号が追加される。

均は無視した。

完全にラッテンを振り回している。

「ところで白夜叉様。先ほどのため息はどの様な意味だったのですか？少し考えてみたのですがわからなくて」

「おんしの質問内容に呆れていたのだ。普通、私の封印方法などについて訊ねに来たと考えるであろう？」

「ああ」

言いたいことは理解できた。ただ、納得はできない。

「それはあり得ませんね。謎は自分で解いてこそそのギフトゲームです。というより、白夜叉様の封印方法は確信できているので、既に謎でも何でもないです」

「ほう、そうなのか。均の考察を聞いてみたい気もするが――」

「だから、言いませんって。白夜叉様の言うように飛鳥の搜索は無駄に終わると思います、少し捜してみます。ギフトゲームの謎の考察をしながら。僕は行きますけど……」

均が飛び立つ前に白夜叉をチラリと見ると、白夜叉は潤んだ瞳で均を見つめている。

「……………暇なんですか?」

「そうなのだ!暇で暇でしょうがない!!私の相手をしてくれえ〜!」

「……………はあ」

駄々をこねてジタバタする白夜叉を見て、深いため息を吐く均。

それでいいのか東側最強の“階層支配者”。

「わかりましたよ、時間を見つけて話相手になります。ただし、ゲームに関することは話しませんからね。白夜叉様はプレイヤー側のゲームマスターなので、話すこと自体に問題はありますが、やはりそれは面白くないので。雑談になら応じます」

「うむ、それでよい。迷惑をかけるが、頼めるか」

「他ならぬ白夜叉様のためですからね。なるべく多く時間を作ります。ただ、今はお暇させてください」

「うむ、わかった。あの娘を捜すことが無駄だと決まったわけでもない。私も心配しているのだ。均が見つけてくれることを祈っておるぞ」

均は頷き、少し飛び立って白夜叉に向き直る。

「はい、頑張ります。では、行ってまいります」

「うむ」

白夜叉の「なるべくたくさん話相手になりに来るのだぞ〜」という言葉を受けながら、均は街の探索を開始した。

三〇分後。

均は探索を終え、考察を一人で終わらせた。

(やっぱり、僕の考え方で正しかったみたいだ。うーん、ジンや十六夜に僕の考察を伝えるべきなんだろうけど………)

同じコミュニティの同志として、ゲームクリアのために情報を共有するのは大切なことだ。

均も率先して情報共有すべきなのだろうが――。

(僕の考えを伝えるのはいい。でもそれをするのは、ジン達にも考えてもらってからだ。複数の視点で物事を考えることは本当に重要なことだし……すぐに教えちゃったらジンの力にもならない。僕と十六夜がいつも助言できるわけじゃないんだ。"ノーネーム"の長として、ジンには学ぶ義務がある)

故に、均にはすぐに考察を披露するつもりがない。まあ、今回のゲームでは、だが。

均は、今回のゲームが再開するのは二週間程度経ってからだと予想している。

再開後はかなり厳しい戦いになるだろうが、やるしかない。

そう覚悟を決めて戻ってきた均が最初に出会ったのは、見覚えのある二人組と見知らぬ男だった。

「あ、ペスト」

「あら、また会ったわね。人間」

「あつ、クソガキ!!ここで会ったが一〇〇年目ええええええ!!」

「おいラツテン、落ち着け。今、ゲームは休止中。戦いは御法度だ」
「ぐぎぎぎぎぎ」

「お前やべえ顔してんぞ」

飛んできた魔王団体御一行様だ。恐らく、城壁の上に行こうとしているのだろう。

ペストにラッテン、ということはずまりこの男が――。

「ヴェーザー、つてわけね」

「あのクソガキに聞いたのか？次は殺すつて伝えといてくれ」

「物騒なことを言いますね。一応伝えておきますけど、十六夜の返答は予想が付くので今のうちにお返ししておきます。『ハッ、やれるもんならやってみな』」

「ククツ、あのガキが言いそうなことだな」

初対面とは思えないやり取りを均とヴェーザーがしていると、ペストが目丸くしていた。

それに気がついた均が声をかける。

「どうかした？ペスト」

「いえ……ヴェーザー、貴方の言うクソガキつて、あの金髪の男のことよね？」

「そうだけマスター。だが、それがどうした？」

「あの男、ジンの同志よね。ということは……貴方も、『ノーネーム』？」

「そうだけど。それが何か？」

その瞬間、ペストの表情が変わった。

「へえ……貴方、『ノーネーム』のくせに私にあんな啖呵を切ったのね」
ペストが楽しそうにクスクスと笑う。

均は、言葉を発さない。

「ふふ、決めたわ。このゲームが終わったら、ジン同様貴方も私のおもちやにする。感謝しなさい？人間」

見下すような表情と共に、この発言。

均はそれを、鼻で笑った。

ペストの形のいい眉が顰められる。その行為は彼女の不愉快さを如実に表している。

「その人間つて呼ぶのやめてくれないかな？僕は平均たいちなわだ」

「へえ、そうなの。覚えておくわ、人間」

均の雰囲気は、僅かに変わる。

「……中々いい性格をしているね、ペストちゃん」

ペストの額に青筋が浮かぶ。

「ええ、おかげさまで。……………絶対に吠え面をかかせてやるわ、覚悟しなさい」

「必ず君を跪ひざまずかせる。楽しみにしててね？」

均とペストの背後に黒いオーラが幻視できるような光景だった。

と、そこで均がペストから視線を外す。移る先はラッテン。

「そうだ、ちようどいいから聞いちゃおう。ねえ、おぼ」

「殺すう!!!」

均が言い終えるよりも先に、ラッテンが切れる。

笛を手に飛び出したラッテンを、ヴェーザーが必死に羽交い締めにする。

「おいだからラッテン!!待てって!!今は戦闘行為が禁止されてるんだぞ!!って、力強つ……!?!」

「止めないでヴェーザー!!私はここで失格になってゲームの参加権を失ってでもこのガキを殺さなきゃならないのお!!はぁーなぁーせえー!!」

「んなこと許容できるかア!!おいマスターも何か言ってやれ!!」

ペストはヴェーザーの必死の訴えに頷き、口を開く。

「ラッテン。殺つちやいなさい。私が許可する」

「しゃああああ許可きたああああああああ!!」

「そうじゃねえ止める阿呆マスターアアアアアアア!!」

「冗談よ。止めなさい、ラッテン。勝手なことは許さないわ」

そう言われてもじたばた暴れていたラッテンだったが、ペストの命令には逆らわないことにしているのか、次第に力を弱めていった。

「グルルルル……クソガキ……コロス……ゼツタイ……ヤツザキニスル……」

代わりに、言語中枢の機能を停止させていた。

「ぜはー、ぜはー、げほっげほっ。ら、ラッテンの野郎、何処にこんな馬鹿力が……げえっほ!」

ヴェーザーは死にそうだった。火事場の馬鹿力的な何かで、ラッテンは相当強化されていたようだ。

息も絶え絶えなヴェーザーが、均に視線を向ける。

「おい、ガキ、あんまり、ラッテンを、刺激するな……げほっ。こいつさつきから時々叫び出して大変なんだ。頼むから、止めてくれないか……」

「仕方ないですね。じゃあ、ラッテン。訊きたいことがあるんだけど」
「仕方ないと偉そうに言っているが、全ての元凶はこの鬼畜である。」
「イノチ乞イサセテヤル……産マレテキタコトヲ後悔サセ………何よ」

言語中枢のスイッチを入れ直したようで、普通の会話を始めたラッテン。

均は訊きたいこととやらを口にする。

「僕らの同志である飛鳥を……ああ、赤いドレスを着た子ね。連れ去ったって聞いたんだけど、何処にいるの？」

「いや答えるわけじゃないでしょう」

真顔のラッテン。まあ言っていることはド正論だ。

「………ラッテンは、飛鳥の力を見た？」

「ええ。見たというより、受けた、だけだね。一瞬、動きを止められてしまったわ。すぐに弾いたけど。それが何？」

「……その力と、対決してみたくない？」

「………どういう意味かしら」

実際に飛鳥と対峙したらしいラッテン以外の二人は、何が何やらわからないのか沈黙を守っている。

とはいえ、当のラッテンも訝しむような表情を浮かべている。

「飛鳥を返してくれれば、僕が飛鳥を鍛える。そして、ギフトゲームが再開されたら飛鳥を君の前に連れて行く。強くなったあの力と、ラッテンの支配の力。どちらが上なのか、試してみたい気持ちはない？」

ラッテンは一瞬目を閉じて考える素振りを見せる。

「その気持ちはないといえは嘘になるけど、その提案はなしね。私達にメリットがない」

均はわかっていたように頷く。

「……ま、そうだよ。乗ってくれたら奇跡、って気持ちで話してた

し。仕方ない」

均はそこで話を切り上げた。

「じゃあ、僕はもう行くよ。ペスト、君は必ず隷属させる。また今度」
三人とすれ違いながら、言葉を残して去っていく。

残された三人は、少ししてから移動を開始する。

そもそも、城壁の上に戻る途中だったのだ。

地上の人間どもに言葉を聞かれることはあり得ないだろうという
高さまで来てから、ラツテンが呟いた。

「……………よくよく考えてみれば、なんで私、あんな真面目に答えたん
でしよう……………」

その小さな呟きに、ペストがハツとする。ヴェーザーは何事かを考
え込んでいる。

「そういえば、そうね…………ラツテンが自然に話していたものだから、気
がつかなかった。おかしいわよね…………」

「まさか、何か“恩恵”を使われて!？」

「いや、違う」

そう断言するのは、ヴェーザー。

ペストとラツテンはヴェーザーの方を向き、その言葉の真意を待
つ。

「今そういうことをするのは“契約書類”で禁じられている。奴が“恩
恵”を使って俺達に何かしていたのなら、何かしらのペナルティが
あったはずだ。奴は恐らく、会話で相手の懐に違和感なく潜り込むの
が極端に上手い…………それだけだろう。問題は、他にある」

「二問題……………」

ペストとラツテンが揃って首を傾げる。

二人には思い当たることがない。

ヴェーザーは、深刻な声音で告げる。

「あのガキは、のんびりと戻ってきていた。こんな状況なのにだぞ？
いつ審議決議が終わって、ゲームが再開するかもわからない。俺達が
疑われたことに腹を立て、あの場でゲーム再開を宣言して戦闘が始ま
ることだつてあり得ないわけじゃないはずだ。その可能性を、奴は考

えてすらいなかった。つまり、俺達の考えを読み切っていたってことだ」

「……………」

ヴェーザーに言われて、その異常性に気がついたのか。

ペストとラッテンが目丸くする。

「しかもあのガキ、あの場にいなかったからマスターの正体を聞いてねえはずだよな？なのに、奴はマスターのことをペストだと断言した。マスターと戦闘していたようだが……………それだけで断言できる程の情報は得られないはず。奴の洞察力と考察力は相当なものだ。こりゃ、俺達のゲームの謎も解かれるかもしれねえぞ」

「あのクソガキも頭が回っていたしな……………」と、小さく付け加えるヴェーザー。

ラッテンも状況を認識したのか、険しい表情を浮かべる。

「……………それがどうしたの」

そんな中、ペストは冷静に言葉を発した。

ラッテンとヴェーザーの視線が言葉の主に集まる。

「謎が解かれても関係ない。私達は全てを蹂躪して勝つ……………。そうでしょう？」

その言葉に、二人の悪魔は小さく笑った。

「ええ、そうですね」

「そうだな、マスター。いけねえな、ちよつと弱気になってたか」

ペストは口元に袖を寄せ、勝気な笑みを浮かべる。

「改めて、この場で宣言するわ。……………勝つのは、私達よ。あなた達も、力を貸しなさい」

「イエス、マイマスター」

ギフトゲーム”The PIED PIPER of HAMEL IN”。魔王が展開するゲーム。

その舞台でそれぞれの意地と覚悟がぶつかり合うのは、もう少し先のこと。

その時を見据えて、各々が自分にできることとすべきことを考えて

いた
た
—
。

第八話 ギフトゲームは一時休止だそうですよ？

魔王達とすれ違い、大祭運営本陣營へと戻ってきた均。

戻ってきて最初の行動は、耀を探すことだった。

(えっと、耀は……いた)

しばらく負傷者達がいる一帯を飛んでいると、怪我人を手当てしている耀を見つけた。

均は、ゆっくりと通路に降り立つ。

「……うん、これで一先ずは大丈夫。安静にさせて」

「かたじけない……」

「ううん。こういう時は助け合わないとだから。じゃあ、私はこれで」

「助かった、感謝する……」

その言葉に耀は曖昧な笑みを返し、均の方へと振り向いた。

「均、おかえり。どうだった？」

「ただいま、耀。残念ながら、飛鳥は見つけられなかった。ごめん」

「そう……でも、均が謝ることじゃない。捜しに行ってくれて、ありがとう」

耀は残念そうな表情を浮かべたが、頭を軽く振って気持ちを切り替えたようだった。

均は軽く頷きを返す。

「うん、わかった。僕らの同志のことだもんね。謝罪は、違うか」

均と耀は互いに顔を見合わせて頷くと、すぐにこれからのことを話し合う。

「私は、このまま負傷者の手当てを手伝う」

「僕は、ジン達と情報を共有したらこっちに来て手伝うよ。それまでは、お願い」

「うん、じゃあ」

「また後で」

均と耀は別の方向に走り出し——均は、違和感を感じて振り向いた。

耀の足音が、しない。

「――耀？」

目に飛び込んできた光景に、驚愕した。

……耀が、柱にもたれかかって息を荒げている。

「耀ッ!？」

均はすかさず耀に駆け寄り、肩を抱く。

その体温は、非常に高い。

念のため額に手を当てると、明らかに発熱している。

「これは……チツ、やってくれるね、ペスト」

この症状は恐らく、黒死病を発症し始めたのだろう。

均は耀を横たわらせると、辺りを見回した。

“サラマンドラ”のコミュニティに所属している、無事な戦士はいないものか。

残念ながら見当たらず、知り合いが通りかかるのを待っていると。

「あつ、オイお前ら!?!どうしたんだ!?!」

「ヤホホ、何やらお困りのようですね」

慌てながら駆け寄ってくるアーシャと、真剣な雰囲気を漂わせるジャックが声を掛けてきた。

均は助かったとばかりに息を吐いた。

「ああ、ちょうどよかった。”サラマンドラ”の方を捜してきてもらえませんか? 隔離できる部屋が必要になりました」

「あ、ああ、わかった! 待ってる!」

「しばしお待ちを。すぐに呼んでまいります」

「お願いします」

数分後、アーシャとジャックが連れてきたのは、マンドラだった。

「あ、マンドラさんを連れてきてくれたんですか」

「……何の用だ。――いや、そういうことか。想像以上に早いな」

マンドラはムスツとした顔で声を掛けてきたが、均に頭を預けて横たわる耀を見て事態を察したようだった。

念のため均も状況を説明する。

「耀が体調を崩しました。……あの魔王の正体については？」

「『黒死斑の魔王』の正体がペストだということは先程知った。つまりそれは、黒死病の症状ということなのだろう？」

マンドラの問いかけ。均は頷いて肯定を示した。

「ええ、間違いないと思います。なので、隔離できる部屋を貸していただきたいのですが」

「いいだろう。案内する、付いてこい。手を貸す必要はあるか？」

「いえ、問題ありません。ありがとうございます」

均は耀を抱きかかえると、マンドラの後に付いて行く。

アーシヤは不安そうな表情を浮かべていたが、均にできることをしてほしいと頼まれて、頷いて走り去っていった。

「ここを使え。他に必要な物があれば言うといい。用意させよう」

「ここは……個室？いいんですか？」

均が驚いたように、マンドラに案内されたのは個室だった。

隔離できる場所の提供を求めたが、個人のために部屋を用意してくれるのは意外だった。

しかも、タオルや水桶など、簡易的な看病ができる環境と道具が整えてある。

「私はここまではする必要はないと言ったのだがな。これはサンドラの計らいだ。せいぜい感謝することだな」

なるほど。サンドラの意向で仕方なく、といったところか。

「ええ。ありがとうございます。サンドラにも後でお礼を伝えておきます」

「敬称を付けろ」

「嫌です。彼女はジンと同年なのでしょう？畏まった場でなければ敬語を使う気は起きませんね。彼女も窮屈そうに見えましたよ」

にっこり微笑みながら伝えると、マンドラは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

「……サンドラはこれから”サラマンドラ”の頭首として同志を引つ張っていかねばならない。窮屈そうだろうがなんだろうが、慣れてもらわねば、やってももらわねば困るのだ……」

「……………」

それを聞いた均は、笑みを消した。

「……貴方の考えはわかりました。心情では納得できませんが……”ソーネーム”ではわからない苦労なんでしょうね。……これからサンドラ様に会う時は意識しますよ」

サンドラ様、と言った均にマンドラは驚いた顔をする。

「耀のために個室も用意してくれましたしね。……貴方がジンに対して剣を向けたことを許すつもりはありませんが、貴方にも立場があるでしょうから」

マンドラは驚愕を浮かべたまま、均に向かって頭を下げた。

「……かたじけない。感謝する」

「ああそうだ、ジンには僕がここにいることは内緒にしてください。逆に十六夜には伝えてもらえるとありがたいです。十六夜ならここにも平気な顔して来そうですね」

均は意図的にマンドラの礼を無視して、自分の要件を伝える。

マンドラは「確かに、あの男ならやりかねんな」と苦笑しながら退室していった。

均とマンドラの関係は多少改善したかもしれないが、互いに謝ることはない。

お互いに、譲れない立場や矜持があった。今は、これが限界だ。

「さて、と……ジン達の考察が出来上がるのは何時になるかな？」

呟きながら桶の水にタオルを浸けて、絞ってから耀の額に乗せる。

耀は既に意識がぼんやりとしているようだ。

呼吸が荒く、目を開ける様子がない。

「辛いと思うけど……負けないでね、耀」

そう言うと、均は椅子に座って耀の様子を見守り始めた。

数時間後。

耀が若干苦しそうながらも寝息を立て始めてからしばらくした頃に、個室の扉が開いた。

「よう、均。春日部の様子はどうだ？」

「十六夜。良くはないね。今はぐっすり寝てるよ」

現れた十六夜に、均が容態を説明する。

十六夜は深刻そうな表情を浮かべて、均に問いを重ねた。

「ゲーム再開は一週間後だ。それまでは保たせてもらおうしかねえが……その様子だと、春日部は再開後のゲームに参加できなさそうだな」

その言葉に、均は本気で驚いた表情を浮かべた。

「え？再開、一週間後なの？本当に？」

「……？ああ。一週間後で取り付けたぞ。ほら、"契約書類"。ていうかオマエ、どうなると思ってたんだよ？」

「正直、二週間後くらいのリ再開になると思ってた。だから、相当厳しい戦いになるだろうなって……えーと、どれどれ？」

均は自身の予想を告げながら、"契約書類"を受け取って目を通す。

そこには、このような内容が記されていた。

『ギフトゲーム名"The P I E D P I P E R o f H A M E
L I N"』

・プレイヤー一覧

・現時点で三九九九九外門・四〇〇〇〇〇〇

外門・境界壁の舞台区画に

存在する参加者・主催者の全コミュニティ(箱

庭の貴族"を含む)。

・プレイヤー側・ホスト指定ゲームマスター

・太陽の運行者・星霊 白夜叉(現在非参戦の為、

中断時の接触禁止)。

・プレイヤー側・禁止事項

・自決および同士討ちによる討ち死に。

・休止期間中にゲームテリトリー（舞台区画）からの脱出を禁ず。

・休止期間の自由行動範囲は、大祭本陣営より500m四方に限る。

・ホストマスター側 勝利条件

・全プレイヤーの屈服及び殺害。

・八日後の時間制限を迎えると無条件勝利。

・プレイヤー側 勝利条件

一、ゲームマスターを打倒。

二、偽りの伝承を砕き、真実の伝承を掲げよ。

・休止期間

・一週間を、相互不可侵の時間として設ける。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

“グリムグリモワ―

ル・ハーメルン”印』

「……へえ、なるほど。同士討ちの禁止と時間制限、それと黒ウサギを餌にここまで持っていったわけか。十六夜、これは全部十六夜が提案したの？」

そう均に訊ねられて、十六夜はニヤリと笑った。

「いいや？ 同士討ちと黒ウサギは俺の提案だが、時間制限を言い出したのはうちのリーダーだ」

「……ふーん、そうなんだ。ジンも、やるじゃない」

均は再び驚いたようだったが、面白がるような声音でもあった。

ジンの成長を素直に喜んでいるらしい。

そして、内心で白夜叉に謝罪した。

（白夜叉様、すみません。会いに行くことを禁止されました。暇を持て余していたく以外になさそうです）

「ところで、“契約書類”の考察は進んだのか？」

十六夜の問いに、均はあっさり頷く。

「うん。多分間違いないってレベルの答えは僕の中にあるよ。十六夜は？」

「まだだ。これから本格的な考察を進めようと思っていたんだが……その前にやることがあったな」

「やること？」

「ああ。オマエを連れていくことだよ」

「僕を？何処に？」

理由が思い当たらないのか、均はキョトンとした表情を浮かべている。

十六夜は呆れたような表情で続けた。

「俺達“ノーネーム”が割り当てられた部屋だよ。均、オマエなんで“アルゴールの魔王”を戦闘で使わなかった？」

「……もしかして、皆お怒り？」

「そう言うことは、わざとか」

「……………うん」

「全員、まだお怒りじゃねえよ。ただ、理由によつては黒ウサギあたりは大層お怒りになるんじゃないか？」

均はため息を吐いて、諦めたように言った。

「だよねえ……」

「つーわけだ。行くぞ」

「はあい……」

最後に耀の額に乗せていたタオルを替えてから、均は十六夜に付いて部屋を出る。

十六夜に先導される形で、向かうは法廷。弁護人はなし。そんな気分だ。

「実際、なんで使わなかった？“アルゴールの魔王”——今はアルルだったか？あいつ、かなりの戦闘力だろ」

「だから、なんだけどね。まあ、僕の勝手な我が儘だからしつかり怒られるよ。それはそうと、考察、まだ共有しないでいいよね？」

「ああ。俺自身の考察がしつかり練れてから均の考察も聞くことにするさ。うちのリーダーにもしつかり考えてもらわねえとな」

「だね。まあ、ゲーム再開のことを考えたら遅くても六日後には結論を出さなきゃね」

若干、挑発するような物言いに、十六夜が反応した。

「均……それは、俺が考察にそこまで時間が掛かると思ってるってことか?」

「いや?気づいちやえば早いと思うよ。気づかなかつたら結論は出ないとも思うけど」

「ほーう。その喧嘩、買った」

「だから、喧嘩売ったわけじゃないんだけどなあ」

「言い方がわざとらしすぎんだよ。まあ、均の思惑に乗って、早く考察を詰めてやるさ」

不敵に笑う十六夜。それを受けて、均も微笑んだ。

「うん、期待してる」

「先に考察終えたからって若干上からなのが腹立つが……まあいいや。着いたぜ、この部屋だ」

到着した部屋は、両隣の部屋の扉の位置から推測しても中々に大きくそうだ。

自業自得だけど、憂鬱だなあ……なんてことを考えながら、均は扉を開けて部屋に踏み込んだ。

「均さん、待っていましたよ。十六夜さんから話は聞いているかと思えますが……?」

「うん、聞いている。皆、僕に訊きたいことがあるんだよね?」

「ええ。取り敢えず、どうぞ」

均が部屋に入ると、黒ウサギとジン、レティシアが席に座っていた。黒ウサギに促されて着席する均。十六夜は何も言わずに座り、均の言葉を待つことにしたようだった。

「では、まず……耀さんの容態はどうですか?」

最初は当たり障りのない質問。

均は苦笑しつつ答える。

「うん、十六夜にも言ったんだけど、良くはない。今すぐ如何こうつてわけじゃないと思うけど、ペストのギフトゲームに参戦できるかは怪しいところだと思う」

「そうですか……耀さんも僕達”ノーネーム”の主力の一人。参戦できないのは厳しいですね……」

ジンが悔しそうに本音を零した。それには均も同意だ。ペストの風を散らしてもらおうと思っただけに、耀の不参加は手痛い。

「……というか、均さんはあの魔王がペストだと気付いていたんですね」

「うん、まあ。ちよつと考えたら推測できるよ」

「なんなら均は”黒死斑の魔王”と戦闘している最中に気付いていたぞ。あの時、『無知な僕に教えて』などと言っていたが、どうせ自分で気付いていたんだろう?」

黒ウサギの若干失礼な物言いに軽く返していたら、レティシアが援護射撃してきた。

均は微笑むことを答えとする。

「ほく、流石ですね、均さん」

「ありがとう。さて、単刀直入に来ちゃっていいよ。本題は別にあるでしょ?」

均がそう切り出してみると、黒ウサギとジンは目配せし合う。

そして、ジンが話すことに決めたらしい。

「では、僕から……均さん、”アルゴールの魔王”を呼び出さなかったのは何故ですか?」

「……僕の個人的な、下らない理由。アルルに暴れてもらったら、敵を全部あっさり倒しちゃうから」

その返答に、均以外の全員が理解できないという表情を浮かべる。敵を倒せるのは良いことではないのか……?

皆の思考がそれに行きついた瞬間、十六夜だけが理解の色を浮かべた。

「……オイ均。オマエ、其れはやっちゃダメだろ。やるにしても、他の

連中には一切の被害を出さないようにするか……春日部がダウンしたり、お嬢様が連れ去られたのはオマエが魔王の実力を見くびったのも原因の一つってことになる」

「うん。そうだね」

「チツ、均。らしくねえぞ、オマエ。優先順位、間違えてねえか」

「……うん、ごめん」

「俺に謝ってんじゃねえ。春日部と、お嬢様取り戻してから二人に謝れ」

「うん。そうする」

二人で理解し合っていた均と十六夜に、黒ウサギが待ったをかける。

「ちよちよちよ、ちよーつと待ってください御二方。御二人だけで理解されても困ります。黒ウサギ達にもわかるように説明してください。如何いうことなのですか?」

「……もし此処で俺に説明させたりなんざしたら、オマエのことぶん殴るからな」

「流石に、そこまで堕ちちゃいないよ」

苦笑を浮かべつつそう言ってから、均は表情を真面目なものに変えた。

その瞳には、後悔が宿っているように見える。

「皆は僕のやりたいことを薄々察してると思うけど……改めて明言すると、僕は魔王を隷属させたいんだ。以前、白夜叉様に訊いたんだけど、魔王が開催するギフトゲームで魔王を隷属させようと思ったら、勝利条件を全て満たしてギフトゲームをクリアする必要があるんだよね?」

「はい、そうです……って、もしかして、其の為に……?」

「ただ単に魔王を倒すだけでは、隷属させる条件が満たされないから……!」

黒ウサギとジンも察したらしい。

均のエゴでしかない、その真意を。

「そ……そんなこと、許されることではありません!黒ウサギ達は、ジ

ン坊っちゃんの宣誓の下に“サウザンドアイズ”と“サラマンドラ”に協力すると約束しました！此れは、“ノーネーム”全員が守るべき約束です！個人の考えで破るなんてこと……！！”

正論だ。黒ウサギの言ったことは、何処までも正論。

その正論に、均は反論する術を持たない。なにせ、正論なのだから。均は、少し悲しそうな笑みを浮かべながら、言った。

「うん。正直に言うとならサラマンドラ”に協力する気が失せかけているんだけど、それは他のコミュニティを見捨てていい理由にはならないしね。僕の行動は、個人的なエゴしかない傲慢なものだった。見通しも甘かった。耀があそこまで弱るとは思ってたし、飛鳥が連れ去られることも想定してなかった。飛鳥達なら、あのくらいなら何とかできると考えていたから。其処は凄く反省してる」

「サラマンドラ”に協力する気が失せた……？何故なんです？」

ジンの問いかけ。その声には疑念と失望が込められている。

均の行動は全く褒められたものではない。ジンの態度も当然だろう。

この質問に答えなければ、均の印象は更に悪くなってしまふ。

だが均は、首を横に振る。

心象の悪化を理解した上で、自分の評価などどうでもいいかのよう

に。
「理由は言えない。……強いて言うなら気付いちやっただから。これ以上は言えないかな」

その発言に、首を捻る箱庭組”ノーネーム”一同。流石にわからなかったらしい。

しかし均は、十六夜の目が細められたのを見逃さなかった。

（——やっぱり、ここまで言えば気付いちやう？）

（——全部ではねえが、な。まあ、くだらねえ話だつてことには変わりなきさそうだ）

アイコンタクトで会話する均と十六夜。

長年の付き合いが為せる業だ。

「……とまあ、僕の勝手な事情はこんなところ。再開後は、反省を活か

して——」

「オイコラ。なーに話終わらせようとしてんだ。それだけが理由じゃねえだろ」

話を纏めようとした均を、十六夜が制止する。

その目は、全部吐けと言っていた。

「……ええ、そんなにわかりやすかった？僕」

「いや、俺だから気付いただけだろ。現に三人ともぼかんとしてる」

「うーん、でも自己弁護みたいなこと、カッコ悪いし……」

均がそう言うと、十六夜は鼻で笑った。

「ハッ。しくじった時点で均は充分カッコ悪いんだよ。だから、吐け。全部」

「うう……わかったよ。……えっと、アルルに頼って魔王に勝つても、僕達の成長には繋がらないと思って。正直に言うと、アルルに戦闘させる気はなかったです……」

めちやくちや逡巡しつつ、均がもう一つの本音を白状する。

「……………」

均の本音を聞き、黒ウサギ、ジン、レティシアが目を丸くする。

直後、呆れた様子でため息を吐いた。

「あのですね、均さん。コミュニケーションのことを考えてくれるのは本当にありがたいですよ？でも、先に相談してください。皆さんで、考えましょう？」

と、黒ウサギ。

「均さん。僕や黒ウサギに、隠し事をするなど二度も優しく叱責してくれたのは貴方でしょう？同志なのだから、と。その言葉、僕からお返しします。そういう大事なことは、僕達にも話してください。僕達は、同志なのですから」

と、ジン。

「均は——賢いのだと思っていたが、存外阿呆だったのだな。此れからは、そのことを念頭に置いて接するでしょう」

と、クスクス笑いながらレティシア。

「れ、レティシア……阿呆はないんじゃない？——コホン。ともかく、

皆、ごめん。僕は皆のことを信用はしていても信頼はできていなかったみたいだ。一番反省すべきはこのことだね。今度からは、時間があれば必ず相談する」

「はい。こうやって少しずつ、信頼関係を築いていきましょう」

「おつ、御チビもリーダーらしいこと言うじゃねえか」

「茶化しちゃダメだよ、十六夜。ジンは立派な、僕達のリーダーだ。今、それを痛感した」

均の信頼の言葉に、ジンがくすぐったそうな顔をする。

それを穏やかな表情で見ていた黒ウサギが、手を叩いて声を上げた。

「では、均さんの考えもわかったことですし——これからのことを話し合いますよう！」

時間は無駄にできない。

一週間なんて、あつという間だ。

「つと、その前に確認。アルルの使い方はどうする？」

均の発言に、考え込む一同。

「うーん、難しいところですね。ギフトゲームは持ちうる手札を全て使って臨むモノですが……僕達の成長にはならないというのは、その通りです」

「だが、成長と言っても状況が状況だ。お嬢様は連れ去られ、春日部は戦力外通告も同然。成長できる人材がほとんどいねえぞ？」

「……あ、そういえば再開時の戦力分配はどうするつもりなんだろう？ 黒死病のせいで参戦できなくなる可能性はあるにしても……誰が誰の相手をするか考えておいて、アルルに足りないところを補ってもらうのは如何かな？」

「——ひとまずはそのつもりでいきましょう。実際に如何なるかはゲーム再開の直前になってみないとわかりませんが……均さん、十六夜さん、レティシア様にお訊ねします。敵と実際に戦ってみた感触として、誰に誰を当てるのが正解だと思いですか？」

答えの一言一句も聞き逃すまいと黒ウサギのウサ耳がピクピク動く。

ある程度、“ノーネーム”での意見を統一しておきたいということだろう。

三人は目配せし合い、均が発言権を譲られる。

「僕の所感は、そうだなあ……ペストの相手は、サンドラに加えてサンドラ並みの火力を持つ誰か。それと死の風に対処するために耀に援護してもらおうのが一番だと考えてただけ……耀が参加できるとは思えないからこの案は却下かな。……そういえば、黒ウサギって実際どのくらい強いのか？」

均が唐突に黒ウサギに質問する。

急に話題の矛先を向けられた黒ウサギは、一瞬身体をビクつかせた。

「え、何ですか突然」

「いや、黒ウサギって帝釈天の眷属じゃない？それに、“箱庭の貴族”と呼ばれてもいる。強いっていうのは見たらわかるんだけど、どの程度なのかなって。ペストを倒せる？相性的な問題も含めて」

「……うーん、なんだか微妙に褒められていないような気がします。まあいいですけど。かの魔王を倒す手段は持ち合わせています。サンドラ様と一緒に戦うのであれば、魔王を抑えることも可能だと思います。ですが、抑えることで手一杯になってしまいかもしれませんが。無茶をしたら魔王を倒すことも不可能ではないかもしれませんが……それでも断言はできません」

均は一つ頷いて、理解を示す。

「黒ウサギがそう言うなら、僕の意見はこうだ。ペストの相手は、サンドラと黒ウサギで。ヴェーザーの実力がいまいちわからないけど、十六夜が相手できるだろうしヴェーザーは十六夜に。ラッテンは僕とレティシア。十六夜にはきつきとヴェーザーを倒してもらってから僕達が抑えているラッテンを倒しに来てもらう。そして最後に全員でペストを叩く。他の人にはやってもらいたいことがあるから、そつちに多く人員を回すべきだと思う。アルルには、他の人達を護っても

らいたいかな。僕達の戦闘の余波が及ぶかもしれないし」

皆真剣に均の意見に耳を傾けていたが、黒ウサギだけが瞳をぱちくりさせていた。

それを疑問に思った均が訊ねる。

「どうしたの、黒ウサギ？鳩が豆鉄砲を食ったような顔をして」

「い、いえ……随分あっさりと私の意見を取り入れるんですね？」

「だって、黒ウサギはこういう状況で自分の力を誇張したりしないでしょ？黒ウサギができるというなら、できるはずだ。それとも、できないのに可能だと思ふなんて言ったの？」

「いえ、そんなことはないですけど……」

「なら、いいじゃないか。それで、十六夜とレティシアの意見は？」

均が残りの二人に水を向ける。

「まあアルルの配置は要相談だとしてだ。他は均の意見で問題ないんじゃないか？つーか、ヒント出されまくってて腹立ってきた」

「無茶苦茶言ってるな、十六夜は……。私も、均の案を基本としていいんじゃないかと思う。"サラマンドラ"とも話し合わないといけないだろうがな」

「それはそうだね。優先されるべきは"契約書類"の謎解きだけ……ま、そこは皆も頑張ってる」

無意識とはいえ均の上から目線な発言に、面々がイラついた表情を浮かべた。

「……黒ウサギも珍しくイラツと来ました。十六夜さんの気持ちが変わった気がします」

「だろ？」

「僕も同じ気持ちです。……意地でも謎を解きます」

「ジンがそういう風に断言するのも珍しい印象だなあ……」

「ふふ。これを狙ったの発言だったのなら、均もやるな」

「全く狙ってないんだよね、これが」

「なら天性の煽り屋か？流石だな、均」

「それ褒めてる？いや褒めてないよね絶対？ねえ十六夜？僕の目を見て答えよう？」

そっぽを向いて口笛を吹きだす十六夜。こつちの方が煽り屋としての才能に恵まれていそうだ。

「均さんにピツタリかもしれないですね。これから名乗ってみてはいいかですか?」

「ジンも言うねえ……」

頬をヒクつかせる均。煽ったつもりはなかったので、そろそろ勘弁してほしいところだった。

「まあ、均をいじめるのはこれくらいにしようか。話し合いも今日のところはもういいんじゃないか? 黒ウサギ」

「ですね。では均さん、これからはキッチンと報告と相談をすること! いいですか!」

「うん、わかった。時間がある時はそうする。肝に命じるよ」

「オーケーです。では、今日はお開きにしましょうか。ジン坊っちゃん、問題ありませんか?」

「うん、大丈夫。それぞれ“契約書類”の考察をすることにして、今日は取り敢えず解散にしましょう」

ジンの号令で、解散が宣言された。

均は部屋を出る。十六夜も一緒だ。ジン、黒ウサギ、レティシアの三人は、部屋に残って議論するらしかった。

扉を閉めてから、均は十六夜に問いかける。

「十六夜は一人で考察したいでしょ?」

と言っても、ほとんどただの確認だったが。

「まあな。つーわけで、俺は適当にぶらぶらしてくる。じゃあな」

「うん、また」

歩き出す十六夜が角を曲がるまでその背中を見送ってから、均は十六夜が消えた方向と逆方向に歩き出した。

ギフトゲームが再開されるまで、あと一週間。

その時が訪れるのを、皆は様々な想いを抱えて待っている。